

ける。其時辨慶珠數おしもみ。汝元來磁石の如し。極樂もいや地獄もいや。修羅道に逗留し。討れて死する平家勢と。冥途にても合戦して。釋迦彌陀の睡をさまし。行きたり方へつゝとゆけと。陀羅尼眞言くりかけ。くくくくくよみかけて野邊に送れる春の夢。さめての後の末の世まで。ためし稀なる武夫やと皆感せぬ。ものこそなかりけれ

才

かくてそのうち。佐藤庄司の信館へは嘆きを憚り。忠信よりわざとたよりもせざりければ。庄司一家の人々は夢にもかくと知り給はず。胎内にて別れつる次信の二子。誕生せしを次若と名付け。西國よりのたよりをば明けぬ。暮ぬと待給ふ。兄弟はつね々々作庭をこのみしに凱陣せば見すべしとて。さまの木の草を植る。岩ぐみ遣水心を盡し。いかはの沼よりよき松を見立させ。數多の人夫持來る。庄司夫婦二人の嫁。庭におり居て見給へば。松の枝血に染り朱になつて見へければ。人々氣にかけ人夫を召し。いかなる事とぞ仰せける。人夫承りさんひ。以前は軽く見えし故。人夫二人して持ければ。振群に重くして取落し。さきさきは何事なくつぎのぶがうたれて疵を蒙りさんひの事といふ。はや姫驚きやあ何といふ氣がよりや。いひ直せよとありければ。はて何と問開きなさる。此松の木を取落し。さきさきのおは何事なく。つぎのぶがうたれぬ。定めて命はあるまいと物がいはせし辻占は後にぞ思ひあたりける。人々興奮め顔を見合せ暫し詞もなかりしが。庄司えんを取かへおめでたし。小松は平家の大將次信が討たるを悦びの酒宴せんと。奥に立入り給へども。はや姫猶も落つかず。所詮我兄の志田の三郎殿を頼み。此子を連れて西國へ下らんと。旅のいとなみそこくに。次若をかき抱き。兄の庵に忍びゆ

もろひめさめ

き。兎角かたらひ兄弟は西國の方へ。と。三重のそがる。

なじみのくもの。あけぼのや。月になぞりて思ふには。前に我夫あとに親。思ひさるせとさらぬせの。中に立たるみをつくし。此身をつくすあはれさよ。されども志田の三郎は。妹に力をそへ。次若を愛しては。目だに覺たら背にきつとおひのこの。ねんくねね。音せでおよれ。神へまゐる。行かた。いづこ水壘の。岡の葛原風さわぎ。恨みつわびつ世の中の。くはいるかへて青葉山。ひくまの野邊にたつ鹿も。妻戀ひかねて歸るとなくはしほらしき。男模様の衣の關。かすみの關の七重八重卵の花さま。藤散りて。初時鳥はつ聲を。苦屋の煙一すじを。二つわりなる常陸帯とけて語りし睡言を。あだに那須野の春のゆめ。さえずつ。夢の通ひ路を。我になきそか勿來の關。花の名殘の。淺香山瀧津。ながればたけながに。ひびきを風にたゝませて。平元結の黒髪山。分行く末は武藏野の。草にあこがれ露にねて。今日四五日目になれし。富士さへあとに三河の國。過ぎて尾張のわたし舟乗りて走りて伊勢もはや。近まらぬ關の地藏堂にあひく。の。夫さづく誓くちすな。朽なばくちよわが中の。戀は埋まぬ土山や。近江の湖は春ふけて。水のみどりも影うつる。繁りし峰は八王子。廿一社の神所。猿は山王まさるめてたき。は世のじるしは松本の松はするぞく柳ははでに。竹はしなへて伏見の里。江口神崎西の宮。夕日にしき唐紅にゆく水をぐりくくく。と水くくる。籠づたひの里をこえ。川をこえつ。山越えて。谷を越えても一の谷。又二の谷三の谷。こゝも此度つはものゝひやう。この津より追風の船は三つ羽の八島の浦。浦波かけて芦ふける柴の庵に。三重つぎ給ふ。庵のへもうちのやさんとあればあ



るじの女扉を明け。此處は源平の合戦未だをさまらす。他國の人にはむざと宿は參らせず。何方よりと問ひければ。志田聞て我々は出羽の國佐藤が所縁の者。軍の次第兄弟が有様聞まほしく。はるく上りいといへば。彼の女聞きもあへず。扱はさやうにひか。みづからは此所の狩人鷲尾の三郎とやもの、姉なるが。次信様のは蔭にて弟は源氏の侍となり。は恩をうけし者ひ。軍は未だ終らねども。平家は大方滅びし由。次信様のは事は能登殿の矢にあたり。果て給ふとやらん聞きしが。女なれば戰場へ出たる事もひはず。委しくは存せぬなり。いざ弟の鷲尾が陣所へともなひ。直にやうすを問ひ給へといへば。志田悦び。然らばは供やさんと。はや姫次若庵に残し。彼の女と打つれて。陣所を。さしてぞいそぎける。痛はしやなはや姫は次若を搔抱さあるじの女の物語。もし誠ならばいかせん。あはれ空言なれかしと。たより待間の待遠く。袖も心もくづをれてとろり。くの仇睡り。枕が上に駒の足並。響の音に夢さめて。庵の内に入来るをみれば。夫の次信小櫻織の物の具かため。しほくとして見給ふ。なふわが夫か次信殿かと抱き付うれし涙を。ながせしが。や。有て能登の守の矢に當たり。は最期とも聞しゆゑいかばかり案せしが。是は嬉しき事とあれば。おすでに死なんとしけれ共。胎内にまきすてし情の胤のみどり子に。心ひかれて汐時の。夜に三度日に三度。軍のひまはなけれ共。しばしの暇給はりて。是迄は来りしと又さめくぞ。泣き給ふ。時に山鳴り谷應へ。天地六しゆに震動して。大地もさくる如くなり。次若わつと泣きければ。いや苦しからず。又こそ平家が寄せ来る。一軍して駆散さん。見物せよと打出れば。平家は寄せくる波の面に。大將を始めとし一門の月卿雲霞の如く。噴毒の鋒先我慢の劔。刃を揃へあらはれし。空の景色も引かへて彌生なかの春の色。今日の修羅の敵は誰ぞ。お能登の守教經よ。あら物々し手並はしりぬ。其一念のうらみの矢さき。思ひぞ出る増の浦の。其船戦

今も又。閻浮にかへる生死の。海山一同に震動し。五塵六慾の風立て。生死の海の厚氷とくれば味方すべば敵走りかゝつて發矢と討つ。打れてさつと引汐の。又さしくるは五逆の太刀。猶忘執の山めぐりさびて。形はなかりけり。次信庵に走り入り。見給ひたるかあの如く。日夜の軍はしげれど。妹背の契此若に逢ひた見たさに。来りしと。次若を膝に抱きのせ涙にくれて。見えにけり。かゝる所へ志田の三郎鷲尾兄弟。忠信諸共歸らる。はや姫走り出で。なふおそかりし次信殿も待兼ては入ひといふ。人々驚き。死して程ふる次信これにありとは夢はし見たるか現かといへば。はて最前より出でて。次若を寵愛します。先づ入て逢給へといひけるにぞ。猶しも不審はれね共。庵に立入り見給へば。南無三寶次信がおもかげは小櫻織の物の具に。次若ばかり抱き付き。ありし形はなかりけり。はや姫是はと絶りつき。なふ次信殿わが夫とよへど。叫べど。甲斐をなきもの。あはれのかぎりなり。はや姫涙のひまよりも。くごき給ふぞ道理なる。扱もくみづからは。世に淺ましき者はなし。假初になれ參らせ。三歳にたらずで別れし事。過世いかなる報ひぞや。せめて恩愛の好みには。今一度次若か我が妻か。なぞや詞をかけ給はぬ。なふ次信殿く。甲斐なき鎧に抱きつき伏し沈みてぞ。なき給ふ。誠に故郷の庄司殿。かくなり給ふとは露しるしめされずし。やがて凱陣し給はんと。明暮待伴ひ給ふらん。是につけても過し頃。つくり庭を奇麗にて。振よき松をもとめ給ひ。兄弟が歸りなば。馳走に植る置き見すべしとて。數多の人夫もち来り。重くて過ちしたりしと。いひし詞の氣にかゝり。心もとなう思はれて。取あへず上りしが。空しくならせ給ふとの。扱は告にてありしよな。生は死の基逢は別れといひながら。思へば。悲しやと流涕。こがれ泣き給ふ。忠信涙を止めかね。扱は現に魂の妻子を慕ひ来り給ふか。なぞや某にも見えさせ給はぬ兄上と。鎧にすがり嘆くにぞ。鷲尾兄弟物に騒がぬ三郎も。小



手草摺に取付きて、人目もわかず泣叫ぶ目もあてられぬ。次第なり。安西の彈正太郎は前にて耻辱を取り、武士の交りならざるも、いよく彼奴らがなす業と一味の悪黨引具し跡よりつけて來りしが、蹴破り無二無三に込入りける。心得たりと忠信次若を抱きこる。志田表に駈塞り、ふ、扱は聞及びし安西な。愁に沈みし弱身をくひ我々を討たんとは己は命に持ちあぐんだな。軍せまいと誓文は立てたれども、おのれを殺すは鼠ぞと。云ふより早く引摺み押伏せ。そばなる大石押取て、背骨にどうご押かけ。さあ鼠殿ちうともいへ。地獄落しに押つくれば、五體碎けて死してんげり。猶も進む奴原を、四方へはつご押散す。人々悦び立重り、日頃の遺恨を散せし事、亡者も悦びたまふべし。いざや菩提を吊はんご。かねて次信歸依したる。都法然上人を、頼みやさん此方へとて都路さして上らる。源平兩家の物語。物の哀は多けれど、かゝる例は上古にも。又末代にもあるべからずと皆感せぬ。者こそなかりけれ

オス

かくてそののち、四海波靜にて國も治る時津風。早打の使として源八弘綱院の所に馳せ參じ。扱も九郎判官義經朝敵追討の院宣を蒙り、八島壇の浦赤間門司が關所々の軍に平家の一門ごとく討滅し、宗盛父子を生捕。天下太平の代に罷成ひ條、内侍所印の箱、事故なく都へ入御なし奉るべき由謹んで奏しける。法皇御感淺からず、弘綱に兵衛の尉を賜はり、源八兵衛と召されける。卿相雲客洛中洛外、近邊の民百姓、源氏の代はばんく歳、千秋樂とぞ祝ひける。扱弘綱は近き参り、軍の次第は物語仕れの宣旨なり。弘綱承り、宣旨もだし難くいへども、出羽の庄司が伴佐藤次信とや者。義經の命に代り討死仕て、彼が親族新黒谷にて追善の佛事取まかなひ故、義經が代參として回向仕るべ

きよしや付ひへば、まづ黒谷へこそとや上れば、尤も殊勝の至りなりと、取暇下さるれば、弘綱悦び袖にもあまる身の冥加と退出するこそ。三重ゆ、しけれ西の迎への紫雲山。新黒谷には次信が追善とて佛前に位牌を立て、燈明香華を供へ、四十八夜も結願にて、はや姫次若參詣あれば、老若男女群集して回向をなすぞ道理や。かくて法然上人は弟子あまた左右に具し、高座にあがらせ給ひける。源八兵衛弘綱は義經の名代にて、大黒といふ名馬、判官は秘藏ありけるを、次信度々所望せしが、朋輩の嫉み、遂に下し給はず。は愁嘆の餘りにや、亡者に贈りひかるゝと、墓のめぐりを三遍牽てめぐりければ、馬も毛をふせ耳を垂れしはれし風情ぞあはれなる。暫く有て志田の三郎參詣す。蓮生座を立て、やあは分は志田の三郎か。我こそ熊谷入道よ。命あれば逢ふたかな。まづ此度は力落し、して忠信鷲尾などは見えざるか。三郎志田といへども、更に返答せず。心靜かに回向する。蓮生腹を立て、こりや法師と思ひ近付をもとすか。奉加帳も頼むまい。見ぬ顔するな卑怯者といへば、あ、かしました。卑怯とは和僧が事よ。此坊主を卑怯者とは何事ぞ。やれ侍はな。親兄に離れても、屍骸を押のけ軍するを武士といふ。忠信鷲尾は次信が憂ありと雖も、軍終らねば、墓へも參らず。斯いふ志田も仔細あつて侍はやめたれ。も安西の彈正太郎といふ悪人を討たるぞ。敦盛の情があり、いや無情を感するなご、軍中より出家する。是は何と卑怯ならずやといへば、蓮生大手を叩いてからく、と笑ひ。こりや凡夫無常を見ては後生に入り、強きを見ては從へるを誠の侍とはやなり。花のやうなる敦盛を我が手にかけて討しと、なんばう哀れに存する故。侍止めて出家すればその人も佛になり。我が身も共に佛果に至るが、是が合點がまゐらぬか。こりや志田の三郎といへば、志田は一念發起して、ありがたし、最早疑心は晴れたり。と發ふつと切て捨て押肌ぬいで太刀を逆手に取直す。蓮生押留めは何事といへば、志田聞て念佛の功力に



て往生せしと聞くからは、見ながら娑婆苦界に片時も存へ何かせん。腹かさやぶり極樂へ早く往かんと  
いへば、おゝ頼もしき大活の佛者かな。さりながら如何に念佛やても。修業の功積らでは往生はなりが  
たし。志田聞て誤つたり。然らば某出家になり。次信が菩提を吊はん心なり。はやゝ出家せさせ  
てたべ。法然聞召し。さてゝ殊勝の心さし。蓮生とても其通り。然らば出家せさせんとやがて。授戒  
をなされける。則ち志田坊とぞやける。如何に蓮生次信が相果てしより。妻子が嘆き彼是を見るにつけ  
てもいどい哀れにひはと涙を流し。給ひける。法然聞召し。嘆き給ふも理なり。次信は君の用立に立死  
したれば成佛は疑ひなし。いでゝ吊らひ得させんと。虚空に向て手を合せ。もんゝ不動八萬四千。  
爲滅無量過切因。利劔即是彌陀切。一生性念罪海怒。なむあみだ佛と唱へ給へば。不思議や佛前に立た  
る位牌。動く見えしが忽ち次信が形を顯はし。あら尊の吊ひや。只今の功力に依り修羅の苦患を免  
がれ。今は忘執晴れたり。忽ち佛體と顯はれ西の空へ飛び給ふ。ありがたし。佛繁昌は代繁昌めで  
たかりともなかく。やばかりはなかりけり

凱陣八島

戲言も思より出で戲動も謀よりおこる。これ皆神心のなせるところ。爰に人皇七十七代後白河の院と  
崇めたてまつる。テロンゆゝしき聖主おはします。されば保元の春の雪。風に音なき並木の庭右近の櫻左  
近の橋。外は柳に愛させたまひ殊更今朝の白妙に。不老門の朝日影運きを願はせ給ひける。然る處にみ  
かほといへる十一歳の女のわらは。南面の御簾さらゝと下し北のやかげを見せ奉る。はや消えがての  
白雪を。しばしと思ふ心さし深く感じさせ給ひ。そのかみ後一條の御時かゝるわけばのを見させ給ひ。  
香爐峰の雪もこれにはと宣はせけるに。清少納言やがて御前の御簾まさあげたるを。いみじく賞させ給  
へり。此心は樂天が詩に。遺愛寺の鐘は枕をそばだてて聞く。香爐峰の雪は簾を捲げて見るとあるを即  
座に思ひ合せり今稚きものが志。これにたぐへて優しやと叙感甚だ淺からねば。諸卿一度にかふりを下  
げはつと。感じて静まれり。其頃源九郎義経は。平家の一族追伐し三種の神寶ことゆゑなく。都にうつ  
し奉りやがて。参内まします。斜めならざる叙慮にて重ねて官祿給はるべし。いよゝ京都を守護し  
逆徒あらば鎮めよと。御暇給りて。御前を退出する。義経の御威勢とへていふべき。三層やうも  
なしはや堀河の。御所にもなれば武藏坊をはじめ各御前に召され。いまだ平家の由縁洛中洛外に忍び居  
ん。事序でに根を絶つべしさりながら。都の騒ぎいかげなれば。何卒ひそかに探すてだてもやとあれば  
辨慶承はり。然らば屈竟の事を思ひ付て。何れも勸進物もらひに姿をやつし。家々に入て檢分仕ひは  
んどいへばおのゝ横手を丁ご打ち。これにこしたる事あらじ。左あらば伊勢の三郎は社人こそよから



め。駿河二郎は富士禪定。常陸坊は虚無僧片岡は鹿島のことふれ。辨慶は山伏と。それ〜に片付けごも〜に兼房一人何に見立る役もなし。辨慶つく〜見てなふ。御身には似合しき事あり。成程見苦しき姿して福笠深く冠り。筑紫方の船頭なるが。播磨灘にて船をわりし者にて勸進せられよといへば。さて見立たり〜とおの〜とつと打笑ひ。思ひ〜に出立て手わけをしてこそ。三重出にけれ。さて義経は。鷲尾とた〜二人。浪人らしく態を變へ笠ふか〜と君が爲。神樂岡のあたりにてまつ花咲かす春雨に。梢の蛙鳴連れて。飛ぶ蝶宿りもとめけり。しはし凌が軒遠く。た〜すむ野路の跡よりも。御所方の女の左に文箱右に傘。さすがの義経濡れながら近寄せ給ひければ。なふたれぞいの。しやはに見知らぬ人じやがと愛想。なげによげにけり。いやなふなさけの雨宿りこれが情の雨宿りと言葉を重ね宣へごも。人のおためめ傘ならずとつれなくも押出され。詮方もなき袂の雨かゝる處へ。さも麗はしき上臈にさしかけ傘の下道を。静にゆたかに見ければ。又これにうつりさのあとを慕ひてそでがさの打萎れたる御有様。彼の姫見返り御覽じて召連られし女に此かさ疊めとありければ。なふさやうこつや是程降る雨にといへば姫聞給ひ。餘所のつらさを見て心なく行くことは。憐れ知らずといふものなり。最早宿も程近しそれ彼方へのおせわにぞ。力およばず乳人はかさを義経に參らせける。さて〜忝しかりながら。如何に御心ざしなればとてあなたを濡し參らせてはと。姫君にさしかけ給へばいや苦しからぬに平にさして歸らせ給へ。いやお宿まで送りまゐらせられよりさして歸らんと。たがひに辭儀のなかだちのかさ物云は〜今ぞかし。のちにはおのづと身にそひて。裳袴にかゝる玉垂もたがひの思かずとて。運ばせ給ふ御有様辨慶遠のあとより見て。やら不思議や。あれはたしか我君なるが。ム、又例の持病のぬれとやらんか。た〜し彼の女平家方の者と聞付仔細を問ひ給ふか。いかさま不審と思ひつゝ御跡

慕ひて。三重まゐりけりさるほごに。彼の姫の御母上一乗寺の里におはせしが御妹姫諸共。何とて姉はおそきぞやと待わびさせ給ふところへ姉君歸らせ給ひ。なふ御兩人ながらまづ家へ御入あり。雨をはらしてお歸りとおればさあらば仰にまかせん。うちつれて入らせ給へば母上不審晴れ給はず。してあなたがたは誰様ぞと問ひ給ふ姫君聞召し。いや誰様かは存せねども。女ばかりのみち覺束なしとて送り給はりひなり。なふそれは優しき御心入れや。蓬生の宿ながら。しばしそらの晴るゝ迄はと他事なき體に見え給へば。義経うれしく思召し立入て見給ふに。姉にまさりの妹姫はつと驚き又これにうつり氣の。こは何人のゆかりぞとしばらく見されておはせしが。必定これは平家方の人と思召し。卒爾ながら見やすにかゝるごころにおはさん人々とも存せず。如何なる故にかと問はせ給へば母上聞召し。されば此處は久我大臣殿御した館でひが。其一人ましまさねば。斯くかはるかな世の中に。悲しきものはみづからと涙を。うかべ宣へば。ム、さては平家方の人々よ。御痛はしや去ながら。移り變る世の中なればなにこそ源氏へ縁をもとめ。姫君たちを御片付なされてはと。あればいやなふ父上いまだ源氏に捕はれまします。如何なるうさめにか逢ひ給はん。其仕儀次第に我々は兎も角もと存するゆゑ。浮世の望なきうちにも。もしやはかみの誓にて恙なきこともやとそれゆる姉は祇園の祠へ。日參。いたさせやすなり。義経聞もあへ給はず。エ、祇園殿の御利生はや見えてこそひへ其ゆるは。我々は堀河殿へ別して出入ものなるが。氏素性よき人ならば。假令平家方の人なりともかたち次第に北の御方と定め。朝敵なりとも其罪やなだめられんと。御事なり。姉姫を差置き異なす分なれども。妹姫こそ必定御氣に入らせ給はめ。何となかだち致さんや母聞召し。こはそも神の教へかや。左もあらば父上の御命に恙あらじ。さりながら姉は妾とま〜しき中なれば。世の取沙汰も如何ことに順義とす。姉を中入れてたまはれ義経



聞召し。いや判官殿の御望のとしごろ妹姫にてひへば。是非にこれをそのたまへども。母上承引ましまさねば何とせんか九等閑に。おもひのたねとぞなり給ふ。辨慶は先刻より垣のそとに閉居しが。さても悪性人かな。さりながら。よつく執心なればこそ門外に突立ちて。熊野山年籠の山伏。人相八卦相性祈禱何にても御用はなきかと呼はつたり。判官ちやくと推しこれ。お山伏。頼みたき事おはいりあれと呼入れ。なふ二十八の男と十八と十六との女二人の内。いづれが相性よからん考へてたべ辨慶聞も敢ず。それは考ふる迄もなし二十八の男に十八の女。水廻火とて大きに悪し。十六の女こそ金生水とて大吉なり。此縁を組給へば佛神の納受に叶ひ。何事も心の儘ならんといへば母上聞召。如何に願の違へばとて悪縁は結ばれまじ。此上は妹をやり入れてたべとある。姉君せいたる風情にて。上手の八封さへ合ふも不思議合ぬも不思議。何あの山伏づれが云事誠にはし給ふな。しやはに水は逆に流れずといふに一生男を持ねばとて。姉を差置く縁やあると大きに不興しおはしけり。義經聞召御理り去ながら。悪縁を結ぶは災を招くに似たり。誠さほごに思召さば。いさ某と御身夫婦の契約いたすまいか。姉君顔うちふつてせゝわらひ。義經さへ不足に思へど親達のためと思へばこそ。如何におちふれたればとて。御身づれの縁組は些とするさんならめと赤面。してこそおはしけれ。さても移り氣な女郎や。けふ道づれのお心入なさけのほごを無になして。義經ならばと宜ふは些とさもしく存するなり。假しそれは兎も角も。實正某との縁組はいやの。ア、聞たうもな。耳のけがるゝに重ねていふても貫ひませじとある。義經につこと笑ひ。ア、重ねてやさし扱は思ふまゝの仕合せなり。御身に嫌はるゝ某こそ源の判官よ。此上はいよく妹姫を給はれや。一命にかへても大臣殿の御科は。やなだめやさんに御心安かるべし。幸今日は吉祥日縁組のことはじめそれゝとありければ。いたはしや姉君面目なさうにおし降伏さ。

ほゝとしてましませば妹君笑止がり。いやこれなふ姉君様。それと知らずば天子の事をいふまじきものにてなし。待てばかんの日和ありとや。みづから斯様に成る上は。御身様も如何ならんやごなきは方へ。おつゝけゆかせ給ふべし必ず悔み給ふなと。さまゝ謀め給ひぬる心の内こそやさしけれ。其内に辨慶堀河へや通じけん。龜井片岡伊勢駿河佐藤忠信常陸坊。種々のさつしやうしたゝめ道をつとはせ参りつゝ。是はめでたき事終夜のお酒もり飲や。諸へや。尤とさいつ。さゝれつ入みだれ君は千代ませ。ゝとくりことを。祝ひ謠ひつれ堀河殿に歸らるゝ是ぞ義經の武運盡き。家のみだるゝ始ならんと悔まぬ。人こそなかりけり

舟こ

鎌倉におはします。兵衛佐頼朝卿諸大名をお前に召され。さても義經西國の凱陣以後。都にて榮華を極め色に耽り酒に長じ。武家の政道外に成す條是れ亂世の基。さるによつて土佐坊を上すところ理不盡に亡ぼす事。いよく逆心疑ひなし事募らぬ其前に。多勢を差向け誅伐せん如何に。ゝと仰せけり。いづれも大事の評議なれば押しづまる其中に。梶原はかりなくやす様。ほい言上仕る如く今度のいくさ半にも。船中にて惟盛の御息女と内通あり。そののみならず勿體なくも女院への御威れ。かれこれ御本意にひはずと意恨をふくみ諷しければ。頼朝なほゝ御立腹にて北條の四郎に仰せ付。三千餘騎を牽添えられ急に打立滅せと奥をさして入り給へば。時政おうけをすされて既に仕度と。三軍聞えけり。此事隠れ。あらざれば無念ながらも義經は。罪なき御身を隠家の。吉野の奥もあらはにて。又都に立歸りひそか忍びおはせしが。辨慶を始め何れも心底を定め。いざ鎌倉勢を此處に引受けさぎよく討死し。名



を後の世に残さんといへば判官聞召かたぐが存念至極せり去ながら。曇りなき身をいたづらに果つべき事も口惜し。一まづ奥州に下り秀衡を頼み。時節を伺ひ見んとあれば。辨慶承りはて兎角は君の御はからひ。誰かは漏るゝ者ひべき。とはいひながら我君の數萬騎の敵にも遂に御後を見せさせ給はぬに。親兄の御禮儀を重んじての御一言。かへすゝも殊勝やおのゝ袖をぞしほりける。左あらば片時も早くも未々の者共には皆御暇を給はり。主従以上十二人山伏姿と相定め。扱北の御方へ此由かく語らせ給ひ。とても長旅およびがたし。都に留りおはしませ。追付迎ひ越すべきと涙と共に宣へば。こは情なき仰やな何とて残りあられふぞ。御供かなはぬものならば浮世にながらへ何かせん。命のお暇たまはれど。聲も。惜ます泣き給ふ。辨慶御いたはしく思ひ實に御道理至極せり。御心やすく思召せ御供させ参らせん。某しだいになされよと兒の姿につくりなし。旅出立の槍笠。まだ夜をこめて今出川明方急がせ 三重

うはら

「諸共に。あはれと思へ山櫻。花に心をそみかくたの。姿に換ふる人々の御有様こそいたはしけれ。住て久き都をば。立や霞にこがれて。後に「見なすや音羽山鳥の啼音も。はら〜。〜と落る涙は。しばしが程も。なふ山科の里を過ぎ。今はかたしや又いつか。世に逢坂の關の戸をた〜さて明る空見れば。なれもわりなき方にこそ。花を見捨る雁金も。おなじ越路の旅なれど心こなる愛身とて見しや。見知らぬ人にさへ。忍ぶ小笠の。深々と。深き思の種をしも。如何なる代にかまき置きて。はからぬ旅の道急ぐ左手は三井の古寺や此鐘のつく〜物を観するに一榮一落春秋と移りかはれる定めなき。實に

も如夢幻。泡影と法の。教は聞きながら。なごいとほぬや假の世を。いや果敢なくも。悟りえぬ。流轉生死の海にのみ沈みつ。浮つ〜沈みつ行く船は。さしもぞ寄する漣や。志賀の濱松年ふらて誰が代に引ける子の日ぞやこれ唐。崎の事問はん。飛かふ千鳥八つ六つ。な〜の社を伏拜み。見渡せば花も。紅葉もなかりける。浦の宮屋のわけは。夕を秋と。誰かは思ふ山わきに。巖あやしき風景は。今の物憂き身にだにもすこし慰む便かや。まん〜たる湖上の雲。過來し跡を見返れば。故郷道にして際もな〜。しつばかつこせいと。唐土人の故事までも思ひ出つ。口すさみ。磯邊に拾ふ玉村の。里に立ちぬる薄烟。つ〜み焼なる堅田船。文の傳手さへ長濱の。行末守れ白鹿の。神の社や和げる光。長閑けき。日の出が岬うたゝ。寢覺の。とこの海詮方もなき歎きには。比べて類あらし山春雨の降を。めしより一人に翠に見ゆる木の芽山ア。あれ。〜あれ荒れし。軒端のいたどり川。苦しき。瀬のみ越つれば何時の。間にかは秋元の。宿の秋風吹井とや狭き。袂に。せき兼て。餘る涙や森田の宿。さなきだに憂を重ぬる旅衣。きて見る事も思ひさや。目馴れぬ村々里々を。覺束なくも辿りぬる。心は猶もほそるさや。大聖寺ぞと聞からに。各法施を奉り。來ん世をたのむ蓮の浦。浮節しげき竹の橋渡るもつらさ。身の仇なるは石の燈か。しろふりて昔。うへの。草も木も。繁みて道に。踏迷ふ。こ〜ば三國の。港なる出船入船數々の。品かはりたる憂わざに音信とては小夜嵐。思もしのに篠原や日敷を經れば程もなく。名にのみ聞し加賀の國。安宅の。浦にぞ着き給ふ。然る處に往來の者共行違ひ。さても安宅には新關すはり何かは知らず山伏達をかたくあらためらる。由と言捨て通りけり。いづれもはつと驚き一期の浮沈此處なりき。所詮打破つて通らんといふ辨慶聞て。いや〜此處は大事の所。尤も打破つて通らんは安けれどもまた行先の難儀。随分陳じて通るべし若その上に異議あらば思ひまうけし事といへば君聞召し。



實に御分がいふ通り然らば陳じやうの相談こそあらめ。先づ此方へくと。片山かげの森のう  
ちへ各召連れ 三重入り給ふこれは扱置き。安宅の關をば富樫の左衛門うけたまはり俄に堀ほり塚を  
かけ兵具ひつしと立ならべ。備へきびしさその景色鳥も通はぬ要害なり。去るほどに判官は。辨慶を先  
達にてさも鷹揚に來らる。番のものごもこゑにふく客僧たち。是は鎌倉殿よりの仰にて山伏  
達をあらたむる關なり。一人も通さじとひしめく辨慶不審がまじさかほつきにて。いやわれ。鎌倉殿  
よりあらためらる。科をもたず。たゞ山伏道の修業が天下の法度にはしなりさぶらふか。時に左衛門  
つと出で。いや。左様の事にあらず。頼朝義經おんか不和になり給ふに付き。判官殿十二人のつ  
くり山伏となり奥へ御下向の由きこえ。あらためせとの御事といふ辨慶きいて。あらうれしや仔細う  
けたまはらぬうちは思はぬ氣づかひ致してひ。その判官とやらんは此なかに終に見たる者もひはず。わ  
れは南都東大寺建立の爲。諸國を巡りひが何と奉加に付き給はぬか。左衛門聞てホ。かたぐを誠  
の山伏にしては請とり難くひよ。殊に同道十二人。疑ひもなく判官殿ならん一人も通さじとひしめく辨  
慶すこしも騒がす。なにまことの山伏ならじとはして此中はその判官と紛らはしきものひか。いや紛ら  
はしくもなくまさしく御身は武藏坊辨慶。彼なる色のしろさが判官殿よ。所詮一人も通さじといへば辨  
慶からくと笑ひ。さてうれしや日本一の勇士にわれ。が似たるぞや。これは好き目利とやいは  
ん不目利とやまうさん。さはさりながら富樫殿。御身鎌倉殿を主君と頼みまませば。義經も其にお主  
筋。御中不和なればこそさすかの義經。姿を變て忍ばる。を是非に檢め現はさんとはさてもさもしき心  
入れ。悉皆うれば武士たる者の所爲ならず。假し又我々誠の義經辨慶ならば。この關の五百や千の人衆  
小指の先にもかくべきものが。御身武士の道を知らばたとへ誠の義經と見るとも。かゝる敵になり給は

い哀憐の垂れ通さんこそ本意ならめ。近頃不祥なる處へ來懸つたるものかなど。おの。一所に立なら  
びびくともせば踏つぶさんと思ひ込ふたるその氣色。いかなる天魔厄神もおそれつべうぞ見えにける。  
左衛門聞て尤もなり去ながら。さいせん東大寺建立の勸進とうけたまはりひ。さだめて勸進帳のひへき  
聽問致しひはん。もとより勸進帳のあらばこそ。往來の衆物取いだし勸進帳と名づけ。高らかにこそ讀  
上げれそれ。つらく。おもんみれば大恩教主の秋の月は涅槃の雲にかくれ。生死長夜の長さ夢。驚か  
すべき人もなし。此處に中頃帝おはします御名をば。聖武皇帝と號け。奉り最愛の。婦人に別れ。戀慕  
やみ難く。涕泣眼にあらく涙玉をつら。ぬく思ひを。善路に翻へして盧舍那佛を建立す。かほどの靈場  
の。絶なん事をかなしみて。俊乗坊重源。諸國を勸進す一紙半錢の。奉財のともがらは。この世にては  
無比の樂にはこり當來にては。數千蓮華の上に坐せん。歸命稽首。敬つて白すと天も響けと讀上たり。  
左衛門聞てこの上は。たとへ判官武藏にもせよ許しやすにはや。通り給へ。なに仔細なし通れとや。  
然らば落居のうち暇を取り奉加におくれひへば御大儀ながら是非勸進帳に付け給へ。實に。現世後世  
の爲とて鳥目百疋出しければ。いやなふ富樫殿。大儀は一度名は末代御身も名ある侍の。鳥目づれば見  
苦し。なまじ付すば付ぬまでよ。せめて金十兩といへば富樫きよつとして。さて。山伏かな。  
關を許せば奉加を望む。奉加につけば少分なりと却つてわれをはちしむる。とはいへ判官ならばゆるさ  
る。を悦び仔細なく通られんが。まことの山伏知れたりと又百疋取出し。何卒と存すれども某もまどし  
ければこれにて堪忍したまへど。やう。にわびければ辨慶にか。しきかほばせにて。エ。輕微なれ  
共。いらたか數珠を押もんで。皆一同に聲を上げ東方にかうさんせ。南方にぐんだりやしや。西方に大  
威徳北方。金剛夜叉明王中央に。大日大聖不動明王ねがはくは。判官殿をこの關もりの手にわたし。勸



功下状にあづからしめ給へど高らかに唱へ心中には、南無八幡大菩薩願はくば我君を、事故なく奥州へ送届けてたび給へど、腰なる放螺貝押取り、天も響け、大地も裂よと吹立て、くく暇やてさらばよとて、おのく打連れ通らるゝ虎の尾を踏み毒蛇の口、危かりける次第なりとて聞く人、身をこそ冷しけれ

才 三

よしや義経ならぬ身の麻衣、御姿さへあるものを色をかへ、品をかへ、多くの難所凌ぎつゝ、出羽の國に入り給ふ。是に高札の立てあり、何や佐藤の館にて山伏接待とひいざほつきひへ。兼房聞て佐藤の館にひ程に直に御通りあれかしと存じひ。辨慶聞きもあへすいや、繼信忠信が草の蔭にて恨みん所もあり。只知らぬさまにて御着有ふするとおのく、内にぞ入り給ふ。辨慶鶴若を見て是は誰の御子息ぞ。さんひ佐藤繼信が子にてひ。さて繼信は御内に御座ひか。判官殿の御供中八島の合戦に討れてひ。あら笑止や扱此接待は誰の御企ひぞ。さんひ判官殿十二人のつくり山伏となり奥へ御通りの由承り、乳母にてひ者此接待を始めてひ。見せば方々こそ十二人御入ひへ。若し判官殿にては御座なくひか。ア暫く斯る疎忽なる事をやさるゝものかなまづ、内へ御入ひへ。如何に乳母君山伏達の十二人御着にてひ。噓し、舊里を出し、鶴の子の、松にかへらぬ淋しさよ。實にや憚りある身として、御前に参りてひへば、かつうは亡き人の名をも下し。又は子供にいしへの耻をも、あらはすにてはひへ共餘りに御なつかしき心ばかりにて、御前に参りてひなり。これは故佐藤庄司が後家、繼信忠信が母にてひ。實にや親子恩愛の別れの餘りには、包むべき人目も知らず。又はうき身の耻をも、あらはすにてひへ

も、さりながら、此接待とやすに、現世のいのりの爲にもあらず後生せんしよとも思はず。嫡子繼信は八島弟の忠信は、都にてうせけるとばかりにて、詳しき事をも知らずして、ひとり悲しむ身を知る雨の晴れぬ。思やなぐさむと。此接待を始めてひ。札をたて、よりこのかた。一日に五人三人、乃至一人二人、絶ゆる事はましまさねども、十二人は今が始めにてひいづれが我君ぞ。何れがそにてましますぞ。夜も更たり人の知るべきにもあらず。この乳母が耳に密と、御語りひは、この接待の利生にてむなしくなりし繼信を再び見ると思ふべし。親子より主従は深き契の中なれば、さこそ我君もあはれと思召すらめ。殊更御爲に命を捨し郎等の、一人は母一人は子なり。なごや吊ひの御詞をも出されぬ。斯程數ならぬ身には思のなれかしあら恨、めしの浮世やな。辨慶聞きて是は思ひも奇らぬ事を承りひものかな。我等如きの山伏の、五人三人行連れ、今夜十二人泊りたればとて、判官殿とはかゝる粗忽なることを承りひ。さりながらさまこと繼信の母にてまします。判官殿の御内の人少々見知り給ふべし。所詮そなたより名をさして御覽ひへ。仰の如く我子は御内にありしものなれば、大方推量やたりともさのみ違ひまじ。まづ斯様にもゆす山伏は何處山伏と御覽じてひぞ。さんひ只今物仰せられつる客付は、此御供の中にては一の老歳にて御渡りひな。いで此御供の中にて年寄たる人は誰ぞ。ヲ、今思ひ出したり。判官殿の御乳母の親、ましおの十郎權の守兼房山伏ひな。一年よりたるが兼房ならば尼公も兼房にてひべきか。さて是なるは何處山伏にて御入ひぞ。是は出羽の國羽黒山より出たる山伏にてひ。いや是は播磨の人の聲にてひものを、それをいかにとやに姥は素より播磨もの。十三の歳繼母を恨み、都にのぼり故庄司殿とちぎりをこめ。繼信忠信をまうけ今かく愛目を見ひへば、たゞ恨めしうこそいへ。されば我國の人の聲なればなと聞知らでひべき。いで此御供の中に播磨の人は誰ぞ。是も思ひ出したり。判官殿



越とやらんの御時、狩人の姿にて参りあひ其儘苗字を賜はり、今迄も御供と聞えし鷲の尾の、十郎山伏  
 ひな一さて又斯様にものやす山伏を何處山伏と知し召されてひそこれこそ大事にてひへ京の人の聲か  
 と思へば又近江の人の聲にも似たり、いで御供の中に近江の人は誰ぞ、やひさればこそ始より、器量骨  
 柄人にすぐれ何とやらん物おそろしげなる御有様、天晴これは辨慶山伏御座めれ、それなら元は近江  
 の人三塔一の悪僧今はまた我君の、一人當千の武夫よなふもの、よ武夫も、物の哀は知るものを、な  
 ごされば餘りに御心強くましますと、袂に絶り聲を上げ人目も、知らず泣居たり、一鶴若見参らせいか  
 に姥御前、斯程心もなき人々にさのみことばを盡さんより、今は内へ御入りひへ、是なる童は伶俐さこ  
 とをすものかな、まこと繼信が子ならば主君判官たるべきものをえつて出しひへ承りてひと十二人の  
 山伏の、みな御顔を見廻しこれこそ其にておはしませ、一切をにてあるべき所以はいかに、いや如何に包  
 ませ給ふとも、人に異なる御粧ひ疑もなき我君よ、乳給べなふとて走り寄れば、岩木を結ばぬ義經なれ  
 ば泣くく膝に抱き取る、實にや柳橙は二葉よりこそ匂ふなれ、誠に繼信が子なりけりと皆涙をぞ流し  
 ける一言語同断此うへは何をかかくしすべき是こそ我君にて御坐ひへ近うまわりて御目にかゝられひへ  
 「我君を拜み奉るに付て子供の事こそ思ひ出でられてひへ、さても繼信は八島にて、功なりともや又不  
 覺なりともやす、最期の有様承はり度ひ、判官開召し如何に辨慶、繼信が最期の仕儀悉しく尼公に語つ  
 て聞せひへ、畏つてひ、御説ご中御所望といひ、終夜かたつて聞せやさん近ふより御聞ひへ、さても  
 八島の合戦今はかうよと見えしところに、門脇殿の次男能登守教經と名乗て、小船に取乗ら磯間近く清  
 寄せ、如何に源氏の大將源九郎義經に、矢一筋参らせん受て見給へと罵る、かうやすおのくを始とし  
 て、我もくと御矢面に立んとせしが、何とやらん心後れしたりし所に、繼信は心優りの剛の人にて御

馬の前に駆塞がり、義經これにありとてしづくと控へ給ふ、其時に教經は、引設けたる弓なれば矢坪  
 をさしてひやうを放つ、過たず繼信が着たりける、鎧の胸板押付總角かけすたまらずつと射通し、背  
 後に控へ給ふ我君の、御着長の草摺にはつた射留む、さて其時に繼信は、馬に乗り直らんくとしけ  
 れども大事の傷なればちつとも堪らず馬より下にさうと落つ、やがて我君御馬を寄せ、繼信を陣の後に  
 擔せ如何に繼信、如何にくと宣へどもたんだ弱りに弱つて終にむなしくなる、なんばう面目もなき物  
 語にてひ、なふ其時に弟の忠信はひはざりけるか、あら愚や忠信の御事は、日の下に於てかくれなし能  
 登殿の童菊丸、繼信の首を目懸け落の方に走上るを、忠信取て放つ矢に菊丸が真中射徹され、かつは  
 とまろべば教經船より飛で下り菊王が、綿嚙つかんで遙の船に投げ入れ給へばほごなく船にて空しくな  
 る、眼前兄の敵をば、弟の忠信こそ取てひへ、さては敵も大將に仕へやせし御童、繼信は又我君の秘藏  
 に思せし御内の人、彼は平家の船の中、此方は源氏の陸の陣、彼も主従、是も主従、思も同じ思なれば  
 「餘所の歎を思ひ合せ御なぐさみひへ」とよ、それは仰までもひはず、御身代に立つ上は今生後生の面目  
 なりさりながら、命ながらへ御供や、御笈をも肩にかけ此御座敷にあるならば、十二人の山伏の十三人  
 も連りて、只今見ると思ひなばいかはうれしかるべき、さてなふ弟の忠信は都にて死したるともす、  
 いまだながらへあるともやすついでに語つて御聞せひへ、されば忠信は君の御行衛を尋ねかね、都に返  
 びある由六波羅より聞付討手向ひ、終に六條堀河の御所にて、我君を拜み奉ると思ひ自害せられたると  
 承りひ、なふ問ふに辛さの増り草葉末に残る白露と、思へば浅ましき長命やな去年の春忠信わざと人を  
 下し、繼信討れたると聞ければ、身も絶なんどは思ひしかを明年の春の頃、忠信下らんといふ嬉しさに  
 、繼信がことは餘所になり、あはれ今年も早く經ち、新玉の春も来て忠信も来よかしと、思ひし事もあ



だし世に生て物を思はんより、殺して給へや人をとて前後も、さらに無かりけり。君をはじめおのゝまことに道理至極なりとて共に袖をぞしほらるゝよしなき長物語の中夜がわけてみ。奥とは程も近ければ、追付御入あられふする間、いざ御立と勤め奉れば、鶴若これを聞きいかに誰かある馬に鞍置き弓鞆おこせ君の御供やさんに「やあ御供とは何事ぞ」君の御供やてこそ親の敵に逢ふべけれ。それは弓矢の道これは修業の山伏道に何の敵のあるべきぞ。左あらば小さき兜巾袷懸をこしらへて給はれ。山伏道の御供せん。辨慶暫し涙を押へ、天晴繼信が子かな。誠御供ありたくば。今日は道具をこしらへ給へ。明日は迎ひに参るべし。誠さうか「なかく」に「我も迎ひに参るべし。我も迎ひ参らんと。面々聲々に賺され雅なき身の悲さは、眞實ぞと心得て少し詞の弱りたる。折を得て客僧はなくく、奥へぞ下らるゝ。此人々の心の中、物の哀れは是なるはと聞く人。袖をぞ絞りける。

芽

此處も旅寝の袖の浦、ひそかに出羽の國よりも秀衡が館に入り給へば、入道無き子供を連れ御前に罷出で、此度の御下向まことに勿躰なくこそ覺えいへ。其上北の御方様越路の雪のうき難所。夜寒の衣うすき御姿、返すくも御痛はしと涙と共にゆさるゝ。義經聞し召し今更の事ならねど、いよく頼むと宣へばこは眞加にあまる御誼のおもむきやあ子供等。只今の御一言たどへ秀衡死したりとも、必らずく忘るなる。誠に某が長命も思へば天理にかなへり。是非鎌倉へ伺候して、直に言上御中直し奉らん。御心やすく思召せとさて人々にも挨拶し、まづ新殿に移し奉り好きに慶應仕れど、心底残らぬ有様は實に頼母しくぞ。三重見えにける。頃は卯月の、初めの八日秀衡が乙の姫、千種の前とて未だ二八の春も

過ぎ折節にたく東路の躰隔が岡の花車欄干にとりるかし奥さまへお取次頼みませんとといふ處へ、判官よつと出合せや、ム、してこれは何處からぞ姫すこし會釋して、妻か母の方より奥様へといふしほらしき顔に義經はうごなづみ給ひ先は見事の花車、引手のお名はと問ひ給へば、千種とやひなりかゝる田舎の末の松山花のなみ色よし振よし濡れの盛りと手を取らんとし給へばしやはに何の田舎者ぞと思はせ振して立歸る。姿の惜や小鳥の蟄の重ねて便の船もがなど、あとなつかしげに見送り給ふ所へ北の方出させ給ひ、さてうつくしの花車いづかたよりと問ひ給ふ。いや秀衡が女房の方よりと、宣ふ内にも懸の山、千種に思ひあまりてや上の空なる御有様北の方御覽じて、君は御心にかゝる事ばしひか、たいうかくと見えさせ給ふがとあれば義經ちやくとよい術を出し、さればこの花を見てふと人界の仇なる事こそ思はるれ。盛は朝の露散るは夕の風を待す。兎角菩提心を起し、一七日坐禪して、心を疑し見んとあれば北の方驚き給ひ、なふ今やなと後世の道さりとて思し止まり給へとたつて歎き給へども、いやまづ沈めて聞給へ。われ年月の合戦に人を殺す事敷を知らず、その罪いかで免れん修羅の苦み目の前なれば何卒この苦を通れたき願ひ、御身どもまた後の世を、一つ蓮の望あるゆゑなり。悪しく心得給ひそよ、はてその御心入れならば兎も角もといひながら、少しの間さへ待遠なるに七日逢ではいかにそや、あられふものかど宣ふをいろく、偽り宥めさせ、表の坐敷に出給ふ心の「中こそ嬉しけれ、さて辨慶を近ふ召されよもやまの御咄の次に、なにと世の中に止がたきものは、色慾の道にてあるまいかど宣へば、随分堅き武藏坊、誠にそればかりは止むまじき事と打笑ふて居たりけり。判官好き首尾と思召し、いやこれ辨慶それにつき近頃言かねたれども、黙止がたき懸路ありて奥をばかやうに誑りし、迷惑ながら其方我身に代り、坐禪してくれよとあれば辨慶呆れて御顔を眺め、も又止させ給へといふ義經はつと思しなが



ら。此度ばかり不承ながら是非に〜と宣へば、はて量見もなし仰なれば鬼もかくもと座を占めて、きぬ引被さし有様はさながら。鬼に衣なり、判官るつさまましまし鬼かういふはくだなれば。最早行くぞと宣へば辨慶不興聲にて、これ〜随分早く歸らせ給へ。遅くは此役目断りなしに引ゆさん。フ、待せはせじと言捨て、千種の前のおはしける襦戸に「忍ばせ給ひけり早更過る。小夜嵐、嘸さこそ。袖の朝明け思遣れて北の方。銚子盃取添へて物静にさし足し。密と覗き見給ふに、おこなひ濟しおはします。扱も〜おこゝろさしのかくも變らせ給ふものは。去ながら俄に左様にあそばしては。お氣詰りもやと煩し宵よりの御心晴しに、酒一つと寄給へば辨慶ぞつと寒氣立ち頭に頭を振りにけり。ム、扱は御行の邪魔にばし成りひか。併し常にお好きなれば。平に〜と強たまふ辨慶心に思ふやういやく〜こゝは飲でとく。又早く歸すためと思ひ襖の下より手を出し。たぶ〜と引受け。押俯伏すつと干した差出してうご。受け。飲む中に我を忘れ。頭を撫ては。好い氣味かなと。いふ聲に驚き顔さしのぞきこれはいかな事。さても憎やと衣引除けなふ殿は何處へ遣給ふぞはや〜言れよ腹立やとあらけなく答められ辨慶はうごゆきつまり。いや未だ讀岐の八島にと何をいふやらわけもなく。あとをも見ずして遁にけり。エ、腹立や胸の燃るは鹽釜の恨みは君にと衣引被さ。武藏が如く座を占て。今や〜と待給ふ御有様こそ。三軍たいならね。花の錦の、下紐は。解けてなかく〜よしなや柳の糸の亂れ心。いつ忘れよ信夫の里の信夫摺。見えすく〜。薄き情と思はれず。や。早や鶏が啼くさぞ辨慶や待兼んと。立歸り見給へばつくとして坐してあり。さて〜侍遠からん辨慶さりながら先へ行きての首尾いやはや詞につくされず。とてもの事に君が情の有様語つてきかせん。とはいへぢ〜には遠慮あれば。窮屈ながら今暫く其儘衣をかぶりてのよ。ム、なに心得たとして領くか。フ、さあらば語るにつけ。かゝる東の果し

にも亦あるものを優女。しんぞ都耻しく歌にて口説ば歌にて返し。警喻でなげば警喻で受け。どうもならぬをやう〜と靡け。床の打解語らひは。いやはや何の因果に山の神めをはる〜連ては下りしぞ。さて越し方行末の物語のうち嬌鶯の啼く聲聞ゆ。夜や明けぬらん早や歸らんといへば。彼の姫じつと手を取りて。鶯がなげば。最往のとおしやる月夜の。鶯。何時も啼くと唄ひとめられし程に。いや〜早や明るやらあれ。〜。曉の明星が。西へちるり東へちるり。ちるり〜とする程に。往ふよ。戻らふよといへども小腰に抱ついて。いなふとも戻らふとも。何とも。其方の計ひと。いふては袂を引留て。鳥も啼け。鐘も鳴れ。なれ〜しけれと。しめてお寝れの夜は夜中と楓の様な御手にて。それがしが背をほど。〜と叩かれるれば。なにの事か思はれふ。わんざくれ命諸共とは思へども。しのゝめやう〜明方なれば。御名残いつまでもつくる夜更にひはじと。是非なく歸れば送りて出で。馴れ参らすは如何ばかり今の思はせまじを。うらめしげなる別れの程やれ辨慶。鬼の様な其方なりとも心の引れまゐものにてなし。や。嘸窮屈ならんさあ〜最早衣をとれ。何否とてかぶりをふるか。扱は遅く歸りし腹立ヲ、道理さりながら。今少し早く歸らんと思ふ處に。彼の姫靜が事を問はせられてな。其處で大きな嘘をついたは。その静めは碌な者ならず。夫ゆる京に捨置しといへば。又奥が風情を尋ねられし程に。猶や誹つていや〜。人の交りする者にあらず。心入の悪さ生れ付の可笑さを。譬へて言ば、何にかは。とつと深山の其奥山のこけ猿小猿が雨にそぼ濡てひ。ひつくばふてかいつくばふてさうして斯様して物として。とこに一つの取柄がないぞいの頭も禿てゑ。會釋はなふてヲ、怖い節を云ひければ夫はまた何人の息女ぞある程に。何の數ならぬ賤原の樵夫が娘なりと答へたぞ。宣ひもあへぬに北の方堪り兼ね飛菟る。義經周章てやれ悲しや辨慶。頼み甲斐なしと振切給ふを容赦もなくしがみ付き。



して妾が父の何時樵夫をせられしぞ。いかに戀のたよりとても餘りなる御仕方と。御髪を取て引付給へばさしもの義經責付られ。くるし氣さうな聲音にて。いや／＼ひよつと不調法眞平御許し／＼と。わびさせ給ふを辨慶物陰に聞き居しが。おつ／＼立出で。先かうあらふと存じた事。是は奥様の重々御道理最早堪忍あそばせと。是非に御手を引放せば。面目無さうに判官はむづ／＼と起直り。しほ／＼としておはせしは手持無沙汰に見えにけり。辨慶餘り笑止さに。此上はそれがし随分御意見やさん兎角勘忍遊されよ。若し其上にも止み給はずば。屹度訴人いたす儀といへば北の方聞召し。いやこれ倍氣ばかりでやになし。今は大事の御身なれば。人の讒世の妬み秀衡殿へ聞えても。好らぬ事と存する故と其理を詰て宣へば。義經もはうと詰らせ給ひいやなふ尤是に懲ぬものが誰があらふぞと。苦笑ひの御有様辨慶可笑く思ひ。まことに異見の言置はやされず。我君は勿論この武藏めも。一生物の怖しいといふ事を知らず。又數萬の敵に逢ふても終にうしろを見せざるに。今宵奥様の御氣色には。慄と身の毛がよだちて足も痿え心消え。逃るに途方を失ひし。あら勿體なや思はしや懲させ給へ重ねては。此武藏は存せぬと後には哄と打笑ひ。お暇やて立にける彼の辨慶が逃振と。又義經の難儀の體。嫉妬ならずばかくやあらめと皆人。感するばかりなり

オ

有爲無常の慣とて佐藤秀衡は。文治四年の冬の末。終に空しくなり給へば義經を始め奉り。一家一族諸共にうれひに沈むばかりなり。されども日數重なれば。七日／＼の御吊ひ實にも「殊勝に見えにけり。さても秀衡死去ありて。百ヶ日も過ぎるに鎌倉殿より御教書下り。安衡が邸にして兄弟五人拜見す其文

に曰く。何とて奥の一黨は。惡逆の義經に與し頼朝に敵を爲す條其ぶめいを知らず。はやく義經を滅し鎌倉に降参せば。勳功厚くあて行ふべきものなり頼朝判とぞ請上げたり。兄弟暫くとかうもいはす目と目を見合せぬたりしが。惣領しきとて安衡押取ていふ様は。いづれもいかと思はる。ぞ。御教書の如くよしなき義經を主とたのみ。下まじき處にて馬より下るも無益なり。いざ討取て鎌倉に捧げ。勳功に預らんいか／＼といひければ。錦戸を始め四郎元義ひづめの五郎皆尤もとぞ同じける。中にも和泉の三郎涙をばら／＼と流し。さて／＼勿體なや幾年生んとてかゝる事は宣ふぞ。父上も此事。を末期迄言置いづれも。起請を書せ。世に嬉しげにて死し給ふ其遺言を空うし。お主に弓をひかん事いきては家の名を下し。未來の業は如何せん此事に於ては。思ひ止まらせ給へやと袖を。殺して諫言す。安衡錦戸ことばを揃へ。なに兄々は勿論弟ごもまで了見して尤も同せしことを。汝一人否といふは必定高館殿と一味ご見えたり。然れば我々に敵せん所存。全く其處を立せじと膝立直し怒を爲す。忠衛居直りいや。事をかしき舉動や。親兄の禮を重んじ諫言するが。僻事か。天命をもおそれず惡逆無道のかた／＼を兄とも人ごも思はねば。是より直に高館殿へ参り御味方やすぞや。兄顔をして入らざる力みさあ。口程あらば留て見よと。四人をはつたと脱廻し。坐敷を躰立て歸りしは實にたの。もしくぞ見むにける。兄弟四人は腹を立て。時刻移さず押寄せ先づ忠衛に腹切せ。軍神に祀らんと照井金澤鳥海に。三千餘騎を差副へ和泉が城へと。三重押寄せける程に。和泉の三郎忠衛は急ぎ宿所に歸り。女房に近づき始終を語りければ。こはそも如何に我君はなにか成らせ給ふべき。假し此上は是非もなし。みづから女の身なりとも御身諸共御供し。兎にも如何にもなりはてし思へば。／＼あさましの浮世の中やと涙を流し中さる。ヲ、能ぞ／＼頼母し。有業は佐藤庄司の娘忠衛が女房はごありけるよ。然らば侍の最後に心か



ありありては必ず不覺の死ありとや。いふ二人の子供を害し心よく討死せん。それ／＼とありければ女房少しも恐怖す。二人の若を召連て父が「前にぞ直りける。無惨やな若共は五歳と三歳になりけるを。忠衡双の膝に抱き。後れの髪を掻撫く。暫し涙に咽びつゝ、ア、さて不便の者共や。幾程添はぬ間を親となり子と生れ。剃さへ父が手にかけ殺さんど。前世の因果といひながら思へば辛き事ごもかな。さりながら殺す父な恨みぞ多。これ叔父共が爲す業ぞ。念佛せといふまゝに兄花若を引寄て。胸元を二刀刺殺し押伏する。弟が是を見てわつと叫びこわいぞなふ。母上様と抱きつく。忠衡心は消ゆれどもやれ花みつよ。汝ばかりは行ぬぞ父も母も行くぞとて。母に其儘抱かせながら脇のかゝりを一刀。わつとばかりを最期にて同じ枕に押伏せ二人が死骸の其上に。夫婦諸共倒れ伏し聲も。惜まず泣にけり。涙のひまより忠衡は。さても／＼如何なる前世の宿業にて。現在の我子をば。手にかけて殺すはかなさはア。淺ましき武夫の。引に引れぬ弓矢の道。南無三寶しなしたり。斯まで武運盡るものか。又平伏してそ歎きける。女房も猶し心は消ゆれども。男に力をつけんと思ひ。御歎きは道理なれどもさりながら。子供を殺し我々が。存らふる身でもなし。定めて御身や妾が。過去の敵が子と生れ御手にや罹らん。何事も定まる業。必ず歎かせ給ふなと。さも深く宣へど。せき来る涙は白糸の瀧津瀬に増すばかりなり。忠衡聞て實に後れたり弓取の。心を弛せば不覺を取る定めて押寄せ来らんと。子供が死骸を隠しぬき郎黨共を召集め。斯様／＼の次第なり用意せよとありければ。有繁和泉が家来とて命を惜む氣色なく。畏つてひと。弓鎧長刀太刀刀。思ひ／＼に腹巻し寄せ来る敵を。今や／＼と。三軍待にけり。時刻移さず敵の大勢二重三重に押寄せ波をどつとぞ上げにける。城の内にもかくと期したる事なれば。木戸を開き切て出で。兩方互に入亂れ火花を散して。三軍戦ひけり忠衡は。其隙に物具し弓押張り橋に上れば

女房も物具し。長刀引提げ續きけり。さて忠衡は大音上げ。それへ寄せ来るは照井金澤鳥海とこそ見れ。某がいふ事をたしかに聞て悉しく語れ。我兄弟ながら汝等が主共は。貪慾無道の者はなし。あはれ命がな今一つ欲し。天命知らざる兄弟共の成れる果が見届たや。今某が放つ矢汝等に射るにてなし。兄弟のもの共に恨の矢一筋受けて見よと云ふまゝに。十三束みつぶせ三人張にとつて番ひよ引ひやうご放つ矢が。一陣に進んだる金澤九郎が胸板をぐつと射ぬいて餘る矢が。うしろに控へし番場の兵衛が兜の左手のふきかへしに火煙散して立つたりけり。これをはじめてさしつめ引つめさん／＼に射る程に。十七八騎射て落し。扱櫓より飛んで下り打物抜いてさしかざし。夫婦諸共きつて出で。こゝを最期と。三軍はげみける未だ時も。移らぬまに夫婦の人の手にかけて。五十八騎斬つて落し残りしやつばら四方へばつと追散らし。手に手をとつてうちに入る。いざこれまでと忠衡は鎧の上帯切解き。心しづかに観念し腹十文字に掻切れば女房やがて介錯し。刀の尖先口にくはへ打伏にかつばと伏す。女房は二十九忠衡は三十三。をしかるべき命かはまことにこれらが最期の體。忠とや云はん義とやせん前代未聞の次第なりとて惜しまぬ人こそなかりけり



盛久

去程に舟をはじめて。一門皆舟に浮べは乗後れじと。汀に打よれば座船も兵船も。はるかたのび給ふ。せんかたなみに駒を扣へ。あきれはてたる有様なり。平家の方に是を見て。まさしく源氏の若者共高名せんと寄せつらん。射とれや射とれと辨めければ彼武者聲を上げ。ア、全く源氏方にひはず。何某は主馬の判官盛久なりと高らかに呼ばれば。能登殿船端に突立上り。盛久は平家譜代の侍武畧の達者。其外亂舞堪能の譽ある故。八島一の谷にて侍大將うけたる身が。此期に臨んで引返すは後れたるか憶病か。いかにくと仰せけり盛久駒をひかへ。不審はほこわりさりながら。此度薩摩の守忠度卿の手に屬しひが。忠度卿とは和歌の同學。心を同じうするを朋といひ。師を同じうするを友とかや。彼是盡せぬほよしみ。忠度卿敢なくも六彌太に討れさせ給ひぬ。今は何をか期すべきと存じ切てはひへ共。一門の行衛おぼつか波の舟の内。一とせ小松殿北山にて。茸狩のいうるの酒宴の時。某一曲奏での褒美に。床夜と申女房を婦妻に下したび給ひぬ。然れども未だ取迎へをもせざるまに。此兵亂起りひへば。せめて未來のかため結び度是迄参りひと。涙を浮め申にぞ上下感給ひつゝ。やさしきもの心底や床夜の前に引合せ。最後の名残をしませよと料の舟お供舟。残りなく尋ぬれども床夜の前からざれば聲々にかくといふ。何我妻はひはずとや。エ、彼れが所存を察するに。運の末と見うけつゝ。落行しにまがひなし。おのれ女め畜生め。左様の心と知らずして敵にうしるを見せ。是迄来りし無念さよと不覺の涙を流せしが。エ、よしなし此上は。浮世にさらしく心とまらず。源氏の大將義経を引組ん



盛久  
 二  
 で死なすんば二度又人に。面をむくるとあらじ。是迄なりと夕沙の。引は返さじ武士の八十島かけて  
 わだの原。島がくれつ。三重別れける。主馬の判官。盛久は今早心安ふ討死し。忠度卿と手を取て  
 四手の山路を伴はんと。夜を日に次で打つ程に須磨の上野に着しかば。とある岩の上に駒かきする。四  
 方をさつと見る所に。何處よりかは流れ矢來り。馬の平首はぶくらせめてはつしと立つ。馬は頻りに跳  
 上り屏風倒しにたをるれば。我身は岩角にて胸を打ち。うんとばかりに息絶る扱も是非なき次第なり。時  
 時に誰とは知らねども。薬を與へ水をそぐげばやうく氣付息をつき。眼を開けばは如何に。花と鶯  
 く小娘の雪より白き手づからや。つめの紅葉もしむばかり額を押へ看病す。盛久ぞつとしくらくと又  
 目を眩すばかりなり。南無三寶迷ひしと心で心を押へ。何方かは存せねども。は恵にて命を拾ひ忝し。  
 重ねてお禮申さんといひ捨行くを引留め。是は器量にも似合まらせず。一命の終る所を助け参ら  
 すれば。妾は命の親ならずや。然れば君は妾が子。なふ子ゆゑの間にまよひしぞ孝行あれとて放され  
 ば。盛久あきれて顔を眺め。いやはやもたれし言分助けられて迷惑なり。孝行は追てのとまづ。愛を  
 放してたべ。いやなふ放さじと申さばこそ。は命救ふたるは禮聞て放さんといふ。ヲ、して。は禮には  
 何事か己身の望に任せ申さん。ア、忝し其お詞をちがへ給ふな。耻かしながら自は。あけぼのと申て此  
 浦の。蟄の子にて侍ふが。身にも及ばぬ望有て未だ夫を持ち申さず。夫を持たで死しぬれば。賽の河原  
 も怨めしく。誰をがなと思ふ内。不慮に目にかゝるよりそる浮立つ戀衣。せめて一言二世までの殿  
 よ妻よのは契約。憚りながらお情にと涙を流し口説けり。あだなやよそに盛久も。色に染みたる。風情  
 にてさてくわりなき心ざし外ならずは存すれ共。かくなり果し平家の運。今日の命も知らぬ身が。夫  
 婦の約束なるものか只々思ひ切給へ。いやくそれはお詞とも覺えず。君が一夜の情には妾が百年何か

盛久  
 三  
 せん。只今なりとも諸共に死なば一所。其手間に。片時も早く應ごいふ事ならぬかと猶色深く寄添  
 へば。岩木にあらぬ盛久我を折り腰をほつきと抜し。エ、其心底を聞き何しに詞を違ゆべき。未來迄も  
 夫婦ぞや。さあらば最早用云はん。見らるゝ通り此馬傷を負ふてありければ。引て庵に歸りよく植はり  
 て給はれや。生る共死する共今の詞は違へまじ。あれ見よ敵も旗近し。一軍はげみつ。後程庵へ尋ね  
 し。構へて一所ぞ夫婦ぞと別れて。濱邊に下りしが。人塵塚のあなたより。腹巻に烏帽子胴服打掛けて  
 武者こそ一騎出で來けれ。敵か味方か間近く寄せ敵ならば討取んと。一木の松に樹隠れて。しばし窺ひ  
 よく見れば我妻の床夜の。エ、憎くし我をふり捨。都へ歸る道すがら武者に擬て行ぬらん。おの  
 れ駆け出で一討か。なまなか敵に討せんか。兎やせん角やと牙を噛み。身を悶へ立つ所に。源氏の軍勢  
 兒玉黨の中よりも。洲濱の十郎と名乗て内裏上臈と見受たり。いづく迄もは供と際もあらせず追掛る。  
 取て返し長刀なげ捨て打物抜て飛ちがひ。爰を先途と戦ひしが。左手さがりに打つ太刀を押もぢりに受  
 ながし。十郎が鎧の上帯高紐かけて嵐にもろき風車。車切と云ふものにはらりすんぞ切落し。袖のふり  
 にて太刀押拭ひ。につこと笑ふて立給ふ。盛久少し思ひ直せども。今暫くと見る所に。小山の太郎武者  
 宗重と名乗り六尺ゆたかな大男。若黨二人左右に立ちしづ。と出で來り。天晴は働やひ。平家方にて  
 は誰人のよね様ぞ。名乗て勝負し給へとたつからかに呼はつたり。ヲ、自は主馬の判官盛久か妻女。建  
 禮門院の床夜の。前といふ者なり。定めて盛久は討死と覺ゆれば。夫をとられし鴛鴦の惜からぬ命ぞや。  
 洲濱が首を土産にて冥途の夫に逢ひたきに。寄て討とれ。と長刀取のべいざと云ふ。聲の内より太郎  
 武者からす踊のさそくを踏み。長刀はたと打落し大地へごうご取て伏せ。太刀押當れば盛久は如何はせ  
 んと心を碎くはあやう。くも又道理なり。され共宗重笑顔して。是お上臈。討死したる盛久に心中立て



死んより我が女房になり給へ。申ても某は武藏の國の旗頭。一國の者共に與様と仰がれば一生の樂みぞ  
 なから何とぞと思ひ。いやなふ仰は嬉しういへども。敵と味方の濡衣うらありげなるは詞。誠ならじと  
 有ければ。弓矢八幡侍冥加みちん僞なしと云ふ。何が扱其は誓言からは兎も角もと有ければ。ヲ、過分  
 くと引立て鎧に付たる塵打拂ひ。いざとせ給へと手を取れば振放し長刀押取り飛退り。是侍畜生奴  
 貞女は兩夫に見えずと云ふに組敷れしも汚はし。むざくと死んよりはと心ならずも前しを。誠と思  
 ふか口惜や。平家の御世が御世にして夫諸共にあるならば。今の無念はよも聞じと怒れる眼に涙をそ  
 ぎ。長刀かざしかゝらるれば宗重大きに仰天して。踏殺せと狂ふにぞ左手右手より取てかゝる。盛久堪  
 らず飛で出で宗重をはたと蹴倒し。二人の若黨兩手に取り微塵になれどかつばと投げ古木立に立給へば  
 此勢に恐れをなし宗重取て逃げさまに。盛久免せ神八幡口でいふた計りぞや。女房に手はさすゆ  
 せくといひすて。後をも見すして逃ゆけば。エ、太刀が切れて證なしと暫後を睨み付。扱床夜の  
 前に對ひ天晴は身は我妻かな。最前より見届けしにつゆちり濁らぬ心さし。かくとは知らで恨みしと心  
 底懺悔したまへば。嬉しきながら恨めしげに妻は又さは知らず。はや討死やなされつらん若さも聞ば諸  
 共に。自害し死んと参りしに疾より名乗り出給はで。扱わるがうな小面憎やと。涙交りのわらひ顔さ  
 め朽せぬ縁とかや。いざ此上は諸共に。一門に追付一所に死んど勸むれば。ヲ、尤も盛久二足三足出  
 でられしが。南無三寶あけばのに。堅き契約いかせん。往ねばたす往ればせず。思案とりく千鳥  
 足後にも心は残れども。かくといはれぬ二道の是非なく。誘はれ 三軍、急がる。いで其比は。元暦二  
 年三月廿四日。平家の兵船三百餘艘皆々陸におりたつたる。源氏の大將義經采押取。雜兵に目な懸そ。

門の人々を。討取れ生捕れ組留よと八方に下知をなし。白旗赤旗立違へ山を動かし火焰を放ち爰をさ。  
 い。期と 三軍、戦ひけり。爰に源氏の兵堀の彌太郎近經は。させる高名極めすよき敵がなと待つ所に。  
 床夜の前は舟を目がけ急がる。を。追駈取て組伏せ首を掻んとしたりしが。さすが痛はしく思ひ是々お  
 上臈。は身はまさしう女院の近習と見受たり。敵を助くる法はなけれと申ても女性の事。あれこそは  
 座船よ。疾々追付給へとて助けてこそは通しけれ。小山の太郎宗重は彌太郎に意趣ある中。此體を見  
 るより早くやあ見たぞ。彌太郎。敵を助けし二心大將に訴へんと。云捨て、駈て行く彌太郎はつと驚  
 き。扱口惜や近經が色に耽しと讒せられ。いか言譯立つべきぞ此上は討死し。悪名を雪がんと無二無  
 三に切て出る。主馬の判官盛久是にありと渡し合ひ。二打三打打合しが盛久太刀をかりと捨て。早く  
 首取れ彌太郎とさうご座を組み居給へば。彌太郎不審に思ひ何首取れとはして。此近經に逆も適ふまじ  
 きと思はる。か。盛久につこと笑ひヲ。かたぐ五人や十人は物の數とは思はねども。情の道に矢は  
 立す。以前は邊が助けしは某が妻なるが。察するにそれ故になき名を取らん無念さに。討死せん心ざし  
 天晴道ある侍を。殺さん事も本意なし。其上平家の運盡れば我々とても残らぬ身。急ぎ首取りあだ名を  
 す。げはやくと。くと勸めらる。彌太郎暫返事もなく。只感涙を流し佇めば。やあつれなし近經心ざ  
 しを無になすか。ヲ、心得たり去ながら。我悪名を雪がせんと思は。憎しと思ふ宗重めと。對決の證據  
 の爲何と生捕になつてくれまいか。はては身が爲にならば兎も角も計へ。ヲ、嬉し。頼もし。と。  
 上帯解て搦めつ。弓矢取る身の是非なさと目と目を見合せ泣れけり。かゝる所に沖の方より平家の大  
 將生捕り一門残らず討死と。呼はる聲を聞しより。源氏の軍勢一同に。関をつくり船を叩き悦び勇めば  
 御大將。同士軍すな舟覆すな勝て甲の緒を締めよ。降人討すな首散らすなと駒の手綱をかいくつて。し



んづ〜しづ〜と。乗戻し乗返し諸軍勢に下知をなし。數多の生捕引立て〜上下千秋萬歳の勝鬨、をこそ上げにけれ

第二章

しやくさいれうせんのは名は法華一乗。我等が爲の觀世音三世利益同じくは。けいりくに近き盛久が末くらからじと思へども。月の影見ぬ牢輿の。打しはれたる讀誦の聲憂き時つる、友もがな。土屋の三郎輿の戸を叩き如何に盛久殿。土屋が参りてひ。誠に人多き中に某預りや事他生の縁と存じひ。扱堀の彌太郎中越ひは。鎌倉迄は遠路なれば心も憐むべし。牢輿を免し参らせ馬に召させ。能々いたはりせよと呉れ〜ゆひひき。とう〜出ひへと。牢輿の戸を開けば盛久立出で給ひ。誠に此度平家の生捕多き中に。盛久はなんばう果報の者かな。仁義正しき彌太郎殿に生捕れ。情ある土屋殿へ預られやす事。せめては運に叶ひたり。就ては道中馬にて下しせとは。風景をも見せ給はんとのは心入。返す〜も忝しと。互に懇意の挨拶にて先々。輿に入れや。扱家の子櫻井を近付。盛久を鎌倉迄驛馬に乗せて下すなり。随分善き馬借りて來よ。畏て小藤太は急ぎ馬屋に觸れさせけり。や、あつて貸馬を三疋牽て來りけり櫻井是を見て。フ、よい馬共かな去乍ら。中に牽たる連錢直毛は手負馬。駿足あやうし罷歸れ。残り二疋は留れといへば。何なふ妻が馬は召まじとや。四國九國の戰場をも勤めし名馬いふに。よし叶はずば叶はぬ迄よ。盛久さまに一目逢せて給はれとぞ泣き伏してぞ泣居たる。あら不思議や。心得ぬ言分何者ぞと咎むれば。げに不審ははことわり。みづからはあけぼのとやす須磨の蟹。盛久様に故ある中。是も召れし馬なるが餘り床しき遺方なく。せめてお供と心ざし斯くもしつらひ参りしに。哀れと

思召し只一詞交させたと。又さめ〜とぞ泣きにける。櫻井もはかりがたぐ。輿に立入り主君に斯と訴ふれば。土屋暫く思案して。不憫には思へ共。女ながら平家餘黨且は彼が身の爲なれば。只某が情なき分にして〜かへせ。承りひと表に出で。是々大事の囚人なれば對面は叶はず。早く追返へせとの仰なり。それ〜といひければ。下部共あらけなく門外に押出す。あけぼのわつと聲を上げ。今迄はさりとも頼みし甲斐もあだとなり。妻こそはなじまぬ中畜類ながら此馬の。主に縁なき不便さよと鞍に絶りて口説きけり。然る所へ床夜の前。いと忍びたる風情にて土屋の門外へ櫻井を呼び出し。自は盛久の妻女。床夜とや者なるが。別れてよりは便もなし。あはれ〜お情に一目あはせて給はれと涙に。しほれ宣へば。櫻井輿顔にて是は〜。おれなる女も盛久を夫なりと名乗て來り。又其方も妻といふは如何さましれたる女共。思ひもよらずと大きに叱り扉を。さして入にけり。床夜の前呆れながら。何是なるが盛久の妻と名乗て來りしとや。して先其方は如何なる人にて盛久殿の妻なるぞ。いや異な事をしらぶる人かな。妻は須磨のあけぼのにて。盛久様とは夫婦もめをどほ夫婦にて有りけるが。さう又咎むるは身は誰ぞ。フ、おれな。定めて聞も及びやらふ。床夜の前といふ者なるがなふ。とくご物を聞きや。男の慣なれば女ひとり守り給はじ。戯いふまゐりものでもなし。それをはや夫婦とは。扱淺はかな心底や自こそ盛久様とは。めをとも夫婦眞夫婦と。八げん放つておはしけり。あけぼの赤面しいやなふ。忝くも盛久様の命を。妻は救ひ参らせしが。は身は我身の身替に。盛久様を生捕らせそれで夫婦が立つ物か。さあ。斯いふが口惜くは早く彌太郎討取られよ。討ずば一分立まじきと幾り掛れば急きかくる。心のたきに淀鯉の上りつめつ。床夜の前。エ、はしたないあの口わいの。是。人の事はいひよいも。左程もごかしはおぬしはなご彌太郎を。狙ふては討ざるぞ。フ、サ夫をば身にならふか。いか



にもく討て見せふ。床夜いよ急にせき。いやく大事の夫の敵おこつれが手に掛ふか。自が討て見せふ。ア、は身も討ば討て。遠言ではない此女三日の内に討て見せふ。やら事をかし三日とや。妻は今宵首取て其生面に打付ん。ア、其口を忘るゝな。御身が討か我討か討てからの廣言と。きつと争ひ譲り合ひ。殴んで左右へぞ。三重別れける。既に其日も。くれなるの。恨すくなき彌太郎を。女の意地の詮方なく守刀を肌差し。今宵討んと忍び居る矢竹心を哀れなる。折節彌太郎土屋が陣へ行けるが。歸るさの門外に物こそ見ゆれ。やあ其提燈上げよと云ふ聲に驚き逃んとはし給へども。案内は知らず物蔭に押俯。伏ておはします。彌太郎差覗きは。は身は壇の浦にて助けやせし盛久の簾中ならずや。さこそ流浪と察したり先こな。たへと内に入。わりなく待遇し。扱彌太郎やさるゝは。武士の慣是非なく生捕参らすれば。餘り御痛はしう存じ土屋が方へも能く恤りやせやと。日々に人を遣はし只今も。某は見廻りやたり。は有様を見るに付け。哀いやましひと涙を。流し語らるゝ。深き情に床夜の前直しいふべき恨もなく。は心ざしの程を承り。お禮やさん其爲に斯くは忍び参りしと。誠しやかに。いひ直し。もはや今宵も更みへども。斯く零落し身にしあればいづくに頼まん宿もなし。今宵一夜を明させてたべ彌太郎はたと行當りしが。ア、易きとなれども。陣屋なれば間狭といひ。殊に女中の宿はと不便ながら辭退あり。ほことわり去ながら。互に曇らぬ身の上を。誰が何とやべき只は芳志にと宣へば。然らば我等も家來共も彼なる小屋に臥し。爰に明させ在しませ。誠に翠帳紅閣に起臥し給ふは身にて。いふせき陣屋の假枕は痛はしや此上にも。盛久殿の一命は何ぞぞ申なだむべし。若々訴叶はず共。下人の手にはかけ申さじ。は腹召させ申べし。如何なる者が敵となり如何なる者が味方となり。心の外の仇を結び今の哀を見ることよと。他事なくもてなし入けるは情深うぞ。三重見えにける。また寝もやら

盛久

八

ぬ。床夜の前。彌太郎が乗ての情。今宵の詞を聞かからに何とて彼が討れふぞ。仇を思にて報すれば恩ある人に仇はなし。道を忘れ討たらば佛にも捨られ。夫にも爵のあたるべし。ア、勿體なや討まじき是ぞ瞋毒の劔の山と。守刀をかりりと捨て涙に。くれておはせしが。南無三寶忘れたり。今宵も早かはたれ時今にもあけぼの來りなば。番ひし詞何とせん先をこされて一分立す。討ては叶はず討ればせず。討ては仁義の道立す討ねば女の意地たゝず。道を立ふか意地をたてふか。兎やせん。かくやと胸迫り途方涙もせきあへず。エ、我身ながらもさもしやと。獨言して彌太郎が籠の視取出し。心静に書置し。扱黒髪をふつと押切り。脱き捨ありし直垂を枕の上に取掛て。男の寝姿しどもなくなむあみだ佛と諸共に。口に吹消す燈火と共に。「限りの命かな。はや鐘鳴りて。あけぼのや。斯とは露も白小袖太刀わきばさみ彌太郎が。陣屋の體を來て見れば門戸厳しく入るべきやうもなき所に。一木の松の枝垂れし。是屈竟と左手を延べしすえに縋りかろゝと。彼方へひらりと飛んだるは胡蝶のはぶく如くなり。此音に床夜の前後あけぼのぞと静まりて。今ぞ最後と御念す心の内こそ痛はしき。あけぼのは差足し。静に座敷へ探り行き枕に掛る亂れ髪。是ぞと思ひ首かき落し。提げ飛んで出でにけり。陣屋一度に眼を覺しやれ盗人よ通すなど。手々に松明出しけり時に近經聲を上げ。何者なれば此彌太郎が陣屋へ狼籍する條則なしと云ふ聲にあけぼのははつと驚き火影に見れば女の首。は。南無三寶任損せしと投捨て。呆れて立居たる。彌太郎も肝を消し能く見れば床夜の首。討たる者も女なり。是はいよ合點ゆかず仔細を申せと詰かくれば。ア、暫くは不審は御道理。妻は須磨のあけぼのと申者にて侍ふが。盛久殿と一ことの契り故。嫉妬の恨を言裏りば身様を討んとて。此仕合にひと今日の次第を委く語り。冥加に盡きしか狼狽たか。なふ面目もなきしわざやと聲も震ひて。語りけり。近經構手を丁と打ち。扱こそ宿とはいひつらめ侍勝

盛久

九



の者共ど、暫し感ずる其内に郎黨共書置を見付。彌太郎に差出す急ぎ披き讀で見るに、筆の立どもあつ  
さまと哀を盡せし。文章なり忘られぬは世の情疎まれぬは妹春の中、牡鹿の角の争ひに。今宵限りの小  
夜砧。討てば情の思を知らず。討ては人の義理立す。思にも戀は替られず戀にも思は捨てられず。二つ  
の道が心を責め露の命を捨筆に。いひ残し置我心。哀と思ひ恨を晴れなき跡吊て。たばせとよ。思ひ切  
にし命にて。露塵程も惜からず。さは去ながら我夫に逢ふことこそは叶はずとも。同じ浮世に存へば暫  
し慰む方もやは。死なば一所と契りしに。一人先立三途の川誰が手を取て渡るべき。返すくも名残惜  
や南無阿彌陀佛と讀みも終らず。扱も哀れや不便やと。各、袖をぞひたしける。涙の隙よりあけほの。  
扱もく思切にし所爲やな。思へばくいとほしや。よしなし草の争今更悔ひに甲斐あらねど。今日逢  
初めて今日の内に。討つ討るゝ悪縁は過去の敵であるべしと。思ひながらも情なやさりとは許してた  
べ。なふ許してたべと敢なき首に抱きつき。聲も惜まず嘆きしが。エ、何をか嘆き何をか恨む。四手の  
山に待給へ追付て言譯せん。是迄なりと刀押取り既に自害と見えければ。彌太郎はつと押しめろ。思  
ひ切たる所存やな。去ながら心を静め聞き給へ。御身空しくなるならば。死したる人も其方もいよく  
罪業重かるべし。盛久浮世に在す内は何卒命存へて。亡き人の爲我身の爲香花を取て結縁あれど。疎る  
涙もはらくく。ばらく鳥の聲添へて夜。しらぐとあければのも生きての嘆。死しての思も  
もひやられて聞く人おしなべ袂の。海とぞなりにける

第三

それ良薬は口に苦く。忠言耳に逆ふとは誠なるかな頼朝卿。饒者の爲に連枝の御中不快と成て饒怒と。

腰越より追返し生捕ばかりぞ曳れける。時に小山の太郎武者宗重は前に參上し。堀の彌太郎近經こそ君  
へ野心を企てひ其仔細は。今度平家の兵主馬の判官盛久と組は組でひへども。談合づくにて生捕ひ跡。  
後日に源氏を傾けん所存と察しやてひ。其上盛久を判官殿の指圖にて。土屋の三郎の預り罷下りひへ  
も。堀と土屋と心を合せ。盛久に繩をも掛す牢輿にも入れやす。傳馬に乗せ此處彼處に二日三日宛滞  
留し。遊びがてらに召連れ彌太郎は都に残り。平家の落人集むる由。然れば斯る逆徒鎌倉へ入れては  
かどぞ存じ。金洗澤に待受け盛久を請取り。土屋は追返しひと。襦袢合せ偽りし辨舌こそは恐しけれ  
頼朝聞召何堀土屋逆心とや。心得難し去ながら。盛久を召出し事のやうを尋ねべし。それくと言へば  
畏つて盛久を急ぎ「は前に引にけり。君は覽じ盛久とはおことよな。召出す事餘の儀にあらず。堀土屋  
心を合せ頼朝を傾けんとたくむ由。其方こそ知らぬ包ますやと仰せける。盛久聞きもあへず。は新し  
き事を承るものかな。某は平家の武士。堀土屋はは家人ならずや。逆心ありとて某に知らせやべきか。  
大將は眼士卒は手足に譬へたり。君の手足に痛あるを盛久如何で存すべき。それはは心に問はせ給へと  
空うそ。ふいて居たりけり。頼朝聞召然らば何のよしみにて。汝に情深くかけゝるぞ。盛久からくど  
打笑ひ。いやはや源氏の御大將の云はれたり。情を知るが謀反人ならば仁義の道は皆謀反か。なふ  
堀も土屋も源家には過たる文武の侍ぞや。若し逆心あらば夫は大將に過失こそあらめ。そもやそも某  
に。味方の耻を問ひ給ふ源氏の大將頼朝は。聞しに劣る愚將やな。斯様の人に敗られし。平家の運の拙  
さと牙齧鳴し身を慄はし。鏡の様なる眼より涙を。はつらくとぞ流しける。若は立腹まし。扱は彼  
奴が知たるに紛れなし。云はずは拷問せよと宣へども盛久憶する氣色なく何拷問して問んとや。ヲ、つ  
がひく筋を抜き。骨を碎き煮らるゝとて源氏の事は知らぬぞと。少しも驚く氣色なし。頼朝暫く



は思案あり。是は假初の儀にあらす。先土屋が所領召上げ出仕を止よ。宗重は上洛し彌太郎を連下れ。又盛久は川越の重房に預置く。追て詮議を遂ぐべしと座を立せ給ひければ。盛久威猛高に延び上り。エ、眼のあかぬ大將笑止千萬。正しく夫なる宗重めが譏言よな。やいさ卑怯者。己れ軍中にて某が妻。鷹言吐き追立てられて逃げたるが。耻かしうもなふ某によくも面を向けしよな。おのれ微塵に蹴殺さんど。繩取り宙に引立て。駈出でく引て行く。所存の程こそ。三重無念なれ大方の。罪ならなくに科もなき。人を害せし我身ぞと我身ながらも恐ろしく。如何なる僧をも師と頼み。黒髪剃りて袖を染め。浮世の隙をあけぼのは。寺ある方へと北山や大原の。麓に着給ふ。是より奥には人住む隙もなく。雲高嶽の跡を埋み。初山櫻二ふさ三ふさ。ちりちり水の谷川や。誰が摘すての。櫛欄れて行水に。女の足駄流れく。扱は住む人あるにこそと流れを。傳ひ分入れば。一字の庵室物さびて。花を主と岩脚。庭に茂れる山吹垣。篋の澤に啼く蛙。心細くも住みなせり。障子をあくれば。あるじもなく。中尊に。觀世音。五色の糸を。手に掛け。八軸の名傳。九條の御書。燻る焼香。しんくんと。茶を煎る籠。竹の竿鹿の子の。手巾掛捨て。じやうみやう居士の方丈に。三萬二千の座を並べ。諸佛を請ひ給ひしも。斯やと殊勝に。羨し奥の一間に珍らしき。玉章繼で紙帳とし。涙に朽し文枕。物思ふ身は斯こそと。住人心奥床し。斯る折節二八。計りの。二人。づれ。浮世も髪も切捨て。花筐厨にかけ妻木に。蔵折なれぬ。笹播分る阻傳ひ。何踏立てお痛しと。笑ふ聲々ほの近く庵に。こそは歸らる。あけぼのを見給ひなふ珍らしや都人。道に迷はせ給ふかや。何方よりとありければ。ハアは免なりませ。みづからは出家の望侍へば弟子になさせたび給へ。ア、いとほしやまだお若い。何故の思ひ立何方のお人ぞや。さんひ自は。須磨のあけぼのといひも敢ぬに二人の尼。何聞及びしあけぼのとや。妻は忠度卿の妻菊の前が

なれるはてにて侍ふなり。は身の事は盛久殿と故ある由を聞しがと。床夜の前を討し品々問ふつ問はれつ今更に。袂さけくひちまさる。今一人の尼涙ながら。みづからは無官の太夫敦盛の後家。同じ縁のともなひぞや。此所に相住みし。十念の柴の戸に施主の光明を拜み。共にしやうじゆの來迎を。松木折たき茶を沸し。涙の友とぞもてなせる。實にいたはしき。住居なり時に向ふの。峰よりも。になひし柴も世を軽く遁れし姿と見えけるが。櫻が本に肩をかし。盛りの花をつつくんと打眺め。天晴よき新いさんなれと。腰の大鉈追取り色香みちたる櫻木を。情なくも根元よりゑい。伏木たうくたり。人々驚きなふそれは何しやる。一ふさ散るも惜まれ佛にだにも折らで手向る其花を。扱狼藉やとありければ。彼法師見向もせず。主なき深山木茶湯の薪に致すはと。ちつとも厭はず鉈振りわぐる衣の袖に起り付。薪を負へる山樵も。花の蔭には宿るとかや。いかに出家の木のはしも花に情を知り給へ。松は薪と夕煙さびしき庵の憂き住居。つらさを凌ぐ此花を是非に。と留らる。法師かぶりを振り何是を花なるぞや。ア、愚なり。今の浮世に花はをりないさ。其處退れよと振り上るを又引留め。爰は一つ閑所。斯く眼の前に美しく。咲きにし花を花ではない。浮世に花はないものとは。それは悟の心なるか柳は緑花は紅。花は花月は月と見るこそ誠の悟ならめ。迷ひ給ふな坊とあれば。法師暫く顔を眺め。はて生小癩なお比丘尼かな。全く左様の坊主ならず。エ、各に誠の花を見せざりし残念さよ。是。誠の花と云はな。平家の公達無官の大夫敦盛の。十六歳の姿こそ誠の花でありしぞや。されども武士の習にて其初花を手に掛し。熊谷がなれる果蓮生坊とは愚僧が事。敦盛をさへ手に掛て失ひし某が。此花花と思はんや生中つらき櫻花。咲せて物を思はんより同じ煙と消えなんと。持たる鉈をからりと捨て大聲上て泣にけり。人々夢とも辨へず何御身は熊谷殿にておはするかや。妻は祐方卿の娘敦盛の後家なるは。



是は誠か懐しやと縋り付てぞ泣き給ふ。法正覺涙を押へ。痛はしの心根や皆物思ひは有るぞとよ。是なるは薩摩の守忠度卿の北の方。妾が庵の相住なり。又夫なるは主馬の判官盛久の縁とて。只今は來らるゝがいとほしや此人の。十方なげなる有様を憐れみ給へ熊谷殿と又さめ。くぞ泣き給ふ。蓮生聞て是も佛の引合。盛久の噂をばかねてより承る。疎略あらじといひければあけぼのも頼もしく。身上語る人々の縁の程こそ不思議なれ。法正覺宣ふは。なふ此文枕文紙帳は。平家の人々の筆の跡。昔の形見と起臥に。せめて詠め慰むに覺せよとありければ。蓮生涙ながら。定めて教盛の筆もひはん。一言の情忘れがたくひへば。近頃わりなき事なれども。一心さへ通しなばなぞか夢に見ざるべき。お許しあれ一雁と紙帳の。かけに轉び伏す。各ともに介抱し。猶越方の物語り暫く「時こそ移りけれ。扱も小山の太郎宗重は。堀土屋を譏言し。彌太郎を連下れとの詮意を受け。洛中洛外詮索し此山蔭迄尋ね來て庵の内へつゝと入り。此所に平家の人々有るよし方々にてはなきか。菊の前氣もない顔にていえ。さやうの人は見た事も侍らはすと有。いやくさな隠されを卒爾は致さず。鎌倉殿の仰には。縦合敵方なりとも女中は許しやせとの使とぞ偽りける。さすが女性の憂てさは誠ぞと悦び。なふ嬉しや然らば何をか包むべき。我々は教盛忠度の後家。又是なるはあけぼのとて。盛久の縁の人。萬事は頼み参らすと言せも果すあけぼのが。小腕取て下人に負はせ急げく奪ひ行く。二人興覚めやれ狼籍や情なやと。追かけ給へば立歸り二人を兩手に取て伏せ。こりや。あけぼの是にあるからは彌太郎が行衛を知らぬ事あるまじき。少しにても陳じなば。此木刀喉に突込み鯉骨を引出すがど。傍若無人の大聲に蓮生はつと目を覺し。紙帳より顔差出し。一文字に飛で出で宗重を搦掴み。後へどうと投げけるは心地よくこそ見えにけれ。宗重はふく起上り。や。熊谷殿扱も久しや。先々息災さうで一段と追従し紛らかす

久

入道にづともせずいやさ。人の皮着る犬畜生に終に近付を持す。戯言吐て捻り潰さるゝと腕まくりして立ければ。宗重氣色をかへ何侍を畜生とは聞悪き難言あれ。通すな承ると。一度にどつとかうりけり。いや素丁稚原推参と軒の松の木搔つかみ。根際よりほつきと折り麻を振るより猶軽く。用捨もなく打立れば七八人雜伏せたり。宗重今は敵はじと。跡をも見ずして逃げ行くを餘さじと追掛しが。いやいや罪作りよしなしと。庵をさして立歸り。南無三寶あけぼのを奪はれしと又駈出んとしたりしが。思へば跡も氣遣はし。兎やせん角やと駈出で。駈入り切齒をし。己れ悪人め今に見よ。此法師がある内は奪ひ返さで置くべきか。大悪人の畜類故。あつたら生木を捻折た。是も殺生去ながら。我山に持歸り草木國土成佛の。十念せんと打かたげ南無阿彌陀佛。くくくつぶやき新黒谷に歸りけり。出家侍頼もしとは。斯様の事を謂つべし心地よしともなつかなかや。ばかりはなかりけり

弟

堀の彌太郎近經は。宗重が讒言にて勳功をもたされ。却つては勘氣深く蒙り丹後の國なれあひに。影を隠して居たりしが。世間の様を窺はんと。頭日都に忍び出で盛久歸依の佛なればと。清水寺の觀音へ夜半ばかりに参らるゝ。星明らかに。雲まれにしんくたる山嵐。鐘打ならし念佛や靜に來るを能く見れば。六尺ゆたかの大の法師。大竹笠をのみだ笠にきなし。衣の下に長刀いかさま異相の法師ぞと。彌太郎太刀に手をかけ間近く見れば熊谷なり。ヤアは分は直實入道にてはなきか。ヲ、蓮生なるがさいふ其方は誰ぞ。はて堀の彌太郎なるが見忘れたるか。何彌太郎とや逢たかつたに扱嬉しや。して先は邊と土屋とは。宗重が讒言にて逆心と言立られ。は勘氣を蒙る由嘸口惜からんと察したり。それに付宗重奴

盛 久



は。洛中洛外暴れ歩き大原の奥にて。盛久が妻あけはのとやらんを奪ひ下りたり。愚僧其節行合せ。下人輩七八人打ひしいではありけれ共。宗重奴を討もらし今に無念さ堪やらず。こりや狼狽たる所でなし。身を碎きても言譯し。叶はぬ時には宗重めと指違えんとは思はぬか。エ、傍から見ても齒痒しく何時なりとも後詰は是。此坊主ぞと。昔忘れぬ蓮生が詞の末を頼もしき。彌太郎首肯き涙を流し。流石よしみなればこそ千萬過分去ながら。何をいはんも關をする鎌倉へ通さぬ由。存分遂んやうもなし。おことを初め世の人に。腑甲斐なしと笑はれん恨めしの君のほ所存。口惜きは身の成果としほくとして嘆くにぞ。鬼のやうなる蓮生も衣の袂を絞りしが。やれ彌太郎。ふとよき手術を思付たり先開て見よ。大原山の二人の比丘尼を東に下し。鎌倉殿の隠所へ只管歎かせては如何あらん。扱々屈竟一の思案萬事は身を頼むといふ。ヲ、愚僧に任せよ然らば二人を先に立て。見を隠れに下りつ。首尾を見て便せん。是も第一觀音力。なほし守らせ給へやと伏拜みつ。三尊わかれけり

あつちのうらなひ

ぬれぬささこ。いとふへぎよその露さへほかならじ。衛士の焚く火の燃えさしに。ゆかりの烟立さらで。今はたひせぶ我身をぞ。是も修行と菊の前。あんぢの觀音負ひ參らせ。法正覺を先に立て。腰に練のなきのはや。笠にさひたもなきのはみつ。お山の修行の立道もおぼるの玉清水。今を「かざり」と結び捨て。みやこの名残けふの身と。實に心なき深山木も。我を見おくる花の。花のふきよの。滋費の山越え。打過ぎて。あのあまさがる落方を。我が行くそらと見渡せば。心ぼそさぞ。まさりける。鼓わう妓女が戀衣。墨の袂に苦蒸で。嵯峨野の霜にやつれしも。我にはよもや及ばしと。過ぎにし方も

身の上にひいて較べん。琵琶の海。なみの調子もまばらにて。あはぬ浮名のかみやはおのが心よをの宿しるしの石にもとはん。一夜二夜もくるしきぞ。九十九夜どのかねごとは。いかにつれなき小町塚。ゆきゝの人。の手向草。袖とくやすりはりのとうげはるく。眺むれば冥途の鳥の。はつはと。さす死出のたよりの。山風ふかばふみを。こしぢの。海見えて。するは籠にはてしなく。いと心をも。沖津しらなみ波は。つるがの磯に打つとよの。いやうつ。なき。ひばら茅原分行きて。野澤の水に影見れば。むかしの姿色失て。やつれ果たよ我身をぞ。いや我身を我こそと。水にくましくかき濁す杖投捨て。ア、うきよいらぬものよの。熊野比丘尼の。かづくて。らぼうし首がさの。おつるは。おつるは。おつるは。は下は木曾川。あふないぞ。しやんと押へたあらしはげしく。雨やばるく。ほる。うつ。舞もあさの。ひな雉子。をさな雲雀の雲にきねとんと落てはちり。くくくと。せはしかしました下りつ上りつ。はねも。心も輕井澤。登り降りて。坂本の。こぞのつら。に水く。いはま。く。のむめの花。ひらいたも座るつぼんだも座るあらし吹ねど。ひと枝二えだ手折らば。折取りく。枝をりの。花ぢや程に。いへつともたれか。あるじと松枝や。とまりは名のみいたづらに。いつの杣木に引せめしわが宿ならで。のきは昔く。板鼻の宿にぞつき給ふ。向ふを見れば大幕打。武器をひつしと。かざり關所と覺しく大木戸打。さも厳しく構へたり。され共二人遠慮なくちと愛は免と宣へば。番の者棒入違へ。大事の關所判がなうては通さぬと云ふ。はあ我々は修行者なれば。何の様子も存せぬが。してどうした事の關所判。ヲ、合點ゆかずは語て聞せん。今度堀の彌太郎が謀反故鎌倉の口々に新關すはり。此所は小山の太郎武者宗重殿の承りにて。則彼なるが宗重殿の家來。成瀬平内岩上權藏此兩人が改めらる。近頃不便ながら通す事はならぬと云ふ。法正覺聞給ひ是は詰らぬお詞かな。彌太郎とやらんをとむる



關ならば、彌太郎ばかりをとめ給へ。我々は熊野比丘尼いかな關所もは免の者。いち悪事いはんすな  
椰の葉お札は入ませぬか。ちとくはん。くごぞやさる。權藏浮氣者にて様の端へ突と出で。フ、  
熊野比丘尼とや。なふ。大事な者の。定めて小歌もなるであらふ。一ふし聞てのみかけば何もなるま  
い。是平内。何と厭かど云へばはれやくたいもない。やあく。比丘尼共。惣じて比丘尼は髪を根より剃る  
なるが。和は前達は有髪さら。心得がたしと云ふ。さん侍ふ我々は。みつの山に閉籠り難行の山踏  
に。髪剃る暇あらばこそ。は本尊再興の勸進に。鎌倉へ参るなり。さあ通してやとありければ。權藏は  
元より若黨足輕氣を浮し。扱も見事な丸太ども髪は長い角物か。關も柱もいらぬ物打破て通せやとさ  
めさあふ事限なし。平内目に廉を立て。エ、大事の前の小事。卒爾して我々に痛い腹切らすか。是  
比丘尼共。汝等が體合點ゆかず。熊野比丘尼が定ならば六道の繪圖あらんとく。出せ。さなきに於て  
は賈比丘尼搦捕るぞと怒りける。いたはしや人々何と詮方あらうれしや。庵の床に張付し九品十戒の繪  
像。みづしに墨み入置し是幸と取出し。いかに各。尼法師の詞とて疎かに思ひ給ひそ。皆是佛の口眞似  
ぞや。雜言などし給は。忽ち其舌入つにさけ。大地割れて生ながら奈落に墮罪し給はんと。口には威し  
心には。南無千手觀世音。故なく此關通してたべ大慈大悲と觀念し。關屋の柱にかけ置きて語らせ。給  
ふぞしゆしやうなる

むくおの記

そも。往生極樂の雲の臺に法の花。上ばんれんに浮ぶ事。此世の此身此儘にとりもなほさす成佛す。  
としふをんとは説れたり。かばかり近き極樂も。つくりし罪が鬼となり心の劍身を賣ひる。一百三十六

地獄無間叫喚阿鼻やうちん。此世の色は空花の。情の涙ながれても。焦熱の火は消えやらす。道理の衾  
暖かに比翼の床をかさねても。紅蓮の氷は解がたし。そもや人間一人は三世の諸佛くるしみて。造り立  
んとし給ふを十月にたらでおろし子の。諸佛一度には聲を上げ歎かせ給ふは涙。流れて浦津。血の如く  
火焔となつて身を焦す。扱其次はさよ衣。我夫ならぬ邪淫戒。嫉妬のけふりねたみの焔。僧を墮せし  
女の罰。尼を犯せし男の罪。無名の馬の毛をふるひ愚鈍の。牛が角をふりたて六道四生を。くるりく  
因果は爰にめぐり車の我からとかひも涙にふし沈む。是は又うますの地獄。竹の林に衰るへて。かけ  
もよろ。たよ。と。辿りよるはふ哀さは。千すぢの。とどうしん。たぐりもて心の關に。吳竹の竹  
の根を掘るしの竹の杖に縋りて泣くばかり。くらしやつらし。明開じやう。そも此苦患とやはしやばに  
て人の目を暗まし。とがなき人を牢に入れ。又關の戸の關守よ。往來を惱ます其報四方は石の門に。  
五體を攻められ五色の鬼が夜に三度日に三度。時こそ來れどかしやくをなす土はせいけん山はてつちや  
う。五百生々盡させぬ因果。弓取とても留まらず。力あるとて頼まれず。疑ひ給ふな人々。無量の辯  
舌よごみなく語り給へば關守は。此さん談に恐をなし上下わな。き身を振はし色を。變じて見えにける  
平内權藏口を揃へ有難き聽問。皆身の上に覺えぬ。佛とも法とも辨へず仇に暮せし後悔さ。後生こそ  
恐ろしけれと思ひ。に奉加して。はや通られよといひければ詞多くて悟られじと。一念發起お殊勝や  
といひ捨て。通らるゝを。下部の中よりこれ。跡なる比丘尼待れよ。まさしうは身は忠度の妻菊の前  
よと。いはせも敢すやれ夫あますな引戻せ。よくも。たばかり盗人におひとやら。した。か奉加を取  
込み腹切らせふとはしたるよな。それ先縛れ搦めよと。散々に打けるは目もあてられぬ次第なり。蓮生  
は一里程跡にさがつて下りしが。俄に胸こそ騒げと大汗になり駈來り。さればこそと思ひ關屋の内へ飛



入て、あらあつやと仁王立に立ければ、平内權藏はたと呪め、何處の寺の鉢ひらきぞ夫追出せと怒れども、蓮生憶せすいやさ。苦しうもない。熊谷入道と云ふ鉢ひらきよ。又あの二人の比丘尼達は教條忠度の後家なれども、朝敵とても女をば鎌倉殿よりお許れば怖い者はなければ。宗重が讒言にて新關ある由傳へ聞き。兎や角詮議面倒しくて姿をかへさせ下せしに、何の科あつて彼様には計らふ。彌太郎ばかりで讒言が仕足ぬか。大原山にてあけぼのを取返さぬさへ口惜きに、犬奴等夫を離さぬか。一々掴み挫んとどうぞ踏だる力足。大地も揺ぐ計りなり。平内權藏氣色して、いやさ兎角の間答は要らず。何者にもせよ一人も通す事はならぬと云ふ。何通す事はならぬと云か。此熊谷頭は刺れど力毛は刺らず。いで通すか通さぬかと關の門引放し。さあ通す事はならぬと云か。微塵になさんと振廻れば、ア、は尤何が扱。どうなり共。と平伏し。わな。と懐ひけり。ホ、よい合點上分別。此上は鎌倉迄足を休めずさんと。達者に見えし若侍三人引立二人の人々負せつ。我身は佛を肩に掛け大の男に打乗つて、高けれ共は番衆是からお暇は免なれ。さらば。はい。と打たて。急ぎける獅子の勢虎の勢。實に熊谷と名にしおふたる天晴。稀代の法師なり。

卯

桐が谷の座敷半川越の重房預りて、さしも殿しく盛久は今日の命も白濁の。消えなん事は厭はねども。科なくして堀土屋我故冤罪に沈む事。此横難を救ひ給へど。毎日卅三卷の。請願につる。鳥の聲。草木も法にや。逢ひぬらん。痛はしや盛久は獄屋の内の憂き中に。鸚鵡の鳥を飼給ふが。始めはお經の口眞似し後には覺え盛久と。同音にこそ讀にけれ。妙法蓮華經觀世音菩薩普門品第廿五。にじむじんい菩薩

即じうざきへんたん。うけんかづしやうかうぶつにさせごん世尊觀世音菩薩。盛久涙をはら。と流し。有難や汝無念無知の鳥として。斯は經にかたふく事思へば人間物を知らず。斯程物憂き籠住居も。汝を友と暮せしが。近き内に某は誅せられんらん。死後は猶しもは經讀誦し。我をも助け汝も亦共に淨土に生れよや。あら名殘惜やと泣給へば。頭をうなれ羽末をつき。涙を流す有様にいと名殘の惜まれて。ひざの上に抱き寄せしは消え入り泣給ふ。かゝる所へ重房半の扉押あけて。扱々是非もなや。最期今日と仰せ出され。狩野の助が太刀取我等檢使を承る。は覺悟の爲先々知らせやとあれば盛久聞給ひ。あつばれ疾斬ればやとの念願叶ひたると存じひ。只は情には片時も早くと宣ふを。鸚鵡聞入れ飛蒐り重房が弓手の頬先した。かに蹴裂たり。重房取て引摺み捻殺さんとする所を。盛久はつと絶りア、暫く。は存の如く此鳥は我に馴さし事なれば如何にしても不惑なり。眞平免し給れと手を合せ詫給へど。川越更に聞入れず。鳥類といひながら面に劍を付られ堪忍のなりひべきか。ア、至極せり去ながら先鎮めて聞てたべ。此盛久は三つの寶を持ってひ。一つには命二つには此鳥。三つには守本符此は本符は。清水の觀世音夢想によつて請たりし。閻浮提金の千手の像。冥途までもと存すれども是を替りに参らせん。さりては免してたべと錦の袋諸共に。は本尊を送らるれば怒る心の重房も。忽ち神威肝に銘じ。有難きは結縁は遺物といひ且は又。は回向の爲某が。二世安樂も頼母しと。押頂きて懐中し。扱は最期は未の刻。後程は目にかゝらんと立出で行けば盛久は。危き鳥の命を助け嬉しき中にもは本符の。は名殘を包みかね涙。ながらに。三重入り給ふ。是は扱置き。頼朝卿諸大名を供にて。鶴が岡に社参あり勅額鳥居に着給ふ所に。神木の銀杏の梢に怪しき鳥羽を休め。たうじんだん。と。れば君を始め奉り。各不思議と見る所に宗重罷出で。惣じて此界に不思議と云ふ事ひはず。皆是天魔のなす業



明さ開さを覺に入れんと、隨身の持たる弓矢追取り暫く引しほり、切て放せば過たずはたと當るを見えけるが、忽ち宗重悶絶し手足を締め返る。こは如何に神前を漬しぬる罰ならんと、漸に呼び生け先宿坊にぞ入りにける。扱彼の鳥と見えけるは閻浮提金の千手の像、尊體に矢を射立て光を放ち立給ふ。君は袂に守上給へば、上下あつと禮拜あり白毫、不思議と謂つべし。かゝるところへ川越の重房狩野之助宗持、盛久を誘引し大息ついで馳せ参じ、詮意に任せ盛久を誅せんと仕る所に、盛久が體より光明輝き、此太刀段々に折てひと前に差上る。我君は手をうたせ給ひ、かねて彼は信者と聞きしがよづく大悲の佛意にかなひ、刀刃段々壞の名文あらたなりやあゝ盛久、若し此佛に覺えやあると宣へば、盛久夢の心地して、さんい我等が守本尊にてひを、重房にあたへいとありし次第を言上し、二度拜する有難さよとひれふし涙に咽ばるゝ、君も隨喜の涙ながら、實に信あれば徳ありとは今日前のごとわりなり、佛の助け給ひしを頼朝討べきやうもなし、助け置との証盛久頭を地に付て、こは有難き詮意の趣言語には乃べがたし、去ながら平家の恩を捨て源氏の恩を受ん事、武士の素懐にひはず、只は慈悲には切腹をと殘る方なくや所へ、蓮生法師は法正覺翁の前を打連來り、拙僧は熊谷法師定めては見知りべし、扱も一の谷の合戦の時、熊谷は二心やあると人々にいはれしが、よき鑑定只今は、阿彌殿とや主を持ち都黒谷の城に籠り居ひ、それに付如來や越ひは、佛法繁昌にして惡人少くなりぬ故、地獄穢穢に及びぬ間、近頃無心ながら小山の宗重とや惡人を奉加に入らるべし、早速拙僧に申請歸れとの事にひと憚りなくぞ申ける。頼朝聞召是は與がるや條、して宗重を惡人とは何を以てぞや、さんい阿彌陀程の大將が、科なき者を惡人として奉加には望みやす、科なき者とは堀土屋が事、是を識しは褒美に預るは、何と惡人にてひはずや、早や奉加とぞ、大聲上て喚く所へ、何と忍び來りけん、あけは

盛久

三二

の人目も愧ず駈出で、みづからは盛久が妻女あけぼのど、や者にて侍ふが、小山の宗重君の仰と偽り、理不盡に奪ひ來り妻にせんとせども、道に背くを悲しみやうゝ忍び参りたり、夫諸共に害してたべといひ捨涙に沈みけり、大將大きには氣色損じ、扱は宗重めが讒言にきはまつたり、上をかるしめ人をなやます倭人それ早く搦め捕れ、畏つて宗重を高手小手に縛しめ前に引出す、頼朝は覽じ見るも中々腹の立、それ急ぎ首を打て時に蓮生謹んで、誠に有難き詮意彼奴をつだゝに刻んでもは腹はゐるまじけれ共、爰が出家の役なれば命は愚僧申請け、頭をこそげめんはくさせ度ひと申上る、ヲ、其段は法師次第、いよゝ以て有難し、いざさらばとて取て押伏せむたいに「剃りて押放せば、宗重あどへ振返り、首の替りに頭を剃るは大きな功徳、此は禮には黒谷に萬日なご遊ばさば、かねはりに参らんと耻らふ氣色見えざれば、扱も憎し耻知らず奴とぞつと笑ふて追立けり、頼朝仰出さるゝは、時こそあれ神前にて倭人現はれ、其上奇代の本尊頼朝授りや事、猶萬歳の驗ぞと感の餘りに盛久に、源氏の姓を給はりは所領仰付らるれば、こは有がたし松の葉の散失すして正木のかづら、長居は恐ありと罷りや仕り、退出しける盛久が、心の内ぞゆゝしゝゝ

盛久

三三



主馬判官盛久

近松全集

長門の國へも敵向ふと聞しかば、また船に取乗りていつくともなくおし出す。かゝる折節味方とも敵かともいざ白妙の、卯の花絨に月毛の駒海へさつと打入りしが、一門みなく船にうかめば乗後れじと汀にうちよれば、御座船も兵船も遙かにのび給ふ。平家方にはこれを見てまさしく源氏の若者ども、功名せんとて寄せつらん射取れや射とれとひしめきける。彼の武者聲をあげ全く源氏にひはず。なにがしは平家の侍主馬の判官盛久とたからかにこゝろ呼はつたれ、能登守教經ふなばりにつゝ立上りいかに盛久、盛久は平家譜代の侍武畧の達者、その外亂舞堪能のほまれある故、八島一の谷にて侍大將うけたる身が、此期に臨んで引返したる憶病さよ、いかにくんと仰せける盛久駒をひかへ、仰せはさる事なれ共それがしこのたび、薩摩守忠度卿の御手に屬し、忠度卿とそれがしは和歌の同學心を同じうするを朋といひ、師を同うするを友といふ。彼これ盡させぬは好みに、忠度卿は敢なくも、岡部の六彌太に討たれさせたまひぬ。今は何をか期すべきと存じきつてはひへども、一門のは行方おぼつかなきの船のうち、いかかぞ存じ一つは又一とせ小松殿北山にてたけがりのゆるるの酒宴の時主馬の盛久一曲一奏のほ寝美として床夜と云へる女房を不才に下した給ひ夫婦の袂をかさねてはひへども未だとりむかへもせざるうち、此兵亂起りたり未來のかため結びたく是迄まゐりひと、涙をうかめやすにぞ上下感じ給ひつゝ優しきもの、心底や床夜の前に引合せ最期の名殘惜しませよと料の船お供船残りなく尋ぬれ共床夜の前のあらざれば聲々にかくといふ。何我妻はひはずとや。エ、彼か所存を察するに、は運の末と見



うけつゝ、おち行きしにまがひなし。おのれ女め畜生め左様の心と知らずして敵にうしろを見せ是迄來りし無念さよと不覺の涙を流せしが、よしなし此上は。浮世にさらし心とまらず源氏の大將義經と引組んで死なんすば。二たび又人に、面をむくる事あらじ是迄なりと夕しはの引は返さじ武士の八十島かけて和田の原。島がくれつゝ、三馬別れける。主馬の判官盛久は今早心安う討死し。忠度卿と手を取て、四手の山路を伴はんと。夜を日についで打つ程に須磨の上野に着きしかば。とある岩の上に駒かきする四方をきつと見る所にいづくよりかは流れ矢來り。馬の平首はふくらせめて發矢と立つ。馬はしきりに跳上り屏風たをしに倒るれば。我身は岩角にて胸をうち。うんとばかりに息絶ゆる。扱も是非なき次第なり。時に誰と知らねども。薬を與へ水をそぐげばやうく氣づき息をつき。眼を開けばこはいかに花とおどろく小娘の雪より白き手づからや。つめの紅葉もしむばかり額を押へ看病す。盛久ぞつもとしくらくとまた目をまはすばかりなり。南無三寶まよひしと心で心をおさへ。となたかは存せねど。は恵みにて命を拾ひ忝し。重ねてお禮やさんと云捨て行くを引留め是ははきりやうにも似合參らせず。は一命の終る所を助け參らすれば妻はお命の親ならずや。然らば君は妻が子。なう子故の間に迷ひしぞ孝行あれとてはなさねば。盛久呆れて顔を眺め。いやはやもたれしいひぶん助けられて迷惑なり孝行は追ての事先づこゝをばなしてたべいやなふ放さじとやさばこそ命救ふたるお禮聞いて放さんといふヲ、してお禮には何事か身身の望み任せやさんア、忝し其お詞を違へ給ふな。耻しながらみづからはあけばのどやして此浦の。養の子にて侍ふが。身にも及ばぬ望みありて未だ夫を持ちやさず。夫を持たで死しぬれば賽の河原も恨めしく。誰をがなと思ふうちに。不慮に目にかゝるよりそいふ浮立つ戀衣。せめて一言二世までの殿よ妻よのは契約憚りながらお情にと涙を流し口説きけり。あだなやよそに

盛久も色にそみたる。風情にて。さてくわりなき心ざし外ならずは存すれどもかくなり果てし平家の運。今日の命も知らぬ身が。夫婦の約束なるものかたぐい思ひ切り給へ。いやくそれはお詞とも覺えず。君が一夜の情には妾が百年何かせん。たゞ今なりとも諸共に死なば一緒ぞなう其手間に。へんしも早くおうと云ふ事ならぬかと猶色深く寄添へば。岩木にあらぬ盛久我を折り腰をほつきと抜かしエ、其心底を聞き何しに詞をたがゆべき。未來までも夫婦ぞや。さあらば最早用云はん。見らるゝ通り此馬手を負ふてありければ。引て庵に歸りよく勞はりてたまはれや。生ることも死するとも今の詞は遠へまじ。あれ見よ敵もはた近し。一軍はげみつゝ後程庵へ尋ねべし。構へて一緒ぞ夫婦ぞと別れて。濱邊にさがりしが。人丸塚のあなたより。腹巻に烏帽子胴服打かけて武者こそ一騎出來けれ。敵か味方か間近くよせ敵ならば討取らんと。一木の松に木隠れて。しばし窺ひよく見れば我妻の床夜の。エ、につくし我を振捨て。都へ歸る道すがら武者にゆきぬらん。おのれ駈出で一討か。なまなか敵に討たせんか。とやせんかくやと牙を噛み。身を悶へ立つ所に。源氏の軍勢小玉黨の中よりも。洲濱の十郎と名乗て大裏上臈と見受けたり。いづく迄もは供とすきをあらせす追つかける。取て返し長刀投捨て打物抜いて飛びちがの爰を先途と戦ひしが。左手さがりに打つ太刀をおしもちりに受流し。十郎か鎧の上帯高ひば掛て嵐に靡き風車。車切といふものにはらりすんを斬落し。袖の振にて太刀押拭ひ。につこと笑ふて立給ふ。盛久すこし思ひなほせども。今しばらくと見る所に。小山の太郡武者宗重と名乗り六尺ゆたかな大男。若黨二人左右に立しづくと出來り。天晴れ平家方にては誰人のよね様ぞ。名乗りて勝負仕給へど高らかに呼ばつたり。ヲ、みづからは主馬の判官盛久が妻女。建禮門院の床夜の。と云ふ者なり。定めて盛久は討死と覺ゆれば。妻をとられし鴛鴦のをしからぬ命ぞや。洲濱が首をみやげにて冥土の妻



にあひたきによつて討とれ〜と長刀どりのべいざといふ。聲のうちより太郎武者からす踊りのさそくをよみ長刀はたと打落し大地へごうご取つて伏せ。太刀おし當れば盛久は、いかゞはせんと心を碎くは危う。くも又理なりされども宗重笑顔して、これお上臈討死したる盛久に心中立て死なんより我女房になり給へ。やしてもそれがしは武藏の國の旗頭。一國の者どもに、おく様と仰がれば一生の樂みぞさあ。どうぞ〜と鎧のわきより手を差入れ。こりやならぬ命取めと傍若無人に戯る。床夜の前無念ながら何ぞぞと思ひ、いやなう仰せは嬉しう侍へども敵と味方の濡衣うらありげなるは詞誠ならじとありければ弓矢八幡侍冥加微塵偽なしといふ。何がさて其の誓言からはともかくもどあるヲ、過分〜と引立鎧についたる塵打拂ひいざさせ給へと手をとれば振放し長刀おつとり飛びしさり。これ侍畜生め貞女は兩夫に見えずといふに組敷かれしも汚らはしむざ〜と死なんよりはと心ならずもたばかりしを誠と思ふか口惜や平家の世が世にして夫諸共にあるならば今の無念はよもさかじと怒れる眼に涙をそゞぎ長刀かざしかゝらるれば宗重大きに仰天してふみ殺せと狂ふにぞ左手右手より取つてかゝる。盛久たまらず飛んで出で宗重をはたと蹴倒し二人の若黨兩手にとり微塵になれどかつばと投げこばく立に立ち給へば此勢ひに恐れをなし宗重取て逃げさまに盛久ゆるせ神八幡口で云ふたばかりぞや。女房に手はさゝすゆるせ〜と云捨て、あとも見ずして逃行けばニ、太刀けがれ切つて詮なしとしばし跡を睨みつけ。さて床夜の前に向ひ天晴は身は我妻かな。最前より見届けしに露塵にござぬ志。かくとは知らず恨みしと心底懺悔仕給へば。嬉しきながら恨めしげに妾は又さは知らず。早や討死やなされつらん若しさも聞かば諸共に。自害し死なんぞ参りしにとくより名乗り出給はで。さて悪業なこつらにくやと涙まじりの笑ひ顔さゝめ朽せぬ縁とかや。いざ此上は諸共に。一門に追つけ一所に死なんと勸む

れば。ヲ、尤と盛久二あし三あし出られしが。南無三寶明ばのに。堅き契約いかせん。ゆかねばたゝす。ゆかねばせず。思案とり〜千鳥足跡にも心は残れども斯くとは云はれぬ二道の是非なく。勝はれ三軍急がる。いで其頃は元略二年三月廿四日。平家の兵船三百餘艘みな〜陸におりたつたる。源氏の大將義經采おつとり。雜兵にめな掛る。一門の人々を討とれ生捕組とめよと八方に下知をなし白旗赤旗立違へ山を動かし火焰をはなちこゝをさ。い。ご。と。三軍戦ひけり。こゝに源氏の兵堀の淵太郎近經は。させる高名きはめすよき敵がなと待つ所に。床夜の前は船をめかけ急がる。を。追かけ取て組伏せ首をかゝんとしたりしがさすが痛はしく思ひ是々お上臈。は身まさしう女院の近從と見受たり。敵を助くる法はなけれ共やても女性の事。あれこそは座船よ。と〜追つ付給へとてたすけてこそは通しけれ小山の太郎宗重は彌太郎に意趣ある中。此體を見るより早く。やあ見たぞ〜彌太郎。敵を助けし二心大将に訴へんと。いひ捨て、駈て行く彌太郎はつと驚き。扱て口惜しや近經がいるにふけしと讒せられ。いか言譯立べきぞ此上は討死し。悪名をすゝがんと無二無三にきつて出る。主馬の判官盛久是にありとわたし合。二打三打ち合しか盛久太刀をからりと捨て。早く首取れ彌太郎と〜かど座を組み給へば。彌太郎不審に思ひ何首取れとはして。この近經にこそもかなふまじきと思はる。か盛久につこと笑ひヲ、かた〜五人や十人は物の數とは思はね共。情の道に矢はたゝすいせん。は邊が助けしは某が妻なるが察。するにそれ故になき名をさらん無念さに。討死せん心ざし天晴道ある侍を殺さん事も本意なし。其上平家の運つければ我々とても残らぬ身。急ぎ首取りあた名をすゝげ早やと〜とすゝめける。彌太郎しばらく返事もなく。只感涙を流したゝすめば。やあつれなし近經心ざしを無になすかヲ、心得たりさりながら。我が悪名をすゝがせんと思は。憎しと思ふ宗重めと。對決の



證據の爲め何と生捕りになつてくれまいか。はては身が爲にならば兎も角もはから。ヘヲ、うれしく頼母しど。上帯解いてからめつゝ、弓矢とる身の是非なきと目と目を見合せなけれり。かゝる所に沖の方より平家の大將生捕一門残らず討死と。呼はる聲を聞きより源氏の軍勢一同に。鬨をつくり籠をたき悦びいさめば大將。ごしいくさすな舟かへすな勝て甲の緒をしめよ。降人討すな首ちらすなと駒の手綱をかいくつて。しんづくしつくと。乗戻し乗返し諸軍勢に下知をなし。數多の生捕引立く上。下千秋萬歳の勝鬨。をこそあげにけれ

# せせらるる

五月間の峰にともしの狩衣。裾野の草の葉末まで。靡かぬ方もあらざりし源氏のチロシ。は代こそめでたけれ。扱も兵衛佐頼朝卿。浅間御原野那須野の原あさづまのかりくらより。すぐに富士野に牧狩あり思ひくく小屋うたせ。君を守護し奉れば。さしもに廣き富士の根に錐を立つべきらい地なし。爰に一年工藤左衛門に討れし河津の三郎が二六の子。曾我の十郎祐成同五郎時宗は。夜前假屋に亂れ入り敵祐經を討果せ。は所の侍二百餘人に傷を負ふせ祐成は討死し。時宗は生捕れ明れば建久四年。五月廿九日にぞ遂に「は前に曳れける。頼朝は覽じ曾我の五郎とは彼が事か。誠に親の敵をねらふ事ことわりと云ひながら折もこそあらめ頼朝が。狩場にての狼籍甚だ奇怪なりと宣へば。時宗頭を下げ詮意は尤にひ去ながら。此年月野路山路宿々とまりくまで心を盡しひへ共。敵は小勢で通れども五十騎百騎を召連れい。我々は兄弟二人つれざる時は只一人。其猛勢を怖るゝにはひはねども。折を窺ひ延引致し只今に至りひと。憚りなくゆけり君聞召し。ム、實にそれはさもあらん。して又此事を曾我の母には知らせるか五郎聞もあへず。こは日本の大將軍の仰とも覺えぬものかな。地を走る獸空を翔る禽鳥まで子を悲しまぬはなきものをましてや人の親として只今死に參るといふを悦ぶ親やひへさ。いやはやさようがる詮意かなど嘲笑。ふてぞゆける。ことわりなれば頼朝もしばしうなづま宣ふは。尤も祐經は敵なればさもあらん。頼朝には何の意趣ありて傍近く亂れ入り。剩さへ近習の侍斬散せしは何事ぞ時宗承り。さんひ祐經を討ぬ間は木にも萱にも心措かれ命をしくひひしが。討おふせての後は千騎萬騎をも微塵蠅蟲とも存せ



ぬ所に、は所中の侍連やれ夜討こそ入れたれど、狼狽まはるが可笑きに、そつと太刀風をあてたるばかりにては坐ひ、去ながら重傷は一人もひまじ、それにては傷癒ば、面押拭ひ罷出で奉公や仕らん。扱又君の事はまさしく祖父伊東が敵、其上日本の大將軍、鎌倉殿の討奉りしと閻魔の廳に訴へば、一つの罪通れんと思ひ恐れながらは佩刀の刃と、時宗が鎗太刀の刃を試めして見ん心ざしにて駈入つては、口惜や運盡きて、是なる五郎丸を女と思ひ油断して、やみく〜と生捕られし君の、は運の目出度さよ。五郎丸だになかりせばは首を給はり、それより切て出るならば、おそろく關八州に人種はおかじをど。且は怒り且は恨み詞すしく言上す、頼朝大きに感じ給ひあれ聞給へかた〜、まう將勇士もうんつきぬれば力なし。叶はぬ迄も助からんかと耻を捨て、陳すべきに、露ちり命を惜ます詞を飾らぬ心底は、天晴武士の本意餘の者千騎萬騎よりはど、双眼には涙を浮べさせ給ひければ、伺候の大名諸共に各、袖をぞ絞らる、其後新田の四郎忠綱を召れ、兄十郎が首を時宗に見せよとの詔意、畏つて忠綱は村千鳥の直垂に、祐成が首を据る時宗が前に置く、今迄はさしもに勇む朝親の日蔭に萎む如くにて、情やど押俯ぶきしばし涙にむせびつ、ア、なさけなく早くも變らせ給ふは有様やな、幼少竹馬のあかつきより、敵を討し夕迄一所とこそは契りしに、口惜くもながらへて四手の旅路におくれしよなア、斯くあるべきと知らずして、深入せし後悔やといひも敢へず咽かへり、こぼるゝ涙をおさへんとすれども繩の強ければ、膝に顔を押し付けて消え入るばかり、に泣きにけり、君を始め奉り、上下の侍連取迄至極の、涙にしづまるゝ、重ねて仰出さるゝは、前代未聞の勇士なれば、死罪を宥め召使ひたく思へども、傍輩のそれみ祐經が親類の意趣彼是以て免れがたし、かまへて頼朝に恨を遺すなはや首討てと宣へば、時宗につこど笑ひさも嬉しげにあたりを見廻し、いかに人々、親の敵を討果ふせ、其上斯る詔意を受け何しに命の

惜からん、此縛は孝行の佛の御手の善の綱、皆手をかけて結縁あれさらば、〜と暇乞ひ心静かに引出され、遂に屍は夏野の草葉の露と消ゆれども、譽は富士の上もなき雲井に「名こそ揚げにけれ、扱梶原源太景末をば前に召され、明日は鎌倉に歸るべし、就ては此度供せし武士を花やかに出立せ、とめたりし鳥獸を名乗せて見物せん、則ち新開の荒四郎奉行にて帳に記させよと宣へば、畏てひこまふし、〜を三重ふれれにけり去程に、頼朝公井樓高くしつらはせ、ひた白の幕打せ左も鷹揚に座し給えは、左は老中は小性花を飾りて見給ふ、扱國々の諸侍、思ひ〜の狩装束駒の鼻を立並べ、扱野を扱しと控へたり、中にも新開の荒四郎棟領給はり大紋の、露を結んで肩に掛け筆取一人隨へて、御座の右手に伺候して次第、〜にどめたりけり、先一番に春日野や、若紫の装束しらゐの行腰たぶやかに、崩黄の裏打つ竹笠木枯にふき反させ、陸奥立の荒駒に乗たる武者は誰人ぞ、扱場の獲物は如何に〜、さんみ某は、先年我君七騎にて敵に襲はれ給ふ時、寄邊定めぬうたかたの安房の國龍崎にて、甚だ忠をはげみたる土肥の彌太郎遠平、おと〜ひのせこいたに、猪と引組んで早速どめてひとど、名乗て通れば筆取はやがて斯くとぞ記しける、二番に桐珍の装束錦襦の小手をさし、白熊の敷皮下げ宿月毛の馬に脚絆を掛けさせしは、天晴出立や誰ぞや誰ぞ、誰ぞやどは人がまし、又やさぬもいかなり、名乗もさすが耻かしの盛長にてひを、誰にまがへて藤九郎、しかもしらと答へつゝ、静かにこそは通りけれ、三番は木賊色、秋の野すつたる狩衣大口のそば高く取り、尾花蘆毛に片手綱ゆらせ、「出たる若侍、家名實名名乗れよ名乗れどはなのりの浪のまに〜、藻園焼く三浦の、平六兵衛吉村、二つ連れたる飛兔はつかけ、〜嶺を分け谷へ下つて駈ちがへ、其儘兩手に引摺み上覧に入れしかば、汝は翼やあらんとは戯れにあづかりし、今更やも事く〜しとさも鷹揚にぞうたせける、扱其次に、梨打鳥帽子に鉢巻し濃濃の袖印



鹿子の行騰く、り下げ足利様の染手綱。鞭に取そへ懸懸し馬上の達者は實に誠。秩父の重安ひなヲ、何と包まん隠れなき園生の植ゑし紅の、染羽の矢先に翔鳥を二つ續けて射て落し。見參には備へねど證人紛れひはず、お帳に頼み存するなり。「實に、尤と夕間暮。雲立笠の狩衣せいの尻袴掛たる太刀。雲雀毛の馬に淺黄の厚總かけしは如何に。是は信濃の國相澤の彌五郎猪壹頭射留てさふ。續きて小松の摺衣。露を含めて絞りあげ。徒歩立の弓杖は誰人の家人ぞや。さんひ上にも豫て知しめす。秩父が郎黨本多の次郎近經去ぬる廿日の朝山に。馬屋の徳竹が手負猪に追立られ。今を限りと見うけし時。尾上を横に走りつけ猛つて赫せる荒れ猪の。片脛どつて引伏せ草分を三刀に。突留てひひし鳴呼がましうひへ共。は尋ねなればと會釋して。人溜居にぞ入りにける。跡より乗て出しほの。流石氣高き亂れ髪。額に滿る月の顔二八ばかりの若武者は。いづかたのは曹司聞まほしやどの。めければ。抑もこれは。村上天皇の後胤木造の忍ぶ丸。富士川の岸行く鹿。跡より追かけ先へ廻りむかふを射留てひと高聲に呼はつて。手綱揺くりしんづ。かつし。と歩ませしは由々し。かりける風情なり。八番に糸毛の腹巻斑の駒に目結の手綱一際すくれて出立しは。誰人なるぞ誰やらん。さればひ某は。昨日まで御所の五郎丸。今朝元服ひゆるるさ荒井の藤太重宗と名乗りひ。此度の狩くらに。さまでの事はあらねども。鬼神といはれつる會我の五郎を生捕らひ。は帳に記し給はれと打て過れば荒四郎ヲ。比類なきは手柄。は身は會我に十倍ぞやがて帳にぞ書せける。扱其外甲斐源氏。三浦の一黨伊勢平氏。坂東坂西北陸道。南は紀の路八庄司。在鎌倉は云ふに及ばず大名小名。都合十萬六千餘騎。駒も千歳を嘶ゆれば。我君の威勢知るも。知らぬもおしなへて萬々年とぞ。三重。祝ひけるかゝる所に。朝比奈の三郎義秀遠侍に扣へしが。すか。と立出で新開が傍にむづと座り。是荒四郎。見ればは身には目も耳もあるが聞えぬか見

えざるか。何共不審晴れすと云へば新開氣色を損じ。何某を。か盲かとは侮つたる云分かな。聞えぬか見えざるか汝が眼に見されよと片膝立てぎめけ共。朝比奈事ともせずいやさ。なんばう急ふと儂汝に目も耳もあらんとは先此朝比奈は思はず。合點ゆかすば語つて聞せん耳垢を取て能く聞け。して今日の結構は何事ぞか思ふ。此度は狩にとめたりし猪猿鳥の物数を記よとこそ詮意あれ。何ぞは所の五郎丸が時宗を生捕しを帳面に記す事。何時の間に時宗が猪にばしなりけるぞ烏にばしなりけるぞ。やれ。目も耳もあらばとつくと聞け。會我は三浦の一家なれば我々とも逃れぬ中。其上兄弟がはたらき日本無双の侍と君もは褒美なされし物を。己れが分にてよくも。畜生にはしけるよな。いで人を殺しても猪猿同前ならば。幸かな己れを切り此。朝比奈もは狩にて新開の荒四郎一正と記されんと飛でか。れば人々慌て押隔て御前なるにさりとは。鎖まれよと兩人を先左右方へ引分る。君仰せ出さる。は朝比奈が中條一々道理至極せり。去ながらかほ。目出度鎌倉人なれば是非勘忍せよとの詮にて。奥をさして入り給へばさしもに勇む朝比奈も。は一言にめでやれおのればら。詮意なれば先只今は免し置く。誠に會我の五郎は命助かるべき者なれども。君は丁簡の上にて誅せらるれば誰に恨はあらざるに。今日の帳面に五郎丸が時宗をとめたるを付からは會我が敵は五郎丸。重ねて會我の所縁あらば此朝比奈が後見し。必ず狙ひ討すべし新開とても危しとはつたと睨んで罵れば。始めは詞荒四郎後には。わち。慄ひつ。先へ心は急げども。あともなか。氣づかはしく見返り。退出す朝比奈が詞の末。尤もことわり頼母しく心地よしとも中々。ばかりはなかりけり

才



曾我兄弟の郎等兄に鬼王。弟に團三郎。彼等二人の者共は。祐成や時宗がまだいけなき頃よりも。影の如くに附従ひ共に敵をねらひつゝ。此度の落着に是非二世迄も供と。達て望みせしかど。祐成も時宗も母の事氣遣はしく。最期の供を許さねば力及ばず。兄弟は。形見の品々取持て。むなしき駒の口を取り。泣く泣く曾我へぞ歸りける。斯る所に若侍しはし。と呼びかけ。何もは曾我殿の家人鬼王團三郎殿にてましますか。是は朝比奈の三郎義秀よりの仕立なりとぞ出しける。何事かは存せね共と鬼王押戴き披き見れば。何々方々が主人曾我兄弟は。君は了簡あきらかなる上何れにあだを殘さず相果らるゝといへども。仔細ある事にて新開の荒四郎。并に五郎九今元服して荒井の藤太重宗と名乗り。此兩人曾我の敵に相極る。此分等兄弟の内一人は曾我へ歸り老母に仕へ。一人は早々鎌倉へ歸らるべし。義秀が手引を以て重宗荒四郎を討すべしとく。とぞ書れける。兄弟大きに悦び先使者に一禮述べ鎌倉に歸し。やれ團三郎。此上は某鎌倉へ取て返し重宗荒四郎等を討べし。此邊は曾我へ参り形見をも奉り。は老母様をはぐみませと云へば團三郎聞もあへず。いや。某は若輩者にては母君へのいはりは。中々叶ひまじは身兄の役なれば。おとなしやかに歸り給へ某敵を討んといふ。鬼王重ねていやさ。古郷の事は内證づく。眼前主人の敵を討て侍がたぬとや。是兄弟者。さやうの事を知りながら我を古郷へ眉をひそめ。ム、何主人の敵を討ては侍がたぬとや。是兄弟者。さやうの事を知りながら我を古郷へ歸れとは。ヲ、頓て心得たり。曾我殿の下人こそ兄は心健氣にて主の敵を討けれど。弟は憶病者にて逃げ歸りしと人に笑はせんたくみよな。弓矢八幡其手は喰ひならぬ。と顔打振て。歸らん氣色はなかりけり。鬼王重ねてヲ、聞得たり去ながらそれは以ては同じ事。和殿鎌倉へ歸り某古郷へ参りなば。弟は心剛なれども兄は腰が抜けたりと。世上の人に笑はれんは御邊も同じ耻ならめ其上此狀にも。一人は古

郷へ歸り御老母をはぐみ。一人は下れとあれば是非此上は理を非にまげ。おこと歸れと云ひければ團三郎色をかへ。はてくどひ事身はくどくに刻まるゝとも古郷へは歸らぬなり。誠さほごに思召さばは身も我も連れて下らんとときめければ鬼王今は堪へ兼ね。エ、是程事を分ていふに兄の詞を開入れず二人連達下らんとは。必定某一人にては得討まじきと思ふか團三郎拗者なれば。ヲ、近頃申悪けれども身一人ではあふなし。といへば鬼王脹を張りはつたと睨み。己れ兄に向てぞんざい千萬七生までの勘當と牙を噛で怒りける。いや異な事を力まるゝものかな。は身の勘當が恐ろしいとて男の道を捨つべきか。勘當がしたくはせられよ此方からも勘當ぞ。追付敵の首を取りは身が顔に投付んといへば。ヲ、其口を忘るゝな。某が打付らるゝか己れが眼に張付るか此上は運試し。夫迄は音信不通兄と思ふなヲ、弟共思ふなど。怒つて左右へ別れける。所存の程ころ。三重やさしけれ實にうけ難き。人の體を受ながら。例すくなき川竹の。流れの身を定かならね。思ふも思はざりつるも。夜毎にかはる憂き枕。つらさながらも勤めて。朝な夕なのけはひ坂無惨やな少將は五郎に深く相生の。松は根ごとにあらはれて。婦女郎や朋輩の善悪なき口にかけるゝ。くつわがせてあはせねば。猶手も足も。なよ竹の虎に斯とぞ。示しける。素より虎は戀知りの。此身も同じ愛さつらさせて語り慰まんに今宵や行きて大磯の。勤の隙に忍び出でしやらり。と露踏めば。鼻緒もぬる。濡姿。けはひ。坂にぞ着れける。折しも少將まがぎに出で。よくぞ。此方へと常の。座敷に伴ひて。妾参りてゆさんにお志の程こそ嬉しけれ。扱は存じの如く五郎様と我事は。いかう譯ある挨拶殊に世になきお方なれば。心のひがみもあるものど。鎌倉方の大名にはふつ。逢ひも致さぬ故。外の勤のさはりとして。内よりかたくせかるれどやり手。禿の目を忍び。言傳にてか文にてか日に一度は。音信を。せぬ事とてもひはす。身にかへてもいとほしく



随分たて、ひに。此四五日は打絶えては出てもひはず。文を遣りても、返事なし。定めし是はみつからに。もたせぶりにてあらんと少し憎ふはありながら、戀が因果でひへば、猶し増しくる床しさは、ほろと泣てぞ、語りける。虎も涙を流しなふ恨も同じ恨思も替らぬ思なり。自も十郎様とは新造の昔より、なじみを重ね参らせて、指切髪切入ばくる。人目も耻も憚らず、日外和田の大よせにも、一人の母に思ひかへ、たんと心を盡せしは、やさぬとて隠れなし。此心底の我なるに此四五日は何とてか、いなせのよすがもひはず。されども世の中の、男の心は斯したもの。別の事もあるまいによしや氣遣ひし給ふな。起證も反古になるならば、神や佛もいらぬものなふ。浮れ女に實なしとはいづこの誰かいひ初めし。あはれかし我々が心意氣をお二人に、おしわけて見せたやな。今にも來らせ給ひなばいざ言合て振らふぞや。先盃と夕暮に互の「思を語る、かゝる折節、新開の荒四郎荒井の藤太重宗は、朝比奈が詞の末氣遣にて夜が寝られず。所詮會我が所縁とあらば根を掘て葉を枯さん。先虎少將をたらしゆかりのあらば尋ねんと。二人とつくと談合しけはひ坂にぞ急ぎける。はや程もなく着きしかば案内請ふて座敷に入る。虎少將は是を見て、頓て座敷を立んとするを藤太少將が手を取れば、荒四郎は虎が手を取りこは情なし先暫くど、よれつもつれつしけれ共虎少將はにこどもせず。はて先離させ用あらば重ねてど又立上るを引とめ、是女郎衆、惣じて遊君は全盛して、よき客の數多あるを譽とするところ聞てあれ。和比前達は一風變て世になき會我の兄弟に心中だては何事ぞや。いらざる素浪人を不便がらすと我々に懇あれ。これはなるは荒井の藤太といふ人。某は聞も及び給はん新開の荒四郎といふ者なり。は身達の意氣地次第。八幡ねびきにするささしと髪かき、撫てぞやける。虎くつくと吹出し、尤かし皆様はは大名さうなり殿はよし。何暗からず見ゆれども我々は異な物好きにて馬鞍見苦敷會我殿が、たんと

いとしく思はれて大名は嫌ひなり。外をかせぎ見給へといへば藤太聞もあへず。扱々ひよんな物好きかな。大名がお嫌ひにて浪人が好きならば、やすい事身共等もお暇や浪人致し。君に思はれやさんと抱き付ば振りほごき。エ、あれ輕薄ななふ虎様。よしない相手になり給ふなといへば虎も顔を赤め、しやはになま見られぬと振切て立つを兩人とつて捻据る。何なまくられぬとは誰が事ぞ。金銀出して買ふからは見たうなくとも見させて見せん。さあ、ひくと成りとも動いて見よと太刀に手をかけぎ、めければ、やどや一家は膽を消しこはひかにと騒げとも。二人が擬勢に恐れうるたへまはり居る所へ、鬼王形身を持ち涙ご共に來りしが、此跡を見て何事ぞうと問ふ。亭主標ひく、有増を語る鬼王聞もあへず。いや推参なり狼藉者とするくと駈入り、飛び蒐り兩人がかんづか掴んで引伏せ。方々は歴々さうなが人體にも似合す。何ぞ女童を捕へ卑陋千萬見苦し、堪忍ならぬ事わらば某が相手にならんと太刀ひねくつてはつたと睨む。思ひよらねば兩人膽を潰しむづくと起き、鬼王が顔を恐るしさうに打守り。扱々世には興がるものあり。身にもかゝらぬ事につなう力む男かな。尤も仕様は多けれども爰はいふても所わるし。あのやうな無法者にはかまふていらぬものなりと。座敷を立ばい、やお侍、無法者は相手にならぬか。それはひけて見ゆる是さ。くと喚げども聞入れもせず。足早に歸りしを笑はぬ。者こそなかりけれ。扱鬼王は虎少將に近付て、兄弟の人を討死の次第を語ればやれそれは誠か悲しやと。其儘其處に倒れ伏し聲も、惜まらず泣き給ふ。涙の隙より虎少將、なふ神ならぬ身の悲しさは斯とも知らでさまぐに、恨みやせし果敢なさは、淺ましや夢ばかりも知るならば。一所にこそは死せずとも何しに浮世に存へんと。いひも敢ず鬼王が腰の刀に取付くを押止めこはいかに。尤もは嘆は道理なれども、我々さへは最期のひ供を許し給はず。まして女性のひ身といひ。誠左程に思召さはは發心まし。ながくは跡



弔せ給へとさまぐになだめつゝ、扱我々は形見を持ち曾我へ罷歸る所に、朝比奈の三郎殿より斯様  
 の状故、新開重宗といふ者を討ん爲道より歸りてい、近頃御難儀ながら此馬と、形見の品々曾  
 我へ送り届けてたべ、片時も早く某は鎌倉へ立越えて、二人の奴原討やさんと語りもあへぬに虎少將、  
 なふ其荒四郎藤太とは只今の兩人よ、何只今の奴原が新開荒井めなりけるとや、扱口惜や腹立や天の與  
 へを知らずして、やみくゝと通せしかや、實の山に入りながら、手を空しうとは此事ぞ未だ遠くはよ  
 行かじ、追懸け討て本意を遂ん思へば、無念やと跳上り飛上り、跡をもとめて駆け出る其勢は怪  
 羅天魔、實に牛頭馬頭の鬼王やと扱恐れぬ、ものこそなかりけれ

虎少將乃り

三長目

さりて、も戀はくせもの、皆人の、まよひの淵や氣の毒の、山より落る、ながれの身、うき寝の翠の  
 しらべかや、引手数多にしげけれど、思ひ出すは彼の一人、なふ戀し床しの念力も、甲斐なき矢先に  
 たつ石の、虎御前少將は形見の駒の口を取り、夫故沈む身の行衛、思ひ「やられて、哀れなり、悉達太  
 子に別れにし、車匿童子が往昔は、檀特山の岨傳ひ、戀泥駒の諸手綱、もろき涙にくれけるも、夫は生  
 きての別れぞや我身の愛に比ぶれば、立もおよばぬ富士の山、裾野の原の、草がくれ、露の底にや兄弟  
 の死骸のおはすらん、あの藤澤に啼く雁も、やよや哀れを知るならば、翼につけん一筆を傳へて、暮の  
 鐘の聲寂滅、爲樂とひくげとも輪廻の、花は散りもせ、す、いつか火宅の、門をさへ、伊豆の、三島に  
 鹽氣取る、浦の煙の、一むすび、又小結び、捻れて纏れて、解けて亂れて靡き、大磯君よ、いと、の道  
 すがらさうし、夕の頃までも、こゝを通ひて來にけらし、さはりありやと黃昏は、さこそ駒をもせめ

て扱、ア、此駒よ、汝も心のあるならば、鞭をうたれしうらみをも、今は形見と思はずやと二人手  
 綱に絶り付、口説き給へばさすがに聞入たりし風情にて諸膝折りて身ふるひし、頭を俯だれ耳を伏せ  
 黄なる、涙を流しつゝ、主の別れを嘆きしは、人間物を知らぬなり、秋霧の、立野の駒を牽く時は、心  
 にのりて戀しさのむかしがたりとなりし世に、誰が玉章の箱根山、まだき時雨のしい柴も、涙に染めて  
 赤澤山鎌倉山の、谷々もかけ氣おさるゝか、あしたか山、刺藻かくなる、伏猪の、ここに石のまくらや若  
 むしろ、二人かはさば憎からじ、待つ人もたぬ徒歩路の旅、すじの篠原真葛が原小すげ、蓬生玉かづら  
 押分け、扱分けしごる、もごるに、知る邊なく、主なき馬の、馬方いやは、ん、ほんに、  
 穗に出て、あふ夜もあり、鞍子川、其埋れ木のむもれゆく、身の果いかにわびしさよ、は身と  
 ても我とて、花ならば初櫻月ならば十三夜、盛に足らぬ身をもちて思ふ人には添ひもせず、かゝる愛  
 めを見る事よ、是も誰故紫の一もとゆるのゆかりぞや、歎き給ふな歎かじといさめられてはいさめつゝ  
 氷もらさじと、しめてねし其移り香も残るやと、袖より袖に入かはし、手に手をとりて行く程に曾我  
 の、里にぞ、三馬着き給ふ、わきて哀れを、とめしは曾我兄弟の母上なり、祐經を討んとて二人狩場  
 へ出しより、げふ廿日に餘れども兎かうの便あらざれば、しばしまごる隙もなく明れば十郎戀ひしや  
 暮れば時宗戀ひしやと待つ精力も弱り果て、萬事限りの病の床頼み、すくなくなり給ふ、二の宮の姉  
 は前、女房達は集りて様々に看病し、富士の、女狩も過ぬるよし、頓て目出度歸り給はんは心やすかれと  
 すかし慰めやせども八十に近き老の波、打臥ものも宣はずまもり「あるより外ぞなき、かゝる所へ虎  
 少將、門外にたゝすみて涙ながらに案内こふ、折節二の宮の姉出給ひ、案内は誰ぞと見給へば、あてや  
 かなる女房のしほ、としてややう、是は大磯の虎化粧坂の少將とや者にてひが、は兄弟の人々敵祐經



を討はうたせ侍へども、かやう／＼の次第にて終に空しくなり給ふ。形見をとり持てといひも果ぬに、姉君は、何兄弟は討れしとやそれは誠か悲しやと前後もわかず泣き給ふ。二人も涙にくれながら實に道理我々も、かやうに様を變へ參らせ是よりいかなる山にも入り、香花を取りは菩提を、吊ひ參らせば心ざしそれに付、憚りながら兄弟の形見に、母君様の顔容。一目拜みたうひがと思ひ、入りて望みける。姉君感入給ひ、誠に各の事もかぬ／＼聞は及びしが、聞しにまさる人々の心中、返す／＼も頼母しけれ。尤も母君に逢せたらうへ共、兄弟を戀ひ倫て今を限りにひに、斯くと知らせし物ならば中々命もひまじ、去ながら各の望も無下になしがたし。扱いかいせん何とかと、しばし思案し給ひしが、ヲ、思ひ付たりありし世の、形見の烏帽子直垂を、虎少將に打着せて暫く是にまませと、中門にたすませやがて「奥に、走り入りなふ兄弟こそ敵を討祐成歸りてひは、時宗歸りてひと誠しやかに宣へば、重き枕をかる／＼あげ何兄弟が歸りしとや、扱も／＼嬉しやなとく／＼是へ／＼とて、身のいはりも打忘れ勇み給ふを哀れなる。晝さへうとさ、老の目の、黄昏過るおはしまの、燈火に顔をそむけ心までくる憂き涙、おし俯向てぞ居たりける。母嬉しげに珍らしの兄弟や、遂に便もなかりし故。若は狩場の流矢にも中りて過ばししたるかと、案せし憂の病となり時を待間の我が命、存らへし甲斐あつて敵討ての對面は、最早死しても本望ぞや。さすがは父の子にてあり。ヲ、でかしたり／＼やれとてもの事に祐經を討たる體を語り、母をも想めかつは又、冥途にまします河津殿にも手向けよみちを照し參らせよと、持佛堂の戸を開きはやく／＼とぞ望まる。むざんなるかな人々は、おおもかげも忘れ形見の母の仰を重んじて。はつと答へて立上り聞傳へしをしるべにて。狩場のをの、物語さく／＼に「たもともぬれぬべし

### 虎少将十卷折

去る程に建久四年五月雨の、あやめもわかぬ開き夜に今宵限りとしらま弓、引返さじと一筋に思ひ定めて祐經が、狩場の庵に忍び入り松ふりか、げ見てあれば、よひの酒宴に酔ひしづみ前後も知らず伏したりけり。うき木の龜や優曇華の花待ち得たる心地して兄弟思はず打うなづき、につこと笑ふて立たりし心の内こそ嬉しけれ。されどもいねたる敵を討ては死人を切るに異ならずと、いかに祐經、曾我兄弟の者共なり親の敵見參せよと、呼はる聲に目を覺し起上らんとする所を、左手の肩より右手の肋のはづれ迄ばらりすんご切付た。時宗すかさず諸手を薙ぎ、廿餘年の秋の風今吹返す葛の葉の、恨はつきじと飛上り跳り上つて切る程に、あゆみの板に切り付けて門外に駆出れば、すは夜討こそ入れたれと上を下へと返しけり。かゝる所にむさしの國、たいらくの平馬助と名乗て物々し曾我殿原、參りざふと云ふ儘に、四尺餘の大太刀を差挿してぞ出たりける祐成是にありやとて、小柴の蔭より突と出で一文字に切てかゝる、詞には似ざりけり、かいふつて逃て行く。まさなうひ平馬殿、何處までと打つ太刀に、おしつきのはづれよりかいかね掛て切込まれ、よろり／＼と引にける。爰に平間が姉舞愛甲の三郎と名乗て出た五郎莞爾と打笑みて、紫燕は柳樹の枝に戯れ、白鷺はれうくわの蔭に遊ぶと笑ひながら切拂へば、左手の腕を打落され後をも見ずして入てけり。是を見て安房の國、安西の彌七郎十郎目がけてわたしあふ、さしつたりと聲をかけ、二打、三うち、うつ、太刀の根も高紐のはづれより、草摺三げん切落され、成亥にとうとまるびしは不便なりけり淺まし、淺間の嶽か信濃なるうすきの八郎景信時宗に、打てかゝる、得たりやかしこしあまさじと、南無阿彌陀佛の拜み打、真向二つに割付られ夕の露とぞ、消えに



ける。五番に所の黒彌五爰をば我に任せよと。いかめしげに駈出る。請取たりやと祐成。横に拂ふ重斬。四十あまりの鬚男。二つになつて見なければ敵も味方も一同に。さつても切たりきれ物かないやいやとつとぞほめにける。よみも未だやまざるに駿河の國の岡部の三郎。遠江に原小二郎。二正つれたる唐獅子のぼたんにすたく如くにて。隙をあらせず兄弟に稻妻よりなほ早く。煙を立て。飛んで蒐るをひらりと外しはつしと受け。ひらり〜てう〜。蝶の羽づかひ。隼が雉子にあひしとやおどし。刹那の息をもつがせばこそはらり〜と雍倒し。太刀振りかたげ汗押拭ひし息をぞつがれける。八番には信濃の國海野小太郎行氏時宗に渡り合ひ。膝口割れて引て入る。新開の荒四郎此よしを見るよりも。敵は二人でありけるにさもしや方々よ。いで某が討とめて娑婆の暇をござせんと。小踊して馳せ向ふさやつが廣言憎ければ。微塵になさんと兄弟は飛が如くに切て出る此。勢に恐れをなし。太刀も刀もいらばこそ。小柴垣を破り高はひしてにげけるを。笑はぬ者こそなかりけれ。其外群がる兵を爰に雍伏せ彼處に斬伏せ兄弟の手にかけて五十餘人討れば手負は三百八十人。爰に又武藏の國。新田の四郎忠綱祐成にわたりあひ。火花をちらして。三重戦ひけりされ共祐成。太刀打折て力なく指添ぬける其隙に。忠綱横に雍ぎ拂へば右手の高股切落されすでに最期と見えにける。斯とはしらす時宗は所の間近く亂れ入る。五郎丸と云ふ童を女と思ひあなごつて。やみ〜と生捕れ廿九日のあけばの。つひに前に引出され。よひと。あしたに。兄弟は一夜を隔て。富士の根の。裾野の草の露霜と消えてはかなきおもかけの。あら戀しの祐成殿や。なふなつかしの時宗殿やと。烏帽子直垂かなぐり捨てかつはとまらび泣ければ。母は夢ともわきまへず何兄弟は討れしとや。是は夢かや夢人かと二人にひしと抱き付き消え入り。〜給ひけり。二の宮の姉涙を押へ。實に道理去ながら餘り兄弟を待たさせ給ふは歎の痛

はしさに。露の間なりと心を慰めんどのばかりごと。則ち是は大磯の虎御前。此方は化粧坂の少將とて兄弟が思ひ人。形見を持って來られしを。頼みて斯はしつらひしと語り給へば母上は。何かた〜は聞及びし虎少將にてましますとや。誠に世になき者共に死後迄不便を加へられ。是迄訪せ給ふ事。返す〜も嬉しけれ。さは去ながらさきのふにも。母もむなしくなるならば今の愛目はさかしものと思へば。〜かた〜の。とふにつらさのまさり草葉末の露と消え失せし。もとの年の我身かと又絶え。入てぞ泣き給。ふ虎少。將もなみだながら。誠に兄弟のほ名残に。ほおもかけを拜み奉らんと推參致しひ所に。却ては歎を懸奉りひものかな。去ながらは形見の品々此は文をば覽じ暫し慰め給へとあれば母上文を取上げて。涙ながらに形見の品々拭目録を披見あり。あらず不思議や。十郎が手蹟にて守刀は祐若にとらすと書てあり。此祐若とは誰が事を虎聞も敢ず。扱は左様にひかや。耻かしながらみづからが腹に三歳の若在ますを。手越の伯母が元に隠し置せ給ふといへば。何と〜十郎が忘れ形見のありけるとや。扱も嬉しやなつかしやなど召連れては來給はぬ。なふはや〜と身もだへし。兄弟が蘇り來ると聞程にいさみて「使を立ちらる。はや程もなく。祐若を乳母が抱き來りけり。やれ來たか祐若是へ。〜と宣ひ老母膝にかき抱き。扱も〜おもさしよふ祐成に似し物哉。嗚や最期に十郎が。此子の事こそ思ひつらめ。五郎は未だ子もなしとや。何を形見に慰まん。時宗共祐成共此孫一人のたのしみぞと。歎きながらも祐若が愛らしき手を拍き。譯も聞えぬ泡沫の哀れとも又愛らし〜とも云ふかた。もなき涙かな。されども姉君かひ〜しく老母に力をつけんと思ひ。いづれもよしなきは歎き。それ侍の家に生れ刃にかゝるは常のならひ。誠に彼等は親のため。ほまれを殘し惜まれて本望達し討れば。果報いみじきあやかり者。殊にかやうの勇しき世繼のあれば何事も。打捨て悦びおはしませヲ。目度出し〜とい



さめながらも忘られぬ。曾我殿原の物語實に、頼母し、健氣なり。あはれとも又痛はしくともためし稀なる敵討やと惜まぬ。人こそなかりけれ

才 四

鬼王團三郎兄弟は、武道の意地を云ひ慕り同胞の縁をきり、立別つて我先にと敵を狙ふぞ頼母しき。ある時朝比奈鬼王を招き、は身知らずや今日新開の荒四郎荒井の藤太兩人、鶴が岡の濱邊にて笠懸を射るよし聞きはや團三郎は出てあり。尤も義秀方人して討せたきものなれども、かく兄弟が張合の上助太刀ありと云はれては討つたが討つたに立つべからず。是非兄弟が手た餘らば此朝比奈が控へたり。鐵の楯なるぞ。はや急がれよと宣へば鬼王はつと悦び、誠に有難きは懇情生々世々迄忘れがたし。さあらばは馬一疋拜借仕度とせば安き事それごと。あらひ轡に裸馬取物もとりあへず鶴が岡へと。三重急ぎけるさる程に、新開の荒四郎荒井の藤太重宗は、未だ弓にはかゝらず遠乗してある所へ曾我の郎等團三郎、主の敵一人も遁さじと一文字にかけ來れば、すは朝比奈こそ後見よと一太刀にも及ば、こそあどをも見ずして逃げて行く。團三郎是を見て憎しきたなし返せ戻せと諸鎧をわはせ追駆ける。鬼王遙にこれを見て、南無三寶おくれじと一散にかけつき團三郎が乗る馬の、尾筒を取て引戻す團三郎大きに怒り。只今手詰のさかいをこは狼藉と怒りける。やれづれなし團三郎、大事の主の敵弟に先を越れ某が立つべきか。初太刀は我に討せよとあとへ取て引戻す。引違へて團三郎又鬼王が馬の尾筒に縋り、いやさ我は兄をもたず。卑怯せられぬ見苦しと跡へ取て引戻す。いやさそれは當座の意地づく平にゆるせと引戻せば、又廻つて引戻し二三度四五度せり合ひしが、あまり強く引据ゑられ團三郎が乗たる馬尻居にどう

を伏しければ、真逆様にかつはと落ち巖に胸を打あて、呻と計りに息絶ゆる鬼王見返り南無三寶。こはいかにと乗返し馬より飛降りいだき付やれ團三郎。くと呼びいけ藥様々用ゆれば、少と心地を付にける。鬼王大きに悦びやれ心は何とありけるぞ。兄鬼王なるに氣を取直せと云ひければ、團三郎眼を開き留息をほつとつき。何鬼王殿とやして、敵は討取り給ふか鬼王聞て、いやとよいかに敵が討度とて、目の前そちが落馬してかゝる體を見捨ていかで先へ進まれん。先々は身が心持いかゝあるぞと云ひければ、左右も云はず團三郎暫し涙に咽びしが、暫く有て云ふ様は、扱もく冥加に餘るは心底。兄上ながらも耻かしや、誠にいかなる天魔が魅入れ、兄を兄とも思はせず。中違とは云はせけるぞ。はかなき我が心からは、たとへば兄上かゝる仕儀にて死させ給ふを見捨て、意地を意地に立べきに今それがしが體をば覽じ大事の敵を振捨て、は看病なさるゝ事さすが兄上なればこそ。近頃面目なきながら只今迄の慮外をば、眞平は免給はれと手を合、せてぞ歎きける。鬼王も涙を流し、ことわりなり何がさて。もごより連枝の中なれば少も意趣を残すでなし。今より心を一にし、一所に敵を討取んまづ、和殿が養生せん。兄弟打つれ隠家へ空しく歸るぞ。三重無慘なる。是は扱置、新開の荒四郎荒井の藤太重宗は、團三郎に追立られ危き所を免かれ大息ついで歸り、荒井の藤太云ふやうは、兎角彼奴らは命を捨て狙へばたとひ一旦延びたりとも、猶此上が心元なし如何せんと云へば荒四郎聞もあへず。エ、それにつき能思案こそひへ其趣は、聞けば虎が腹に十郎が一子あるよしいさ此悴を奪ひ鎌倉へ参り。曾我が郎等共此子を世に立ん爲君を狙ひすと偽らば、彼奴等は上より探し出され誅せられんは定なり。然らば世上も廣くならん此儀はいかにと云ひければ、ヲ、云はれたり企まれたり是に過ぎたる智略なし。去ながら虎が方に若きやつばらや忍び居ん。まづくは身と某只二人忍び行き様子を伺ひ奪はんと、供をもつ



れず笠引被り庵をさしてぞ 三重急ぎける。折節少將 虎御前祐若を寵愛し。せめては慰みぬる所へ新開荒井つゝと入り。是々兩人。曾我の祐成が一子是にある由上聞に達し。急ぎ召捕つて參れとの事にて我々迎ひに來りたり。片時も早くと祐若が小腕取て引立つる。二人は驚き肝を消し袂や袖に縫りつき。尤も君の誑意ならばさもこそわらめ去ながら。しばらく待て給はれや度事ありと。無體に取付き泣歎けばさすが色には迷ひ易く。はて云ひたき事あらばとよはくとする體をみて。虎先荒四郎か手を取て。いや別儀にてははす。祐成は我君へ何の仇をか致され子供までの尋ねぞや。たとひ少しの咎ありとも東西わかぬ嬰兒なれば。各さまのお心得にて死せたりともは披露あり。助けさせたび給へ七尋の島に入尋の舟をかくすとかや。今生後生の思に手を合せてぞ歎かる。もとより實なき事といひ殊に名におふ虎少將。しつはと口説くに二人の者たよくおろくこりりとして。いやさ我々も不便に思へばは前はいかやうにもなるまじき事にてなし。去ながら。かたぐの心得次第といへば少將聞給ひ。いやなふさそれがましく宣ふが。其子だに助けて給はらばわんざくれ比丘尼をやめ。いかやうにもは兩人のお心に従はんと。まことしやかに誑れば扱通りたり。此上はなにがさて随分我々精を出し。命を助くるのみならず終にはは前を云ひ直し。曾我の家を立させん心安く思はれよと。よい加減につもりあひ先目出度に盃を。さいつさくれつ打くつるぎ暫く一時をぞ移しける。酒もなかに荒井の藤太いや是兩人。して此庵へ鬼王團三郎はこざりけるか虎聞給ひ。されば其奴ばら折々爰へ参りしが。兄弟の中をも耻す我々に濡れかゝり。何とも迷惑仕ひ。近頃惨き事なれども。殺してたべと偽れば荒井につこと笑ひ。エ、しやつめらを殺すは蠅虫より猶易し。今にも來りてあるならば此兩人にまかされよと。心は怖く思へ共。座敷なりの空威嚴よそに聞かへ耻かし。荒四郎是を聞き尤もそれはさうなれども。彼奴原

如きの下郎めと太刀を合すもいかいなり。とこそにそつと忍びぬてどうぞだまして討やうやあらんと云へば虎聞給ひ。されば何處に隠しませう所もなしと邊を見廻す内少將云ふやう。なふ屈竟の隠し所こそひへ。唯今にも彼等が來らば是非に酒を強ひ酔伏させしめし。其内は苦勞ながらあれなる二かうの唐櫃には忍びませませ。よい時分に我々が。合圖を致さんとあれば智慧薄き二人の者。ふはとだまされ打領づき是に超したる事あらじ。時刻移して彼奴ばらに見付られてはいかくなり。いざとて二かうの唐櫃へ入りける。心ぞ淺ましき。虎少將立寄て。蓋をしめんとする所を藤太しばしと押へ。いや。油断は怪我の基。兄弟を仕果する迄は方々が心知り難し。先其錠をこちへこされよ。蓋をも前後へし給へと云へば二人からくと笑ひ。さつても用心深きお方かな。兎も角もと云ふ儘に錠を二人に相渡し。ふたをも前後にしたりけり。去程に虎少將。是迄はしつ此上はそつと落てや退ん。兄弟がな來れかし。兎やせん角やと身もたへし足もしごるに落付かず。かゝる折節表の方に響の音聞たり。はつと思ひ虎御前。走り出で見給へば朝比奈三郎義秀なり。こは天のあたへぞと左右の事は打置て。右の次第を語らるれば朝比奈横手を丁ぞ打ち。扱々女人には過たりし智慧才覺いやは驚き入てひよ。たとひ彼奴等が錠鍵とる共蓋を前後にしたり共。此朝比奈が來る上はと云ひも敢すわたりの大石をい。と引起し兩脇に引扱み。かろくと歩み行き櫃の上にそつと置き。やれ横着者共。仰もなきに誑意と偽る其天爵立所にあたり。女子共にだまされ扱もよい態ひよ。かく云ふは朝比奈の三郎義秀なり口惜くは是へ出され一太刀合せ頭をはね曾我兄弟が供養にせんいかにくと罵れば。二人は箱の内にしてこは無念と騒げ共。二三十人して持つ石を蓋の上に置ければ釘付よりも猶堅し。され共荒井大方。うんと云ふて押破れば。箱は四方へさばれ。何がするぞき大石に押ひしがれて鮭魚の板の。如くになりけり。荒四郎箱の内よ



り慄ひく云ふやうは。いや是朝比奈殿。某は會我殿原へ敵對したる身でもなし。只今是へ参りしも荒井めに唆はかされひへば。兎角貴公の慈悲に。侍一人取立ると思召密に命を助けてたべと泣聲にてぞ申ける。義秀腹脈をよつて打笑ひ。何會我兄弟に敵對せぬとや。ヲ、柴垣破つて逃る程の腰抜がいかに敵對すべき。悔り易き女子共には能も男だてをしけるな。己れがやうなる腰抜は。侍共のみせしめに殿中にて耻搔せんと。若黨共に云ひ付緒繩を多く取寄せて。新開が入りし唐櫃を十文字に結びさせ。彼よ是よとする内に鬼王兄弟來りたり。朝比奈見給ひやれ方々。論も意氣地も無になつて自業自滅の鼠共一疋は押に打れ。今一疋は生捕たり是こそ會我の運聞き。いざ此儘にては前を経鎌倉中の物笑ひにと死骸と生捕荷はせて。鎌倉さしてゐいさつさ。よいさつさゐいさつさ。よいさつさゐいさつさ。よいさつさゐいさつさ。よの果。知るも知らぬも矢聲をかけ手を打拍さ。身をよぢもだえて笑はぬ。人こそなかりけれ

芽み

朝比奈の三郎義秀は會我の祐若虎少將。鬼王兄弟召つては前に罷り出で。是は工藤右衛門を討し祐成時宗が妻子にては座ひ。然るに新開の荒四郎荒井藤太重宗。此二女が庵へ参り君の詭意と偽り。これなる悴を召捕らなど。威し苦しめひ故。女童の事なれば當座の難を免れんと賺したらしひ所に。運命盡きてやすくとたばかられ斯様くの様子にひと。新開を生捕の唐櫃。荒井の藤太が死骸やがては前に引出す。君開召し扱も憎くき所業かな先其箱を開き新開めを引出し諸士の中にてあんはくさせよ長つて義秀は。唐櫃の掛繩をはらりくと切解さ。蓋を開れば新開飛出で逃げんとするを朝比奈とつてあげておとし。背骨の上をどうごふまへ。爰にても彼處にても逃尻早き男かな。とてもこの事に前にて生首引拔

きやさんか云へば君開召し。ヲ、侍の面よごし所領盗人國家のついでへ。見るも中々腹の立つはや計らへと宣へば。畏つて鬚をとり既に危き折節虎少將引止め。尤かし心底の悪さ頭より爪先まで刻みても嫌たらす。去ながら殺せしとて。夫の祐成時宗の蘇生り給ふ道にもあらず。其上かやうに殿中にて耻を與へ給ふ上は。討たよりはまさりなん。たゞ我々が望には願くは出家させ。一枝の花をもつませなばせめて利益のたよりども。又祐若が祈禱とも嬉しと思ふ其悦び。何か是にまさり草。菩提の種ともなりやせんと事をわけてやさる。君も道理に歸服あり實に尤もことわりなり。さあらば會我がさやうやうにとて。は赦免あれば朝比奈荒四郎を引立て。是程耻をかく上にも未だ命が惜きかど。いへども更に返事せず。袖にて顔を打覆ひ押俯向いて逃出れば。扱ても惜きは命かほど一度にぞつとぞ笑はる。重ねての謙意には。會我兄弟が振舞今方々が仁義天晴無双の者共かな。則ち先祖の知行宇佐美久須美河津の庄祐若に得するなり。扱時宗には子のなきとな。然らば兄弟の者共が家名實名かたごりて。會我の十五郎祐時と名乗るべしとしるしのは判を下さる。道の道たるは政法有難かりける次第なり。此事奥に聞えしかば虎少將が心ざしは臺深く感じさせ給ひ。は籠目近くは出あり二人をつくと。は。かくとは知ら白拍子は頼すくなく偽多しと聞きつるが。彼等が振舞貞女とや云はん賢女とや云ふべき。かくとは知らで今迄は。遊女はさもしき者と思ひ床しき事もなかりしが。今更彼等が有様を見て傾城の懸路のしな。いとなつかしく見まほしと君へは訴証なされ。古の遊女のさままなふでみせよと宣へば。二人は顔を打赤め。今は昔になれ衣かへすくも恥かしと幾度辭退せども。かすくのお望みには意も重荷の力なく。お請を申立ければは所のおまへに町づくり。數多の遊君召集めすでに用意を。三重したりけり



つらき心持

誠にめなれぬ。ふりうやと。上下さめきあふ中に。深編笠の目にたちてたれをしのぶの。頬冠り。扇をかざし手を引て。扇格子に立かゝりたばこ。のめとは。かたじけなひによほし。くくはうよはいくほやんれなさけの君さままたんだ。今宵どのじか。そこしんそれくついらをいそぐ賤の男が。駕籠のすだれに手をかけて。又のお首尾といふもあり。罪も報も後の世もわすれ「はてたる。ばかりなりかゝる折ふし。思ひくしの紋の笠。さし櫛の齒の引つれて。ひつこき髪のととなしに亂れて物を思へどや。小襦かいざりほらくと緋無垢。黄むくのひまぐに。脛いと白く忍ばしくゆられ。ゆらりと。ゆりかけて。しづかにあゆみ行く振は。天津乙女の舞の袖。峰に羽を伸す。天津雁。月にとわたる風情して道中。いみじく。三重過越し。猶いにしへの。物語。今様にこそかたひけれ。曲輪すまわは。しぐれの雨よ。ふつゝ濡らしつ。むらゝさめの。まだひぬ。露もまだひぬやや。霧は不断の。伽羅をたぎ。晝にもまさる燈火は。月じやうちうの夜みせかや。智あるも愚なりけるも。こゝぞ戀路の學問所松風羅月に。言葉をかはすひんかくも。さつて来る事もなく翠帳紅閨に。枕をならべし其人もくせつの嵐に誘はれ。硯の海や筆の山。管紙千づかに積れども。浮氣の雲の定めなく。馴れはまされで戀がますよの世の中は。つらき勤のしなぐに。節句正月色競べ。春は柳に桃の酒夏はすゞしき。あやめ酒秋の。菊さけ。冬は雪見にふけや。松風。あがれやすだれなきりくく。しやんと結んで空に知られぬあられ酒。つけておさへて。あひにあひ竹篠竹の。竹になりたやしの竹に幾夜かさねて書く文に。切つて巻込む黒髪の。いふにいはれぬとりなりやみせば。襦高ゆきみじか。裾にはさつと立波やばつと立波さうく

く。さらくくく。迹や志賀の山道。うらは紅絹うら花の。花の吹雪よの。吉野初瀬の。花よりも紅葉よりも。戀しき人はみたいものじや。誰ぞ。かぶる。出て見よア、風がふくそれで寝もせで迷ふ夜の。明方つぐる。鐘の音。ねびきの櫻枝折の。やり梅かぶるの愛き名残。なじめば涙のこぼれ梅。かごは其方に飛梅の凌ぎかねにし愛さつらさ。昔がたりと句梅。後は小梅の花さかりくちせぬ中の契なり。かく定めなき遊女の。寄せては返る浪枕。浮きたる船にたごへしも。今身の上にはづかしやかたるもいふもおもておせいさく。名残の調子をと。虎少將が調にて拍子を揃へ。三重かなでけるかくておいとま給はりて親子伴ひ立歸り。富貴の家となりにけり實にありがたき忠孝の。威徳は千秋萬々歳目出度かりともなかく。やばかりはなかりけり



出世家法

近松全集

さるてもそののち、妙法蓮華經觀世音菩薩、普門品第廿五は大せう八ぢくのこつずる。しんくき  
 やうじや大慈大悲の光明に預り奉る。チロシ觀音威光を有難き。爰に平家の一族惡七兵衛景清は、西國  
 四國の合戦に討死すべきものなりしが、死は軽くして易し生は重くして難し。所詮命を全ふして平氏の  
 怨敵。右大將頼朝を一太刀恨み。平家の耻辱を雪がんと落人となり尾張の國。熱田の大宮司にいきか  
 知るべありければ深く、忍びて居たりけり。元より大宮司は平氏重恩の人なれば、深くいたはりひごり  
 姫にをの娘と聞えしを景清にめあはせ。子とも婿ともかしづき給ふ心ざしこそわりなけれ。景清大宮  
 司の御前に出で、誠にそれがし無二の怨志に預りながく浪人仕り。身は埋木と朽果ん末頼みなき身  
 ながらも、せめて頼朝を一太刀うかひ君父の恨を散じ。その後は腹切て兎にも角にもまかりならんと  
 空しき月日を送りひ。然る處に今朝屈竟の事を聞出し其故は、鎌倉殿は南都東大寺大佛殿を再興あ  
 るべしとして、秩父の重忠かの奉行を承り、さのふの暮ほごに此處をうつて通りひよし。たとへば頼朝七  
 重八重の城廓に取こもり。天地に黒鐵の網を張つて用心きびしくひとも此景清が一念にてなごか狙はで  
 ひべき。去ながら重忠常に頼朝の側を離れず、神變不思議を兼ねたれば其身は都にありながら、心はな  
 は鎌倉殿の側にあり。かうや景清は二相を悟りひへ共重忠は四さうを悟る。頼朝に出合討んとせしこと  
 三十四度に及べきも、重忠に隔てられ終に本望遂げやす。然らば先重忠をさへ打取らば、頼朝を打ん  
 事くびすを廻らすべからず。重忠此度東大寺の奉行にのぼる事さいはひかな仕合せ。天の時來りたり忍



集 全 松 遊

びやかに南都に下り、重忠が首ひつさげて参らんに早お暇とやる、大官司聞給ひ實に屈強の時節は参なれ。携へて人に悟られ給ふな急いで事を仕損すな。片時も早くとありければ、北の方も悦びて、宗盛公よりたび給ふあざ丸といふ名剣を景清に奉り、首尾よく仕果せ給ひなば一日も逗留なく、早くは歸りましますと門出の盃を出さるれば、たがひに千秋萬歳と獅子の勢龍のせい、いさみくして行く虎の、源尾張の國を立出て奈良の、都へ三重上らるゝいで其頃は、文治五年春過ぎて夏にけらし白旗の、源氏の大將頼朝公は、南都東大寺大佛再興の願にて、畠山の重忠奉行職を承り、松にも花を春日野やどぶひの、べに假屋をうたせ、よこめ帳付勘定方大和大工に飛弾匠、ぞま入り木作り事をはり今日吉日の柱立、我身は機敷に一だん高くむらごうの大幕打せ、ついで見えしは本田の二郎其外のみさふらひども、帳場へしるしを立て弓鎗長刀ふきぬきに、やなぎさくらをこきまかせて花やか「なりけるはふしんなり、かくて番匠のとうりやう、木工のかみ修理のかみ、おのがしなれる出立にて、吉方にうちむかひまづやがための、祭文を唱へつゝ幣をふつてさいはいし、手斧はじめのろの儀式、げんぢうにこそつとめけれ、むべもとみけりささくさの、みつば四つばの大伽藍手斧はじめの壽に、千代をかためてはし、ら立、春は東に立をむる、是萬物の初めなり、夏は南にめぐる日の、あやめが軒や、かはるらん、秋は又西の空つきせぬちぎりかたごりて、天のがはらの橋柱しらげたつるやつきがんな、雲をそなたにやりがんな、冬は北にぞつゝ井づゝ水こそ家の寶なれめぐれや「まはれ井戸車、かまど賑はふへつゝ殿、先陰陽の二ばしら、二本のはしらは女神男神を表したり、三本のはしらは、三世の諸佛四本のはしらに四天王四海泰平民安全と祝ひてめたる、すみつばの、いどのすぐなる國なれば、實や宿にみつめざりのこざりくすのかすゝと、濱の真砂と君が世はかぞへつくさじおもしろや、しかるにこの、大伽藍とすは

集 全 松 遊

聖武、皇帝の建立三國無双の靈場なり、とそつ天のないかんを、さもわりくゝと移さるゝ、塔の高さが二十丈、佛の丈は十六丈雲につゞけばおのづから、月をこくわうと三笠山、柱のかすは天台の、一念三千のきをあらはして、三千本と定まれり軒のたるきは、法華經の文字のかす六萬九千三百八十四本なり、山門には獅子のこま、さて正面より四方四面の、とびうゝの彫物には、松にから竹牡丹に獅子、豹と虎とがむせいを争ひ百千萬のけだものをばつたて、くろくろくろりと巖に追上げ追下し風に嘯ぶく波間より、紫雲を巻て登り龍又くだり龍、玉をつかんで虚空にさゝげ、鱗を立たる其いきほひ手をつくさせて彫りつくし、扱ひな瓦のき瓦、こんくゝるり、はり、しやこめなうさんごはくすわしやうを、ふきたてゝ、さごじゆのこまをひつしと打たるうてなには、金剛錦に柱を包んで黄金の銀を輝かせん、むな木をおふのはしらをして、なんほのうふよりもおほく、うつばりにかするのたるきはきしやうのこうちよよりもおほく、ていとうのりんゝたるはゆにあるのあはよりもおほく、たんぼの説法讀誦の聲はしんのげんぎよよりも多からしむ、佛法繁昌四海鎮護の大伽藍如意満足のはしら立めでたし、うゝめでたしと、手斧おつ取りてうゝゝ、槌おつ取てはしつてゝゝ、かなな取のべさらゝゝ、えいさらゝゝてうゝゝと、打始め取始め、三々九度の酒をさゝげ千たび百たび、きねんして重忠にきだいのしとらりやう座をぞ下りける、手斧はじめも事すぐれば、数千番匠下々まで皆々小屋にぞ、三重上りにけりはるかの跡より、四十ばかりの男なるが人足と思しくて、ひるがれの櫃をになひ煩冠りして通りける、秩父の執權本田の二郎きつと見て、ヤア是成下郎めは、かゝるはれの庭なるに煩冠はくわんたいなり、しぎだいでせよと答むればかの男小聲になり作法もしらぬ下々なればは免と云ひてつゝと通るぞこへゝ、扱々ぞんざい千萬なる奴めかな、煩冠を取ずんば誰かあ



る。それ打て擲けと下知すれば。中間共承り一ごにはらりと取まはず。番匠のとうりやう此よしを見るよりもいや是本田殿。きやつは其日雇ひの人足にて差別も知らぬ下郎なれば。さを推参もいへし。去ながらかゝる目出たき折なれば。たゞ何事も穩便にはからひ給へど申けり。本田開も入れずいやさ。彼めはちご人に似たるものゝいといへば。扱めづらしや本田殿。人が人に似たるとは事新しういひかに下郎めおのれ大ぶんの錢を取りながらかたを。て働かず。横着ひるぐゆるにこそ人々にも怪まれ。祝儀に邪魔をなしけるよ。價を損にする迄を罷り歸れと叱りければ。よき幸と景清は荷ひし櫃を下しおき。迷惑さうにもみ手をして表にこそ出らるゝ。重忠幕の内よりひ覽じて。しばらく。ひかにかた。平家の落人こゝかしこに忍びゐて君を狙ふと聞きけるが。只今の入足はまさしく悪七兵衛と見しはひがめか。彼あますないふても是は一大事の柱立の淨めの庭。穢らしてはひかとなり。前なる野邊に追出し打て捨てよと宣へば。もとよりはやる關東武者我も。とかけむかふ。景清是をみて。になひ棒に仕込みたるくだんのあざ丸するりと抜いてさしかさし。大せいをゆん手にうけ頭を叩いてからくと笑ひ。はお侍。某はおはを枯せし鎌倉の浪人者にていが。あさ夕にせましかゝる佗しさいとなみを仕る。さすが人目の耻かしく顔をかくして有ければ。なんぞや某を悪七兵衛とは眼がくらみてありけるか。たゞしは其景清が恐ろしさに面影に立けるか。よし何にもせよ是程まで難言せられ。勘忍罷ならず景清程こそあらす共。そつと手なみをみせんすと例のあざ丸小脇に掻込み。多勢が中に割て入り火水になれど。三馬切合ける時刻もうつらぬ。其内に十四五人切ふせ重忠に見参せんと。此處のつまり彼處のくまに駆入りくさわけごも。大勢にへだてられ今ははや是迄なり深。入して雑兵共に手をふせられては景清が。末代の名折なりまたこそ時節あるべけれ。いでおつ拂ふて落ゆかんと番匠箱をおしひらき。大のみ小のみ

手斧のこざりがんな。くつさやう一の手裏剣とおつ取りく打立れば。さしもに勇む軍兵共つといふてはさつと引。なほも寄來るもの共を小屋の小柱ひんぬいて。八方むぐらに。三馬ふりまはれば秋の嵐に。ちる紅葉ひらくばつと逃げにける。ヲさもさぶつさもあらん此たびは仕損ず共。此景清が一念の劍は岩を徹さんものをと。跳りあがり飛あがり齒がみをなして行く雲の。月の都に上りける。悪七兵衛が力業。早業輕業神通業只飛ぶ鳥のごとくなりとて恐れぬ。ものこそなかりけれ

第二

さるほ。どに。誠やたけさものゝふも戀に發るゝならひあり。たきとを負へる山人もたちよる花の景清も。つねに清水寺の觀世音を信じ奉り。參詣の道すがら清水坂のかたはとりに。阿古屋といへる遊君に初假伏のかり枕。いつしかなれて今ははや二人の若をぞまうける。兄のいやいし六才弟のいや若四才にて。世におとなしく見えにける阿古屋はもとより遊女なれ共。妹脊のなさけ細やかに世になき景清をいとほしみ。二人の子供を養育し兄には小弓小太刀を持たせ。父が家業をつがせんと。ならばぬ女の身ながらも兵法の打だちし。武道を教ゆる心ざしたぐひ稀にぞ。三重聞えけるかゝる所へ。悪七兵衛景清は重忠を打そんじ。やうくとして清水やあこやが庵に着給ふ。女房子供を引連れは珍らしや何として。は上りいぞ元こなたへと請じける。景清やけるはなひく。は身も知ることく。我平家の恩を報せんため鎌倉殿を狙へ共。其かひなくて一兩年は。尾張の國熱田の大宮司にかくまはれ空しく月日を送りし所に此度島山の重忠東大寺再興の奉行に登るをよきしほど。先重忠をねらはんため我身を卑しき下郎にしなし。すでに間近く付よせしが運強き重忠にて。我らが智畧現はれ本意なくも打そんじ。一かう



に重忠と差違へ死なんと思ひしが、思へば身がなつかしく子供が顔をも見まほしく無念ながらも  
 からへて扱只今の仕合せなり。誠に久しく逢ぬ間に子供もいたふ成人し身もすんど女房をじしたり。  
 なんでもこよひはしつぱりと積るつらさを語らんと。しどよればるゝ。榮耀らしいかく浪人の憂身と  
 いひ殊更敵を持つたる身が、せめて一年に一度の便も仕給はず。ヲ、それも道理よ。此ころ聞けば大宮  
 司の娘をのゝ姫とやらんに深い事と承る。尤かなみづからは子持むしろのうらふれて、見るめにいやと  
 おぼすれども子にほだされてのほ出か。倍氣するではなければも浮世狂ひも年による。しやほんにをか  
 しい迄よい機嫌じやのと有りければ。景清打わらひ是はめいわく。其大宮司の娘をのゝ姫にはしかく  
 物をもいはいこそ。八まんぐさふした事で更になし。そちらならで世の中にいとし者が有べきかと。  
 なほももたるゝ袖枕阿古屋も心打解て思ふあまりの戀いさかひ犬が食ふとや是ならん。銚子盃たづさへ  
 ていや石に酌どらせ。三とせ積りし物語。かたらひあかし給ひける契の程こそゆかしけれ。景清のたま  
 ふやう我久しく尾州に盤居して觀音參詣怠れり。在京の間は一先日參の心ざしあり。さりながら是より  
 毎日往來せば人の咎めも如何なり。とゞろきの坊にて一七夜は通夜中。やがて歸り對面せんと編笠取  
 て打かづきおもてを差して出給へばいや石門迄送り出で。さらばくの小手招きしほらし「かりし生先  
 なりこゝに阿古屋が一腹の兄伊庭の十藏廣近は。北野詣をしたりしが。大息ついでわが家にかへり。妹  
 の阿古屋をかたはらに招き。是を見よ誠に果報は寝てまてとや。悪七兵衛景清を打てなりとも搦めてな  
 りとも參らせたる物ならば。勳功は望したいこのは制札を立られたり。我らが榮華の瑞相此時と覺えたり。  
 兵衛はいづくに有けるぞはや六波羅へ訴へて。一かご恩にあづからんのかにくと仰せける。阿  
 古屋はしばし返事もせず。涙にくれてゐたりしが。なふ兄上そもや身は本氣にて宜ふか。たいしは狂

氣し給ふかや。わらはが夫にてひへば。は身のためには妹婿此子は甥にてひはずや。平家の代にてひ  
 は誰かあらふ景清と。飛ぶ鳥迄もおちし身が今この代にてひへばこそ。數ならぬ我々を頼みては入  
 りものを。たとへば日本に唐土をそへて給はるとそもや訴人が成るべきか。飛ぶ鳥懐に入る時は狩人  
 も助くるとよ。きのふ迄もけさ迄も隔てぬ中をそもやそもの。がれふ物かさりとては。人は一代名は未  
 代。思ひわけてもは覽せよと泣いつ。くゞいつとめける。十藏からくと打笑ひ。やれ名ををしみて  
 徳をとらぬは昔風の侍とて當世は流行らぬふる事。其上御へんが夫よ妻よなんぞとて心中だてはしけ  
 れ共。あの景清はな。大宮司が娘をのゝ姫にさいあいし。は身が事は當座の花後傳する共叶ふまじ。女  
 さかしくて牛賣れぬとははぶんが事ぞ諸事は兄に任せよととんで出れば又引こめいや大宮司のむすめ  
 は人のいひなし悪口ぞや。景清殿にかぎりさやうのことはひまじ。よし人はともかくもわらはが二世の  
 つまぞかし。さ程に思ひます給はば子供もわらはも害して後心のまゝになし給へ。やあいけらん内はか  
 なはじと縫りついてぞ泣き給ふ。しかる所へ熱田の大宮司よりの飛脚なり。景清様のは旅宿所はこれに  
 てやひやらんぞやがて文箱を出しける。十藏出であひいかにも。是は景清殿の旅宿にてひが。宿願あ  
 つて兵衛殿は清水參詣いたされひ。はふみを預り置き歸られ次第見せやさん。明日は出ひへと飛脚を返  
 し。兄弟ふみをひらいて見ればをのゝ姫のふみにてあり。かりそめにはのぼりまし。ていなせの便も  
 し給はぬは。かねくゞし阿古屋といへる遊女にほしたしみひか。未來をかけし我契いかと忘れ給ふ  
 かど。こまぐとぞかゝれける。阿古屋は讀みも果て給はずはつとせきたる氣色にて。うらめしや腹立  
 や口惜や妬ましや。戀にへだてはなき物を遊女とは何事ぞ。子のある中こそ誠のつまよかくとは知らで  
 はかなくも。大切がりのとしがり心を盡せし口惜さは人に恨はなきものを。男畜生いたづらものア、ラ



らめしや無念やと。文すんく〜にひきさきてかこち恨みて泣き給ふ。ことわり。とこそ。きこえけれ。十藏悦びそれ見たか。此上は片時も早く訴人せん最思ひ切れたかといへば。ヲ、何しに心の残るべき。せめて訴人してなりとも此恨を晴してたべ。げによき合點と立出れば又暫くと引とごめ。とはいひながら如何にうらみがあればとて。夫の訴人はなるまいか。いや又思へば腹も立つにくい女めニ、是非もなやと。あるひは止めあるひはすゝめ身をもだへてぞなげかる。十藏袂をふり切てニ、輪回したる女かな。そこ退けと突のけて。六波羅指して急ぎしは了簡もなき。三重しだいなり斯くとは知らず。景清は清水寺に参籠し。とどろきの坊に通夜中。同宿達に双六打たせ助言してこそゐられけれ。頃は卯月十四日夜半ばかりの照月に。ひた宛五百餘騎江間の小四郎大將にて。訴人の十藏まつ先かけ。とどろきの坊二重三重に取まはし関の聲をぞつくりける。元來こらへぬ荒法師門外につゝ立て。そも此寺は田村將軍此方しゆでふにうの靈地なるに。狼藉は何者ぞよ盗人なんど、覺えたり。あれ打とれ小僧共と聲々にばはれば。江間の小四郎駒かけよせ。さないはれを法師たち坊に答はなけれ共。平家の落人悪七兵衛景清今宵こゝに籠りしよし。伊庭の十藏訴人によつて義時討手に向ふたり。異儀におよば、寺ともいはせし沙門ともいはすまじ。かたはし切て切ちらせといひもあへぬに悪七兵衛。是に有りて切て出る常陸の律師ゑいはん此よしを見るよりも。慈悲第一の此寺にて信心の行者を空しく討たせて。觀世音の誓願はいかならん。防げや〜法師ばらさ〜へよや下僧共。承りひと衣の袖を絞り上げ。獲物く〜を提げて三十餘人の荒法師五百餘騎につゝさ〜へて命を惜まず。三重、戦ひける五百餘騎が四方に分つて隙をあらせず防げども。景清飛鳥の術をえたればさうなく討れんやうもなく双方しるみて扣へたり。景清襟端につゝ立て今宵の訴人は妻の阿古屋おなじく兄の十藏と覺えたり。おのれ數年の恩愛を振捨て大慈

にふける愚人共。勿體なくも此は寺に血をあやす奇怪さよ。とても世になき某がおのれらが身のためならば何條命をしからん。人おほく打たせんより女房兄弟をりあひて搦めとれとぞわめさける。十藏が下人二三太といふくせもの分別もなく飛んでかゝる。景清につこと打笑ひ側にありける双六盤。片手に取て投げつければ二三太が眞甲に。響き渡つてはつしとあれば首は胴にぞにへこみける。ヲ、でつく共せぬ丁稚めが手柄しさふに見えたれども。ぐし〜となりけるは誠に愚人夏の虫とたはふれて立所を。十藏つゝいて切てかゝる景清長刀押取のべ。虫同然のこつば武者婆の訴人は是までぞ。閻魔の廳にて訴人せよと受つ流しつ切むすぶ。江間の軍兵是を見て。訴人討すな加はれとごつと連ておし隔つる。心得たりと景清はさいもんを小楯に取り。入か〜大勢を左右にうけ。眉間まつかう鎧のはづれ嫌はずあまさず。三重打たつるこは叶はじと。軍兵共十藏を引つゝみ六波羅さしてぞ引にける。景清今は是迄と音羽の山の峰を越え。梢をふみわけ巖をおこし飛びこえ。はね越え飛越え刹那が間に飛ぶが如くにあづま路さして落行きしは。誠にきたいのものゝふやと扱感せぬ。ものこそなかりけれ

第三

かくて。そのうち。悪七兵衛景清行方しれすなりたれば。もつとも天下の大事と諸國の所縁を詮議ある。中にも熱田の大宮司は現在の舅として。千葉の小太郎搦め取て警護厳しく打つれさせ六波羅に引据ゆる。梶原源太大宮司に對面し。汝は當家の大敵平氏の落人景清を。婿にさるのみならず刺さへ行方もなく落しける。罪科甚だ輕からず。いづかたへ落しけるぞまつすぐにゆせ。すこしも陳せは拷問せんとはつれと怒つてゆける大宮司聞給ひ。仰の如く景清とは縁を結びひへ共。去年の春國もを立出で今に



便もみはず。土も木も源氏一統の位代なるに。一旦陳じやとて隠しとげられずべきか。婿に取りしを解  
 事とて誅せられんは方なくい。行方に於ては存せぬと詞すししくやさる。重忠仰せけるは尤も。た  
 たごへ行方を知つたればとて婿の訴人はいたされまじ。たつては此方の不調法いかに梶原殿。かの景清  
 は仁義第一の勇士なれば。所詮大宮司を牢舎させしと傳へ聞ば。眞の難を救はん爲。己れど名乗り出ん  
 事は目前に見えぬ。此儀はいかにと有りければおのく評定尤も。六波羅の北のてんに新造に牢を建  
 て。大宮司を押込めさせ厳しく番をぞ。三重させさらる人につらくば。あたられぬ。何の報や袖の露。  
 かれもはてなでをのゝ姫いたはしやこそぞの春。つまは都へ去しより。あこやの松の夕しぐれ。そめつけ  
 られてわがもみぢ。こひやちらんさあけくれに。人め。つゝみの。くひく。と案じ煩らふ。身の上に。  
 父は都の六波羅へ。とりことなりてあさましや。うさめにあはせ給ふその。そのおとづれをさしより  
 思に思ひつゝかさね。せめてはうきに。かはらんと。めのとばかりをちからにてたびの。衣手なみだ  
 つめたきくれなるに。もみうら濡れてゆふされし。空飛ぶ鳥の。かへるさに。物忘れせぬ故郷の。風も  
 わが身にふきかへて今の門出を。をばりぞと國の。なごりも。つゝましく。身のたねまきしうぶの神  
 熱田の宮居伏拜み。父と夫とをあんおんに悪魔はらへと取る弓の。桑名のふねに梶枕。しきねのたまの  
 あらむしろ。はだへにあればつられければ。戀するあまが怨怒のよるのふすまを見る。めかる。かづく  
 荊蕀はなにぞ歌に。よまれしひじきもや。かだめあまのり春もまた。わかめまじりのめさしほす。  
 しはやが軒に竹見えて。おさな鶯。音をぞなく。花にまがひのさくら海苔天をひたせば雲のりに月を。包  
 みてかるとはすれぬ。手にはとられぬ。かつら男の。いぶりさは。いつ青海苔もかだのりと。身のさ  
 がらめをなのりぞや。あらめづ。らしとあらめかる。二見の浦ははるく。松のむら立るのはま

近松全集

近松全集

繪にかくも。にたるよな。あまは白雲とばかりを。故郷のゆめとそらとめて。しやうのにつぐかめ山  
 は。誰がためながきようつよと嘆つ涙はせきもせで何をか。せきのぢさうだう。せめて未來をたのまは  
 や。のぼり。くだりてさかの下たにの川せにかゝり。ころり。ころく。なるはかじかのなく聲か。  
 小石流れて行くおとか。いや水のあはちる。玉でないよの駒のひさふしんがらが。ちんからからりの。  
 すゝかやま。しづがわらぢのいごなみに。ふけてわら打つ槌山や。だてのたひぢにゆくならば。かふて  
 もたもれ水口のつ。いらにかさに露もりて。おのがまゝなるびんみづは桶にたまたぬ髪とくくゆけ  
 ばらくやうや六波羅にこそつかれけれ。扱父上のおはします牢舎はいつこなるらんと。こゝかしこにた  
 づみ給へばおりのころあれ梶原源太。町まはりしてかへるさに此ていをきつと見て。きやつが有様た  
 いものならず何ものさふとがめける。姫君聞召しさんみづからは。尾張の大宮司が娘なるが。ゆゑ  
 もなきに父をとられひゆゑ。我命にかはらんため。是迄参りひといはせもはてず景季ヲ、皆迄もいふな  
 。おのれが親の大宮司に。景清が行方を云へといへ共知らぬといふ。おのれは夫婦の事なればよも知ら  
 ぬ事は有まじき。すでに清水坂の阿古屋は子のある中さへふりすて。一度ちうしんせしぞや。ありの  
 まゝに白状せよと小腕取つていかりける。なふ恨めしや命をすて。是迄出る程の心にてたとへ行方を  
 しつたればとてやさふか。此上は水せめ火せめにあふとて夫の行方も存せぬなり。只父上を助けてた  
 へと聲もせしませなき給ふ。ヲ、いふ迄もない事さ。おのれおちすばた置くべきか。高小手に精  
 りつけ。六條河原に引出し。しゆく。に拷問したりしはなふななきなふこそ。三重見えにけれ。梶原親  
 子が奉行にて。方一町に垣をゆひつく棒さすまた鐵の棒。ひやう具ひつしと並べしはさながら修羅の獄  
 卒が。八逆五逆の罪人を責責にかくるごとくなり。いたはしやをのゝ姫あらし風にもめてぬ身を。はだ



かになして繩をかけ。十二子の梯子に。さうなかを縛つけ哀れもしらぬ難人ども。ゆさうに水をつぎかけ。おちよとせめけるはた。瀧津瀬の如くにて目もめてられぬ景色なり。むさしやなをの、姫息もはやたへづくに。心も亂れめくるめき既に最期と見なければ。いやく武士のつまとなり心よはくてかなはじと。さあらぬ體にもてなしいかにかた。つまの景清つねに清水寺の觀世音を信仰し我にも信じ奉れと深く教え給ふゆゑ。今とても尊號をたえず唱へ奉れば。此の水は觀音の甘露法雨と覺えたり。今この水にて死する命は惜からじ。夫の行方は知らぬぞや千日夜も責め給へ。南無や大悲くわんせおんと苦しき體をおしくし。いさぎよくは宣へども。さすが強き拷問に聲も濁りて身もふるひ。よはくとなり給ふは扱も悲しきしいなり。此分にてはおつまじきぞやれこぼく責にせよとて。細首になはを付松の枝に打かけて。あいやく引あぐる下せば少し息をつぎ。引あぐれば息たゆるあはれといふも餘りあり。たとへいかなる鬼神も是にてはおつべしと。二三度四五度責めければ今はかうよと見えけるが。又目をひらきなふ梶原殿。此木の上に吊上られ世界を一目に見おるせ共。夫の行方は見えやさすかた。もなぐさみに。ちつとあがつて見給はぬか是へくと有ければ。景時腹にすゑかね。扱々しぶとき女かな。此上は引おろし火責にせよと。炭焚木をつみかさね團扇をもつてあふぎ立てく。天をかすめし黒烟焦焼地獄といつべし。すでに責めんとせし所に。悪七兵衛景清いづくにてか開たりけん。諸見物の其中を飛び越え跳ね越え垣の中に躍り入り。こりや景清ぞげんさんとはつたとねめまはし。二王立にぞ立たりける姫君はつと肝潰れ。立寄らんとし給へば人々取て引する。すは景清をのがすなと一度にはらりと取まはす。景清けらくと笑ひエ、さやうくし此景清がかくれんどおもは。天にもものぼり地をもくぐらんすれども。妻や舅が愛目をみるかなしさに。身をすて、出でたればもはや氣

遣ふ事はなし。さあよつて繩をかけ六波羅へ連れて行け。妻や舅を助けよと手向ひしてんす氣色なし。姫君涙をながし口惜しの有様や。みづからや父上は生きてかひなきうき身なるに。御身は存らへ本望遂げんとは思さず何とて是へは出で給ふ。あさましの御所存やと又さめくと泣き給ふ。景清も涙をおさへ頼もしの心底や人はすじやうがはづかし。子中をなせし阿古屋めは夫の訴人をしたりしに。己身は命にかはらんとは頼もしや嬉しやな。去ながら父大宮司の心事もさなふ覺ゆれば。己身は是よりとうくかへり菩提をとふてたび給へと。鬼をあさむく景清もふかくの涙をながしける理り。せめて哀れなり。この事六波羅に聞へしかば。重忠大宮司を同道にて六條河原に馳せ來り。さても景清人の難儀を救ひ。我身を名乗りて出らる。だん近頃心妙尤もかうこそあるべけれ。此上はをの、姫大宮司共に赦免なさる。條。景清に繩をかけ急ぎ引立申べし。畏て人々繩よ綱よとひしめければ景清よるこび。それこそ望む所よとおのれと千筋の繩をかへり。先にすゝめばをの、姫なふみづからも諸共と。駈出で取付き泣き給ふを大勢中を押隔て。あたりを拂つて引立て行く。景清の心底勇あり義あり誠あり。前代未聞の男子なりとて皆武士の。手本とあほぎける

第四

かくてその、の、ち。げにや猛將勇士も運つきぬれば力なし。ふびんやな景清鎌倉よりの評定にて。六波羅の南おもてに始めて牢を立させらる。いぢらしらがしくすの木とがの木。長さ一丈にとらせ地へは七尺掘入れ上三尺のつめ牢にし。この木を以て脚手格子に切組んで。一尺二寸の大釘のうらをかへさす打たれば劔をうゑたる如くなり。七尺ゆたかの景清を二重に取ておし入れ髪を七把にたばねて七方にこそ



つたりけれ。足を牢より引き出し左手右手へ取ちがへ。山だし七十五人してひいたる桶にてあげほだしをうたせ。しつちやうつめがね。たうくくる、千引の石さいもくを積み重ね。首にはねぼりの大づゝを三本迄かづかせたり。諸人に見せて耻かゝせよと。番も警護も付けざれ共なかゝ五體働かず。されば文王はゆうりに捕はれ。公治長はけいりくにかゝれり。君がため名のため何ぞかつて愛へんご。観音經の讀誦のほか。世間口を閉ぢたればしやうもん耳にとさせり。はたらくものは兩眼のみ見るめもかなしくあはれなり。いたはしやをのゝ姫不思議のいのち助かり。牢屋ちかきに宿を取り。酒菓物をとくのへて。牢屋の格子に立寄りいたはり給ふぞ哀れなり。やうくとして景清心地よげに酒をのみ。今日はしは骨髄にとほつてひ。まことに己身の心ざしいつの世にかはわするべき。扱かりそめながら某は天下の朝敵さだめて最期も違からし。今景清が生きたる顔をかたみにて。とうく己身は尾張へ下り後世吊ふてたび給へ。これに付けても阿古屋めが心底のうらめしさよ。二人の子供も今は早や殺してや捨てつらん。思へばく景清が運のつきこそ口惜しけれと。恨みかちて泣き給ふ。姫も涙をながしは仰せはさる事なれども。とてもみづからは最期の先途を見とけ。兎にも角にもなり参らせん。一日も一時も己命のあらん内は。往生のほいとなみを心にかけて何事も。定まる事と思召し人をな恨み給ひそよ。いつ迄も是にありたくひへども。人目しげうひへば明日又参り申さんと。泣くく。歸り 三重給ひける是は扱き置。阿古屋の前いや石いや若もる共に。山ざき山の谷陰に深くかくれておはせしが。景清牢舎と聞くよりも我身もあるにあらればこそ。六波羅に走り付き此體を一目見て。なふあさましのは風情や。やれあれこそ父よわが夫と。牢の格子にすがりつき泣くより。外の事ぞなき。景清大の眼にかごを立てやれ物知らずめ。人間らしく言葉をかくるもむやくながら。かはどの恩愛をふりすて夫の訴人

近松全集

遊藝全集

をしながら。何の生面下げて今此所へ來りしぞ。おのれ指一つかないなば。掴みひしいで捨ん物をどどがみを。してぞゐられける。實にほうらみは理りなれ共。わらはが事をも聞給へ。兄にては十藏訴人せんと申せしを。再三留めてひ所に。大宮司の娘をのゝ姫とやらんより。親しきほふみ参りしゆゑ女心のあさましさ嫉妬の恨みに取みだれあどさきのふまへもなく。當座の腹立やるかたなく。ごもかくも申つる後悔さきに立たばこそ。さは去ながらしつとは殿御のいとしさゆゑ。女のならひ誰が身の上にもいぞや。申諍いたすは皆いひおちにてひへ共。今迄のよしみにはだうり一つを聞分けて。只何事もほめんあり今生にて今一度。詞をかけてたび給はしそれを力に自害して。わが身の言わけ立申さんと地にひれ伏してぞ泣き居たり。むざんやないや石父が姿をつくく見て。なふ父上程のがうのものがなせやみくとは捕はれ給ふぞ。いで押しやぶつて助け奉らんと。柱に手をかけえいや。くとおせ共。ゆるがばこそふびんなりける所存なり。弟のいや若はほだしの足にいだき付。いたいかや父上様。なふいたむかと撫上げ。撫さげさすり上げ。兄弟わつと叫びければ。思ひ切たる景清も不覺の涙せきあへず。やあつて涙をおさへやれ子供よ。父がかやうに成たるはな。皆あの母めが悪心にて繩をも母か掛させ。牢にも母が入れけるぞ。邪慳の女が胎内より出たる者と思へば汝ら迄が憎いぞ。父とも思ふな子とも思はじ。はやく歸へれと叱るにぞ。子供は母に縋り付なふ父をかへしや父上かへせと。ねだれ嘆きし有様は目もあて。られぬ次第なり。あこやほ餘りたえかねて。よし此上はみづからはごもかくも。可愛やな兄弟に優しき詞を只一こと。さりとてはかけてたべなふ。子は可愛いうは思さぬかと又せき上げてぞなげかゝる。景清重ねて。おことがやうなる悪人に返答もせじとは思へごもな。今のくやみをなご最前には思はざりしぞ。されば天竺に獅子といふ獸あり。身は畜生にてありながら智慧人間に超えられたば。



狩人にもとられず却つて人を取食ふ。され共腹中にとくといへる虫あつて。此虫毒を吐くゆゑに體を破つて自滅すなり。されば女の嫉妬の仇。人を恨むと思へ共夫婦はおなじ體なれば。皆是わが身をせむることわり。和御前がやうなる我慢口痴の猿智恵を獅子身中のむしに譬へて佛も戒しめ給ふぞや。汝が心一つにて本望とげすあまつさへ。耻辱の上の耻じよくを取り。今いひわけて妻子がなげくを不感よとて。日本一の景清が再び心をかへすべきか。何程いふても汝が腹より出でたる子なれば景清が敵なり。妻とも子とも思はぬとおもひ切てぞゐたりける。扱は何程に申ても承引あるまじきか。ヲ、くごい見苦しきに早やかへれ思ひ切たぞ。なふもはやながらへて何方へかへらふぞ。やれ子共よ母があやまりたればこそかく詮言いたせごもつれなき父の詞をきいたか。親や夫に敵と思はれおぬしらとても生きがひなし。此上はて、親もつたと思ふな母ばかりが子なるぞや。みづからもながらへて非道の浮名ながさん事未來をかけてなさけなや。いさもる共に死出の山にていひわけせよ。いかに景清殿。わらはが心底是迄なりと。いや石を引寄せ守刀をすはと抜き。南無阿彌陀佛とさしとほせばいや若おどろき聲を立て。いや、我は母様の子ではなし。父上たすけ給へやと。牢の格子へ顔を差入れにげあるく。エ、卑怯なりと引よすればわつといふて手を合せ。ゆるしてたべこらへてたべ。あすからはおどなしう月代も刺りやさん灸をもすゑませふ。扱も邪見の母上様や。助けてたべ父上様といきをはかりに泣きわめく。ヲ、理りよ去ながら。殺す母は殺さぬで助くる父御の殺さるゝぞ。あれ見よ兄もおどなしう死したれば。おことや母も死なでは父への言譯なし。いとしいものよよう聞けど。すゝめ給へば聞入つてあゝそれならば死にませふ。父上さらばといひ捨て。兄が死骸によりかゝり打あをのきし顔を見ていづくに刀を立つべきぞと。阿古屋は目もくれ手もなへてまるび。伏してぞ歎きしが。エ、今はかなふま

し必らず前世の約束と思ひ母はし怨むるな。追付行くぞ南無阿彌陀と心元をさしとほし。さあ今はうらみを晴し給へむかへ給へ佛と。刀を咽に押あて兄弟が死骸の上にかつばと伏し。共に空しく成り給ふ扱も是非なき風情なり。景清は身をもたへ泣けとさけべとひぞなき。神や佛はなき世かの去りてはゆるしてくれよ。やれ兄弟よ我が妻よと鬼をあざむく景清も。聲を上げてぞ泣きわたり。物の。哀れの限りなり。かくとはしらすでいばの十藏。梶原がとりなしにて。せう、動功に預かり若徒小ものあまた連れ。遊山より歸りしが此體を見て肝をつぶし。是は扱しなしたり。不感の事を見る物かなこれ侍共。我此如くは恩賞を受け。榮耀榮華に榮ゆるもきやつ等を世にあらせんため。この頃方々尋ねしかども行方のなかりしが。扱は何者ぞへんしうをおこし害せしか。たいしは大宮司がはからひと覺えたり。よし何にもせよなほ景清にいひぶんあり。先々死骸を取おけと傍らに葬ふらせ。牢屋にむかつて立はばかり是ぞ妹むて殿。いつかに怨あればとて。げんさいの妻子を目前に殺させ。腕かなはずばなきいさばねでも立さるぞ。ない、は某邊が命を申うけ。出家させんと思ひしが最早はつてもならぬ。侍畜生大だはけといかつはいてやける。景清くつくとふき出しこりやうるたへもの。あのもの共はおのれが貪慾心をかなしみ。自害したるが知らざるか。それさへあるにうぬ奴が口から侍畜生とは誰が事ぞ。命ををしむ程ならばかゝる大事をたくむべきか。まつた生様と思ふ程ならばべろくばしらの五十や百。此景清が物のかすと思はふか。心中に觀音經をくじゆる嬉しさに。なぐさみ半分は牢舎して有るものをくわんたい過ぎたる摩言つき。二言と吐かば掴みひしいで捨てんとはつたと睨んでやさるれば。十藏かんらくと笑ひ。其縛にあひながら某をつかまんとは。腕なしのふりすんばい片腹いたし事をかし。幸此頃けんびきいたきにちつとつかんで貰ひたしと空うそいひてぞゐたりける。景清はらにする



近松全集

かねいでものみせんといひもあへず。南無せんじゆせんげん生々世々。一もんめうがうめつちうざい大  
 慈大悲觀音力と金剛力を出しえいやつと身慥すれば。大釘大繩はらゝすんど切れてのいた。くわんぬ  
 き取て押ゆがめ扉をかつはと踏倒し大手をひろげて跳り出で。八方に追廻すは荒れたる夜叉の。三尊ご  
 とくなりむらがりかゝる。若徒中間はらりゝと蹴倒し。十藏を掻摺み取て追伏せ。背骨も折れよご  
 うごふまへ。何と景清を訴人しては褒美にあづかり榮花といふは此事かど。二つ三つふみ付れば。なふ  
 かなしや。骨も碎げて息も絶え入りひ。は慈悲に命をたすけ下されど聲を上げなげきける。景清手を叩  
 き打笑ひ。フ、某が褒美には廣い國をとらせんと。兩足取て逆さまに引上げ。肩をふまへてえいやつと  
 裂きければ。胴中より眞二つにさつと裂けてぞのきにける。エ、心地よし氣味よしとゆん手め手へから  
 りと捨て。さあしすましたり此上は關東へや落行かん。いや西國へや立退んと。行きつ。戻りつ。戻り  
 つ行きつ。一町ばかり走りしが。いやゝ此度落失せなば。又大宮司やをのゝ姫愛目を見んは必定と。  
 思ひ定めて立歸りもとの牢屋に走り入り。内よりくわんぬきしと、締め。千筋の繩を身に纏ひさあらぬ  
 體にて普門品。讀誦の聲はおのづから。即心菩薩の變化ならんと。皆奇異の思をなしにける。

茅

かくてそのうち。右大將頼朝公南都の大佛は再興まし。既に成就どうつたゆれば。供養の放赦に  
 急ぎ大赦を行ふべしと。天が下の科人京鎌倉の牢を開き残らず免なされける。中にも悪七兵衛景清は  
 大事の朝敵重罪なれば。助くるに所なく佐々木の四郎に仰せられ。終に首を刎ねられ今は四海太平なり  
 。大佛供養は聽聞有るべしと諸國の大名は供にて。南都に下向なされける。路次の行列。三尊、花やか

近松全集

なりすでに我君。小倉堤にさしかゝり給ふ時。島山の重忠息をはかりに駆せ來り。は馬の前に蹲づき。  
 扱も悪七兵衛景清は成敗のよし承りひへ共。未だ恙く牢の内に罷有りひ。一大事の囚人なれば早速首  
 を刎られ。然るべくひはんご謹んで申上る。頼朝聞召し不思議の事をや物かな。景清は佐々木の四郎に  
 申付け。一昨日の暮程に首を打せ。則ち其首頼朝が見参して獄問にかけさせしが。ひがごと成るかど仰  
 せける重忠重ねて其段は存せずひへども。重忠は今朝景清が生顔をたしかに見て参りひと。いひもはて  
 めに佐々木の四郎つゝと出で。いやは島山殿。筋なき事なすされそ。其景清は某仰を承り。高綱が手に  
 かけ首を刎ね我君の實験にそなへ。三條畷に獄問にかけてひ物を。景清がふたりあるべきか。近頃粗忽  
 千萬と嘲笑てやさるゝ。重忠聞給ひ尤々御分が手にもかけつらめ。又重忠もたしかに見てひはいかに。  
 高綱色を遣へはてらちもない事。一度切たる景清が蘇生るべきやうもなし。それは定めて血迷ふて何を  
 がな見られつらん。但しは寝はれて夢をばし見たまふか。いやさ御分がうるたへて。よしなき者を景清  
 と思ひ切たるか。夢を見たるか慌てたるか。是目を醒して思案せよと氣色かはつて争ひける。頼朝だん  
 々聞召し。いか様佐々木島山そこつある人にてなし。不思議千萬晴れやらすいで是より取て返し。頼  
 朝直に見分くべしおのゝ鎖れ。御馬のはなを立なほし都にかへらせ。三尊給ひける去程に三條  
 の畷に景清の首を切かけ。平家の一族謀反の頭領。悪七兵衛景清と高札を添へられたり。頼朝立よりほ  
 覽あり。高綱重忠を招き是見られよと仰せける。重忠なほ不審晴れず諸大名立かゝり。よく見れば  
 今迄景清の首と見えけるが。忽ち光明かくやくとして千手觀音の。ほぐしと變じ給ひけるりやつかうふ  
 しぎぞ有難き。しかつし所へ清水寺の大衆達。我もゝと馳せ参じ。扱も一昨日の夜中より佛前の上と  
 みおのゝあきてひゆるる。もし盗人のわざにやと戸をひらきてひへば。觀音のほぐしきれて失せさせ



給ひ、切口より血流れてらばん長床あけにそみ。勿體なきは風情に拜まれさせ給ひ故。驚き入ては注進申上ひと事の次第を申上れば、君を始め奉り畠山も高綱も、供奉の上下おしなべてあつと。感ずるばかりなり。君信心の感涙をながさせ給ひ。誠や景清年来清水寺の觀世音を信に奉り。十七の春より卅七の今日迄。毎日卅三卷の普門品誦誦懈怠なく修行せしと聞けるが、疑ひもなく觀世音。兵衛が命にかはらせ給ふ有難さよと。は手を合させ給ひければ、僧俗男女下々迄皆々禮拜くぎやうして涙を流さぬ者もなし。重ねての証にはかくては如何勿體なし。急ぎ千人の僧を供養し一萬座の護摩をたかせ。ほぐしをつぎ奉れ。ほうじの上にて景清にも對面致すべし。いざ頼朝も參詣せんとは身を淨め。佛のほぐしを直垂の袖にうけ入れて。清水寺へのは參詣例まれにぞ。三尊聞はけれ枯れたる木にも。咲く花の。千手の誓ぞ有難き。かくて頼朝は法事も事ははり。佛のほぐしをつぎ參らせしゆくばうに入らせ給ひける。時に佐々木畠山景清夫婦を伴ひは前に出らる。頼朝は覽じ珍らしや景清よ。我を平家の敵とて狙ひ討べき心ざし。神妙く尤も武士の勢げにさふも有るべけれ。然れば頼朝がためにはは邊又敵なれば。うつつ捨つべきものなれども。汝が身には觀世音入替りましますゆゑ。二たび誅せば觀世音のは頭を二たび打つ道理もつたいなし。もし又頼朝運盡きては邊に討たる。物ならば觀世音のは手にかゝると思ふべし。此上は助け置き。日向の國宮崎の庄をあておこなふと。は戀情の証詞には判をうへて給はりける。景清涙をどめかね。誠に身に餘りたるは証の段。生々世々に有難くたましひにとほつて覺えひ。かくなさけある我君と知らで狙ひ申せし景清が。所存の程こそくやしけれと。は前をも打忘れ聲を上げてぞ泣きたり。さては土器給はり。諸國の大名残りなく皆々。さかづきさし給ふ。重忠仰せけるは斯るめでたき折といひ。かつうは我君御なくさめのため和殿八島にて功名のやうすかたりてきかせ給へ。

内々君もは所望なりしぞひらに。とありければ。頼朝公をはじめ參らせ。満座の人々一ごうにはやくくくとのぞまる。景清辭するにおよばねば袴の裾をたかく取り。は前にしきだいしすきし。昔を語りける。いで其頃は壽永三年。三月下じゆんの事なりしに。平家は船源氏は陸。兩陣をかいがんに分つて。互に勝負を決せんとはつす。能登守教經宣ふやう。去年播磨のひろ山備中の水じま。鶴越にいたるまで。一度も味方の利なかりし事偏に義經が謀いみじきによつてなり。いかにもして九郎を討んところあらまほしけれと宣へば。景清心に思ふやう。判官なればとて鬼神にてもあらばころ。命をすてばやすかりなんと義經に最期のいとまごひ。陸にあがれば源氏のつはもの餘すまじごぞかけむかふ。景清是を見て。物やしやと夕日影に打物ひらめかいて切てかゝればこらへずして。又向たるつはものは四方へばつごぞ逃げにける。さもしやかた。よ。源平たがひに見る目ははづかし。一人をどめん事はあんのうち物こわきにかいこんで。なにがしは平家の侍。悪七兵衛景清よと名乗かけ。手取にせんとて追ふて行く。三保の谷が着たりける兜の鍔を取はづし。二三度逃延びたれ共。思ふ敵なればのがさじと。飛びかゝり兜を押し取り。えいやとひく程に。鍔は切れてこなたにとまればぬしはさきへ逃げのびぬはるかにへだて。立かへり。さるにても汝おそろしや。腕のつよきといひければ。景清は三保の谷が首の骨こそ強けれと笑つて左右へのきにける。昔をわすれぬ物語お耻かしうひと。語り給へば人々は一どにぞつとぞ感じける。かくて我君は座を立たせ給ひければ。大名小名ついでて座をぞ立ち給ふ。景清君のほうしる姿をつく。と見て。腰の刀をすりと抜き一文字に飛びかゝる。おの。是はと氣色をかへ太刀の柄に手をかくれば。景清しやつて刀を捨て。五體をなげ打ち涙を流し。ハッア南無三寶あさましや。何れも聞て給はれ。かく有がたき恩賞を受けながら。凡夫心の悲しさは昔に返へる恨の一



念。は姿を見申せば主君のかたきなる物をぞ。當座のは恩は早や忘れ尾籠の振舞めんぼくなや。眞平は免をかうふらん。まことに人のならひにて心にまかせぬ人心。今より後も我とわが身をいさむる共。君を拜むたびごとによも此所存は止み申さず。かへつて仇とやなり申さん。とかく此兩眼のあるゆるなれば今より君を見ぬやうにと。いひもあへず差添ぬき兩の眼玉をくり出しは前にさし上てかうべをうなだれぬたりけり。頼朝はなはだは威あり前代未聞の侍かな。平家の恩を忘れぬごとく又頼朝が恩をもわすれず。末世に忠をつくすべき仁義の勇士武士の手本は景清と。數のは褒美淺からず鎌倉差して入り給へば。なほ景清は觀音に。三萬三千三百卷の普門品を讀誦して。日向の國を本領し悦びく退出す。なほなほ源氏のは繁昌。國せいひつの始めなるはとみな。萬歳をぞとなへける。

### 佐々木大鑑

神武ふさつは聖王の徳。それ鵬鳥は三千年に一度羽うつて南冥に至り。きんあんは暇なくして飛ぶ事數仍に過す。良將愚將の計略此時にあらはれし。チロシ源平の治亂ぞ。はなやかなる。扱も平家の一門福原の京を攻落され。九郎御曹子義經に一の谷の内裏を逆落しにやぶられ。讃岐の屋島にたてこもると雖も度々の軍に利をうしなひ。敦盛忠度通盛經政。成盛もろもり知章なんど。云ふ。宗徒の一門悉く討死し重衡は生擒られ。維盛清經は入水し今は斯よと見えしかども。残りたる平家の侍越中の次郎兵衛上總の五郎兵衛。天下分めの死軍せばやと云ふ程こそあれ。小松中將資盛同じく少將有盛を。大將軍にて五百餘艘の兵船に。乗りつれ。こぎわたり備前の兒島に陣をさる。源氏の大將三河守範頼三萬餘騎を引卒し。室津を立て西川尻藤戸に御陣を召れける。源平兩陣海のあはひ廿五町を隔て。旗の手を翻へし攻鼓をならせども。源氏に船は一艘もなく徒らに日數を送りける。平家方のはやりもつてんでに扇をひらめかし。爰を渡して寄せよ源氏の兵者共。かかれや源氏の軍兵共。ア、憶病なり卑怯なりと一度にどつとぞ笑ひける。源氏方には和田島山土肥佐々木。大きに急てもがけども矢をつく如き早潮の。波ごうくたる荒海に犬死しては猶耻辱と。せんかた浪におり立て拳を握りひかへたり。さはらの十郎思案して深淺を試みんと。小荷駄の馬を二三疋海へさつと追込だ。四五町計りは泳ぎしが逆捲く波に押流され。駒の頭も見えばこそ無念なりける有様なり。平家は猶々をかしがり。さばかりに招かれて寄せぬ源氏の未練さよ。是ていの淺海は平家の方の泉水ぞや。いでく殿原水練して遊ばんと。鑑ぬきおき若武者共波



にひたつてぬき手をきり、立泳ぎ蛙飛び、すいり逆手水掛あひ暫く、時をぞ三重移しける。谷一度に手を叩き、これ裸身を射さらぬか。海は源氏の禁物かどかんらんとぞ笑ひける。去ども源氏は詮方なく、口惜やと牙を鳴して居たりける。平家の大将資盛卿。今日の軍は戦はずして遊びながら勝たるぞ。源氏は射負になりたるは勝関つくつて人馬の息をやすめよと。采振廻しよばり給へば、貝のを引太鼓を打て聲はるい、大空に響き渡れる波の音破の嵐に。三重たいへけりされども爰に。宇多天皇に九代の後胤近江源氏の何かし。佐々木源三秀義が三男佐々木三郎盛綱は、廿五日の半夜の空月まだおそき浦傳ひ。只一人陣所を出て吉備津宮の神前に、暫く禮拜合掌し涙を流し申けるは、いやしくも弓馬の家に生れ、なまじひに武士一人の數に入と雖も、手にたつ響覚えなし。兄の太郎定綱は八牧合戦に高名す、弟の四郎高綱は宇治川の先陣神慮も驚き給ふべし。然るに今日平家の軍兵源氏を輕侮し笑ひし事、弓矢の耻辱よんどころなし。此度某一命を鯨鯢の頸にかけ、此海を先陣し敵味方の目を驚かし、譽を三國にとめずんば又いつの時かごし申さん。神力を添たまへ仕損するものならば、腹掻破り海中に飛入て、惡龍の眷族となつて恨をなし奉らん。返すくも神明納受ましますと。五躰をなげうち涙を流し、祈請をかくる志いかで、感應なからめや。然る折節鳥居の側なる稻村より、若き女の泣く聲して助けてたべと喚はれば、盛綱不審をたて、管引除て見給ふに眉目よき番の兄弟と思しきが、二柱にからめられしほれ嘆きてゐたりけり。こは心得ずして和主達は何者ぞ、二人の女聲を揃へあさましや我々は、當浦の鹽焼藤太夫と申者の娘。姉は待宵妹に時雨とて兄弟にて候が、今亂世の事なれば、晝は流矢も恐ろしと、夕潮酌に出で候へばなふ情なや。佐々木三郎盛綱とやらん申武士に出逢ひ、此海の淺瀬を教へよと仰せられしを、素より知ぬよし申て候へばさん、腹を立。然らば今宵小夜更て我々を海

に追入れ、潮踏をさせて試みんとて此如く、いましめ歸り給ひぬ所には仕候へども爰は潮の落合にて。渡海の舟も舵をたえ、あまのかづきし事もなく西國一の難所なり。今にも彼人來りたまはいかいかならんお侍様、助けたまへとくさける。盛綱横手をはたし打。ム、扱は廣綱が所爲なるが、我は佐々木三郎盛綱その廣綱が弟なり。いかに高名したきとて科なき女をせこむる事、兄ながらも廣綱は待には似合す。いや常に貪慾非道にて、一門兄弟にも疎まるゝ者なればさぞあらん、爰は某たすけん二人が繩を切解けば、姉も妹も手を合せ有難や命の親と。生たる心地色に出で目おしのこひしごもなく。塵毛に残る涙の露京も及ばぬ女なり。盛綱元來好色者、ム、扱は其方は姉よの、そなたは妹はは、揃ふたる兄弟親達はおはするか。除所の兄弟は心そらふて頼母し、こちのかたの兄弟は助くる弟があればしかりつくる兄もあり、いましめの繩のあと、痛みはせぬかと手をとりてふいつさすつしたまへば、妹の時雨は十六にて殿珍らしき色ざかり、盛綱の美男にどうとほだされ、誠に兄御様の御心とはたんと違ひていとしらし。鬼と佛の御兄弟、是佛さま如來さま、未來をかけてと寄添へば、姉の待宵つきよのけて、エ、おきや。あたしたるいいたづらな。年齢もいかいで後生も未來もいる事か。是は姉が佛さまなふ是如來さまの、もの事は順道にまもらせたまへと結びつく。いや佛にりんきはいらぬものど時雨が方へつれて退く。いや我こそと兩人兩手を左右へとり、彼方へ引づり此方へ縋りせりあひし。に。さすがの盛綱あぐみはて、やれまて衆生等、其ごとくまんがらにてはいかな如來も迷惑なり。去ながら佛の道は廣大にて、一切衆生あまさを漏らさすくひこる。君達の御姿、いづれを何れとわかかねて。如來もほんごなづんだり。此上は姉も妹も諸共に、一つ蓮のお手枕ならべて我も成佛と。鐘の袖を打かけし人に語るな礎千鳥、既に其夜も、更ければ佐々木の次郎廣綱只一人走り來て、此有様をきつと



見て、やあ、それなるは舍弟盛綱にてはなきか、某が先陣の案内せんと搦めおいたる女を捉へ、戯むる、は尾籠なりとはつたとらんで申ける。盛綱聞きも敢ず。さん候様子を承り候へば、彼等を海に追入れ深き浅さを御覧せんため搦めおかれ候由。尤も高名したきは武士のならひ去ながら、無益の殺生非道の手柄は本意ならず、第一軍中の掟なれば後の聞えもいかゞ御爲と存じ、扱ゆるし申候といへば、廣綱理非なき無法者、己れ兄が高名の邪魔をなし剩さへ利根だて、所詮うぬめを搦めて瀬踏をさせんとひしめけども、盛綱猶も禮義を破らず、是は御意とも覺えず。廣綱が先陣は女に教へられてといは、御手柄にもなり申さじ、いかに兄弟なればとて餘り道なき御振舞、心をしづめて御了簡あれかしといへば、廣綱聞入れず、エ、しやまだるし先己れを一討と、飛でか、れば盛綱も、禮義は是迄たまれずと抜合せてぞ戦ひける。其隙に二人の蟻おのが鹽屋に逃かへる。非道にそひたる臆病にて弟に斬まくられ、おのれ兄に向つて太刀打天道知らず畜生、犬侍と、我身を知らぬにげ吠して一村松に隠れけり。討留るに及ばずと幸にして盛綱は、元の所に立歸り、扱々是非なき次第とてあきれて息をぞつかれける。はや月影も茜さす濱邊に添ふて來る人あり、盛綱の前にひざまづき、我等は鹽焼の藤太夫と申者にて候、誠に卑しき蟻の子に御めぐみ深き故、娘兩人命を拾ひ申候、今生後生の御厚恩、いかゞは報じ奉らんごしみくごぞ申ける。盛綱もしやと思召、ホ、痛入たる言葉禮までもなし、しかしこの海を馬にて渡すべき所やある。教へて得させばいかばかり我又あつき恩ならんと、小聲になつて問ひたまへば藤太夫承り、さん候漁師舟人いくら候へども、秘密の淺瀬知つたる者我ならでは候はず、御厚恩の我君に何か惜み参らせん、あれ御覧せよ月は一つ影は二つみつ沙に、よりくる波の、わかれこそ川瀬のやうに淺くして、月頭には東にあり、月の末には、西にあり、有磯海、あなかし二人に語らせたまふなよ、めで

たく先陣ましませと懇ろにこそをしへけれ、ヲ、嬉し、ありがたし是八幡の御告と、伏拜みたまふ所に後の松の木蔭より、兄の廣綱大音上、いかに盛綱人にならひし先陣は手柄には成まじきぞ、鹽焼の藤太夫は淺瀬の案内知たりと、諸軍勢にいひきかせ、ならばせて渡さすべしといひ捨てこそ逃にけれ、盛綱はつと思案に行あたり、いや大勢に知らせてはあしかりなん、きやつは下臈のすぢなき者、おどしては、また餘の人にも教ゆべし我のみこそと、藤太夫をこつて引寄せ心もこそ二刀さし通せば、あつとばかりを最期なり不便と云ふもあまりあり、やがて死骸を浮洲の岩の下かげに押沈め、涙をばら、とながいて、淺ましきは武士の道我子の恩を送らんごて、大事を教へし我又恩をうけながら、殺さでかなはぬ詮方なき、さこそ恨みん耻かしさよ、よし何事も前世の縁根をはれて成佛せよ、南無阿彌陀佛と同向して、ふりさけみれば東雲の、遠寺の晨朝ひいきたり南無三寶、明はなれてはあしかりなんと陣所をさしてぞ、三重歸りはる、明れば元暦二年三月廿六日、昨日の如く平家の大勢波打際におり立て、渡せや寄せやと招きける、源氏の方には佐々木の三郎盛綱しげめゆひの直垂に、緋絨の鎧きて連錢芦毛の馬に乗り、ざつくと歩ませて海へぞうご打入りける、大將軍を始めとし土肥北條三浦の一黨、あはれ盛綱には物がついて狂はするか、犬死せんとの心底かどいませしとよば、れども、耳にもさらに聞入れずしんづくとおよがせける、兄の二郎廣綱昨夕の意趣を晴さんごついで馬を打入れける、盛綱振返り二郎殿候な、合戦の道に兄弟のわかちなし、お先へ参る御免あれと、手綱かいくらかいおろし浮いづ流れつ渡りける、廣綱いよ、せきにせき、ヲ、手柄に義理はいらねどもさすが弟の不便さは、それ馬のはるびがゆるまつたり鞍かやすな、やれしめよ、とよば、れば、盛綱からくと笑ひ、それは舍弟高綱が宇治川を渡せし時、梶原をたばかりし事其手は古い、馬をも鞍をも頼まばこそと波をけた



つる其勢ひ、廣綱も聲をかけ三づにさがつて歩ます。馬も名馬乗手も達者。弓杖二つえ三つえともちがはぬばかりにくらべしを、盛綱暫し引しづめかくをめて、はねさすれば、廣綱が乗たりし馬のひらくひけかへして屏風倒しにかつばと伏し、次郎はやうく浮きぬ沈み泳ぎつきもこの陣所に逃入れば、敵味方も一同に轡を叩いて笑ひける。盛綱は見向きもせず馬の草分むながひづくし、ふとばら鞍蓋こす所乗あげ、乗さげ乗おろし、時々聲をはいくくと深き所を泳がせて浅き所に打あがり、宇多天皇の末孫佐々木の三郎盛綱藤戸の海先の陣と、天もひいけとよばればすはやつけと三萬餘騎、くつばみを揃へ白波にざつくと打入て、浮きぬ沈みぬ渡しけり、盛綱兵を下知してはいく、波の逆捲く所を、岩ありと知るべし弱き馬をば下手に立て強きに波をふせがせよ、ながれ武者には弓箆をどらせ、互に力を合すべしと、たゞ一人の下知によつて、さばかりの難所なれども一騎も流れずむかふの岸に、おめいてあがれば平家の勢は、我ながらふみためす半町ばかり覺えずしさとつて、切先をそろへてこゝをせんご、三重戦ひける、勝に乗たる、源氏の軍兵さしとり引つめ此處に射たて彼所にされば、平家散々なりたてられ、兵船に取乗て讃岐の屋島へ漕ぎ戻す、とても弱き平氏の侍一人づゝ殺さん事、てまだうなりと盛綱は熊手を提げ、三百餘人取乗たる船の楫ごに打かけ、あいとふて引よせ船端をかいつかみ、力をはつて押しければ、まつかいたさまに打返され同時に溺れて失せにけり、大將範頼御威あり、今日の軍は是までなり、心地よいさぎよし、盛綱が高名前代未聞鬼神かと、扇をひらいてさつとさ、さつさ佐々木をあふぎたてくひさんで、御陣を召れける

第二

文治二年の初空や平家の餘類悉く滅亡し、三種の神器目出度都に還幸なり、右大將頼朝六十餘州の惣追捕使に任せられ、諸國の大名恩賞忠にしたがへり、中にも佐々木の三郎盛綱は、藤戸の先陣他に異なりと備前國を安堵して、即ち入部の行列はゆゝしき弓馬のほまれとかや、屋形の南に庇を構へ平家の亂よりこのかた、私の争論公事訴訟を決断し、御領私領隠田押領寺社盜賊等までも、是非を判ち治めんと譜代の執權姉川小太郎きめいけ、あらかじめ執奏す國安全、三重しるしなり然る所へ、一國の惣名主、北脇文太、國の指圖を御前に差上げ、抑當國は磐梨邑久味氣津高、赤坂上道御野兒島すべて八郡、壹萬三千三百六十餘町の御領と昔より定まりしを、近年平家のおごり故、清盛の沙汰として二萬町にさほを入れ、民疲れ國衰へ何とも迷惑仕る、剩さへ我君去年御高名遊ばせし、兒島は鹽の名所にて彼浦の鹽を焼き、都に商ひ候へば拔群の利徳を得御年貢心のまゝに候、然るに兒島の鹽燒藤太夫と申者、去年人知れず相果て後藤太夫が後家、并に待宵時雨とて兄弟の娘物に狂ひ、兒島の海をかへほさんと毎日くみ捨て候故、鹽を焼べき便もなくいよ、百姓衰微仕候、急度仰付られ下されかしと謹んでこそ訴へけれ、姉川小太郎聞も敢ず、何藤太夫と云者の後家娘共物に狂ひて、大海をかへほさんとすること心得ね、急いで其狂女共搦めとつて來れ曲事に行はん、足輕共誰かあるとくくと云付れば、盛綱籠中より出で給ひ、御涙にくれながら、暫くく、彼鹽燒の藤太夫には我陣中にて思ひ合する事のあり、扱は彼が妻子共父が別れを悲しみ狂人となりけるか、重ねて不便を聞く事よ此上は盛綱ちきに行むかひ、對面せんと宣ひて又御涙にむせびたまへば、小太郎を始め郎等共こは心得ぬ事かなと、不審ながらも御供して兒島のむかし、三重うしや思ひ出じ、忘れんと思ふ心こそ、忘れぬよりは思ひなれ、去にても身は仇波の定めなくとも、とかによるべの水にこそ、にごる心の罪あらば、おもき罪科もあるべきに、よしなかり



ける。かいろのしるべ。思へば三津のせぶみなり。父をぞ見まくほしかぬる鹽焼衣ユ。さて見よ。かしのやつ。さあ〜鹽をくまふよ。くめどもさしくる。うしやうしほのそこ。こそあれ。あれ〜父の死骸はあらめとて。うきすの岩に兄弟はすがり。ついてぞ泣のたり。母は思ひに亂れ心の雨眼は泣きつふし。岩の上を立もやらず只ひれ。伏して。居たりしが。あたりを索つてやれ子共よ。何と大方此海を酌ほしたるか。夫の死骸の見えたらばちやくと母に知らせよへ。目こそは見えねいだきとめ。老の妹脊のさめごと。つもりしうさを語らん何とて油断をするぞと。岩をたいてせめければ兄弟涙を流し。いや油断はなげれども。人々のきちがひとて笑ひたまふも面ぶせく。さしくる潮がはやうてくめどもつきす候。何きちがひとて笑ふとや。笑はわらへ狂女が心の若むらさきの。藤戸の恨も波も潮もつきせぬ海を。くめやくめ〜母も共にかいげひしやくのゑいさら〜さあと後より。涙の海ははてなき親子の思ひ。なふいつかは此海ひかたとならん。父上戀しつま戀しなき人返せ。〜とよべどもうきすの云はすこたへす。是はいかなる因果ぞやとて波打際にかつばと伏し。三人一所にもつれそひ流涕。焦れ嘆きしはめもあて。られぬ風情なり。盛綱なく〜立寄りたまひおろかなり女ばら。いかに汲ばとて此大海のひることやあるべき。近比〜愚痴の至り向後心を取なはせ。亡き者の菩提をもとひ。某がはごくみ得せんと宣へば。母は涙をおしのごひごなたかは存せねども。ありがたき御尋ねに預り候去ながら。いかなる御情よりも夫の藤太夫に今一度。逢たく候故此波の底にある由承り。親子の者が此如く毎日くみほし候へば。物狂ひとて笑はる。我は物には狂はぬものを。せいの海をうめしためしもあり。只御慈悲にはあの笑ふ人を制し。殿様も諸共海をかへてたび給へ。昔戀しう候と又さめ〜とぞ泣き居たる。姉川小太郎進み出で是々狂女。侍に汐くめとは近比推參千萬そこ立退とはぢしめける。なふ當

代は侍とても心穢く頼まれず。我等が夫の藤太夫は。鹽焼ながらも侍にまさりたり。それ故にこそ命を失ひたまひたれ。昔物語致さんいづれも聞てたまはれ。去年此所に源平の軍のありし時。佐々木の三郎盛綱といつし人。先陣せんとて我夫に淺瀬を習ひ高名し。遂に軍にうち勝たまふ。昔より今に至る迄。馬にて海を渡す事。稀代の例も我夫故。いかなる恩をもたふべきに思ひの外にさはなくて。是なるうきすの岩の上に我夫を連れてゆく。波の氷の如くなる刀を抜て。むねのあたりを指通しさとほさるれば氣もたましひも。きえ〜となる所を其儘海に。押入れられて千ひろの底に。沈みしと。聞くより我々三人は。心亂れて明暮に二人の娘が父戀しと。我をかこち我はまた。せめては夫の形見に子共を見んも目は見えず。思ひがせまつて狂亂となつて候。是も誰故盛綱のもりて聞名もうらめしや。若殿様も盛綱ごのを御存じなされさふらは。母や子共が恨むると傳へてたばせたびたまへ。情なの佐々木殿や。恨はつきせじ盛綱殿と聲も。惜ます泣き居たり。名主文太聞も敢すア。音たかし〜。聊爾なる事を申なわれにましますこそ當國の主。佐々木の三郎盛綱公よ近比魚忍千萬などいへば。何あれなるが三郎殿か。親子三人走りより人目もわかす絶りつき。父を返せ我夫かへせ。何のそがには殺したまふと。左手右手にまろびふし流涕。こがれ嘆きけり。盛綱も涙に咽び。言語同断不使の事を見るものかな。去ながら汝等が行衛なつかしく。扱當國を請受けたり。おことが夫の藤太夫は我爲には氏神正八幡大菩薩。恵によつて後代迄。名譽の高名せし事いつの時にか忘るべき。其返報には汝等を親とも子とも思ふぞや。今は恨を晴れよとあれば姉の待宵聞も敢す。さばかり恩ある我父をなせ命をば取たまふ。其上見忘れたまふか我々兄弟に。こやかくたはふれたまひし事数ならねども父はしうと。彼是以て道に背きし成敗。さあ云分あらば承らんと色をかへてぞ申ける。盛綱聞給ひ。ヲ、恩ある者の命をとる例はあらねど。其



時節兄廣綱が悪心故。藤太夫は下郎なれば武士の道は知らずして、人にかくとも語りなば我等がならひしせんもなく、殺へし益もなき事と思ひ、不便ながら侍のならひなれば力なく、そのまゝ討てすてしぞ全く恩は忘れずと宣へば、妹の時雨立寄りて、いや侍のならひとは猶以てうけがたし。我親の藤太夫又餘の人にもいはんかと思召す程ならば、殺さずとも擗めおき、軍終るまで郎等にはなご預けさせたまはぬぞ盛綱重ねて、ヲ、尤もそれ程の事は盛綱も知たれども、はや東雲も明渡る、家子若黨にも深くつゝむ事なれば其段までは及ばざりしぞ、よし何事も前世の事定業とくはんすべし。血をわけし汝等二世と契りし女房より、藤太夫が不便さは盛綱が身にこめたり。今かはらるゝ者ならば、命は惜からずと直垂の袖を顔にあて御落涙の體を見て、二人の娘も盲目も因果は父御ひこりなり。聞くにつけ語るにつけなふなつかしの亡き人やと、御前ども憚らず悶へ伏してぞ、嘆きける。伺候の侍あま人も共に、袖をぞしぼりける。やゝあつて兄弟涙をおさへ、目と目を見合せ聲をそろへ、女とこそ生れうづれ盛綱と聞くならば、大名とはいはすまじ親の敵一打と、日比ねらひし志因果の利劍是なりと、鹽びしやくにしこみたる太刀をてんでにするりとぬき、一文字にとびかゝれば郎等共かけへだて取ておさへ、狼籍者どひつすゆる母は手をあげやれまて子供よ、恩ある者さへ殺さるゝに、御身達が恨をなさば慮外者どて、又いくばくのうきめをかみん其時に此母は、何となるべきひらにしづまれ、暫しと身をまがけば二人の娘は母の顔、盛綱の顔見合せ、なふ情なしと計りにて太刀を、捨てゝぞ泣居たる、盛綱御覽し扱しんべうなる心入感じ入たる者共哉、男になして見まほし、此上は汝等も親の敵は討たる同意、努々恨を残すべからず、扱望のあらば何にても叶へ得させんとありければ、母うらめし氣にあはれ其御言葉、藤太夫諸共に承るものならば、いかゞ嬉しう候べき國のかみならずんば、親の敵と娘共に討せてや

はか候べき。たごへ望あればとて敵の恩をうけん事。みくづとなりし我夫。思はん事もはづかし、只御恩には亡き者の死骸をあげさせ、跡吊ひてたまはれかしとしみくと訴ふれば、盛綱あくまで感じたまひ、夫と云ひ女と云ひ、親と云ひ子と云ひそろひたる賢者かな、此上は望にまかせ藤太夫が死骸をあげ、千部の經を供養し追善かたの如く行ふべし、扱某は官位昇進参内のため明日上洛すべき間、在京の中親子のもの各主の文太に預置く。よくよく勞はりかしづくべしと、御座をたゝせたまひければ二人の娘は猶一念の、うらめしげに盛綱の後、姿を打まもり見送り、見返り老たる母の手を引て泣く、文太が宿に歸る、藤戸の浦の濱の真砂はつくることも、彼等が涙はよもつきじも、の哀れの限りならん今にも、かたりなげきける

第三

源氏の威勢日を追て盛なる武家天下を治むる、世是を以て始とす頼朝卿の嫡男高壽公、五歳の春や正月吉日元服の儀式あるべしと、鶴ヶ岡の拜殿に珠王を鏤め給ひけり、御父頼朝北條一家和田山千葉上總、御譜代の歴々威儀をたゞして著座ある、遠侍には佐々木の太郎定綱同四郎高綱、但し三郎盛綱は在京にて伺候せず、使者を以て嘉儀をのぶる其外けふの御家人は、大名小名に限らず又官位の高下にもよらず、武道のほまれに隨て座を定むべしとふれられければ、覺ある侍は衣紋繕ひ烏帽子のひながた引揃へ、我も、こなみあしは雲の如く霞に似たり、中にも佐々木の次郎廣綱は藤戸の海の先陣を仕損せしと、前代未聞の不覺とて弟共より引下られ遙の下座に控しが、一門他門の人々も、けふの出仕は無用かなと目引補ひき笑ふもあり、廣綱は身をしらす弟の盛綱なかりせば、けふの上座をせんものと思ふ氣色をあら



はし。おめぬ顔に見せかけ、テ扱何れもおすまい。互じやと。はざふらひをしかり付うぞぶるふてぞつめにける。勅使は徳大寺實定公加冠は關白兼實公。勅名をうけて遙々鎌倉に下らる。時めかしうぞ聞えける。理髪は頭中將定家卿。各式禮事終りうるか。ふりこそめでたけれ。やがて衣冠束帯し父上への拜禮。ひきいれ大臣勅使にむかひ。それの御作法おとなしくらうたげに。天晴源氏よつぎやと上下。あつとぞかんじける。勅使官命をひらいて。何々鎌倉將軍頼朝が長男。萬壽丸從五位下左衛門佐に任ず。よろしく源頼家と名乗るべし。文治二年丙午正月十日。ていれは勅狀如件と讀上げ給へば。頼朝親子大名小名あつと首を地につくる。御盃始まれば思ひ。の進上物あなたの御肴。こなたのおさへ漢の倭の佳肴を揃へ。うたふつまふつ千秋萬歳の千箱の玉を奉る。關白仰せけるは。某當春娘一人設けたり。即ち彼娘を頼家に許嫁。御邊二十娘十五に成ならば。徳大寺殿を媒にて必ず送り申さんとあれば頼朝恐悦まし。賤き武家に關白の息女を給はらん事。未代の面目弓矢の冥加にかなへりと。かたは頼朝恐悦まし。おうけ申させ給ひ響應引出品々にて。勅使關白殿上人御歸洛。とこそ聞えけれ。北條の四郎時政は默然として物をも云ず。抑うつふいてゐられしが。漸あつて是方々。關白殿の息女當年生れ給ふとあれば是丙午の歳。惣じて丙午の女は夫にたると云傳へ。賤の妹背も忌事ごごめり。將軍の御臺にはうけがたしとぞ申さる。頼朝聞召尤もさる事なれども。一の人の仰を頼朝ちきに領掌して。今更變改は成まじき是非に及ばぬはと宣へば。いやく君の崇は天下のたより。是を糺すは臣下の道いかにしても時政は。尤もは申がたしとあれば頼朝重ねて。いやいかに云ふともあなたは關白我は將軍。直々に合點して今更變改せば彼息女はすたり物。殊には高位にたいし憚なりと仰せける。千葉介上總介口をそらへ。御詮にては候へども申ても易大事其ふんにては置がたし。あなたもこなたもおつとならぬやうの思案。

そあるべけれ方々いかにと申さるれば。是はかうよと人々は。顔にあせし首をやましめにがくしうぞ見えにける。時に山重忠しやく取直し。昔もかやうの例唐土にもある事にて。轉ずる法の候其次第は。外に又同生れの女を尋求め。三七日變體の文を授けて。鹿毛の駒に縛りのせ命門の筋を切て。心の臓をつんざき刺殺して棄候へば。こなたの女は生を變じ。其身安穩夫も壽命長遠まのあたり候。此儀はいかゞと有ければ君聞召し。其儀にてあるならば谷々に觸をなし。丙午の女命をうらば買取べし。疾々と仰せれば。佐々木次郎進み出で。末座の教訓推参ながら。生とし生ける物命うらんと罷出るものは候まじ。何事も君の爲忠節とは爰の事。命をすて。奪取より外なく候。某きつと思ひ付たる丙午の女。しかもはや夫一人見殺したる者の候。三十日のお暇給はり。搦捕て参らんと詞を放て申上る。頼朝聞召し神妙。然らば時刻移すべからず。しおふせて後恩賞厚くさせんと。御座を立せ給ひければ。次郎はでかした顔振にて是々いづれも。戰場にての忠節は誰もする事珍しからず。かやうの時こそ本々の御奉公。今に見給へ御褒美に預りすそわけせんあやかられよと。肩で風切り身をねちて退出すれば人々は。天晴武士の風上にも。もつたいなや忌々しと笑ひ。のめく三重計りなり。秋ざれや。霜枯果し紫に。名のみ藤戸の浦さびて。戀せぬ身をも待宵や。涙の時雨兄弟は。母が歎にはだされて。恨もはれて盛綱の。仇を思なる情にて。文太がもとに嘉祝れ。こころの。まゝに。法の道。主の文太も盛綱より能痛れとの仰をうけ。他事なき振舞うれしにも。うきにも忍ぶ昔なり。せめて亡夫の御ためとて。心ばかりの。水施餓鬼ながれ。くわんぢやう。とばかりに。木の葉をひろひて。經木まじりの八のまき。かいて流してしがらみに。見し世の人を留ばや。なふ時雨。あはれかやうの身ならずば此經木をもさ。舟にして。思ひと戀とのせて見よものといへば。ほんに姉様あんまりな。扱は何ぞおもしろい。戀が有



そな有ぞうなア、羨しとありければ、誓文戀はなけれども先かう云ふて見たばかり、お主も我身も今は清僧く、つと笑ひしかほばせは花と紅葉の如くなり、老母よろこび立出で、御經書寫はみてたるか、然らば妾が此間稱置たる、百萬遍の念佛をも父上へ奉れ、回向のそとばをかいて流せとありければ、兄弟一字三拜して卒塔婆を同くながれにうけ、願生菩提と回向して又袂をぞ絞りける、佐々木の次郎廣綱は供人あまた召つれて、己が顔にはひげつくり立やすらひ様子を聞、そとばを上てよんで見れば、口唱し奉る念佛百萬遍、亡夫藤太夫菩提の爲施主六十一の老女としるせり、扱は聞しに違はずと、つと入て主々と喚はれば、文太立出で何方よりと云ふ、扱は汝は名主の文太よな、是は此國の國主佐々木の三郎盛綱殿よりの使なり、扱も主君盛綱在京の間、藤太夫が妻子預置れし處不便を加へ痛はるよし、都に聞え盛綱大悦致さるゝ、ついては彼等か志帝の歡聞に達し、御威のあまり母をば急ぎ參内せさせよとの勅諭にて、乗物もたせて某を迎にこされ候、兄弟の娘は苦勞ながら今しばし其方に置れよと、盛綱公の仰なりと誠しやかに述べれば、文太思案ものにて、尤も仰と候へばお請申たき事なれども、國主様御上京の節御直に預り、能痛れと仰付られ候ものを、御使へは渡されまじと申せば母は此由聞も取す、なに自が噴雲の上まで聞え參内致せ候か、有難や賤き身を今生の思出し、たる人も本望なり、殊に盛綱様よりの御迎、目こそは見えずと王城の土なりとも踏まほし、はや御上せ下されかしと逢て望めば、文太も今は免も角もとはや乗物にぞのせにける、二人の娘頓て御歸り候へ、都とやらんは我も見たし妾も見たし、何卒我々も召るゝやうに、さらばくと立よる處を廣綱とつて押退け、乗物に錠おろし繩をはらりとかけにける、文太驚き扱こそ心得ねは何事といへば、廣綱からくと笑ひ、やれ狼狽者、此女は六十一丙午の由聞えあり、關白兼實公の御娘同く丙午に當り給ひ、御縁邊のさはり故此者の命を

取り、轉じかへられんどの事にてはるゝつれに來たり、さあ汝等是が此世の別なるぞと、云もあへぬに兄弟はなふ悲しやと伏轉ぶ、母は輿にて泣叫べとせんかた更になかりける、文太暫くものをも云す、ム、してそれは必定盛綱殿の仰よな、ヲ、中々の事、ハア南無三寶、思へば盛綱は侍にてはなかりしな、今更云ふには及ばねども彼等が爲には親の敵、されども國主と云ひ情らしく武士の道を立られし故、云ひなだめ痛りしに某に預けながら、理不盡に奪取り非道の罪に行はんとは、侍畜生土民には劣りたり、よし此上は國主ともいはず、親の敵にまぎれなし天をかけり地に入るとも、此文太がかたうとして盛綱を討すると真直に申せといへば、廣綱かね心に盛綱うては猶珍重と思ひ、ヲ、我等が主君盛綱なごが、おのらていに討るゝならば手柄次第に討て見よ、長居は無用それ引立よと乗物を先に立て、ぼつたてぼつたてとぶが如く後をも見ずして走らせける、文太は腹にするかね走出で、は立かへり、思案しては又駈出で、無念しなしたりと二三度かけ出でかけもどり獅子の怒をなしければ、いやくせいであしかりなん、萬端我にまかせよと二人の娘を誘ひて、旅のいでたちかへすがたなをしも、ものや三冊

らるる道行

おもひ川ほさぬたもとに、ゆく水のうきな、ながさんはづかしや、人ははたちのはなざかり、こひにくちなば、をしからぬちりの、あくた、の身をすれば、うはの空たつ、うすけぶり、ありのすさみにくかりし、人のむくひか我すがた、やつしやつれて、女とも見えず、男なりけりなりふりは、心かろしや氣もかるや、よしやよしの渡し舟これもこがるゝたぐひかや、しほならねどもやくもの、何をかおもひそめつけの、かすみにむせふいんべのはま、こゝこそじつさうむろの津や、すいせんしん



によの。波はこきやうへ歸らばかへれ。われはかへらじけふありて。あすをしらふの高砂や。あれは尾上の遠山松。これはなつかしこひぐさの。姫路は雲のふりそでに。波のちやみのあか。しがた。はぎやききやうはみだれても。あをばの笛ををじかなく須磨のゆふぐれ。きて見れば浦の景色はほのくくんとさあさびしる。あひくくもみぢちる。ア、くちりかゝる。さつとちりくるむらもみぢ。おもはでだてをすげのかさ。こそんの翁。いで、見よらんにかさき菊かほる。ひやうごのとまやつゆふけて秋のはじめと西の宮。いくたこやのにたがふよ。もいのとつぐるくだかけを。狐はめなで。うらみ蔭の葉つたのは。はつあほだされたそれではらからまよひゆく。みやこも近く。なるやらん。やまのすがたや心なき。草木も心みゆるにぞいなかそだちのおもはゆく。かたふけゆかつかぶと山みねにむら。紫の。くもやきせながのはきんらん。み山はさやに緋縮緬かせをいたみにかし拾ふ。こどもやさしく。あいらしく。このみ木のはがばら。ばつとあらしにちりければ。冬まつ色にとまならぬ。ゆきやこんこ。あられやこんこ。そでやこづまに。おちてたもとの。たまあられ。すこしわらひのたねなれや。なほゆきくみてみなせ川ア、あねともつたまたず。妹ともいはけなきあだなつ、まし男山とまらでいそげしはくも。むかしにかへるゆめはなく心をくたく旅まくら。かさねつもりてらくやうやどあるかりほに。かりのやさしはしてこそ。しのばるくげにやくがいの世の中に。かゝる思もあるものかさても。いのちはあるものかとみな。かたるそできくたもとぬれて。ほすまはなかりけり

第六

佐々木三郎盛綱はかゝる事とは知り給はず。備前守にふせられしはらく在京すべしとて。六波羅の南

殿と申かりしづかに休息せられける。かゝる處へ御舎弟四郎高綱御上京と申上る。盛綱不審に思召し。それく是へと宣へば高綱禮義ふかく。先以て尊體御堅固の段悦び存候。鎌倉に於て將軍家御機嫌能。舎兄太郎殿一門無事御座候と懇願に申さるれば。ア、く珍重。して先此度御邊の上洛何事かは。問給へば高綱重ねてのされば若君萬壽君御元服まし。従五位下に任せられ頼家公となのらせ給ふ。御禮として頼朝公の御名代に参内の爲罷上り候とあれば。盛綱満足淺からず。誠に大名多き中にかゝる大事の御代官。御分承る事佐々木の家の面目なり。先々兄弟勇健にて。替らぬ對面よるこばしと世に睦じき參會なり。高綱仰せけるは此度某上京について。妹の萩の前よき次手に京都一見いたさばや。是非召ぐしてと申せし故太郎殿へうかひ候へば。苦しからじとの御事故召つれ上洛仕る。如何あらんと宣へば盛綱打笑ひ。ア、若き女の京見たがるは理なり。東女はきこつなく都しらぬもふつゝかなり。一段く町屋の旅宿もさうくし此館に滞留させ。思ふさまに慰ませよぞれいづくにかと宣へば。高綱やがて案内し兄の。御前に出でらる。扱高綱は。いまだ参内院參をも仕らず先公用をつとめ申さん。緩々御意を得奉らんと座敷を立て出給へば。盛綱は一人の妹君を寵愛し。毎日の物參遊山たけがり紅葉狩。商人參者おもてにつごひ御なぐさみに。三重いとまなし

第七

立まふ市の。中々に。むざんやな待宵時雨兄弟は。色々に態をかへ何卒たよつて盛綱を。一打とこそねらひけれ。けふは二人立わかれをとこわつばの姿に出立ち。かたにれんじやく腰に鑢わづかのあじかに草かり入れて露ながら。難波堀江のあし召れよよしあしはしらねども。あしめせくあしめすまいか。



おあしそへて召れよや。姫君聞給ひさすがは都なりけるぞ。鎌倉にてかゝるやさしき商人なし。それ一もと、宣へば。女房達はしり出であし買ふとぞよび入れける。あとより時雨聲をあげ。伊勢のはまおきめすまいか萩めされよとよばりける。姉の待宵しらぬ顔にて腹を立てやあわつば。商人の作法を知らぬか。一人召るゝからはもはや外にはいらじといふ。いやゝ商はうりがちなり。其方はあしをうれ我は落萩。いやあし召れよいやはまおきとまたせり合てぞ賣にける。あづまそだちの女房達何のわかちもあらばこそ。やれそこな子。其落萩は川魚か海魚か。是は佐々木殿の妹君萩の前の御宿なれば。其やうなさもしき物はめされず声賣こちへと招きけり。姫君遙に何を云ふぞ女房達。あしもおきもおなじ草扱しほらしきあらそひや。あいらしき子供やな。兩人共にと宣へば。女房達打笑ひ。しらぬ事とてア耻かし。馬か牛かを買やうに。草めして何かはとわめいて奥へぞ通しける。姫君彼等を女とは知り給はず。扱よい若衆心ある賣ものや。あづまのかたには陸奥の。あさかの沼の花がつみ。さまゝ名あると聞たるに。伊勢の落萩難波のあし。よしといふもおなじ草か語りてきかせよと仰せける。さん候我は伊勢の牧童菊若。我は津の國の草刈よしわかと申もの。げにやものゝ名も所によりてかはるよなふ。たとへどすゝき穂に出で、尾花といふも同じ色。菊には霜のおきな草。からよもぎとも御覽せよ。立田のにしき。みよしのゝ。雲と見しは。はなもみち。其外かはる。なの花の。しなぐの草の種。歌人はるながら名所をしる中々賤のわらはより。君こそ心にくけれ。おもしろや。心ある。人に見せばや津の國のなにはのあしのわかを舟。おきのかもめ磯千鳥。はんま千ざりがちりやちりゝ。ちりゝやちりゝとこぎ出してつりする所に。つたすがたのやれ。ゝやぶれがさ。雨にきる田蓑の島もあるなれば。露もますげの。笠はなごかなからん。難波津の。春なれや。なにおふ梅の花がさぬふてふとりのつばさには。

かさゝぎもあり有明の。月のかさに袖さすは。天津をとめのさぬがさ。それはをとめ是は又なにはめの。かゞく袖がさひぢがさの。あめのあしへもみだるゝかたをなみあなたへざらりこなたへざらり。かさらりゝ。風のおげたるふるすだれつれゝもなく。心おもしろ。いせの落萩めすまいか。いやあしめされよいやはまおき。あしめせゝとぞ申ける。姫君いたふめで給ひ。此上はなづれも買得さすべし。未だとひたさ事もあり今宵は是にとりうし。かみがたの物語かたりて聞せよそれもてなせと立さまに。ふたりに残すしほのめはしかけの露のかごとなり。兄弟暮を待兼て。さあしすましたり似せも似せたり。首尾はよし。是非にこよひ討とらん庭の案内のさばを見よ。あれは敵盛綱の居間でさんなれ。さいはひ爰に弓矢もあり遠くはうちとれ近くはきれ。今しばらくを見つければ。なさとられなとよろこび。いさむ兄弟が心の内こそ。三重ふびんなれ。はや初夜なりて。そよ風の。そよぐもたそやたれならんと。うたゝねいらす枕をもたげ。そなたを見れば萩の前戀のよねまきの。すそほらゝとしそくが。あないさしあし。あねが枕に手をかけてこれ。お若衆。おちごさまと宣へば。二人はさえ入る心地してそらいびきをぞしたりける。いや手の悪いそら寝入りこゝはちつとおこさんと。ふところへ手を入れ給へばなふかなしやと逃んとす放ちはやらじと引とめ。ア、おと高し。にくふてこゝへ來られうか。一目見しよりなごやらん。わがたましひも亂れあしの。一夜ばかりの添伏をさあねしやとありければ。待宵ほうごこまりつゝふるひゝ申やう。御志は有難けれも。お侍の御娘いやしき草刈童と妹背の枕。もつたいなし。御めん。ゝといひければ。いや此道に上下の隔はなきものを。つれなき君やと火を消し給へば姉はいよゝ迷惑がり。妹は堪かねふき出し腹をかへてあたりけり。姫はそれとも知り給はず。扱聞わけなやたゞしは我をさらはるゝ。あづまものにてお氣にはいらすと



近松全集

ひに。一夜と口説かるゝ。待宵もせんかたなく。何もつたひなくきらひ申にあらねども。なにともわけ  
 ても申されず。ちとらちのあかぬ事のありひらに宥させ給へと云ふ。ム、扱は未だ總の道御存じなきと  
 の御事か。こよひを懸のいろはにて我手習のししやうにと。すがりつけばハテわけもない。やあ是に候  
 伊勢の濱狭賣る若衆。世より御事のみにて姫君さまへ執心のよし申候。菊若出でよと手をとれば。ハテ  
 やくたいもない御身こそとにげありく。姫君腹たちいやならばいやまでよ。おこと等が振舞は我をなぶ  
 るかさもしやな。若衆には似合すとおごしはちしめ給へども。それでも兄弟せんかたなく苦笑して二人  
 の中。御心に従ひたくは候へども。何共内証にらちのひぬ事御座候。達て仰せらるゝ程何とも迷惑千萬  
 と。又くつゝと笑ひ出しすみにかいんでのたりけり。かゝる處へ盛綱は。眠られぬ儘に庭に出でたれ  
 かあると宣へば。そりやこそ人がと姫君はにげて奥にぞ入り給ふ。ア、うれしやと兄弟はさしのぞき見  
 てあれば。親の敵盛綱月を眺めて立ちたりけり。エ、天のあたへ嬉しと悦びざめき飛出んとしけれど  
 も。色は高し程遠しあやしめられては不覺なり。いかいともがきあがくまにはや盛綱はいらんとす。す  
 は射取とて兄弟は。そばなる弓と矢とつてつがひしばしかためて盛綱の。後姿を外さじと二人一度には  
 たと射る。中に立たる大石の水鉢に一二の矢。のなかせめてはつしと中れば血煙四方へはつと立ち。血  
 沙は瀧の如くなり。思ひこふだる一念の石に立矢ぞ哀なる。盛綱驚きふり返り。狼籍あんなりおりあへ  
 やつと宣へば。御舍弟高綱郎等共上を下へと騒動し二人を見付。きやつばらが弓矢持しは心得ずとふみ  
 つけ繩をぞ懸にける。提燈たかくあげさせ盛綱大に怒つて。汝等は某に意趣ある者か。若輩にて盛綱を  
 討んと思ふ志。神妙なれば品によつて助くべしとぞ申さるゝ。兄弟承りなふ是程の事をたくむ身が生  
 びんと思ふべき。仕損せし上なれば仔細は申に及ばず。疾々首を召れ候へニ、無念口惜し。さのたまふ

近松全集

たい中を一矢とこそ存せしに思へば。我々が。運のきはめぞ無念なれと涙を。ながし申ける。盛綱彌  
 不審はれず。聊覺束なし若し平家方の末類かご問給へば。なふ覺なきとは情なし見忘れ給ふか我々は。  
 鹽屋の藤木夫が娘姉の待宵妹の時雨にて候。父を討れし御恨は武士の習と候ひし。御情にほだされ少し  
 晴て候處に。なんぞや天地と頼みたる一人の老母を。丙午の女の命がはりに殺すとて。無體に奪取り給  
 ふ其恨はいか計り。御身を討ん。謀にさまん。に身を篋し。ならばぬ童と成しかご果報ゆ。しき佐々木  
 殿。淺ましき我身かなされども未來はあるものを。くごいつかこちつ身をもたへ恨。涙はせさあへず。  
 盛綱横手をはつたと打。さら。合點いかぬ事藤木一家の者は盛綱が守の神。何者のわざなるぞ高綱  
 いかにと申さるれば。ハア思ひ當て候。鎌倉にて彼御沙汰ありし時。舍兄廣綱お請を申たれしが。疑  
 もなき廣綱の所業ならんと申さるゝ。扱は疑ふところもなし。廣綱軍に耻辱をとり其爲御前の輕薄。又  
 意趣ある我をも討せんとて假名をしたると覺えたり。先其者の繩をとけ。是へくと請せらる危。かり  
 ける次第なり。扱老母が身の上氣遣はし預けし文太は何と。さん候文太は一筋に頼もしく。都まで  
 我々に附添上り候へども。はや母上は鎌倉へ渡されしと傳聞く。をと。ひの暮程に鎌倉へ下り候と。申  
 もあへねば盛綱高綱ヲ、頼母し。さもあらん。時刻うつして鎌倉の母が命をとられては。悔るとも申  
 あらし早速鎌倉に下り。是非の落居は彼地にてさあ。急げや急げとて。兄弟が馬よ奥お歩乗掛駕籠乗  
 物。供人郎等打揃ひお道具る。おつたてろ任せておくる夜をこめて夜をこめ日をこめいさみにいさんで  
 鎌倉。さしてぞ下らるゝ。

第八



佐々木次郎廣綱は夜を日についで鎌倉に下り旅装束にて登城し、御尋の通り丙午の女召捕て参り候。一かど御褒美に預らんと。乗物を白洲へすへさせ廣言らしく言上す。老中見給ひ一段御辛勞、扱其者は誰人の領内に何と申者なるぞ。一門一類合點づくにて候か。申ても是は非道の殺生なれば、重ねて天下の越度にはならざる事か吟味せられしかといへば、廣綱承り左様の儀ぬかる事には候はず。即ち舍弟盛綱が分國備前の者にて候。聊罪科にて籠舎いたさせ置候を。盛綱に申聞せ候へば幸の次第とて、即ち差上候とあれば、此上は仔細なし此度の儀式御邊に預け仰付らるゝ間、羽黒山の行者を招き三七日行ひせさせ。由井ヶ濱にて法の如く打て命を召るべし。追て御褒美御さらんとありければ、次郎は悦び我宿所松谷にぞ。三重歸りける。扱其後に、屋敷の東にかり屋をうたせ七重のしめ八重のだん。母は輿にこめながら五體清淨の爲にとて、五穀を断て木食させ湯水をかたくこめたれば、さなきだに老の身の。精も力も弱りはて涙ばかりを便なる。俗體は汚はしと。行者一人押籠て二七日こそ祈らせければ、名主の文太は漸鎌倉に忍び入り、未だ命ありと聞何としてかは入たりけん。編笠脱すて行屋の内へつと入り是御坊、承れば關白兼實公の息女、頼朝の嫁になり給ふ御約束とて、丙午は崇ありとて是なる女の命を取り、御祈禱なると聞てある。佛法も神道も慈悲を以て旨とし善根をたねとする。御身行力達せばなご人の命をとらすとも。此持たる珠数は何のため。祈念祈禱にて轉じかゆる事叶はぬか。但し人の命をとり殺生してもくるしからぬ事あらば、御弟子になつて某も、少し殺生致さんいかにと云ひければ。行者驚き、抑先和殿は誰人ぞよき所の御不審や。尤佛法に殺生せよとはなけれども。是は一死萬生とて世話にも申。小の蟲を殺して大の蟲を助けよと申も同理と。いはせも果す飛懸り胸板を踏付て。小の蟲を殺し大の蟲を助けよならば、和僧は出家我は俗。妻子はこくむ便なり只今殺して剝取と。

太刀ひん拔ばア、暫く聊爾なされな。我は何も存せねども廣綱殿の仰にて、何方の行者出家を頼みても。殺生なりとて合點せぬ間、是非に某行者となりの。此所に三七日眠りてなりとも罷あれと。僅の齋ひし布施に目がくれ此比是につめ申。愚僧は何も知らぬ奥方のはちひらきにて候。眞平御免と涙をながし申ければ、文太打笑ひさこそ。然らば汝に云事あり我此輿に入間。外よりもとの如く錠を下し繩をかけよ。必ず人に沙汰するな。いさばねたてば踏破てねち殺すと云ひければア、如何やうとも。何しに沙汰し申べきと共々錠をこちあくれば、母は悦びなふ文太殿かと出で給ふをヲ、音高し。靜に様子を申さんと一つ輿に打のれば、法師はそより錠下し七重八重に繩をかけ、震ひく。お茶でもまのらば仰せられよとさあらぬ體にて居たりけり。三七日の曉に、次郎廣綱侍下部召つれて、さあ今日は定の日由井ヶ濱へ引出せと。乗物中に引つゝみあたりを拂つて、三重出にけり今や浮世に、神無月。初霜まごふ白波に菱垣たかく由井ヶ濱。土肥梶原は檢使の役島山は惣目付。佐々木の太郎は奉行職廣綱もとより太刀取にこそ参りけれ。其外役人男女の見物哀れ果敢なし不便やと。涙をながし念佛しいかに仰なればとて、我領内の民なるをさりとては情なし。佐々木の三郎盛綱の末よからじとぞつぶやさける。盛綱高綱兄弟は事に臨んでかけ出んと。笠ふかくと引被り二人の娘をさうにつれ。見物に立隠れ今やと待給ふ。知死期すはやと云ふ程こそあれ。廣綱乗物に向ひ。汝廣綱が手にかゝる事努々恨むべからず。舍弟盛綱がなす所爲なりさりながら。天下の御用に立つ命是本望と觀念し。成佛せよ只今と戸をあくればこはいかに。文太飛出で廣綱をこつてふする。狼藉若と人々ばらくと取廻せば、盛綱高綱飛出で。此者には仔細あり寄て見よなでざりと。さうに立で腕まはせばさうなく、かゝる者もなし。其際に老母與より轉出で給ふを。待宵時雨絶り付。なふ母上加我子かど嬉し涙はせきあへず。和田秩父



北條いかに盛綱高綱。是は一切心得ず。最前御詮議ありし時は盛綱領内の科人にて、即ち献上せらるる段しかも他人ならぬ。兄の廣綱取次にて是程の催しに、推参の振舞上を輕め申に似たり。仔細あらば申されよと詞を揃へ仰せければ、盛綱進出で是は老中の仰とも覺えず某差上る程ならば、盛綱直に引せでや候べき。是程の御大事をいかに兄弟の申とて、一旦某に御尋ねなきはいかに、佐々木、太郎進出でやあゝ盛綱。それも一理は聞えたり去ながら、我身に覺えなき事ならばなど此比に老中まで、密に内意を申さず、只今に臨んで狼籍故理を以て非に落る。兄弟迄の名折なりと座を打て宣へば、盛綱涙をばらはらと流し、承り候さりながら、此者共は盛綱が一命よりも大切に、恩を受たる者共なるを、是なる兄の廣綱かり名をして奪取り、直に預け申されし由承り、若内證にて殺してや捨られんと、扱此時節を待ち候天下へ對し狼籍とて、假令某が命をば召るゝとも此者が一命は、せひく申給はらんと涙を、浮べ宣へば、和田北條畠山、目と目を見合せ一度に横手を丁ど打ち、扱々披群の相違なりいかに廣綱。何もか云ぶんに違はなきかとありければ、廣綱文太に押へられながら、何あの衆の詞にうそは御座候まじ、よいか減に御詮議あり、爰をちつとくつろげ給はれかしといへば人々あきれ詞もなし、かゝる處へ佐々木の妹萩の前、取物も取敢ず徒はだしにて走り付、人目も耻ずなふく、何もあの女は、佐々木の家の氏神なりひらに助けて給はれ、是非あの者を討給は、彼等が言譯に先自を殺してたべさなき中は叶ふまじ、なふ兄上達自をといさみ進んで出給ふ、廣綱まだ口が滅す、フ、でかしたく、いかに人々、あれは我等が妹にて何方のかまひもなし、彼奴を殺しはや我等をもゆるしてたべ、ア、究屈是方々、死ぬるゝとわめきしは見苦しかりし風情なり、其時重忠進出で、天晴けなげな云ぶんかな、扱盛綱の志尤至極致したり、爰は某申べし、惣じて丙午の女夫に崇るといふ事俗より出でたる僻事なり唐土にては文王の后

丙午にて萬歳をたもち、我朝にては安閑天皇の御母后日子の姫、其外丙午の女、世に千代を重ねし其例古今に數しらぬ、迷ふときんば例へば水のエ丑にても崇なくて叶ふまじ、ア、愚なりく、此通り重忠が、了簡せしと言上せば君も否とは宣ふまじ、二人の娘は畢竟我君へ忠臣の者の末、盛綱高綱のふさいにせられよ、武士の妻には系圖はいらす武勇をもと、勵まれよ、扱妹の萩の前の御心底、天晴佐々木殿の妹なり重忠嫁に申請ん、御臺所の御生れ丙午にたゝらぬ事、此重忠が請合申天下に證據をあらはさん、此由披露申べし此上に各も、重忠が了簡僻事あらば打て見給へ、いかにく、とふるなの辨に花をさかせ、詞すゝしく宣ひしは瀧のながるゝ如くなり、誰かは異議に及ぶべき皆尤もとぞ同じける、北條重ねて、扱二郎廣綱は億病者の表裏者、武士の名折一門の耻辱、只今速に切腹せられよ時政介錯致さんと、つかくゝとより給へばア、魚相千萬、澤山をうに一つの腹を先能分別仕り、重ねてお返事申さんと、立て逃るを太郎定綱子々孫々の面汚しと、後より細頸水も溜らず打落し、悪を退け善を勤むる御代萬歳の印ぞと打つれく、歸らるゝ源氏繁昌國繁昌、千秋萬歳萬々歳めでたかりけるものがたり



源氏物語

見渡せば松の葉白き石橋山幾せ凍りし雪ならん。年は安元二年の。冬の日數も積る雪。した行水の音までも嵐に咽ぶ源の。右兵衛の佐頼朝は平治の亂に流人と成。伊豆の配所の愛住居伊藤の次郎祐親は。當國一の大名とて深く頼みまします。伊東が一族本間澁谷。大場糟谷會我岡崎。今こそ平家の郎従なれ昔の恩を忘れじ。花の朝に霞汲み紅葉を焚く月の暮。時にしたがひ折にふれは心を慰む。人の情に佐殿も打解け月日を送り給へば。近國の若侍吉川船越佐越の十郎。天野の藤内狩野の藤五竹の下の孫八なごをはじめとして。いざや殿原流人右兵衛の佐殿の。は冬籠の徒然を慰めやさん尤も。人別に一種一瓶してさゆる野掛の暖め酒。竈にたゝむ石橋山拂はぬ雪も。盃の。酔にとけつゝ吹おろす。峰の吹雪もは酒宴のさゝんざ。調ふるばかりなり佐殿興に。入給ひ。實にも榮ある景色やな紛はぬ花と詠せしは。咲ぬ梢もありつべし。横も檜原もおしなべて。咲も残さぬ花の雪。折らでも袖に挿入て。歸る家路も入る山も。白妙匂ふ空の色。朝日夕日の影までも。共に凍りて松の雪あたらか。げなると書たるも。是ならん。峰の梢の滴りは。氷柱となりて谷かげに。音無き瀧の白糸に。むれるる鳥もうづもれて。皆白鷺と。山の井の。氷の。鏡と己れさへ影に驚くはたゞさや。はつとはらば色々に驚も鳥も現れて。雪に繪を描く風情。かや。雲居る方は。いづくぞことひの杉山奥深く。妻木の道も杣人の通ひも。絶て是や此。東方朔が杵の跡。たれ炭籠の。薄けむり。横断る風に。むらゝと消えて亂る。いく筋の。末は結びて塵合ひ。をれふす岡のいざり松己と枝の起反り。さらゝ。さつと翻る。其景色。名に立つ末



野と言置し。末摘花の、園の雪。花に比へて吉野山月にたどへて、更科を、更に見るよ。と見下せば、伊豆の海而遙々、漕來る舟の數々の、苦も船板もうづもれて雪に聲あるから櫓の音の、からり、ころ／＼「やらんやら、お目出鯛釣る海の幸。雪は、みつぎの山の幸。かの山海の幸がへせし、神代を今に見る事は、再び頼朝が、秋津島の海山を手に握るべきしるしごと。數獻に巡るは盃、あかつき梁王の、園に入らざれども雪群山に滿、夜ゆう公が樓に登らね共月千里に明かなりと。朗詠を遊ばせば、馳走の若侍今様を唄ひ舞ひ、辨當合子の足利椀蓋を變ての雪見酒、寒風却て春風と。左扇の歡樂に暫く、座を召されける、伊藤が三男九郎祐清盃受持ち、如何に方々、數ならね共父祐親我君をかくまへ參らせ、浪人の徒然を慰奉る處に、おの／＼近國の交誼として、今日のは馳走身に取ての大慶君も甚だは満足、去りながら春の雪間の比ならば、猪熊なぞを狩出し物頭に馬合つけ、鏑の遠鳴させざるが殘念なりといひければ、竹の下の孫八間も敢ず、否豫て催す鹿狩こそ馬をも卒子をも頼むべけれ、一座一興のは遊覽、いざや面々雪の下伏す兎、手に引摺み熊ののし、を抜打にして、熊膽の苦味を肴に一盃づ、は如何にと云へば、藤内藤五倉澤の彌五郎、ヲ、いしくもやされし鳥けだもの、血に染て、紅葉の山に爲すべしと一盃機嫌の飯東武者、雪を踏立氷を蹴わり、谷にくたり尾上に登りえい、えい／＼聲して、三重狩けるが雉子の一羽も、立たずして檜柴茂るむら消に、しだの葉被さ折敷て盡き出るを、スハ伏猪よ我仕留んど駈寄れば、非人と覺しく二十許の瘦男、駿もおどるにつら／＼めて唇寒さいきの下、只は憐みは助けと凍え臥てぞ泣居たる、情も知らぬ田舎武士これ珍重のおなぐさみ、瘦ても人間猪熊よりは勝なり、首討は常の事胸切か縫割か、斜ざりかぞ立騒ぐ頼朝は覽じしばらく、山中と云ひ雪中に非人の在べき様もなし、そも汝は如何なる者ぞと宣へば、此男頭をもたげ、我等は相州の土

民なるが、永々脚氣を煩ひ僅の田地にも離れ、妻には他ぬ別れを致し何を生たる甲斐の國、少しの縁者尋ねて是迄陸行はるりしが、山道の大雪に持病の痛み骨も碎け、一足も曳れずこゝえ死する口惜さ。は推量遊ばせア、痛々と顔顰め涙を流すぞ不便なる。若者共打笑ひ、然れば何國の谷もなし、むだ／＼と凍え死なんより、源氏右兵衛の佐殿の手に掛つて成佛せいのサアお慰みに大袈裟を遊ばせ、我々は一の胸二の胸、毛脇提灯八枚め雪を土壇の試物、珍らしからんと闘くにも頼朝は仁心深く、無益の事は覺せども今は彼等が情にて、世を詔らふ頼朝なり氣に背きては悪かりなんこと笑ひ、さる事なれ共去りながら、熊猪の代りならば彼奴に竹筒の食事を與へ、力一杯送させばつめて討取るこそ、狩の學びの遊興ならめそれ／＼と有ければ、實に御尤サア今が最後ぞ、腹は裂ふが破れふが一生の喰徳、先餓鬼道は氣遣ひなしと酒飯口に押入／＼、走れ／＼とごよみをつくり手を叩く、むざんやな通れても通れ交野の疲の雉の、逃るとすれど足立す道ふつ膝行つ掻分けて、雪をば口に息繼の、うるほす咽も渴き果叫ぶに聲も出ばこそ、頼朝は只助けんと態と雪にふんごみ／＼、追付かねて見え給へば取逃しては不覺なり、お先へ廻つて打留よと皆谷々へぞ降たりける、頼朝は聲を掛けヤレ狼狽者、此際は何國へも逃て助がれ助がれと、呼はり給へば手を合せア、は恩徳有難しと、喜びても隠所なく七抱餘りの古木の楠の、うつほの洞にやう／＼と這ふ／＼助かり入にけり、頼朝空洞を差覗き扱深山の奇特とて、何千年にか成ぬらん斯る古木も有るものか、此空洞の深き事假令ば十人二十人、五日七日隠れんに誰れ知る人は有まじ、某一度義兵を擧げ、軍の習ひ敗軍すまじき物でもなし、是第一の隠れが敵を搜すたよりも有り、秘密の空洞木正八幡のほしめし、伊藤を始め近國の武士どもも、心未だ一致せず昨日の情今日の仇今日の味方は翌日の敵彼等にも猶包まんと、四邊の雪を掃寄て空洞を埋む頼朝の程、人君の器量備つて



六十餘州を手の内に、握り給はん常々の心掛こそ管ならね、斯どは知らず谷々より立歸り、獲物はと問ひければされば、既にばつづめ捕て伏せ、一討にせし所に忽ち年老狐と變じ、峰を超て飛失たり、流人となれば口惜や源の頼朝が、狐などにも魅さるゝと誠しやかに宣へば、伊藤會澤竹の下藤内藤五箇嚙をなし、エ、古狐のこつちやうめ、最前に打殺し皮引剥でくれんす物、無念千萬、ヤア此空洞木は心にくし、いでく入て捜せやと罵り騒げば頼朝重ねて、ア、狐の出入洞の口雪の埋まん様もなし、神通の獸なれば、空洞木共に狐の所爲、人を誑すも知難し、今日の殺生は頼朝が申受るぞや、麓に降つて今一献とくくと宣へば、實にもあつたら酔醒たり瓶子限りに飲續け、は供せんと献酬す若侍の血氣酒、上戸の腹の石橋山頼朝は空洞木に、軍理の工夫を得給ひて扱こそ山木が合戦に、命を免れ給ひしも、此空洞木に隠れたる、一時の慈悲も善心の、終には朽ぬ石橋山雪も、心も三重色深く戀の道にはむすばれ易き伊藤祐親が乙娘、藤の前は仁義を知り、忠節深き生れ付、佐殿は古のほ主筋ぞとかしづきに、影をも踏す跡にせず膝も直さず懇懇に、堅い女の何時の間にやはらぎ初し大和歌言葉のてには縁と成り、は寢室近く頼朝の胤を身に持つ青梅や、ぶらぶら病纏帯の、巡る日數も重りて七月にこそ成にけれ、父祐親は斯とも知らず嫡子河津の祐重、二男祐清を招き、妹藤の前が事、當國の目代山木の判官兼高より望まれ、早速婚禮有たき由度や使に預れども、姫が病氣抄々しからず延引に及びしが、此比は取わき、起居も重く見えれば急に快氣も有るべからず、生田法眼春樂は姫が合醫者、殊に領内の住人内外共に心安し、療治をも見立て祝言を急ぐべしと言ひければ、祐重承りさんひ、我々も左様に存じ法眼を召し候へば、遠方へ療治に参りし由、飛脚を以て呼返させ候へ共、先も大事の病人とて十日餘り相待共今日まで歸らず、外の醫者に掛られ然るべしと云ければ、祐親大きに氣色を損じ、我儘千萬なる

醫者めかな、我領内に住からは三日路五日路遠方に、如何なる病人有りとても打捨て歸る等、十日に餘つて遅參するは言語同断の慮外者、元首に細付て引摺り寄よと云ふ所へ、門外に四枚肩春樂お見舞、扱宜處と祐清は玄關に立出、ヤ法眼は出か、遅しとて父祐親以外の外のお機嫌、早ふくと促ても急ぬ醫者の心の長羽織、はうらく頭巾の縮緬袖伸々と座敷に通じ、此中は度々使下されてござれ共、寒天の時分なれば、彼處には疝氣が發つたは、此處には子が産れるは、此方の婆が二階から落られた事の、隣の家の子の妊る灸點してくれのと申して、一圓に寸暇を得ず、其上に五日路程、遠方へ療治に参り、只今罷歸つたと、言へども伊藤返答せず、姫君の病氣とは、如何様になんと尋ねれ共、猶顔揺て應對はず春樂元來一徹者、伊藤殿のお召と聞き、とつかはとして参つたが、人違さうなと、佛頂顔にて立んとす祐清見かねて、仔細を聞ずは道理、父祐親は貴殿のほ出遊しと有る當座の恨、其斷り申さるれば濟事と云ひければ、是祐清殿、慰みに醫者は致さぬぞ、春樂が匙一本で、照ても降ても十二人口糊ねばならぬ、伊藤殿に我家内、養ふては貰はず、藥代取ると見付たら、琉球へも渡らいでば、領内に住むと思ひ、陸尺共も我等も、道中の十文盛挿込ばかりで、宿へ着ても藥師如來ぞ茶も喫すに駈付た、此上のお恨みはせふことないぞと吐きける、伊藤眼に角を立てヤア辯舌過た法眼、醫者の慣ひ遠國他國へ行は尤も祐親が用とならば先を振捨て立歸るべき道ならずや、使を受けて十日餘り逗留せしは祐親を、疎略にするにあらずやと席をうつて怒れども、春樂少しも謝辭す、扱は存知なさうな、此度は三河の國矢矧の長者の一人娘、淨瑠璃は前の氣色療治に参りしが、伊藤殿より急なるは用歸らねば叶はぬと、達て斷りやせ共母の長者合點致さず、伊藤殿は大名でも押もおされもする身でなし、源氏左馬の頭義朝の八男牛若君、今奥州にて九郎義經といふ人を、聲に持たる長者なり伊藤の姫君藤の前は、頼朝と夫婦と



聞き互に源氏の相嫁。伊藤の姫が大事なれば長者が姫も大事なりと。理屈詰に止められ夫故の逗留。いかなく此春樂不調法は仕らぬア、言ても下さるなと張肘して居たりける。祐親くわつと腹を立ア子共あれを聞け。何條矢矧の長者めが。伊藤とあひよめなんごは緩急過たる言分。惣じて遠州濱名三河の矢矧此兩所は。平家より加増あり十年このかた。祐親が知行にて長者も我が百姓ならずや。此一兩年長者めが年頭八朔藏納。百姓並の禮式も無禮なりと聞けるが。牛若とやら猿若とやらんを智に取たる因源な。彼の頼朝は昔の交誼我が慈悲心にてかくまへしに。婿よ嫁よと籍名を立られ平家の谷。山木が方への聞えと云ひ皆長者めが言觸す。田地を取上げ知行所を追拂へ。證人なれば法眼お手前も利は遁れぬ。早々矢矧へ使を立よと氣色變つて見えければ。嫡子の祐重進み出で仰にはひへ共。若し姫と佐殿と夫婦のかたらひ實にては。世間の沙汰も偽ならず却て此方の疎忽なり。先暫くは隠使然るべしと制すれ共。いやくそれ叶ふべからず頼朝を婿にせば。長者輩と縁者に成り一門の參會にも。さやつらと膝を組まん事。伊藤の家の瓊瑤なり我娘から穿鑿せん。局はなきか姫を是へ連れ來れと。討ても捨べき顔色に歸られもせず折悪く。参りかゝつて法眼も配劑仕かねて見えにける。局奥より走り出姫君様の行儀の。悪いとやする妾が科氣の細い上臈の。氣合に障れば一大事。先重ねての詮議とことを分てわびけれ共。いやく姫が身の難雪く事隠するは心得ず。ム、扱は頼朝と忍び會ひしに極つたり。病氣と云ふも懐妊ならん。法眼に脈取せよ早ふくと責付られ。局も今は詮方なく奥に入れば姫君も。スハ死ぬる瀬か生る瀬の産より怖き親兄の。よし不興は受くるとも胎内の兒の親は右兵衛ノ佐頼朝也。陳するたけは陳じて見て叶はぬ時は佐殿の。お名に疵は付まじき卑怯は捌くまい物と。思ひ詰てもたよりなく女房達に手を曳れ父の前にぞ出給ふ。伊東は目色を見て取つて。サア法眼假令は邊が勞つても。

外に醫者も有るもの後に知れては其方が。首を取るぞ偽なしに早や脈とつめかくる。姫もこゝは大事ぞと幼少からみづからが。地脈は其方が覺えてぞ疎忽を言ふては頼朝様に首取らる。能う分別して脈取りやと苦々敷宣へば。流石の法眼手もふるひ。浮中沈の三考も。心肝腎も命門も右に有るやら左やら。病人よりも醫者殿の。脈打斷るばかりなり。然れ共心を押鎮め。何と頭痛の氣味有つて。ぞんぞと寒氣などは参らぬか。いやくべつに左様の事もなし。ム、ウ。食に變る事もなく酸物などを好はないか。いやくそうした事もなし。ム、ウ。胸先へ時々ぬつと突上。臍の邊を滑々とならつく儀などは坐なきか。フウ瘡は持病の事なれば苦にもならずと宣へば。然れば先は懐胎ともやされぬ。然らば脈と合口脱き採手をして。ハアウム、ウと目を閉き。六脈靜に考ふれば浮大にして活々と溢れたり。南無三寶娘と言んどせしが待暫し。言へば姫の恨あり言ねば後の不調法と。頭を傾ければ伊藤親子片唾を吞で目をはなさず。姫君は神佛醫者の心に入換り。憐み給へと氣も亂れ脈も狂へば法眼は。右を取替左へ替只ハアウくとひま取て心を碎く危うさよ。父の伊藤突と立ち法眼をつきのけ。己れは姫をかばふよな。此事平家へ聞えては伊藤が家の滅亡。娘が大事か國が大事かいで。實否を糾さん。娘の袖に手をさしいれ頼朝つかんで。扱こそ。懐妊に極つたり。片時も是には叶はぬ産月までは法眼に預け置。其方にて平産させ其後山木の判官。兼高に縁邊組み世間の口を閉ぐべし。我娘さへ斯くする上は領内の矢矧の長者。義經を智に取る事平家の谷某が言譯なし。使を立て淨瑠璃姫とやらんを駈と追放せさすべし。法眼は一先藤の前を連歸れ。頼朝がせがれ胎内に有る中は。局は勿論腰元の一人も附事は叶はぬぞ。サア女郎め其處立ぬかとなめつけられ。あいやくと云ふ聲よりも涙ぞ先に出そめて。親の名残も身のうさも。何のまよと流せども。佐殿の此事のみ心の底に滯はり。暇乞さへ叶はねば。よそごとに託つけ



て母様へも。何方へも宜様に頼むぞや。只さへ産は女の大事心に苦を持つ自ら。よも生んとは思はれず。今日が此世のさらばすと。予して給やと計にて聲をも。たてず泣給ふ。二人の兄も妹を。不便とは思へ共になり切たる親の顔。腰元局聲々に法眼様頼みますと。泣叫べば。人を助る道なれば。是も療治の中なりと我のりものに抱き乗せ。陸尺共と呼ばれども皆喫飯に歸つて草履取の三平ばかり。よい／＼おのれ先肩昇け。後肩は此法眼と坊主天窓の陸尺づゝみ。手先を揃へておつと肩を正氣散。腰を据てははい／＼。排毒散の風薬是ぞ。汗かき乗物昇き裾を擲けて行足の。灸も道も三里半飛ぶが。如くに歸りけり

下之巻

國を療治の流行醫者法眼が薬飲む人は。長生不老門前に薬代禮物もちせきて。薬ごしらへ暇もなく。弟子の春甫が薬研の音。くばら／＼賑ひ忙はし。春甫粉薬かきまはし。女房共はのらく／＼と何處にのらをかはいて居る。醫者の女房に成からは歸うたり刻んだり薬拵へせねばならぬ。粉薬が急ぐ來て歸へとぞわめきける。ハテ何じやいの姦ましい。藤の前様の御用がある。是も主のは奉公此方は醫者の女房此方は直に醫者でないか。いつがいつ迄薬研おろしつ白挽いつ。それで拵が明ますかお師匠なりは主なり法眼様の手助け代脈にも出る様に。學問をさつしやれたらよかりそふなと言ひければ。ヤイ學問ばかりで濟はせぬ。醫者は機轉が第一じや學問の事なら言て來い。大成論格致論。素問靈樞十四經。入門難經脾胃論脈論運氣論。萬卷の書に眼を隠した此坊主。醫者は見掛に依らぬぞ對の陸尺乗物が。煎じて飲む物でもない。一僕連ぬ我々でも藪に功の者。何な大病でも仰付られ。活すか殺すか何方へぞ驗は見せ

ふと自慢する。ハア措て貰ひましたよあの頼朝様とやらは醫者心はなけれ共。藤の前様と假初の契りに。まんまと孕せ物の見事な若君が生れた。此方と妾とは旦那様の媒約で。順て三年添けれ何とやうな療治やら。はらまする事もならぬは定めし如才も有まいが。地體こなたの匙先がゆがんだそふなと云ければ。ば。やれ子の娠ぬはおのれが科よ。芋や牛蒡を見をらぬか。何程種が能ふても品にかなげの有る所は。何ばふ時でもそだ／＼ぬ。こちも牛蒡同然。時ても／＼そだ／＼ぬはおのが何處ぞに。銅の。吹屋が棧んだそふなとて。夫婦ごつとぞ笑ひける。此聲に藤の前障子押開出たまひ。さけばは身達子がほしいこの願かや。みづからが身と代りたや。法眼のお蔭にて玉の様な男兒を。安々と分婉せしに平家の聞え有ばとて。父の爲にも孫ならすやいとし盛りをなさけなく。松川の水底に伏濱に沈めたまふ。是よりは方々の子の無いこそは増ならぬ。此上に山木の判官兼高へ。縁組との事なれ共。か様に氣色重ければ。何時までか法眼や方々の苦勞ぞと打しをれてぞ仰せける。春甫は氣輕に打笑ひ。ア、お氣の弱いの。子の五人や十人は地ぶくさへ能ければ年々にも出来る事。兎角畑の荒ぬ様に氣をわつさり成次第。よろづの病は心から一寸先は開の夜。浮世は一分五厘づゝ。人參入て上たらば本復とぞ申しける。斯る處に法眼は歸りと呼ばれば。春甫が女房迎ひに出。乗物蒲團藥箱床に直しつ衣桁に掛け。姫君のお供して奥の一間に入にけり。法眼四邊を見廻し春甫を招き。藤の前のは容體如何有ぞと問ければ。然ればは顔色物ごしまで。只當分の物思ひに氣の滯はりと存すれば。香附子などにて血を開き。順氣のは療治然るべしとぞ申ける。法眼首を振ていや／＼輕症にてなし。家傳の名法有りと箆筒の内より。二重箱の一巻を取出す。是ぞ秘密の薬法。此通りに一服調合せよと差出す。春甫つらく披見して。ヤア此薬味は残らず石藥韓薬に。毒蟲などの法組は毒薬にては候はぬかと。云せもはてすア、音たかし／＼。如何にも毒



藥則ち藤の前に與へて失ひ申す毒なれ共。某は師匠より、毒藥調合致すまじと堅き誓詞有ゆる。法は傳授受ながら匙とることとは叶はず。其方には誓詞も書かせねば匙を取ても苦しからず。調合せよといひければ春甫は猶も不審顔。して姫君には何恨み何利有つて毒害は遊ばすやらん。ア、不審尤。某に對し恨も利も更になし。姫君の母は繼母なるが、山木の判官兼高は大名と云ひ當國の目代、彼に繼子を縁に付世にあらせんは嫉し、毒害して呉ふならば金銀財寶、倉一箇所を打あけんと頼なり。老衰の此法眼朝から晩まで乗物に揺れ、夜とも言はず引起され、雨にも風にも國中を駈廻り、苦勞をするも本望ならず。此姫君を失ひ其禮物にて療治を止め、永からぬ一生を樂に暮す思案にて、請合たる毒藥師匠の奉公此時ぞ。早々調合願むとこまなくと語りける。春甫涙をばらりと流し、情なやお心に天魔が入て候なり。尤老後を安樂の御望みは尤ながら、醫道に限らず世の中の人の爲になるもの、苦勞せぬは候はず。人の爲かと存ずれば却て我身後世の爲、善惡共に報のめぐりくること、藥のめぐるより猶早し。天爵と申し母御こそ繼母なれ。伊藤殿は實父なり洩聞えて伊藤殿の、御符通れ有べきかとつくと御思案候て。思ひ止まり給へかしとむせび入て教訓す。法眼はつたと睨んで、おのれが言分皆法眼が知つたる事。天爵當らは匙をとつたるおのれにこそ當るべけれ。伊藤の符有るとてもおのれを取つて落さん爲、調合を申し付く扱こそ師匠の奉公願むとは言ひつるが。但我身をかばふかと面色變て言ひ暮る。弟子は泣々聲を荒らげ、いよゝ情ない師匠やな。師弟は親子と申さぬか。弟子の難儀にかはる程の心こそはなくとも。我科を弟子に塗る無得心や候ふべき。かほ慈悲心なき師匠に孝を盡して面白からず。毒藥の調合はふつと叶ひ候はずと申切てぞ泣居たる。法眼溜息ほつと吐、ハア世俗の醫に言ふごとく。咽元過て熱さ忘るゝとは此事。おのれが口から法眼を慈悲心なしとは畜生の。五年以前を忘れたか。一年某下

總へ、療治に立越歸るさに石橋山を通りしは、極月中旬併も大雪。切程寒き寒天におのれは襦袢を身に纏ひ空洞木の中よりよろりと這出、世にも人にも捨られ便もない業人。長々脚氣を煩ひ其上此寒濕に腹を痛み、今を限りの命なれ共雪より外に口を潤す物もなく、今生よりの餓鬼道お醫者様の御慈悲に軒の下にて死する様に御憐愍願み奉ると。泣叫しが不便さに、持せし着替の小袖を着せ、乗物にはおのれを乗せ老體の某は、雪の中を徒跣足宿へ着ては看病人を附置き、衣類食物起臥まで我子の如く勞り、千服計の藥に朝鮮人參三斤半、二年目に本復して以前より達者に成り、鬼ども組んど悦びし其間の心遣ひ。法眼は慈悲を知らぬよな。ヤア是でも慈悲を知らぬか。親類も知音もなく行方もなしと云ふ故に。弟子となして醫道を教へ數年使ひし腰元と、夫婦になして其の如く腰のまはり身のまはり。是此法眼に何處違ふ處がある。年來の御恩徳此世にては報じ難し。一生の大事は命に代らんと幾度かぬかせしぞ。己れに禮を受けんとして懸たる恩にはあらね共、慈悲心なしと云ふ故に事新しき線言。サア法眼が慈悲を知らぬか。おのれが恩を知らぬか根性に問へと云捨て、突と立て入んとする師匠の羽織に絶付。ア、眞平あやまり奉る。恩は更々忘れぬとも惡事の意見やさん爲。言葉過せし勿體なやおゆるしあれは免あり。身は八裂に裂れ八萬地獄に落るとも、毒藥調合致すべしゆるさせ給へ御師匠様と、羽織の裾を顔に當てしやくり。上てぞ。歎きける。法眼も聞入て、尤々其答と。又一箱の錠を開け、藥種をまく、取出す春甫は書物に引合せ。毒の品々調合し思へば此匙は劔よりも怖しき。科なき人を殺すぞと涙も共に包紙。女房々々と呼出し。是姫君の加減のお藥。生姜入らずに藥鍋を北向に、頭煎じ計を早々あげよと言ひければ、ア、お目出度や追付御快氣なるべしと。何心なく走行く法眼見送りサア仕濟した。毒藥五體に浸渡らば苦痛有ん其時に、報せを待ぞぬかるなと調合の、間に入にけり。春甫ははつと氣拔



して夢現とも辨へず。忙然として居たりしが、誠や人の恩を受。此世にて報せざれば未來生々五百生。筋をぬかれ皮を剥れ。取返さるゝと傳聞く。師匠法眼の廣大の御恩は。只今命の用に立百が一つも報すべし。先年石橋山にて討るべきを。頼朝公の情にて空洞に命を助りし。此御恩を報せぬのみか最愛の姫君に。毒藥を盛る此惡業仇を恩にて報するところはいへ。恩を仇にて報するとは何の道にか有べきぞ。一百三十六地獄地獄々々を尋ても。此罪科に對用する地獄とははよもあらじ。淺まし罪業やと。思へば心遺瀾なく身を揉み。歎沈みしが。ア、由なき悔み言身を助からんと思ふにこそ。姫君の御藥飲込み給ふを合圖に。此比首腹に突込み冥途の旅の御供し。生て師匠の恩を送り。死して頼朝の御報恩に供へんと。目を押拭ひ比首拔持。障子の隙より差覗けば痛はしや姫君は。今殺すとは知り給はず花見小袖の雛形を。手づから書ておはしますは有様を哀れなる。女房藥を煎じ上げ。是は法眼と妾が夫。師弟談合の加減のお藥。いざあがりませと出すにぞ。嬉しげにこゝと。此御藥にて本復し春は花見に往ふぞや。其方と我が小袖の模様に揃へるは見やと。藥頼みに未だくみ。是ぞ冥途のよび使ひと知り給はぬぞ痛はしき。春甫は御最期只今ぞと口に御經目に涙。すはやくと待つところに姫君藥を飲きて。喉に通ると見えけるがあら心惡や眩暈や。胸痛やなふ苦しやと顛倒ある。女房驚き懷抱へ法眼様春甫殿。ちやつと〜と呼ばれば。春甫は是に在り。六道の御供と。比首腹に突立んとせし處に。法眼驅出でいや御供は某。比首振取突立んとする所を。又縫付き毒藥の匙とりは此春甫。我ぞ死んや我こそ〜と。捻合々々終に師匠に振取れ。なふお師匠様まだ腹立が止ぬか。我に死なせては厚恩送らせて給たまへとごうと伏して泣きければ。師匠は弟子の心を感じし涙に暮けるが。怒に耽つて法眼が毒藥をもつたと思ふかや。恥かしや繼母の頼みと云もいつはり。悉くも源氏の大將頼朝公。枕を並べは子をなせ

し最愛の姫君を。平家の侍山木づれが奥よ妻よといはせん事。末代の謗り氏の瑾。は父義朝のは臺常盤は前も。清盛が妻と成てこそ憂恥を見給ひし。我等が先祖も源氏のは家人。骨髓に徹つて無念なれ共。親子し所爲は詮方なし僅の女性一人に。源氏の名を流さんより。は自害を勧めんと思ひしかども。は心をはかりかね扱こそ毒藥もりしなり。されども藥方相傳のとき匙を取つて調合せば。生々の父母を永劫奈落にしづめんと。書いたる誓詞に兩親の業苦のほどの悲しさに。匙は汝にとらせし毒害せしは法眼。源氏の恥辱雪ぐからは今生の思ひ出。主君の妻に毒を盛り其科を弟子に塗る。法眼にてはなき物を冥途のお供迄もなし。先ばしり致さんと。突込まんとする手に取付て有難きは心。去年らそれは師匠の道立つて。我等が弟子の孝行立す。此上の御恩に春甫に死なせて下されと。師弟心を感じあひ不覺の涙はせきあへず。今を限りの藤の前苦しき息の下よりも。頼母しの人々や。假令自ら千年百年ながらへても。をつとに恥辱を取せて何の生甲斐有るべきぞ。山木へ縁に付くならば一日も生きまいと。豫て死に身に極められたれば此毒害にうらみはなし。自害を思ひ止りて頼朝様をみついでたも。淨瑠璃御前と義經様と中さかれしも父のわざ。自ら故の事なれば此二つを頼み置く。頼朝様へも言ひたいこと數々ながら最う耐らぬ。氣も遠なる目もくらむしだい〜に聲よわり死んで給んな〜と。夕霧くらき短夜の。宵の夢ぞ消えたまふいたはしかりける最期なり。師弟はなをも義を重んじいざ此上は。一人残つて遺言守り一人は是非死なん。實に我死んと死を争ふ女戻涙にくれながら。御遺言重ければお二人を百人にも。仕たいはごなる大事の身。死なで叶はぬ義理ならば在て益なき女の身。われこそと言ひも敢ず餘りし毒藥つゝと呑む。是は〜といふひまもあら苦しやと身をもたへ。五體變じて。紫に眼をみつめ齒をくひしばり。ぎやつと計を最期にて同じ枕に臥しければ。物に動せぬ弟子師匠。二人の死骸に抱付き前



後不覺に、取亂し大惑る。上て歎きしはことわり。とこそ聞えければ、ア、我乍らうろたへたり。伊藤が方へ聞えては君の爲如何なり。先なきがらを葬り佐殿を密に落し参らせ。北條の四郎時政をたのみ。謀反勤め奉らんと忍びくのはかりごと。扱こそ頼朝の代の後この師弟に恩賞深く。法眼は醫道を以て忠ありとて醫法とめされ。弟子は義を以て誠ありとて義法とめされ。頼朝の膝下去らず。醫法義法の法師武者名を千。歳にぞ。三重揚にける其しらはたに。したかひて坂東八箇國頼朝の手に屬し。討てのばり給ふよし奥州に聞えしかば。九郎の曹司義經秀衡がもよほしにて。奥勢十萬餘騎を参らす。義經は悦喜淺からず頼朝の見参に入。代官を蒙るまでは物の具憚りあるべしと。供の上下残りなく鎧の上の伊達小袖。兜を脱いて太元結鬘付縷子びん天鷲絨脚半。駒もいばふる樹の音しやんくくと振出す。七つ道具に六つ武藏辨慶は押の役。八つ鎧持挾箱持鎧持弓梓弓。引もちぎらぬ行列は柳を手を門出や花の。都に。三重のぼらる。彼紫の。ゆかり求めて杜若三河の國に陣を召され。蜂の薬師に參詣立歸らんと仕たまふ處へ。淨瑠璃御前の女房達有明更科そつすけ。空さへ月さゆ千壽の前。長柄の銚子土器。蓬萊の島臺たづさへ母の長者。上洛を待うけはかごいでを祝ひ申せとて迎ひ参らせし。目出たく聞しめされよや千秋樂とぞ祝ひける。義經聞きたまひ只今それへと思ふをりから義經が好物とてれきく色ある女房達。使ひにたまはる段かへす。満足。追つけ参つて淨瑠璃にも對面せん。おのく先へとのたまへば。有明更科うけたまはり。さては存知ひはぬか。關東の目代山木の判官地頭なれば。伊藤の祐親より吟味厳しく源氏方の縁組を堅く改めやす故。淨瑠璃は先しばらくは通世と披露して。あの谷かげの庵室に忍びてはいりひらへば。此たびの下山ははつししみましくて。やがて目出たく平家をほるばし。凱陣の時分は。世間廣くは對面それを心のお力にて。戦に打勝ちた

まへや先づは銚子といひければ。義經おどるさいやくそれは誠しからず。行末知れぬ源氏なれば。時めく平家の大名に引つけられし矢矧の姫。一夜に變る淵瀾こそ大和に有ると聞けるが。いつ東路の飛鳥川。そこの程の悪さよとらみ。くづをれたまひける。



かゝる處に。年のよはひ三十餘りの尼二人。花の帽子に五條袈裟こきすみ。ぞめに。身をやつし。ひだりには花籠めてには珠數をつまぐりて。曹司のお前問近く。参りつ。涙に物を語らせて。さしうつふひてぞ居たりける。曹司はは覽じて。あれなるは冷泉か。十五夜にてはあらざるか扱も。久しの。冷泉や。扱淨瑠璃はと問はせたまへば。二人の比丘尼うけたまはり。目出たきはあづまの殿。扱つたなさはわらはが君にて。とめたり。身吾妻へ下向の時。まだ音もなれぬ蟬をれのひとよ。重ねし妻琴や。又は駿河の國かんばら宿の約束が。伊豆の伊藤へもれきこへ。日は五十人夜は百人の番衆をつけ。いづくへ成ともまされゆけや。淨瑠璃と日にく。たびか。つかひた。つ。今はせんかた嵐ふく。蜂の薬師のさくだにて人も通はぬたにかけに。竹の柱や松葉垣。しばの。編戸に。引籠り。里の便も聞ざれば。池の真菰を片敷のはたへを隠す。若衣さはへに。下ては根せりを摘み。山田の畔に落穂を拾ひ繁ぐ。命の。うき三どせ。今やたより今やびんぎとまつよひの。夢の通路たえはて。曹司戀しやとそ戀風がつもり来て。無常の風のやまふのとこつひに果敢なくなりたまひ。あのさくだにの若木の花はちり果て。跡には名のみ有明の十五夜れいせいが身の有様。是は覽せとばかりにてかつばと。伏して泣ければ。有明更科そつすけ其外の女房達。何を隠さん我々も君を祝ひ参らせて。かくはいで



たちひへ共、變し姿をば覺せよと補檻とれば墨の袈裟、柳の鬘人髪は、解けて亂れてさんぎりの哀れ悲しき有様に、扱はまことか不惑やなせめて今はの遺物ぞと。二人の尼にすがりつき聲も、惜ます泣きたまふ痛はし、かりける次第なりや、あつて義經、せめて亡人のしるし成りとも見せてくれよとのたまへば、あの卵塔ころは墓所、亡骸を灰となしは骨を納め、一とせ君と添寐の夜のは肌着をはたに縫ひ、土中にこめ置きひなり、いざは案内やさんと、なくく谷を分過て、卵塔開かせ水手向けしはらくは回向有りけるが如何に方々、思へば淨瑠璃は我出陣の守護神とおぼゆるぞや、人間の習ひ恩愛執着に命を惜み、思はぬおくれも取事あり、さけば兄頼朝の妻伊藤が娘も死したるとや、兄弟浮世に執着なく一命を輕んじて、平家をやすく滅ばさん天の示しありがたしと、女人成佛の提婆品たからかに遊ばし、忽然之間變成男子と讀上げたまへば、不思議や五輪飛碎けて光明赫々たる其中に、衣裳の旗へんはんとて成佛の相を現はせしは、三重有難かりける經力なり斯る處に、武藏坊辨慶龜井片岡伊勢駿河追々に駆來り、右兵衛の佐殿は、浮島が原に在着陣のよし、はやは旗を立られは發向然るべしとぞすける、こそ只今つる吉左右はこれなるぞ、兄弟見參はじめぞやいざ花やかに出立つべしと、は馬ひつたては弓張りは旗竿をおしたて、は旗付んとせし處にあら有難や、墓に掛りし佛のはたひらりとひらめいて、旗竿に掛ると見ぬしが小袖の模様旗の手ははらりと落散つて忽ち源氏の白旗に、藥師の梵字ありくありがたしく、藥師は東方源氏も東國、日本もとより東の國土西海四海の敵をはるばし、源氏一統は代萬歲五穀豐饒の日の光、君が威勢の恵みによつて、光りを添ふる淨瑠璃の魂の、徳こそ目出たけれ

天智乙皇

思無邪の三字は神拜の元本、母不敬の三字はさいてんの至用、神を祭ること神のおますが如くすといへり、かいこそ和田のそこづをつたへくし秋津は代、君たるかな齊明天皇めぐみもひろきさなみや、志賀の都に皇居あり、神國のまつりごと怠らせ給はぬ中にも、わきて當國江州の一神白鬘大明神を、はそさやう淺からす橘の右大臣、富房公を勅使として百味の、は供を献せらる、勅使わらふたに着きたまへば、しやそうは經の紐を解き乙女神職宮仕達、山海の高盛七五三五々三、大みきく物てんぐすれば樂人「しちくを奏しけり、時に不思議や塔の蔭より翁姿の神さびて、は供の飯をぞ服しける人々はつと驚き、明神感應ましくて拜まれさせたまひぬと一度に、禮拜謁仰す、右大臣富房あざわらはせ給ひ、それ神は慈悲を以て正體とし、敬を以て食とす此有様は心得ず、食にかつへし神ならば人を守る力はあらじ、いかさま天狗の所爲ならんそれ引出せと宣へば、執權金輪の五郎今國小腕取つて見てあれば、六十餘りのやせ男腰抜けたるにぞありける、おのれ何者を眞直にやせ、少しも陳せば曲事と聲をあらへげ云ひければ、此翁ふるひく、さんひるれがしは狩野の氏久とす繪師にてひ、このたび帝より五畿内の美女を繪にかきて參らせよ、形を撰み第二の宮葛城の大君の、は后に立られんとの宣旨下りしに、は兄逆目の王子某を召され、右大臣富房公の娘花照姫は三國一の美人なれども、仔細ある問題女にかきてまゐらせよ、異議に及ば、害せんとありし故、是非なく繪にかきひへ共重ねて人に語らんかと、足の筋を切つて此島に捨られひ、理非をばいかに白髭の、神も佛もなき世かと語りもあへず泣きあ



たり、大臣横手を打ちたまひ、花照姫とはそれがしが娘なり、逆目の王子執心あれども放逸の悪黨故、  
 弟葛城の大君の后に奉らんと願ひしを、嫉みてへんしうと覺えたりおるかなり、穿鑿するは安  
 けれどもしかれば事を好むに似たり、先づ穩便、後日の證據に其男密に宿所へ具しかへれ、扱ては神  
 事おとなはれり六根清淨たよりなさるな、神ならば神と幣帛とつて拂ひ給へば管弦の、調子めでたき琴  
 瑟の海夜遊の、舞樂ぞ、三萬ありがたき悉くも、齋明天皇と奉るは、舒明帝の后女性ながらも十善  
 の位を即ぎ、今年六十の髪は雪消えせぬ中に位を、譲らんとは思すれども、一の宮逆目の王子は人  
 相野人は心ひすかして、國王の器量ましまさねば、二の宮葛城の大君に東宮の宣旨あり、畿内の美女を  
 繪にかゝせ後さだめの花くらべ、こうれう殿に出御あり、御覽「あるこそやさしけれ」

おんをろ

先づ一番は豊原の百枝が娘二位の君、驪山の春のにはひ水、膚の艶のあたゝかに、夜半の初床引しめて  
 寐てもらひたき面影や、目元威たかき、眉ぐもり、笑ふが如く見えにけり、次にかけては良岑の千  
 古が妹、春風といふ女いかなる繪の具何筆に、うつせばうつす、かほばせは今咲出でし、はつ櫻、新お  
 はぐるの鳥羽玉も、人の心を暗になせとや迷へとや、ア、しづめとや、誰か氣まゝに書きなせし、筆の  
 すさみも嫉ましと、しばらく眺め給ひけり、さてまたつぎは中納言、關尾が娘明石の君、近江の兵衛が  
 卯の花山吹はらからの美女、紀の康宗が乙の姫、八重といへるはいとけなき、振分髪のみだれても、こ  
 ろちらさで、一すぢに、いつこの殿か下紐をむすぶの、神の神心、かねて聞きたし問はまはし、第七  
 番にかけたるは、おほの、長者が養子しきぶの前雨を、帯びたる常夏の、風にめさます笑ひ顔、縁の

ふさびん嬋娟として、八字の細眉をんでんたり、實に三千のこひ草も、色香うしなふためしにて唐の虞  
 氏君王照君貴妃李夫人をうつすとも、此上はよもあらじとつや、見惚れたまひければ君をばじめ奉  
 り、伺候の女官かんだちめ末世の美人これなりと、のめきさゝめき給ひけり、道の末にかけたるは、  
 橘の右大臣富房公の息女、花照姫と名にこそたてれ、色黒く才高く誰かあぐべきつくも髪、花のあた  
 りの深山木とおのゝとつとぞ笑はる、天皇大きに驚かせ給ひ、まことや此姫は三國無双の美人、葛  
 城の大君の后に立てんと望みし故、朕がいとしき思ひ子の一期ながむる花なれば、人傳にては覺束なく  
 此姫ひとり見んために、今日の會をば催せしに見るもいふせし淺まし、人は偽はり頼まれずと逆鱗し  
 きりに見え給ふ、かねてたくみし逆目の王子、思ふ盡にあたりしと笏取直し申さる、は、かりそめの儀  
 にひはず、そも、和漢大臣の位たる身は君をいさめ、國家の龜鑑たるを以て槐樹當職の規模と仕る  
 何ぞや右大臣おのれが娘を後に立んとて、かゝる悪女を美人といひなし天聞をかすむる條、多罪よん  
 ごころひはず早く右大臣の官職をけつり閉門せしめ、此かけ繪を都の大略に曝し、萬人の見せしめに供  
 へられ然るべしとぞ奏せらる、母みかどは逆鱗の上理非に及ばず、それ、檢非違使に任せてきつと  
 計らへ方々ど、は氣色かはつて龍顏に、紅葉を散らす唐錦玉だれ、深く、三萬入りたまふ、勅にまかせ  
 て、坊門の車大路に竹垣結ひ、姫の繪圖をば曝しける、往來の老若男女芻蕘のもの稚鬼の者、柴賣る賤  
 も立とまり、面體とりなり斯る悪女もあるものか、うらゝは山家ものなれど此上郎にくらぶれば、我は  
 天人菩薩顔身をば捨てまいものなりと、指さし笑ひ通りしは稀有の「瓊瑾と聞えけるあら痛はしや、花  
 照姫此よしを傳へ聞き、口惜し、悲しやと、殿を忍び走りつぎ、かけ繪を見れば我妻憎やきたなや、は  
 いかほど、二目とも見やられずしはし、呆れておはせしが、や、あつて聲を上げ給座言とは云ひながら



いかなる仇にかほご逆悪女には書きたるぞ。定めてこれは大君の器量めでたくまします故。いづくの女か心をかけ妾を嫉みし業ならめ。いかに我戀をかなへんとて。女はあひみたがひぞやあ誰しもよの男は持ちたいもの。此恨みいかせんとかきくご。きてぞ泣き給ふ。めのとこの金輪五郎あごより駆けつけ。エ、はしたなし姫君様。我君大臣公只今白髪より下向あり。此繪の筆者を見せられひ。證據をもつて穿鑿しは耻辱を雪がんに。先づお歸りごせせごもいや洛中に耻を曝し。此上は生甲斐なし此まゝに兎も角もと猶泣き叫びておはします。かゝる所に萬城の大君の幸なりと。先をばらひ細代の御をめぐらし。は能たかくとかいげさせさんごめかいて見えけるが。此繪をちらとば覽あり。あないぶせ見苦しと袂を顔におほひ給へば。は供の官人等かゝる不淨の物は目にかくるな。それは與急ぎませいと足早に通ひけり。姫君かけ出では與にすがり付なふ大君様みづからは花照姫。餘りに酷きは仕方な情こそかたからめ。數萬人の目にかけて耻を曝させ給ふこと。恨みの上のは恨み。思ふ殿御に添はぬからは三十二相もいらねども。父母のめぐみにてあの繪のやうにはうまぬもの。よし假令みづからを深山の奥の猿にもせよ。女に心かけらるゝは男たる身の手柄ぞや。人に惚られ左程迄おはらの立つことかはと人目も。わかず口説かるゝ。詞づかひの色深く面體すがたのあでやかさ。雪と墨繪の筆のあと似たる所はなかりけり。大君與より轉び下り。さてはは身は花照姫か。まことの姿をつひに見ず不覺の振舞力なし。此上は母帝へ奏聞し耻辱を清め。今より鷹が枝折の名木の花てる姫と。手をとり給へば引放し。ひんど顔ふる目づかひや。涙にすこし面ばれし。地顔はいと美しや。然る所へ鍛頭巾に顔かくしたるあら男。數十人ばらゝと駈集り。あたりを突退け姫君を引立てんとする處へ。今國飛んで出で何者なれば狼籍と。反打つて云ひければヤアそれ討取れと呼はつて。大勢二度にどつと寄るすは事こそと供人

天智天皇

四

大君に引添ふて狼籍は何者と聲々にこそわめきけれ。ア、最早隠すに及ばずと。各頭巾を取りければ逆目の王子を大將にて。淡路のつぐなは竹知の川風なんごと云ふ。一味の悪黨五十餘人林のごとく突立たり。王子大音上げいかに大君。我汝が兄ながら母帝に疎まれ。帝位を受けざる無念の上。花照姫には某心をかけつるに。これも汝に奪はれ素懐空しくもださんや。とつく姫を渡せ。さなくば御邊はいふにも足らず。母帝をも失ひ大日本の王法を滅し。冥國となすべし。國の爲民のため身を捨つるは天子の徳。道をしるしを思ははとくく。姫を渡すべしと。兩眼くわつと見開きしはたい明。星の如くなり。大君涙をばらゝと流し。淺まし御有様や。此女御執心とひは。兎も角もにひへごも。妹脊の道は互に思ひ思はるゝこそ情ともやすべけれ。權威を以て召されんは下郎のしわざ。戀も色もあらばこそ。殊に此こと叶はずば母帝をも害し國を亂さんなんごとは。天罰は思さぬか其御心故にこそ。兄ながら御即位の御沙汰をも止められし。末世の譏は思さずと理を盡して教訓ある。いやさ仁義五常は聞たくなし。二つ一つの返事せよいかにとありければ。今國つと出でこれさ王子殿。御邊此度のたくみは繪師氏久が白状にて。悉く知つたれども。主君富房公道を重んじ穩密なるにあり難しと思ひ歸られよ。此今國めには悪い虫あつてどんな事は勘忍せぬ。びやくらい王子とは云はせぬと腹を張つてぞやける。ム、扱は必定姫をわたすまいな。をんでもない事ならぬ。いや丁稚めが慮外なり討てとれ承るぞ。扱つれてかゝりける推参なりと今國。供奉の人を左右にたて入ちがへてぞ。三重たゝかひける味方は長袖今國一騎火水になつて戦へごも。敵は大勢あら者なり詮方なくて今國は。大君姫君一つ與に抱き入れ下人にかゝせ。急ぎ歸れと云ひ捨て。王子をめかけて追駈ける。其隙に川風つぐなは駈來り。與昇共左手右手へ切たをし兩人の與を奪ひとり。二三町逃行くを今國さつと見南無三寶と。一文字にはせ來り川

天智天皇

五



風が高股を、斬つて落せばつぐなはは奥を捨てて逃げたりける。やがて奥よりおるしまゐらせ討れし下人の衣裳を刺ぎ、勿體なくはひへども是を召されて打出の濱へ落させ給へ。それがしは智略を以て王子を亡しあそとり追付きやさんと。笠打かづけ姫君大君おとし参らせ。其身は奥に入かはり討漏されたる下人等に。しかくといひ合ひれば心得たりと昇て行く。王子つぐなはは是を見てあれ餘すなごつと寄る。いひあはせたる下人ごもすこし支ゆる風情にて。奥を捨てて逃行くを四方八面にむらくばつと追散らし。走り歸てやれ長追ひすなく。姫大君は奥にあり此兩人を取る上は。本望く此上は大内に亂れ入り。母天皇を奪ひとり天下國家を手にとれば。天地日月神佛草木國土鳥獸類。恒河のうろくづ吹く風も。我が心のまゝなりと。躍り上り飛び上り天も響け地もひびけごう。ごう。くくくごう。みたる足。勢ひはくた王草駄天四天はんぞく王。提婆達多のいさはひかごみなおそれを。なしてしたがへり。

第 二

逆目の王子は奪ひ取つたる乗物を。今國とは夢にも知らず七重八重にからげ御館に歸り。奥の臺に昇き入させ下人を拂ひ。其身も束帶冠あらため奥に向つて是々大君。花照姫は今日より某が妻なるぞ。思ふ中を引分けられさぞ口惜しく本意なからめ。去ながらいふても泣いても叶はぬこと。兄弟のよしみには命は助けて得さすべし。姫もよふ聞かれよ。今まで手ひごくあたりしもそちを我手に入れん爲。戀には氣の急くならひ顔のさめこそおらくとも。女を可愛がることは大君にまけはせじ。二世までとけよ打解けよ解く問おそしとからみの繩。切はごさ戸を明くれば今國中より飛んで出で。力士立にぞたつたりける。

王子も呆れて逃げもやらず。誰かあると呼ばればつぐなははを始め青侍共。押取太刀にてはせ寄りしが今國さつと脱附れば。さうなくも寄付すあとしさりにじつと引き。ごつと寄れば脱みつけ脱まれてはじつと引き。よせつ引さつ四五度が程犬の挑むが如くなり。王子眼をくわつと開き撞鐘の如くなる聲音を上げて。やあく金輪人間はいふに及ばず。天地の間にあらゆるもの。此王子に向つて太刀に手をかけ。氣色せんもの鬼神にても覺えず。たとへば搦め取るとも迷惑ふべきに小童が。好んでこれへ來りしは抜群のしれ者。不敵とや云はん推参とや云はん。姫大君はいづくへ落せし眞直にゆせ。陳するに於ては。蹴殺してくれんす何とくとおめさける。今國ちつとも憶せず聞えぬ王子の一言かな。乗物にて承れば某を妻にせん。二世までとありけるが早くも變る飛鳥川。入幡それは無心中王子の仰は給言に等し。我ために王子は殿御それがしは奥さまぞ。ちつと濡かけやてあんすであんすと太刀抜くつるげつと寄り。ア、く寄るまいく人の機嫌も知らいで酔狂か狂氣か。しされくと云ひながら柱小橋に身を寄せ。用心してぞ憤りける。今國かつらくと笑ひ。扱無心中な殿御かな。但し心を引見ん爲か。心中が御所望ならば腕でも股でもつきやさふか。世間にはやる指切かいや。夫も初心なり。とかく此世は假の宿永き未來の契のしるし。王子と我とさしちがへ心中して繪双紙にのるささしと。疊をたき膝たき腹筋よつてぞ笑ひける。王子もほとんど奥をさまし。さてく聞しにまさる不敵者かな。凡そ夜を盡といひ天を地と云ひなしても。それがしが詞をかへす者天下にはなかつしに。さすが名に負ふ金輪にてありけるよ。若もそれがし運つきて露命亡ぶる時節來らば。此王子が首を取るべき者汝ならでは覺えず。ヲ、日本無双の勇士頼もしく。さりながら天運の往來は太刀刀の力にも及ばず。汝勢は勝つたれども運はそれがしに負けたれば。王子を討んなどは思ひもよらず。向後それがしに従ひ奉公せば。莫



大の所領を與へ主従水魚のちなみをなし。天下國家を治むべし。若違背に及ば、只今王子が手にかくべし。但しは姫が所在をやか三つに一つの返答はサア返答はと怒る聲法螺を吹きし如くなり。今國膝立直し首を下げ。ハア氏素性程はづかしき者あらじ。悪人とは云ひながらさすが長袖にておはするな。三三無双の無理いひわやく人と聞きけるが。此金輪めが勢に恐れ。とても敵ふまじと御覽じ奉公せよ召つはんなどうげたを預け給ひしが。然れば元來本性惡逆もなければ。追従表裏の佞臣どもが御尤く輕薄詞に育てられ。我しらすのかまご將軍御異見者なき故。是非もなし。憚りながら金輪めが勢を取つてやべし。惣じて人の病と申は身を苦しむる敵なれども。敵なりとて病にあらくあたる時は病積つて身を亡ぼす。かるがゆるに惡き病はなほ宥めて養生す。まつその如く王子の威勢強きによつて。人従ふにはひはず。人は賢く退いて通すを。恐るゝと思召す御所存こそはおろかなれ。君子は日に三たび我身を省るといへり。當座の權威にまかせ手前知らずの滅多的。日月の眼明かなれば。善は善惡は惡天道に依怙はなし。虞舜とせし賢王は父かたくなに母ひすかしに。象おそれりて親兄弟にくまれながら。ついに天徳あらはれ四百餘州の主とはなりたまふ。太伯は三たび位を辭したまふ。たゞ願くは惡念を離へし。大君を御位に即け給はよ孝といひ禮といひ。王子も天の恵を受け御末目出たふひべし。又このまゝ暴惡に耽り神明佛陀の冥感に背き。八苦八難の責をうけ給ふ時。金輪が謀懐しく身をかんで悔み給ふとも。後悔なきに立つべからず。是はごまでやさん者日本には覺えず。御父帝の蘇生らせ給ひても此上の御異見はよもあらじ。淺まし御所存や或はおとし或はなだめ涙を。流して諫めける。王子大きに氣色を損じ。エ、につくき汝が諫言存外千萬。是非兩人が所在をせさなくば其座を立せぬと。太刀に手をかけつゝと寄る金輪も膝を押立て。刀の鏝元くつるげ抜かば打たんすらば斬らんす氣

色にて。互に眼を左右にくばり息をつめたる有様は。鶏つがひ龍虎の精鬼と修羅との如くなり。末座に扣へしつぐなは見苦し。慮外者と。飛びかゝつて後より拜み打にはつたと打つ。ひつはづして襟髪どりくるゝと引廻し。とつて引敷き乗りかゝり。しや虫めらが推參千萬。悪人のそへこども金輪が手並もんばい見よ。首捻切つて立つ所を。王子すかさずしつかど抱く。だかれて金輪もつかみつき兩方大力押合ひしが。金輪が右の利足を板敷に踏みぬいて。立たん。くゝとする所を大勢折合ひ手とり足とり八方へこそ引張りけれ。王子悦び。でかした。心地よしと。太刀振上げて兩の腕をえいゝと斬落すは無念至極といひつべし。さあ此上は氣遣ひなし粟津が原にて首を刎ね。獄門にさらすべし日本一の剛者を。搦めとつたる此上は天下も王位も我物なり。酒の爛せよ殿ばらど悦び。おくにぞ入りける。今國大聲上げエ、口借し、力こそ高下あり。仁義に及ぶ力あらじと道だてして不覺を取りし。神にも天にもいつはりあり日月誠を照すとは。ヲ、見事てらされたり照したりよし。是も運のしやうれつ。おのれ王子めたとへすんゝに成たりとも。我身の肉に一寸つゞきし所あらば。魂魄そこに止つて三年とはたせまじ。よつく覺えよ思ひ知れと。につここと笑ふて引かれ行く所存の。程こそ。三馬おはれなれ實にや古語にも。繪のことはしるきを後と夕なみの粟津の里の片ほとりに。松岡の權太郎氏長といふ繪師あり。是はさんぬるころ美人揃への繪合に逆目の王子に殺されし狩野氏久が婿にて。男におとらぬ書工なれども。三年このかた兩眼盲ひ世にあひ難き石硯。筆を捨てたる身なれども。我ために氏久は師匠なり。眞なり。彼是のがれぬ敵なれば逆目の王子をうたせてたべと。潮水を結び垢離をどりの。天を祈つて立待ちしてゐるを。くぐだくぞ不便なる今宵も行法。行ひて家路をさしてかへりしが。粟津が原の木かげよりいさもの泣き聲にて。松岡くゝと呼ぶ聲す。ヤア夜陰に及び野中より誰かは我を呼子鳥。こたまに



てありけるよとそろりくと立かへれば。又松岡くしばらくとぞ呼はりける。いよく不審はれねども。聲に従ひ杖にまかせて辿りつき大音上げ。此廣やれる野原より松岡を呼ばん者は覺えず。盲目をかごはかし笑はん爲か。何者なるぞと云ひければ。ヲ、尤もく。我は花照姫のめの子金輪五郎今國と云ふ者なり。此度逆目の王子がはからひにて。不祥の死を遂げ。獄門にかけられしその無念骨髄に徹し魂魄頭にこりかたまつてしんいがうせい六根を苦しむ。やごの松岡頼むべきことあつて。詞をかけしぞいかにくぞやける。松岡きよつとして返答もなかりしが。稍あつてかつらからと笑ひ。扱ばかしたりく。やれ野狐ごも。兩眼こそ見えぬ胸の明鏡くもらぬぞ。獄門の物いふこと異朝本朝ためしなし。狐の人に用あるとは小豆の飯が所望か。稻荷の鳥居の飛びぞこなひとあざ笑ふてぞやける。いや是々全く野干の所爲ならず。萬物道理に二つはなしは分給かきの名人なり。墨繪の龍の水をこふも一念のとまる所。然らば獄門の首の物いふこと。不思議にて不思議ならず。これにも疑ありや否や。松岡はつと理に服し。げに是はあやまつたり四大は空にかへせごも。しきじやう天地れいくと朽せぬものよ金輪殿。承り及びしと立寄り首をなでさすり。さて痛はし。それがしが眞のために王子は重々敵なれども。かく盲目のことなればいひ甲斐なくや思しけん。後世とふて奉らん心安く成佛われ。願生菩提と回向すれば。エ、聞とむなき頓生菩提。それ武夫の成佛とは。敵を討つて本望を遂げたる所が彌陀如来。逆目の王子を討つまではなふいやの成佛やと。牙を噛んでおめくにぞ獄門の木はこがらしに。枯木の搖ぐごとくなり。松岡重ねてげに潔しさりながら。首ばかりにて本望を達せんとはいかに。ヲ、さればこそ頼みたきとは其事よ。我は首ありて體なし。御分は盲目首なきも同然なり。御邊が首をきつて胴を我に得させよ。汝が胴に某が首をつぎ王子をやすく亡しなば。御邊も本意を達するにあらすや松岡聞て

集巻標

集巻標

それこそやすき間のこと。しかし某が胴におん身が首にて。必定敵の討るべきしるしはなんとく。フ、如是我聞心佛及衆生。是三無差別汝も我もへだてはあらし。げに面白く。色即是空空即是色。ほんう一佛の因縁たり。飢たる鬼に身を與へ諸行無常のさとりを得し。それは佛體これは凡夫同じちかひは有明の月に輝く劍を抜いて。是々金輪。御身が爲にも我爲ども王子は敵の事なれば。頼まれ頼むみぢならず。庵に残せし我妻のさこそ歎かん不惑さよ。ひとへに頼むは是ばかり。たゞ今體を渡すぞと太刀とり直し首に當て。くくく。と押しければ。あへなく前に落つると見えしが。金輪が首は獄門の木より下に舞さがり。切口にとまりしは。鳥のおりある。三尊ごとくなり。忠孝と念力くはしき系八脈つうにうし。首の切目に疵もなく生れついたる如くなり。頭を撫でつ振つて見つ。ヲ、嬉し。有がたし。二世の本懐達すべし直に内裏へ駈入つて。まづ王子を討つべきか。松岡が妻に知らせんか。とやせんかくやと行きつ。戻りつ立つるつ思案も更に落付ず。松岡が女房は迎ひの爲に來りしが。つかくと立寄りなふ松岡殿。目の見えぬなりをして何處へ行かふといふことぞ。さあお歸りと袖をひき顔を見れば夫にてなし。ハア衣裳も太刀も松岡殿にまがひなしと。わたりを見れば夫の首。南無三寶さてはおのれは追劔なり。やれ人殺し出あへくと呼はれば。里人棒を提げ。一度にばらりと取まはす。やれ聊爾すなく。盜賊にてもなく又逃はしる身にてもなし。仔細を聞くと押しづめ。それがしは金輪五郎今國とて是此獄門にかゝりし者。まづ斯の次第にて。松岡に體をかり再び蘇生し。頭は金輪胴は松岡。一身に二人の氣をこめ本望遂げん契約ぞ。此上に入られなくばいか様どもはからへ。さりながらかへつて松岡が。本意にも逆ふべしいかにくぞやける。女房も里人も。さりとはこれは心得ずと肩を。ひそめて居たりしが。げに本望を達せんため左やうのこともひはん。さりながらまことしからず。たゞし我夫



の體ならば日頃かき得し。繪をかいて見せたまへと現出せば。心得たりと建てたる朝札裏返し。墨すり  
 ながし筆をそめさいなみや。志賀唐崎の。入日に。おつる秋風や松の下葉に飛ぶ千鳥なみの花雪し  
 ほらしや。墨付筆勢夫の筆にうたがひなし。女房わつときえ入てア、あぢさなきはうき世の中。まして  
 男子たる者は。義理に命をすつるもならひ如何なれば松岡殿。とても物を思はせばたゞ一かたに思はせ  
 で。かたちは活てありながら御顔ばかりは死し給ふ。目こそ叶はね聲は聞しり給ふらめ。今一度女房よ  
 女共よといふてたべと。首を動し抱きつき流涕。してこそ歎きけれ。ヲ、理り。松岡も。くれぐれ御  
 ことをこそゆされき。某も此おんしやういかで粗器に存すべき。先大君の御行方覺束なし。御跡を慕ひ  
 其後はいか様とも御身の上。望を叶へ參らせんお暇といひければ。いや夫に離れて世の中に何か望の  
 有るべきと。既に自害と見えけるを。はて是悪い合點。夫に離れしとは何事ぞ。此首こそは他人なれ首  
 より下はかんじん。追付本望達しなば。罷歸りて顔ばかりはあちらむき。はたへは馴染の二人寐ぞや  
 と戯ふれすかせば女房も。涙のしたににつこ。笑ひ然らば妾も御ともと。夕づけ鳥のあふさか山。谷峰  
 こえて急ぎ行く娑婆往來八千度。それは上代是は末世其身は佛身此身は凡夫。なゆたわそうき無量劫億  
 萬劫はかはれども。本然本有の玉の緒は切てもきれぬ金輪が命。奇妙奇體の人間やと聞く人。威をぞ催  
 ふせり

牙三

我國の寶器御璽内侍所とすは。天子ゆかを同じうして宇内を御するしるしたり。御いたはしや天皇は。  
 さしも御寵愛深かりし葛城の大君の。行方知らず宸襟を惱まし給ふ上。王子しきつて御位を望み給へば

今は詮方あらかねの土も草木も悪人の世とやなりぬべき。一たん王子が心をなだめその後和睦をむす  
 ばんと。内匠のかみに仰せられ三種の寶のかけをうつさせ給ひければ。毫厘もちがはず作りたて。ぞ捧  
 げける。天皇御威あつてやがて王子を召さるれば。逆目の王子は何事にやらんと直衣の下に腹巻し。大  
 太刀佩いたる骨柄はすさまじう。こそは見込にけれ。御母天皇御覽じて。扱も似氣なき振舞かな。御身  
 も同じ我子ぞや何しにさのみ憎かるべき。葛城の大君行方なくなる此上は。は身を位につけん三種の  
 寶を渡すぞとよ。吉日撰み即位して目出たふ國家ををさめ給へと。誠しやかに宣へば王子偽物とは夢に  
 も知らず。ム、扱は御合點參りしな。此間たつて所望致せしかご御承引なかりし故。今日寶否をたし  
 母とはいせせし。とつてながし奉らんと思ひ設けてひに。お仕合。いかに百官日本三十六代の國王は  
 それがしぞ。天が下我心に背く者おらねども。葛城の大君花照姫彼等兩人覺束なし。見わひ次第に扱め  
 來れ但し汝等も大君にかたうごせば。かたはしに蹴殺さんと大床きつと見渡せば。伺候の公卿かふりを  
 傾け。あつと計りに平伏す淺まし。かりける時世なり。御母天王おごろき給ひ何大君を扱めよとや。御  
 身はきたいの悪人なれども位を興へ宥めなば。心も和らぎ大君をもいとほしうすべきかどさてこそ寶を  
 譲りしに。科もなき大君を扱めとれどは何事ぞや。王位に備はる上からは天下の民をも子の如く。思む  
 こそ道ならめ。我弟をも討んとは王道に背く第一なり。母孝行と思ひなば邪見の心を誦へし。中好くし  
 て大君をおはれみ得させよやれ頼むぞと御なみ。だにぞ咽ばる。王子からくと笑ひ。孝行とは誰へ  
 の事。天子に父母なしといへり天子とは天の子と書く。王位に即たる上は我等が父母は天地なり。孝行  
 盡す親有す誰かある。死をこなひの老耄それ引立よと惡口し。偽寶をとりもつて帳臺深く入りにける。  
 笑止と云ふもおろかなり。天皇わつと御聲をあげ。木こり山がつ潮やく猿鳥獸にいたるまで。親子の情



は知るものをいかなる日いかなる時いかなる悪鬼が我胎内に宿りつる。此後いかなる憂きめをか見ん命長きは耻の種。絶えなば絶えね玉の緒よ。とは云ひながら憎しといふも我子なり。報はんばちの不憫やと。御衣の袂を龍顔に押當て歎かせ。給ふぞ。道理なる。月卿雲客下司。牛飼舎人にいたる迄袖をしぼらぬ者はなし。女官命婦いたはり参らせやう。奥に。入御ならせれてまつる御有。様こそ。三風のはれなれ

四季のつら

頃は彌生の十日あまろ志賀の都を旅立ちて。夜道に迷ふ葛城の大君姫君たゞ二人。徒歩や跣足の小幡山宇治の中宿やごもなく。旅行の賤と奈良坂や春日の里に着き給ふ。大君御涙の下よりも。口惜や我百敷に有りし時は。假初の遙拜にも七日の秘三夜の神事。百官儀式を備へしに。昨日にも似ず此度は。幣とりあへず手向山。神はしらすや我行方。まもらせ給へと御袖を。掻合せ給ひければ。夜半の嵐にさそはれてさねが。小鼓神樂うた。ほそろくせりとよく笛の。かすかに聞え渡るにぞひめもしん。肝に銘じ。あつと頭を傾くれば神さびわたり宮地たゞしき。春日野の。更たけ夜静にして。四所明神の寶前に。煌々たる。燈火も。ともに。おはれむ深夜の月。おぼろく。と杉の木の間をよりくるは彌宜の。娘か。乙女子か木くさの。苗をあじかに入れは。こぶ。あゆみの宮めぐり。四季のくさ木の若苗を。しげれくと植ゑたもの。いまくる春に。さこすよの。面白や有がたやとこそ植ゑにけれ。いかに是なる女性斯程繁りし森林に。重ねて木を植ゑ給ふと不審にこそいへ。さんみ當社は。神護慶雲二年。河内の國平岡より。此山にやうがうなる。されば神の御ちかひに。人の参詣は嬉しけれ共。木の葉の一葉も裳襟に

つきてや失せぬべきと。惜み給ふも何故ぞ。人の願はしげき木の。諸願成就を植ゑ置くなり。げにわがたし慈悲まんぎやうの春の花は。三笠の山の白雲。五重雫色の紅葉は。春日の里の唐錦。神のまに。くかけ頼む。我も一本うゑおきて。草木國土成佛の神木とあがめん。まづ春は窓の梅。柳櫻もこさませて。白玉つばき。萬世を十づ。十や。桃の花千代のしるしと植置かん。夏にもなれば卯の花にやま。は。と。さすや山人の。初音を。かこふうつ木垣。藤の名残を其儘に棟唐桐紫のゆかりとこれもうゆべし。初又秋初時雨ふりみ。降らすみ曇る夜の。かつらはまださ影うすき月さへ色にはち楓。笛による鹿つまつ待かねて。紅葉踏み分け露に伏す忍び草。我が戀草。連理の枝になぞらへて。契の種をや植ゑぬべき。冬は雪間の姫小松まき。榎杉椈檜柏。常盤の苗を植ゑ置けば霜に縁の。濃き薄き。花ひらけ香のこりて。佛法流布の神の山菩提樹のこかげとは。ふぢの鳥居に藤さきて松にも花を。春日山。長閑さかげはりやうせんの浄土の春に劣らめやなふ。諸願は成就。かひりやう満足と。うやまつてぞ植ゑにける。女重ねてややう。かた。の御有様たゞならず。此頃志賀の都より逆目の王子の仰せにて。若き上人の夫婦つれたらんを搦め取て参らせよと。堅きお觸ひへばもし其方にては。とく何方へも落ち給へ。大君はつと思せしがいや。我等は夫婦ならず。是はそれかしが妹なるが繼母の隣にて浮れ出で。途方にくれてひぞ。宿ある方へ教へてたべとのをやかにこそ仰せけれ。痛はしや御兄弟にてましますか。餘所造もひはず妻が方にお宿をゆさん。去ながら父母に伺ふためみづからお先へ参るなり。猿澤の池のはどりにて父の名は御酒の長妻は采女とや者。追付跡より御出といへば。花照姫は袂をひかへ。御心ざし嬉しやなしかし何をするしにお宿はたづねやべき。さればこそとよ我父を御酒の長とやこと。此奈良の里は水の味淡くして。酒を造るに妙あるゆゑ。父酒を造つて當國三輪の市にてあきなひ。富貴の家



となりし故。三輪のしるしの神杉をかたどり。酒のしるしに我宿も杉立る門をしるべにて。尋ねさせ  
 夕暮に跡を慕ひて。三馬行月日。あかしくらさせ。たまひける。假のやどりぞあやなけれ。長夫婦  
 の者共は葛城の大君花照姫とはつゆ知らず。痛はしき旅人や繼母のざんと有からは親里へ歸られじ。兄  
 弟ながらそれがしが養子にし。妹御は縁につけ兄御を婿とし。采女にめあはせすべし。我娘をほむるで  
 はないが。都人の妻といひてもにくからじ善は急げ今宵夫婦の盃と。采女に土器とらすれば采女はもと  
 より大君に。深くぞ思ひより糸の。親のゆるせしつま結び心にあまる嬉しさを。つゝみかねたるめつき  
 にて。袖口ひねりてゐたりける。花てる姫はむつとしてこはいかに。目前我夫を外の女に祝言させ。見  
 てはゐられず我こそ妻よといふてのけふいや名乗ては。さいせん兄弟といひしことば違ふと怪しめられ  
 大君の一大事と心の麻袴かきみだく。色を見付けて大君も采女がさいたる土器を。受けもやらずさし  
 置きてあたりを眺めておはします。長は氣にかけ祝言の其土器を取上げ。又采女に遣されよといへば。  
 あつといひて取給ふ。姫君腹立袖引き給へば又かはらけを下におき。それお盃早ふといへば又取上げ。  
 又袖引ば下におき。取つ置つ大君も。うるくとして取落し土器微塵に碎けり。長は祝儀を取なほし  
 ラ、めでたい。數多くなるからは孫曾孫設けん瑞相有明月もかたぶきぬ。花舞がねのひ枕寮所は  
 奥の亭。采女さそく手をひけ妹御はさし合。こゝに一人臥し給へどくといひければ。迷惑さうに  
 大君も。采女に扶ひかざるは實にわりなくぞ。三馬見えにける花照姫は。只ひとり心亂る。煩惱の。  
 犬骨折りて準の鷹にとられし羽拔鳥。起ても居てもあらればこそ只泣くより外のことぞなき。うしろめ  
 たくも妬ましく。障子のすきより差覗けば。燈火ねふる闇の内。我肌ならで我夫の。外には解かぬ下紐  
 を。にくや采女が打解けて。比翼の睦言はの聞ゆ姫君ふためと見もやらず。はつとばかりに息をつめし

集 卷 終

集 卷 終

ばし。せき上げおはせしが。ア、世の中にみづから程夫に縁なき者あらじ。愛さめ辛さめ凄き來てたま  
 く添ひたる大君を。目の前よその花となす。たとひ采女を誰にもせよ。道に背きし忍び寮ならば倍氣  
 は女のならひなり。そも生けてはおくまじきに世間を憚る我々にて。夫婦といはぬ上からは采女にお  
 いて咎もなし。定まる因果ア、恨むまい思ふまい。ふつと捨ふ。いや去ながらいつか。くど月日を  
 待ちて。渡海小船のよそにつく。なふよい殿もつも世話ぞかし。こはそも何の報ぞと絶え入り。泣入り  
 給ひしは思ひ。やられて哀れなり。いやく思へば今宵は斯ても明すべきが。明日二人の顔を見ればよし  
 なき邪氣も起るべし。今は恨みて甲斐もなき水の月とる猿澤の。池に身を投げ此世のはむらを休めんと  
 思ひ切たる顔容に紅葉をたゞ暎悪の火焰胸にまとへる八重むぐら。亂れさはがし猿澤の池の水際に  
 三重走りつき妙なる法の。力にて此池即ち弘誓海。すくひ取り給へやと合掌すれば南無三寶。人こそ來  
 れ誰なるぞ。わらはは。采女おことは誰ぞ。ヤア姫君様かなふ恨めしや。とくにも名乗せ給は。かゝる耻  
 辱は取るまじきに。それとも存せず床まで参りしかば。寝物語に我々は葛城の大君花照姫と承ばり。  
 主ある殿御と知らずして女の道を背きたる。くやみといひ耻といひ生てあられぬ我こゝる。是にて恨を  
 はれ給へとうちかけぬいで柳にかけ。身を投げんとせし所を姫君とめて。實にもたゞしき賢女の心。  
 知らでうらみし耻かしや。愚人は生て益もなし。我こそと思ひ居ればいや我こそくど。互に身をすて  
 命をすて浮世を早く猿澤の池のおも。く。に。水とうくとして浪またゆらくたりとかや。めいもう  
 の世の中是。采女のたはふれとおぼすなよ。三佛乘の因縁なるものを。一つ遂に至らんと一二を争ひ續  
 いてとび入池水の。底の藻屑と沈みしはためしすくなき次第なり。長夫婦は聞つけて大君もろとも走り  
 つき。あまた水練めし入れてあなれ。此方と水底をかりもよはせば。二人の死骸人を悦び引あげたれ共



はやくきたえて身も冷えたり父母大君すがりつき。わきもこが寐亂髪を猿澤の。いけの玉も見るぞ  
 悲しきと。泣きさげべと甲斐ぞなき涙は。池を濁しけり。時に旅人とおぼしめて。音笠きたる老翁三人  
 淨衣の袴踏しだきしばらく。此女は好色にまよひ死したれども。春日のやしろに樹をうる結縁  
 にひかれ。蘇生ること疑なし。三人の翁が舞の袖。今日の御祈禱なり。在原や。高間が原の其昔天津。  
 岩戸の神歌を。うたひていざや祈らん。とう。たらりたらり。ちりやたらりはさていかに。是眞言  
 の秘密にて。たはすたうたり。瀧のつみは。福壽圓満太平樂をしらふなり。又萬代の池の龜は甲にいた  
 いく三曲の。渚のいささく。として神の氏子は延命長壽。まんざいらく。無上神靈神道加持と  
 我は給へば二人は忽ち息いで心地すしく見えにけり。有がたや不思議やな。さもあれ御身誰やらん  
 我は勢州のす川。清きみなもと汲てしれ。扱又是なる老人は。我は津のくに住の江の。わか松しげ  
 る岸かけに。年へて。住るおきなき。はするの色をつみてしれ。今一人の老翁は。當國當所此山に。  
 紫にはふ藤のかご。明暮とはれしうれしさよ。扱は春日大明神。光天照おはん神住吉の御神を。今こ  
 る見つれ三笠山。みつのみ笠を。かざしきて天が下こそ樂しかりけれ。神はまことの頭にあそび。佛は  
 慈悲の心に住す佛神。水波の。しるしは。これ。この。池のしら浪瀧のつみはほる。くくく。  
 どろくくと歎喜いやくの眉をひらさて。なほ行するをまもるべしとの御聲に入る鳥のこゑ。くくく。神  
 風。山かせさ。さ。さつとして明行くそらをよく見れば。ありしはみかさ山ほの。くくとして神はあが  
 らせ給ひけり。大君しんく。五體にめいじ。残りし三つの御かさをかづき。千度の禮拜萬度のはらひ。  
 神をいさめて還御ある奈良の都のたぎの能。此時よりぞはじまりける。三たりの翁の舞樂をひやうし  
 式。三ばんとは此因縁さてこそ。國土安全の今日の御きたうに。五穀豐饒の秋津しま神樂は。三十字一

文字の和歌のみち妹背のみち。我神の道末廣くやはらぐ。國こそゆたかなれ

夕日

三社の神の御示現にて大君と聞きしより。長夫婦は驚きあらこものしとねを參らせ神の御笠を壇上に  
 いはひ。御酒幣帛御しめなは神と君とをうやまひける。大君仰せありけるは。兄惡王子にそおはれかく  
 さすらふとはいひながら。神慮すてさせ給はずかた。が情のうへ。王位にのぞみはあらねども。御母  
 帝もおぼつかなし。又國民のかゝる世にあふ事の不惑さよ。一つはこの度の御禮三社參詣の望みあり。  
 いかはせんと宣へば。長承り御誼御尤にひ。しからば春日はほご近し伊勢は又ほご遠し。まづ住吉へ  
 と存じひさりながら。王子より詮議つよく人の答もいぶかしければ。さいはひ此三笠の軒に紅の。もか  
 うをはりて。御顔をかくし。住吉をざりに仕立なば答むる人もひまじ。采女もお供いたさせん御用意と  
 ゆふたすき。神道修行のたびなれば下人もつれずた々三人。案内はかねて道の記に。かき置く筈やすみ  
 よしの神もう。でこそ。三重しゆしやうなれ

たのむる花のり

うのかうふりの。すきびたひ。春日の里にぬきおきて。三笠が下のはらけがみ。結ひかはしたる一言  
 の。契はくちぞ戀にたつ。浮名かき消せ住吉の。神のみくじの一二三。四社のおまへの姫小松。千代の  
 子の日に引そめて。サア住の江の。岸に。よる波。よるさへやひるは人めに。木がくれし。柏木の森く  
 らきより。今をはじめの旅衣立退く駒の片手綱。放れゆく身ぞあはれなる。よしや故郷を。はなるとも



歸んなんいさかへるには。如じとつぐる一こゑを。如何にいつまで聞くなとや。みなし山の。ほご  
 ぎす涙の。こほり。とちおきて。もの思ふそでとア、みな月の。とけぬ氷室とくらへ見ん。氷室の社  
 伏をかみ。とゆるきの橋とゆるかす。なれも何ゆゑ世の中を。忍びぐるまの。丑。寅卯たつ田の山の。  
 初錦ふりあげ。見れば。かさのはの。紅に照る日も雲そめてひむくはすてふ。あまのかく山。あれぞか  
 し。手にするて見んたかどり山さて又南は。みわの山賤の。をだ巻。くりかへし。歸れや。かへせ  
 あはれかし。昔にかへる夜半ならば。かやのつり手に思ひをしめて。まくら比翼にならべて二つ。逢瀬  
 うれしく帯とさの。川を渡りて。ゆく水の。澄や濁るやしなく。にうつりかはるも慣ひにて。世はみな  
 戀のひと流れ。糸の山邊のせん人だにも袖の。ぬれぎぬ。洗ひし女。雪のはだへのかの白妙を。襦のひ  
 まく。ほの見そめつ。雲のかよひち通方うせて。こがれうさふし竹のつえさ。サア住の江の。はまの松  
 がねあらはれし。人目づつみの。長るのさと浮名流すな河内路に。命の小船しばしとてつなぎとめん  
 。いこま山。麓にすぐる夕だちの雲のたえまにとぶ鳥は。ひらく。平野もはやすぎぬ。むかふは難波あ  
 しのはの。流れとまりし淡路島。はては滄海まんくとしてあをさがはちのなみまより。あらはれ出し  
 神松の姫松のきしほごもなく。サア住吉に。着給ふ四社の宮居の。かたそぎのかたじけなしと言の葉も  
 。心をたねの方向ぐさ憂きこと。しばしわすれ草いざわすれ具ひるはんと濱邊に。出させ。三萬給ひけ  
 る沖をはかるに。見たまへば流人舟とおぼしくて。船屋形に高もがり兵具きびしき大船を。東風ふく風  
 に帆をあげて西をさしてはしらする。大君浦人をまねき。怪しやいかなる船なるらんと宣へば浦人聞い  
 て。はて隠れもないと旅人は御存じひはぬか。逆目の王子悪逆にはこり。御母天皇さまを日向の島へ流  
 し奉る船なりと。いふより人々はつと驚き。大君は聲をあげ扱あさましやなふ其船しばらく戻してたべ

なぶ。母上様大君にてひは。やれ船子共其船戻せ漕もせと。磯打なみに御足をひたし呼べと。招げど  
 順風に帆は八分にもたせたり。三羽の征矢のどぶごとくわはれ淡路の島がくれ須磨の關の戸せきとめぬ  
 御涙にぞ。むせばる。扱せひ。もなき次第なり。金輪五郎今國は天皇遠流と聞よりも。飛鳥のごとく駈  
 け來り人々をきつと見て。ヤア是は姫君様大君様か。金輪が参りてひといへば人々おそれ飛しさり。ム  
 、おもては金輪にまがひなし。汝は王子に首をうたれ獄門にかゝりしが二度來るは何とぞ。ヲ、ノ、ノ、  
 御尤も。松岡とや繪師にからだをかり。首をついで蘇生りひと事の次第一々にかり。首は金輪胴  
 體は松岡一身二人の一字をとり。名をも金岡と改めひとせば人々やうく聞とけ。扱々稱代ふしぎ  
 やと御悦は限りなし。事急ながら母帝をうばひ取り奉れと宣へば。金岡沖をはるかに見てはや五六里も  
 のびとるうへ。追風つよくひへば船にて追付くと難かるべし。ハアいかいせんぞ案せしが屈竟のここ  
 そいへ。某が此腕元來繪かきの名人にて。妙をえたる腕骨なり彼の船もどして見せやさんと。懐中硯筆  
 を染め社頭にふるき繪馬の白鷺。翼にふでの精を加へ眼に魂入れれば。不思議や此鷺いけるがごとく  
 給馬の板をはなれ出で。三羽の白鷺人々の。三蓋の笠ひつ咬へ沖のそらへ。三萬かけりしが程なく船  
 に追付き船先へまはつて羽風を立。咬へし笠にて煽ぎたてたる神風はさらく。とらうくく  
 と波も潮もさかまきて水際の方へ吹もどす。配慮の預り日向の連船梁に立あがり。やれ帆をおるせ船か  
 へすな。水主かんどり櫂をたてなほし漕ごも。おせごも高浪に帆柱二つに吹折つてはや二三里を吹もど  
 す。金岡得たりうれしやと蟹の乗捨手ぐり。ぐりくくぶねに。一人取乗り大汗ながし漕ぐはごに。  
 はや大船に漕よせたり頼てひらりと乗うつれば。大將むらじを始めとして雑兵船方は狼藉とぞ怒りけ  
 る。金岡あたりを覗まはし。天命しらすの恐人めら天皇の御迎ひに來りたり。じくねたらば片つ端。海



へ突ばめ鯨のるじきとなすべきぞと、舟館のたかもがりはらり〜と押破り、帝をいだし奉り小船にうつし参らす。むらじ大きに氣色をそんじ、諸國の司おほき中に逆目の王子御眼力にて。このむらじに仰せつけられしに奪ひとられて生甲斐なし。冥途がへりの新精靈なほどのとか有る天皇諸共打殺せと齒嚙をなして怒りける金岡かつらからと笑ひ、ヤアしほらしさうでだて。修羅道にて習ひたる兵法の秘術を見よと、また大船に飛びうつり權ふりあげて雍ぎたて〜打まはれば、船も人もたまらばこそ左しもの大船微塵になり、むらじは流る、舵に取付浮きぬ沈みぬ漂よふ所を、權取のべ突流せば底の藻屑と沈みける。心地よくこそ見えにけれ、陸には大君花てる姫、ヲ、手がら〜其船はやくと跳りあがつて悦び給へば、御母帝も叙威のあまり寄せよ〜とせき給ふ。金岡船板に突立つて、それ我國は神の御末不合壽命の後、玉依姫は龍神のほむすめたり、うみをゆづりの蛭子の神はおはせぬか、一天の帝の御船を貢ぎやされよと高らかに呼はりける、天地まことを感じてやあまたの鯨魚うかみ出で、鱗をならべ鱈をふり御船を守護し奉る。金岡扇をさつとひらきヲ、おもしろし〜、まづ目出たいをささだて、時をえぶなの御よろこび、これ毎年のかれいにて君が威勢は手ながだこ、まろく見ゆるは坊さま〜ちとたしなまだこ入道どの、運をひらくや櫻鯛はなほも、こち、るそ、徳と福どのとくもなく、勳をのべて海老のこし、みつわぐむ迄よろづよの龜の甲なる松竹の、かはらぬ御代に住吉のまづ〜神をいさめんご、打つれ立て悦びの神樂を、さ〜げ給ひける。

才入

周の九鼎唐の三尺みなてへいをもつて貴しとす。されば天皇三種の神器のうつしをもつて逆目の王子を

欺き、誠の實は御身をはなたず船中まで持せ給ひしかば、玉體に恙なく大君御下参ありけるも是神實の御めぐみとはやせ共草木まで逆目の王子になびく世の、武士も公家もひとりとて君にしたがふ者はなく、右手も左手も御がたき、まづ大和へ還幸あるべういと、金岡が思案にてわざと其日を暮しつゝ、大君姫君天皇の御手を引きたまひければ、采女はみさきの夕つゆを、うちらはらひ〜夜半にぞ「君が玉ばこの足よはげなる御有様、やう〜たせ給ふほどに、大和河内の境なるあなむし、山につぎ給ふ、頃しも仲秋、十四日、まつよひの月更けて同じ雲井のあまつ雁、御涙をそふるたよりなり、金岡や上げゝるは、これより笠置へかゝつて難所おほくひへば、しばらく此所にて御休息然るべし、やわ幸のことこそいへど、山田の早稻の稻はしたる松かげに忍ばせ奉り、又御薦のためなればと邊の稻をかきよせて、御膝に敷せ参らすれば、大君立のき敷たるいねを押のけさせ給ひ、まことにおことが心ざしは厚けれども、此稻を我膝に片敷んことおそれあり、春はたがやし夏は植ゑ、秋は實りて冬收む、民百姓のくるしみは、千束萬束も、一種の稻もかはらぬぞや、されば十善の位は蹈む共、民のやしなひあらずんばいかでか天下を治むべき、天子即位のとし稻の初穂を天照太神へ奉り、大尊會をおこなふも民を憐れむしるし、神また民をおはれみて、供物はみさねと傳へたり、西天の釋迦門佛は五穀を捨たる罪業は五逆にまさると説きしとかや此かげに立寄て夜の露を防ぐさへ、廣大の五穀の恩下に敷かば天神地祇我をとがめ給ふべき、我此たびさま〜、憂目には逢たれども、民一日のくるしみにはいかでか及ぶとあらんぞ、御涙を御衣にかけながら、一首の御製にかくばかり、秋の田の、かりほのいはのとまをあらみ、我衣手は、つゆにぬれつゝと、詠じさせ給ひければ天皇をはじめ奉り、おの〜わつとばかりにて感涙袖にあまりけり、御母天皇叙威あり、實にありがたき言の葉民をめぐむは聖主の徳、仁は王道のは



じめ、いつのときを期せん只今位を譲るべしと、露を結んで御手水天地四方を御拜あり、かりほのい  
 ほのかり御殿木の丸殿になぞらへ、すなはち天智天皇と號し給ひつゝ御即位「あるこそめでたけれ、こ  
 うに花てる姫の御父橋の右大臣富房公は、志賀の都をのがれ出で剃髮禪衣に身を棄し、伊勢兩宮へ参ら  
 れしが太神宮の御告ありと、驛馬に打乗り伊賀越に鞭をはやめ打せしが、この馬にはかにけしとみて、  
 耳を立て毛をよせて打てども引けども進まねば、馬方いかつてエ、畜生めこりやあ、えだ骨がをれたか  
 ほつこしゆもないとぞうちける、富房御覽じヤアさなせそく、もし此へんに社ばしあつて我乗打  
 を、神の咎めなんめりと宣へば馬方かさねて、イヤ此道は往還にて毎日旅人を乗せやが、斯様のとはい  
 はささりながら、馬上いぶかしとくくごやがて馬よりおろし参らせ、もし大神や有明の月毛の此駒を  
 ひつたに見れば、不思議やなもこのごとくにおゆみ出で胡馬北風に嘶へ行く富房いよく不審はれず、  
 我右大臣の位なれば乗うちを咎めんもの神の外には王位なり、疑もなく此へんに天皇のましますと、此  
 處かしこを彷徨ひ給ふを松蔭より何者と、いふ聲にたちよつて見れば我君なり、天皇様か大君様富房な  
 るは父上かご、覺えず御衣にすがりつき是は、くご御涙、御見参こそ不思議なれ、扱かすくの御物  
 語金岡中上げるは、主君富房参りおひ給ふうへは玉體に氣遣なし、いつ迄かくてひはんそれがし一人内  
 裏にかけこみ、逆目の王子と差違へ早速御代に立てやさん、はやお暇と申ければ、兎も角も萬端汝に  
 任するあいだ、その馬にのつて参るべしとの論言にて、すなはち馬方を馬寮の官に付せらるゝ、金岡勅  
 を承り、鐵兜を持てかためたる王子なりとも、忠孝の智劍を振らばやはか討でひべき、おのれ馬方下郎  
 なりとも普天の下に住んで朝恩をいたさき、稀代の官に拜任する冥加を存せば、命ををしむことなけれ  
 億病ばし働らくな、いとげくといひければ馬子は肩ぬき胸たさき、われらは繪師の氏久が世倅今天目

の彌源次として、小角力の一番もひねる者、きづかひなさるな五人や十人は朝がけの駄賃ぞと、ゆふつけ  
 鳥に夜はあけて坂はてるく、三重逢坂の關うちこえて、さきなみや志賀の内裏に逆目の王子、天もゆ  
 るさぬ帝位につき、美女淫樂を事として酒宴に月日をおくりけり、かゝる所に金岡は彌源次に弓と矢も  
 たせ、南殿の廣庭へ一文字にぞ乗入りける、百官おごろぎ御遊のをりから狼藉もの、餘さしとぞ取ま  
 ける王子さつと見ア、しばらく、きやつは金輪五郎命をついで金岡と名乗る段先だつて知りぬ、推  
 参はにくけれども蛇ぞ蚊ぞ蠅なんぞいふものは、貴人の頭にたまれども蟲と思へば腹立す、蟲同前の  
 金輪ゆるしてかまふなくと、なぶつて心をためしける、金岡ちつとも憶せず、ヲ、蠅の中にも青蠅は  
 小さけれども毒あつて腹中に入て五尺の人の命をとる、一寸の蟲に五分の魂、逆目の王子の首をとる  
 金岡とや青蠅、ちつとお見まひやさんと馬よりひらりと飛でおり、膝立てなはせば彌源次も大床に飛び  
 あがり、青蠅はあらねども馬につく馬蠅、手並は見せつけ置ればくごふはいはぬと申ける、王子  
 いかつて顔色變じ次將のほこをおつ取て、生かはり死かはりばくだいの緩急もの、すみやかに歸れさな  
 くば矛に突つらぬき頭より爪先まで骨肉を粉にはたき、灰になして永く娑婆の縁を切んと、八方に矛ふ  
 りまはす其いさほひ、鐘馗大臣素戔鳴、命もかくやとすさまじし、金岡かつらからと笑ひ、ア、王子殿  
 初心なくゆすりをくふ男でなし、去年御身にうたる、時一寸にても身の中に、續きしところ魂ごま  
 り本望どげんと申たる一言は違へず、其時王子の詞に、運つきて首取者は金輪五郎と有けるが、今ぞ運  
 のつき所、とても取ではおかぬ首尋常にわたされよ、サア御公卿たち王子につくか天皇にしたがふか、  
 いかにかと云ひければ卿相雲客ごとうに、なふ勿體なや今迄こそ是非なけれ、天皇の御味方とこそ  
 ぐにやさるゝ、王子矛をからりとすて、くれなるの涙をながし齒齧をなして、エ、無念なり口をし、



楠も一度は朽ち巖も焼る時節あり、神明にはなたれ天運につきぬれば、勇力とても益あらずさうながら、我一生人間のあらゆる業、に劣り人しとなれど首になつて働くと、是ばかりは汝にまけたる残念あり、生て働くは珍らしからず、只今討たれて我首の、若あへなくならば笑ひぐさ、又一言たがへず働かば、せめて末代にかたり傳へて供養せよ、人生牛馬風今知、水裏溪震靜俱天歸と、高聲にえいざんしサア、寄つて討て是までと首さし、のべてぞ見えにける、金岡きいて神妙ひさりながら、悪人なれども王子なり直にうつは恐れあり、ぬき合せて勝負あれ、イヤ天のせめを受たれば天の罪する一命、汝にわたふる首ならず、はや疾くくと云せも果す承ると振り上げて、水もたまらず打おとせば、おそろしや王子の首うめき渡つて虚空にあがり、百官をおつ立、金岡を目がけ追ひまはすは凄まじかりける次第なり、金岡弓と矢うちつがひさんぐに射かくれば、ある矢を宙にてひつくはへ、四方にむかつて吹かけしは只ふる雨の、三重ごとくなり時に雲中いなびかり、東に日輪西に三日月弓張の、かげに白羽の鏑矢をきり、こ引たはむと見えけるが、きれて放るゝかぶらやは王子のかうへ横さまに、鳴わたつてぞ立たりける、落るごころを取ておさへすた、に差とせば、日輪和光赫奕たり、朝敵滅亡國家をさまる秋の田の、刈穂の五穀豊饒にて、民安全の秋津國猶行く、末こそ目出度けれ、和歌の一徳に國も

日本西王母

傳聞者婆童子は、藥王木を記て五臟をてらし、老聃は漢の武帝に玉の枝をえて、七百歳汗せずとかや、草木の氣瑞仙術の權妙、世々に流れて久方の、ヲロシ天曆の御代こそ、目出たけれ、抑播州法華山、觀音寺の開基方童仙人そのかみ異邦にうつり、西王母が園の桃をくらひこくしん不死の仙術をえ、其時くらひし桃の核、日本の方に投げ給へば法華山にまつて、大木と成し時仙人ついで和國に渡り、かの木を切つて觀世音の像を刻み安置して、佛法ふたいのお山と成、其ねざし今にまつて芽を出し、木にもあらず草にもあらずぬ竹の葉に、桃のすなり累々たり是ぞ誠に三千歳に、花咲き實る西王母の園の桃、老をかへし命を延るいく藥、今せいくんの徳にめで時を感じて出生す道有、御世こそ忝き、爰に當郡の何某桃園樂五郎豊丹は、六孫王の末葉代々民間に下れ共、心をだにもはふらさず領内といひわが氏の名も三千歳の園の桃大内に獻上し、叡感に預り先祖の官祿おこさんと、ねごしに飾る唐桃を先に押立て旅衣、播磨地過ぎて津の國や、こ屋の宿なるたんぐはやに宿を取てぞ入給ふ、亭主玉屋の文次待まふけ、御上京と承り道迄御むかひにと存ひ所に、つんざいての御入外聞かた、忝ひ、就ては日本の御寶を大内へ捧げられ、お大名にならせられんは必定、御さんさんの御本陣をも、拙者に仰付らるゝやうに祝ひ存じ奉り、先々ちんにてよも山の、景を肴にお盃とさそはれ、のぼる高窓の、よしすまかせ、見かげの森、あられの松原あしやの浦、なだの捨舟あした、ぬ、神の昔の西の宮、天皇子の跡たれて、爰住吉の老の松、同じよはひの園の桃、松と桃との相生と心祝儀の盃を、一つ引うけあれ、いし



ゆ。海山川の景よりもくはつとまさりなしよていよし。對の塗が裏にうす繪の花づくし。あげは帽子にうしろ帯かまはぬ風にて身にかまふ。町の娘と見せられ隠れないぞや御所じたて。ありき姿のすな〜とおぼこな貌をつくれ共。戀になれたる目の内の男に耻ぢぬ風俗は。ごうでも御所ぢやていしゆ聞て。ハテわけもないこゝらに御所が何ござりませふ。誠にさうじや屋敷がたか但しくらものか。先なんでもあれ兄弟さうな。イエ〜。主と腰元といひ捨て、いしゆ走り出。やつちやといふて手をしむる腰元につと打笑み。是申。ちと頼みましたい事あるがなんと聞いて下さんすか。何がさて何成共。仰付られ給ふらんが大方推量申した。定て此はなめに是。こんな事かごさ、やけば。ハテわけもないさうした事ではなし。あれなるはわらはがお主なるが。けふ西國のお侍。西王母の桃とやらん御持参と聞給ひ。せめて一目拜みましたきとて是迄來らせ給ふなり。どうぞ見せました下さんせ頼むぞやアといひければ。はておこれに鶉の嘴それはづんごならぬ事。忝くも彼桃は。老たる者も若やぎ死したる者も蘇生り。奇妙薬の木の実ゆる帝へ献上なるを。澤山さうに見せましてくだんせとは。はれやれ太いならぬかなはぬ。いしやじや〜と答へけり。豊舟聞給ひ是々亭主。上方者に似合ぬごつない物いひ。某ぢきに立寄りて。何あの上臈の桃を御覽じたさとの御望ごや。ヲ、女使なれば大抵の。梅櫻と同じ事に覺するさうながそれは大きなおはまり。去ながら帝へ上げて後は我々とても拜む事かなはず。たうり物をいはずして。女中を招くも花の宴しなによつてお目にかけふが。シテ先あなたはどなたの奥様で。殿御のお名はと問ひ給へば腰元につこと笑みイエ。未だ殿御はおはさすといふ。ヤア。なに殿御はない。おもしらい。それでは桃が見せらるゝといふものじや。して又親御のお名は何と申すぞ。されば御父は大納言氏部卿。藤原の元方さま申お公家なりしが。おごゝしの春世を去給ひ御男子とても侍らはねば。姑

集全松遊

集全松遊

姫様に婿君を取り御世をつがせ申す筈。又あのお子は二位姫さまとて御妹攝家清華の御方より御望おほけれ共。たごへば山家の賤の男なりとも好いた男の氣のとはつたを。夫にせんごの願ひにていまた御縁の結びなく。此頃有馬へ湯治をなされ御歸るさといひければ。豊舟いよ〜心うつり聞けば聞程おもしろい。それでこそ大事の桃が見せられた物なれ。サア〜是へと呼入給へば笑顔もにつと二位の君。なれ〜しげにあの者が。つがもない身の上話さぞはでなものとおぼされんと俯ふ顔のぼじや〜と目元けふげにしな深し。豊舟ごうもたまられすいや申。當世はむだなしに。云事計りつか〜と手短かういふがよい。扱桃のお望はやすい事夫ながら。こなたからもといはせもはてす先またんせ。手短かうその桃より。けふの君の馬上の姿かいま見しより氣が納まらず。かこつけいひて参りたり西王母の桃よりも。君が此ふごも、がごふつ〜りごつめられア、痛いたやと云さま御手を取り扱手短かい御言葉それこそは當世風。我等もお返事手短かにいつそあそこで申さんに。いざこなたへと手を取合ひおくの。一間に入給ふ。亭主浦山しげに見おくり。扱手ばしかい〜。サアこれからはそなたと我手ばしかい當番ご。抱き付ばアうるさ。わけもないごて振放すそれはしよんな西王母が園の桃こそもたず共。田舎に稀なほ所柿の熟したも有時ならぬ。女中のすきの青梅か般若梅の木の枝おろそンヤホ。〜。のんやはのじとたはふる。かくて其日も。暮方に姫君のおとも人。お迎ひと立つごふ腰元驚き奥へかくと申すにぞ。名残りをしげに二位の君まだはたなれぬ戀衣。行末かけて染五郎後の契りのしるしぞと。不老不死の園の桃一枝折つて参らすれば。姫君も守より玉軸の普門品。自筆を又のかたみぞと取かはし見かはして。思ひかはして乗物のすだれもりくる移香をとめて。都に。三重のぼらるゝ。いで其頃は。天曆八年甲寅。帝諸卿に曲水の桃花の宴を給ふ折から。播磨の國の武士桃園染五郎豊舟。は吉事に付て推参の



よし奏すれば、藏人は階に出でむかふ。方童仙よりつたはりし桃。來歴當年不思議に花咲し。次第つぶさに奏すれば、御感甚だ淺からず。垂仁の聖代には橘を献じ、舒明の正宇には一莖二花の蓮を捧ぐと傳へしが、まさしく是は死したる者の蘇生り。老をかへす良薬しゆくつしうのはんさんじゆも。是にはいかでまさらんとめんかうふはいのれいにまかせ。南都弘福寺の寶藏にこめらるゝ。信仰の程ぞありがたき。扱豊舟には數々の恩賞。則ち叙爵を給はり民部卿に任せられ。重て仰下さるゝは。幸ひ故大納言元方三年前に相果て。娘二人斗にて家すでに絶えんとす。姉薄雲の前にめあはせ元方が所領三千町。相違なく相續との繪旨を下さる。豊舟首を御階に傾けめんぼくといひ身の悦び。天恩謝するに處なしと拜賀に餘る心中にも。今度上京の道にて夫婦と契りかはせしは。彼元方の妹娘その姉娘の婿になつてはいかにしてもつたらぬ事。如何勅答申さんと胸もさばけぬ其中に。元方が舊臣土師の別當村正。舍弟官太村任を召れ。豊舟家督の婿かねたり。主人と仰ぎ申すべしと仰あれば執權共。誠に故主元方相果て後娘兄弟斗なり。家も絶えんと嘆き候折節。器量の仁を家督仰付らるゝ事。有難し忝しとお受を申し退出す。民部卿豊舟は四方に名をわけ身を飾る。錦の小路に旅館をかまへ吉日。をこそ。三重またれけれ。今年も暮れて。初曆。大みやう日の婿取よし。薄雲は前の屋形には花婿君のひ入とて。は殿々々の飾り物七五三三五三の。盃は新殿とて上下の男女綺羅天を輝かす。民部卿豊舟衣紋つくるひ入給へば。村正兄弟迎ひに出で上座に「請じ參らする。几帳洩り來る。空柱の。行かふ女中の中にも。我假染に契りにし二位の君やおはすらん。エ、勅誼はせふことなや。馴染の妹と添ひはせで姉と今宵の祝言は。さぞ嫉しう思はれん。よしやおなじ屋形なれば妹の局へも。折やお見まひ申さふす。妹さへ美人なれば姉の容貌はさぞ」と。兩手に寶持たる心地見まゝはしさに人目を忍び。のびあがりゝ奥を見いれ

て待給ふ。みす押やり薄雲御前。立出給ふ姿を見れば其丈七尺ゆたかにて。色の黒きに厚化粧まかぶら高く鼻ひらき。髪さへ赤く筋太く腰も手足もふつゝかに。肥太りたる上臈のせんくゝらんゝたる衣裳を纏ひ。花の様なる女房達數十人にかしづかれ。づしりゝと山さらうごき出たる如くにて。民部卿を尻目にかけて口を襟におもがくし。につとよしばむ其悪女書にもかゝれぬ形なり。民部卿はつと驚き。りやなんじや。いかさま人は人さうなが扱もけうがる顔形。是がそも我妻に成る事かと思ふにぞ。ぞつと身の毛も忽ちに。胸もだくつく斗なり。酌取の女房御土器を鞠むれば。薄雲からびたる聲音にて。いやと祝言にこなたよりの盃は。あなたへ嫁りてこそさすべけれ。是はこなへ殿御入なかうごは帝様。勅誼の夫婦なればかため盃に及べきか。容貌よしのふうよし様引手數多におはく共。みづから思ひのきづなど成つなぎとめたぞ此様をぞ。とんと凭れし其重さ只ばん。じやくの如くなり。民部卿じゆつな。さ一時に命も縮む心地にて。色ちがへせしていを見て。ア、おもてよわしさりては。千世の巢立のをとこ驚。初音聞きたしいとしらしと抱きて膝にかきあぐれば。廿餘りの民部卿いとけなきみどり子をおちが。抱たる如くなり。いざ先寝屋へといひすて。奥をさして入給へば女房達もさらゝと膝に「付てぞ入にける。民部ためいきほつとつき。今のは人か化物か。女にも男にもかゝる形の有物か。かごへば大福長者となり。位は天りんじやう王になるとても此人には添れまじ。盃をせぬその先に。逃げ出んとし給ふが。イヤ、彼と添はねば繪言を相背く。ハア何どがなよし勅命を背かばそむけ。あのやうな悪女にそはんより。死罪流罪にあふたがましとかけ出んとする處へ。は妹の二位の君走り出て是申しと。継りつけば豊舟それとも知らず。いや只免お暇と。振りもぎ給へばはて是は見忘れますか。こやの宿にて假染の枕のかたみ身にとまり。腰元小萩が介抱にて去年の師走生み落し。としよわなれと二つ



に成る是このやゝは誰子ぞや。尤帝の引合とは云ながら。一言の知らせもなく姉君への婿入はさりとは出来ぬ仕方と袂をひかへ泣き給ふ。腰元は若君をあれ父様よとつきつくれば。豊舟も慌てながら扱は二位姫にてましますか。ゆめくは身に某が變る心はなけれ共。勅諭違背なりがたく婿入は致せしが。なんと姉は人かいの。ちらと見るより身の毛も立ち。こたゆるにたまらねば直に國にぬけ歸る。委しい事は國元からと振切り出ればいやみづからも此子も共にいや目に立てはいかゝなり。ひらに重ねていや是非ともと留つ縫りつ泣き口説き給ふ處へ。姉姫わめき走り出二人を取つて双へ投げ。はつたと睨まなこより涙を。はらくと流し。扱もくむかしより美女はあく女の敵とは。よくもく傳へたり恨めしのいもうとや。情しらすの豊舟殿やみづから形みにくしとて。さなうと見給ひそよ。孔雀は翼美しけれ共人を害する大毒あり。象は形おそろしけれ共仁道を守る心あり。形こそ悪女なれ心は美女に劣るべきか。親の因果か身の報ひかかゝる姿に生れ付。鏡の影も恨めしく我身ながらもうとましければ。うるさく覺すはことわりながら。つねく我が思ひしは。假へ殿座を持ちたり共此顔にて枕をかはさんといふは表ぶせ。みめよき手かけを置きて參らせ妾は夫婦の名斗にて。暮さんと思ひしかど千人にも秀れたる。容貌よしと聞しより月を數へ日を數へ。今宵をこそ待つるに寝やへも入らず捨られて。嬉しからふかつらからふか。つらさが上に恨めしきは妹ながら二位の姫。さはご子のある中ならば姉にかくと知らせぬぞや。世間は妾がをつと。名付け寐やおことに添はせんもの。時には二人の思ひも晴れ妾も耻をかくなまじきに。エ、思へばつらき人々やな。顔に心が似るならば臍が心は鬼神にて。みめのよいは身達は戀も哀れも白雲の。うはの空なる男の心は頼まれず。唐土の房支齡は片目潰れし妻をだに。心にめでし情のふち。深き思ひは引替て淺瀬の水のあさはかに。思ひさらじなよも切じと怒れる兩眼血を

集 金 松 燈

注ぎ。睨む光りは茜さす日蝕月蝕並ぶが如くむなちあらはにまくり手の。裳引あげ脛高く。嫉ねき顔色骨立て赤くなり。青くなり。拳を握りがたく。さりとく齒がみはたき松の戸を。叩くのわきの夕風に吹亂したる如くなり。おごるの髪も振解け。つらさにまけぬ戀しさの。我夫やらじとおつたて。く廣庭に飛んで下りかの松浦さよ姫は。夫を焦れて石となる我思ひもかなめ石。金輪奈落は揺ぐとも此一念はよも抜けじと庭の立石。輕々と高くさしあけ岩にくたくる瀧川に。石を抱きて身をしづめ悪龍の。するじんとならん千びきの石と我戀と。重き思ひを比べんと大地をかつば。踏ならしとんどろ。といる。と鳴雷のおめき叫んで出らる。豊舟恐れ肝を消し殺しては悪かりなん。一先宥めて歸らんと慕ふて。三重出給ふ。二位の君は。途方に暮れあはてふためき給ふ處に。執權土師の村正舍弟官太村任槍ひつさげて下人も共。二位の君をおつとり巻きこりや。爰な女らう。常々いひしはここの事。とても姉の大ばいたに添ふ男はあるまじきに。はやく姉を隠居させ弟官太と夫婦になり。此家をつぐ思案せよ然らば此村正が。後見せんといろく品かへて云ひけれども。いや不道者の慮外ものよと兄弟をさみし。道にてせられしお上臍姉の夫に密通し。その餓鬼めまで生みたるが何と人間の道なるか。民部が事を思切り。官太が妻になるならば倅共に助くべし。せひ承引なきに於ては姉御の爲の後妻め。我々ためには思ひの敵母子つなごの槍玉ぞと。穂先をそろへて詰めかくれば二位の君齒がみをなし。エ、あさましの奴ばらや。日頃妾をそのかし夫婦になつて家の官祿横領せんと企は。憎しくと思ひしかど女の身の詮方なく。生けて置し慈悲を忘れかゝる時節の狼籍を。武家で云はば叛逆人それく小萩若を渡すな。己らよつて見よやとて守り刀を搦込で寄らば。突かんず氣色なり。官太すかさずつゝと入。守り刀を捻取つて姫君を引伏すれば。兄の村正小萩を踏付け若君を奪ひ取。ヤア誰かある。此倅め



をかも川に沈め、飯食とせよ承ると、難人ども若君を搦み、川邊をさして走り行く。今はかうよと見えし處へ白髪たる老人、反りに反つたる朱鞘の大小腰に、梓の弓杖も、撓む斗によろばひ來り杖おつ取て兄弟を、めつた打にうち付れば兄弟しらんでさつと引く。老人姫君を引立參らせ、抜けし齒莖を食ひしばり四邊を屹とねめ廻し、やつとこさの糸といふてとらと座り、大息はつとついたらは只者ならぬ勢ひなり。兄弟腹を立アア、推參千萬、先この老ぼれなるぞ其處立退けと睨めつくれば、老人からくくと笑ひ、ヲ、サ此ちいは老にほれる。己れらは又主君にほれるよな。我を誰ぞか思ふ。桃園民部卿源の豊舟が譜代相傳の家臣真砂の前司勝海年つもつて八十八、旦那が當家へ婿入の宣旨ありしと聞くよりのも、さうく上京いたさん處に老病に冒され、いまだ本復あらねども命の内に奥様の、は顔色も拜しなくよろばひながら上京せしに、聞けば姉子は悪女とや、左様の人を身が旦那に添はせふとは、はてさてくく御家の御家老ども覺えず、帝には御存じなく姉に仰出されふとも、家老がひに誠の道をはひ宣旨にては候へども、姉はかやうの悪女なれば妹に願はんは上より是非とはあるまいは扱、時には幸ひ妹御に子造もある中、お家繁昌の瑞相じやないか、それをなんぞや己れが妻にし、旦那に悪女をつき付んとは言語同斷の横道もの、よしそれはともあれ若君は旦那の子、其お子を返せ返さぬに於ては、瘦腕のつゝかん程生さすぎたり八十八、娑婆を冥途のますかけ切首と胴との計り分けにしてくれん、口惜や病後ならずは己れらにいさ骨は立てさせじと拳を握り老を嚙はら、泣いてぞ怒りける。村正兄弟嘲笑ひ、イヤ娑婆ふさげの死にぞこなひめ、家の仕置を己れめにならばふかど、兩手を取つて捨ける南無三寶是迄なり、姫君さまお腰元此うち若君を、追駈けて助け給へなふ早うくといさめられ、見捨て難くも二位の君おもてに走り出で給ふ、サア心やすし死ぬとも一人は死ぬまじと、兄弟

にしがみ付き上を下へと組合ひしが、老武者の悲しさは風に縮める。枯木の力も折れて終に勝海呼吸絶ゆれば、それまづ姫を連れ歸れと兄弟打連れ、三馬追かくる。二位の君立かへりなふ悲しや下人共が若を淵に沈めしは、あれいかせん前司殿勝海々々と呼べど叫べど呼吸絶えたり、こは如何に何とせん。實思ひ付たりと守り袋に豊舟の、かたみに得たる不老不死の西王母が園の桃、これい、薬と嚼み砕き口より口に吹き入れ給へば、勝海むくくと起きあがり、あら心よや氣も若やぎ魂洗ふた如くなり、とすんど立ば腰伸びたり、是なふは身の白髪も黒み、皺も伸てみづくと艶出し不思議さは、實かの桃菓の奇瑞たり忠孝の徳名菓の奇妙、天道恵みを垂れ給ふ有難しく、八十八の前司めが三千年の枯木に花、君は一先落ち給へと裏門より落しつゝ、上着をちぎつて裾切捨て力足をせう、くくく踏みしめさあ、是からは鬼でもござれとふんちかつてぞ立たりける。村正兄弟かくとは知らず前司がとめを刺さんと思ひ、門に入ればこはいかに、廿餘の若侍二王立につゝ立て、アア見忘れたか兄弟、以前汝等に老ぼれの死ぞこなひと云はれし真砂の前司勝海といふ娑婆ふさげ、何と八十八には若いとは思はぬか、最前した、か腰骨を踏まれ、お蔭をもつて腰が伸び近頃過分々々、サア、とても事の事に最些つと踏め、踏まぬに於ては此方から此脛にて汝等が、胴腹を踏ぬいて悪事を企む魂の、洗濯をしてくれんと睨み廻せし氣色を見て皆尻、込し見えければ、兄の村正齒嚙をし飛んで掛るを搦攫み、物々しやと七八間微塵になれと投げければ、四つばひしてはふく逃る、弟の官太こは無念と槍追取りつゝかくるを、ひつばづしむすど取りしや物ぐさし小丁稚めと、槍もぎ取て隙間なく突きかれば村任は、こはかなはじどかいつて跡をも見ずして逃げたりける、うぬめら今は助くるとも勝海といふ此鱈が、深く見入し上からは一度は取つて一呑と、残りしさう人追拂ひ、主君夫婦の行衛幕ひもとめて駈け出すは前代未聞の次



身二

うき世の旅に迷ひ来て、く。身の果いつと定めん。扱もく世界の廻り合は知れぬ事かな。某事は播州に於て。桃園染五郎豊舟公といふ人の家臣。真砂の前司勝海が悴。真砂の乙太郎勝興といふ男に生れどとは生れたれ共。勝海老いての子なる故少めんぼくないと存せられてやら。幼少より他人の家に養はされしに。天性好色に生れ付。ごうやらかうやら養父の家を追出されしが。なまじいき斗男にて親の家へも歸られず。斯様の風俗になり古葛籠に木長刀。まいご市町に出で心ばかりの能の真似して今りを弄す。此體に成果て、斯様の事申出す筈ではなけれ共。何事もうき世じや先この葛籠殿を下しまして。そろく装束をいたしませふ。シテ今日の能は何かナア。兎角素人好のいたすやうに修羅事がよからふ。先大口を着しませふ。さあ先大口は着したが。袴の上を着て大口を着る能は此能太夫も存せぬよ。よい時の用には鼻さへ缺けと申せば大事ござらぬ。けふも好い見物あれかしと四方をながめて居たりけり。然る處へ二八に一つをり餘す。つまはつれさへ鄙めかぬ娘姿のほらくと。目の上涙におもばれて跣足姿にかいせりづま。息つぎせはしくなふ是能太夫殿。いや忝い能太夫と見ゆるさうな。扱や美しくい上臈。謠で申さば揚貴妃松風通小町。扱は班女うき舟せうもく。幸ひ四邊に人もなし。ちとしぶいて見ませふと。末廣島に押當て。捨てゝも置れず取れば面影に立勝る。起伏わかで枕より。あとより戀のせめくればとそばに。もつれてしなだる。ア、しんき自は跡より追手のかゝるもの。命を助けたび給へ様子は重ねていひませんと。言葉の綾も氣を急いでごうぞくと宣ふにぞ。勝興ぞつとする程いた

はしく。戯れ事も時による仔細を聞迄もなし。その後は此男が呑込ふたり。早疾く落ちさせ給ふべし首尾好く落延び給ひなばと。耳に口あて八幡いやと云はせませぬ。命をかけてうそでなし此先のあの茶屋でと。しほのめしていふ處へ弟の村任。下人磨針兵太いさを斗にかけ來り。やいこゝな非人太夫。何非人太夫とは此方の事か。は覽の通の非人太夫各の事情にて。今日を送る者お持合の候は。一錢二錢の厭ひはござらぬ。こひえぬ時はあくしん又狂亂の心付てなふ物たべなふお侍と扇を開き立寄れば。イヤサ左様の事でないし其女を打殺さねば一分の立ぬ仔細あり。そこ立去らずは目に物見せんと。太刀の柄に手を掛くれば。さもしやかたぐよ。源平互ひに見る目も耻かし一人をとめんとば。あんの打物小脇に挿込んで。何某は平家の侍悪七兵衛。景清と名乗かけく手取にせんと追て行く。三保谷がきたりける兜の鏝を取外しく。二三度は逃げ延びたれ共思ふ敵なれば。飛びかゝり兜をおつとりゑいやつと引程に。鏝は切れて此方にとまればぬしは先へ逃げよ。早やおちられよと姫君を。遙に逃がして延びあがりく。跡を見送りしすましたりと領さ。サア一錢の合方頼み上ると云ひければ。村任大きに腹を立エ、憎き奴めかな。討つて捨てんと氣色する。ナニつじ能を見物して價をくれぬのみならず。討つて捨てんとは。あらずらしやいかに義經。思ひも寄らぬうら波の。聲を知るべに出舟の。知盛が沈みし其有様に。又義經をも海に沈めんと。夕波に浮べる長刀取直し。巴波の紋あたりを拂ひ潮をけたて悪風を吹かけ。眼もくらみ心も亂れ前後を忘る斗なり。村任主従齒がみをなし。よし。己に意趣はなし。最前の女に追附き。打殺さんと駆出る。辨慶押隔て打物わざにて叶ふまじと。珠數さらくと押しもんで。東方に降三世明王。南方に軍荼利夜叉。西方に大威徳。北方金剛夜叉明王中央大日大聖不動明王。諸天善神力を合せ今の姫君安穩に。落させてたび給へと舞の曲に紛らかし態と時刻を移しけり。



村任與さめいやは是能太夫。是は某が誤なり。仔細を語らず理不盡に。通らんと云故道理々々。あらまし語つて聞せん間そこを開いて通すべし。元來某は播州に於て民部卿元方が舊臣。土師の別當村正が舍弟官太村任と云者なり。最前の女は身が主人の姫。同國染五郎豊舟といふ者と不義の密通をひろぎし故討つて捨てねば譯立す。仔細はかうじやサア通せと云へば勝興きよつとし心に思ふやう。扱は今の女中は染五郎様の忍妻とや。然らば某のためにも主人。うれしや能くこそ落したれ。一命かけても助けやさねば一分立すと思ひ。是々お侍。扱は只今の女は染五郎といふ者と不義せしよな。仔細を聞けば道理々々。是幸ひの事こそあれ。貴様の目には最前の女は。逃げたと見ざるべし。此葛籠にと。いひも敢へぬに村任何この葛籠に入しとや。ヲ、さもあるべし其方が。某が鼻の先へ立ふさがりし故しかと文色を見届けざりし。でかしたりし詮索せんと寄る處を。片足取つて打倒し。大馬鹿の芋虫めと先づ大小を奪ひ取り。しやんとさして頭巾を取り。非人太夫が手際の程を見よとて。葛籠の緒にて高手小手に縛しめ。今こゝにて我名を名乗り聞かすべけれ共。思ふ仔細あれば當分は云はぬといへば。すり針兵太腹を立て。何小丁稚め推參なりと。太刀ひんぬいて寄らんとす勝興聲をかけ。やあれうじにむざと打ち付ると己が主の胸腹に。あちらこちらへ窓をあくるかと云へば。村任下よりヤン兵太れうじすなく。命あつての詮索ぞ。兎角助け給はれともがきけるこそ可笑けれ。勝興からくくと笑ひ。扱々心と形と不相應なる侍かな。氣遣ひめされな危忽に命は取やさぬ。去ながら女を追かけ。殺害せんとする男なれば何共合點行かず。然しうれは兎も角も。主人に向ふて狼藉働くは。其方疎な侍とは見受けねども。始終を知らねば判断し難し。エ、所詮只今討て捨んと。既に刀に反りを打しがいや。むざと殺し若し仕損じてはいかくなり。生け置て様子を見んと其儘葛籠に踏込んで。堅細横綱かくる間に兵太をろく差足し。

逃げかへらんとせし處をさつてへくと。刀の鐙をしかと取りこりやさぶらひ。二合半を申しうくる命の親といひ。大事のお主を打捨て逃げこるではござるまい。近頃申兼たれども。御木儀ながら重たくと此葛籠。脊負ふて御歸り候へと連雀かけて確かと負せ。サア歸へられよと突出せば葛籠の内よりやれ兵太。早ふにげよともかくゆる大の男の重たさ勝り。心計は急げとも膝わなくと腰骨起たす。よろりと歩み行く。跡より勝興太刀にて打叩き。駄賃は先の宿拂ひ急げはいしいと。叩き立て。さつても變つた馬節とさつと笑ふてかへしつ。さて姫君の御行衛心元なく走り出。ヲ、い。とわめけども御行方の知れざれば。よし心の行處心ざし共いふなればと思ひ込みつ。大津道。跡を暮ふて行ちがふ心の。内こそ 三重せつなけれ

二の巻のり

うたてやなあれ御覽せよ今迄は。ゆるがぬ梢と見えつれ共風のさそへばこそ。一葉も散なり。たましく心すくなるをくるへ。と笑ふ人こそ風きやうじたる秋のはの。心も共に亂れ戀の。ごもの物ぐるひと。人はいは木か。石の生れか木のはしか。尋ぬる夫の在家をば。我に知らせぬ。白晝のつばさしほれて。子を呼ぶ聲も。かれの山のを見はらし見おろせば。かなくわくれなわに水を照し。さうじゆみどりに風をふくむ。さんくわ開けて錦に似たり。かんすゐたへて蓋の如し。戀しやな。思はずこに。うかれ来て。名もなつかしみ桃園の。夫の年は廿餘り凍と凍々しく稜高に。長い刀に長脇差。眞十文字にさしやてなしてあるき。姿はすん。と。とすつと振出す振は。よい振り可愛らしさを。何に譬へてえ申まいよのしやん。とさせられたまらやせぬ。をさくが上の。玉あられ。玉のや。



なるみどり子の、花の盛りを連れて行くむべ山。風のあらし手あらし。いのちやあると。面影にのみた  
 つかゆみ。はつたる乳を口に含めて寝たる夜の夢は昔にかはらねど。かはるうつゝぞア、あぢきなき。  
 思ひ出たり。過ぎし彌生のいみあきに。うぶすな詣で好い日を撰らひおちが。かたくま。乳人の日傘  
 日をも雨をも。よぎて翳せしかたみの傘。さしてこゝろは残らねど今も。我子のあるならば。しやんと  
 さしかけヲ、よいお子や。親が見たいとはめさせん。といふ心も仇し河原の撫子ちりてちと鳴蟲  
 の音きえて。ひとり焦るゝは、そのもみぢ。風にもみぢ傘開いて。すばんで。ひらいてすばんできり  
 ん。きりきりきりきり。きりきりきりきり。きりきりきりきり。きりきりきりきり。きりきりきりきり  
 りめぐる月日も。長かれと。ちとせのよはひ祈りしに。氏子守らぬ神心。シヤ耻かしいとは覺さぬか。  
 我子すくはせ給はぬかと神に恨みもつかれど。ろかきよつ。きよつ。きよつ。きよつ。きよつとなつては耻も人  
 目も。身をもうき世も思ひおもはず絶えぬ。涙に伏見武田の。賤があきなふもちるもとめて我子のため  
 と。母こつむ。淀のいけ鯉いけるまの命つれなながれ寄る。みづのみまきの片岡に駒を。よばひて  
 三馬立給ふよりさけ見れば。駒の鈴音はい〜と。追來る馬方打あをのき。ヤア馬からふ。たれぞと思  
 へば氣違ひ女じや。はれやれ〜ほつこしもない。したが。見れば見る程大事な氣違ひほんに殺しを  
 れ。清水の舞臺から飛んだと思ふて。あと腹やまずにこゝろりてならびやくらら。一夜とでるさとたはふ  
 る。二位の君涙ながら是々馬方。京より出しものなるが。道には波れ日は早や暮るゝ。あれ迄馬に乗  
 せてくれよ。馬方けうとき顔付にて。はれやれ〜ふとつづるお氣ち女らう。直段もせいでなんじやの  
 らふ。エ、ごんなけたいのわるいほてつはらめと鞭をうち。引て歸ればいやなふ是馬方。妾は夫子を尋  
 る者。思ひに暮れて氣も亂れ何をいふやらしごもなし。近頃わりなき事なれ共せめて向ふの舟場まで。

何も情に乘せてたべと口説き給へば馬方も。さすが岩木ならざれば。いかさまよいしゆの果てさうなが  
 扱いとしぼや。とても只往く馬なればいざ乗り給へと引よする。姫君嬉しく手を合せ馬は馬頭觀音の。  
 加護にやあひに青柳の。枝を力におり立てさもかる。く〜とぞ乗り給ふ。馬方口にひつそふて。よごの  
 眞菰搔分て。こげやこげ。たな〜し小舟。釣人の。いさり火燈す狐川。八幡の山を目めてにし。よせ  
 よ〜漕よせよ。岸に寄る波よるさへや人目つゝみに着きにけり。馬方猶も頼母しく是々船頭。此人は  
 び亭や子供を尋る人。随分頼むと云ひければ船頭も頼母しく。ヲ、氣遣せられぬと乗られよと。介抱  
 して乗せ参らす馬方は暇乞ひ。馬にひらりと横に乗り去らば〜且那殿。尋る方に回りあひ追付け目出  
 度連立ちて。京へ戻り馬やらふと尋さてこそ歸りけれ。舟人棹を押し出す水のくもでののはしの上に。翁姿  
 の釣糸一筋に殺生を。心に入たる風情なり姫君は覽じ。あら勿體なや此川は八幡宮のみたらし。殺生  
 禁制の處と聞く。年にこそよれあの年にて殺生は何事ぞ。ア、勿體なやと心を痛まし見給ふ處に。老人  
 は釣り得しと覺しくて。竿振上げれば淀鯉の口よりみどり子這出て。父よ母よと呼ばる聲。疑ひもな  
 く村正めが沈めにかけし我子の稀若。夢現共わさまへすなふ〜それは我子ぞや。みづからが子なり此  
 方へたべと身を問へ。焦れ給ふぞ道理なる。時に老翁高らかに。我國あを人ぐささかゆくいのを守るぞ  
 や。され共人間五つの塵六の欲。しばし心は濁り江に沈みて死すべき身なりしを。おことか心すぐに行  
 く水の灘に神やせり。救ひとめて待しぞとてまれ若を與へたび給ふは有難。かりける次第なり。そも  
 く〜まるはもとそのや。源氏の正八幡大菩薩と。御神體を現し給ひ虚空に。飛去り失せ給ふ。姫君は隨  
 喜の感涙に悦び涙とめかね。千度百度禮拜あり舟人も神通の。不思議を目前見る上は只人ならぬは方  
 方ぞや。は神へのは奉公いづく迄もは供と。櫓權おつ取り拍子に乗りてさつ〜。〜と漕ぎめぐる異



國の任氏から中より、龍女を得たる其例今神力に有がたし。尤も貴し忝やとて神慮を。仰ぎ奉る

才三

一河をしばし結ぶだに是ぞ多少の縁深き。水の流れと人の身の知れぬ浮世のならひとて。播磨の前司勝海は主君豊舟二位の君。は夫婦の行衛尋ね侘びつゝ袖しぼる。小萩が露のこゝろさし。女に稀なる忠節にて共に主を尋んと。誓ひし誠を頼みにていつしか夫婦と打とくる郡山の往還に。麥葉賤屋引むすび。其日送りの駕籠昇や。旅の往來に肩をかき妻をはくみいたれば。妻はをつとをいとをしみ深くぞ契るやきもちる。ちやを煮て旅人を呼びかけ是。やお茶參れ駕籠やりませふ駕籠やると。いへどもさすが弓取のいひもならはぬ駕籠昇言葉。なり下りたりたりばんごういつかのがれんきりがれん駕籠やろ。いとぞ涙ぐむ。爰に京の方より有徳人と覺しさが。十七計なる容儀風俗たぐひなき上臈を伴ひ。下女下男少々召つれ來りける。夫婦見かけてコレ駕籠やりませふ。先に駕籠はござりませぬ乗つてござりませ。先お腰をかけられお茶參れ。休んでござりませいといはば各々腰かけ休みつゝ。こりや駕籠昇。身共は播州むろの遊女屋なるが。此女郎を上方より大分の金銀出し買取て下る前に。山崎まで駕籠に乗せれば下手な昇手ゆるか揺れて駕籠に酔ひたるゆる。そろ／＼迄ありかせたり。なんと揺ぬやうに昇くならば價にはかまはぬ。むろ迄とはしてやらぬかと云へは勝海悦び。其段はお氣遣ひなされな。此道中に駕籠昇いくらか候へ共。我等はあつばれ名取の駕籠昇揺がすなごは思ひも寄らず。あげんではござりませぬが私の駕籠の中では。皆且那衆が細かな寫し物をなざるに。机で書くより中々書きよいと御意なざる。先日も急の使者のお侍衆私が駕籠に乗せられ。髮結を相こしに乘せ月代を剃させ

られたに。いつかな事ぎつく共ゆるがせず。まんま月代を剃ましたが。其だいにびんぎは、山道なりに剃り。月代はなま口の口口きさんだやうにこいへば。扱々をかしい事をいふ男かな。よき道中の慰みむるまで金子五兩とらせん。早や駕籠出せと云ひければ忝し。然らば上手の相方呼びに參る其間。見苦しけれ共裏の椽にてお辨當それ女共。あむじろ薄縁敷けやとて皆々。奥に入置て其身は四邊を。廻り播磨への通し駕籠。誰ぞいかぬか與助やい。九介やいとわめき散らせば小萩立出。是こゝな人。お急ぎなるに何と相手はないかいの。ハテ相方は幾人もあれ共身共が餘り上手ゆる。返事さへしてがない。是程結構な乗手衆を取外すも氣の毒なり。ハア何とかなや。女共。そちが片はな昇けといへばハテつがもないざれ事も時による。どうぞ思案もがなごいふ處に。さもおちぶれし旅人の笠かたぶけて來りたり是を旅人。何とよい金を取る駕籠あるが。片はな昇いて路銀にせられぬかといへば。旅人顔を押しかくし。終に肩に物置いたる事もなし。許したまへと行過るいやなふ。四五町か六七町何とぞして昇き給へ。小揚に安う賣付んと無體に笠を引除けて見れば。主君豊舟殿ヤア勝海か我君様か小萩なるかと興さめて暫し。涙に咽びしが。勝海涙ながら君御夫婦御行衛。尋ね奉らんうの爲に小萩と夫婦に罷成り。かゝる仕業と申ければ。さればとよ某も。二位の君の行方又かたぐもなつかしさに。あなたこなたと彷彿へどもいづくに頼ん宿もなく。さればとて本國へも歸られずと。こしかたの物語。つきせぬ。涙ぞ道理なる。時に内の旅人サア。用意はよし。早や駕籠やれと云ひければ勝海も詮方なく。とかうは追つて申すべし貯へなくては本意もとげられず。勿體なけれごあの駕籠をせめて四五町昇き給へ。價を取つて姫君を尋ねの料に仕らん。ヲ、ともかくも身づくろひし。サアお駕籠よし出と云ひければ。いざとて遊君駕籠に乗り既に出んとせし處に。むかふのはらより女の聲にてなふかなしや人殺しよ。助けて



たべと二三才なる子を負ふて、色違へして逃げ来るを見れば尋る二位の姫。南無三寶と御籠を捨て、是  
 や豊舟勝海元の小萩なり、扱々不思議の見参これ佛神の御力と、泣きみ笑ひみ四人の人、天を拜する斗  
 りなり、姫君やうく氣を静め、先々互ひにながらへては目にかゝる嬉しさよ、扱先姉の薄雲御前わら  
 はを敵と追かけ給ふ、只今これへ來給はん影を隠してたべとある、人々どかうの御了簡なく御籠なる遊  
 女を引おろし、姫君を入替垂を下げて隙間には桐油の雨かは打かけたり、御籠をかりたる旅人こは理  
 不盡なるやつばらかな、町人どてあなづるか御籠をやれと奪めくを、眞平御待ち下されよと手をすり断  
 りいふ間に、あらおそろしや薄雲御前よそ目にはひたふる鬼神とや御山木の、風に聳へし如くにて女共  
 男共、人共鬼女共變化共いはん方なき亂れ髪、おしやりかきやり破衣の夫を寝どりし我妹、みめこそ劣  
 れ我力積る恨みを晴さんもの、つらしねたまし腹立やと呼ばはる聲は雷の、落ちかゝるかと怖ろしく一  
 文字に駆け來つて、今迄こゝにありけるが已れいづくに隠れしとて探し出さで置くべきかと、垣を跳越  
 る躍越る軒に手をかけ飛び上つては飛び下り、こゝよかして駈廻るはずさまじかりける嫉妬なり、勝  
 海夫婦豊舟も叢に身を縮め、息を詰めてぞ隠れたる、旅人逃るに度を失ひ慌てふためく遊女の姿、薄雲  
 妹と見違へて鬚を取つてひつ据ゑたり、なふ悲しやと泣叫ぶをなんの悲しい己れゆゑ、我夫に捨てらる  
 れば妾が敵は此つらと、肌差したる守刀をぬき出し情なくも遊君の、耳母をいで捨てたりしはあさま  
 しなんども不憫なり、旅人大きに怒をなし、前代未聞のあふれもの擲取つて此處の、探題へ引けやとて  
 一度にどつと取廻す、薄雲ちつとも臆せず何人違へにて有けるかや、よし人違ひにせよ何にもせよ、美  
 貌好き女は見るも憎し命のあるを取得にし、連れて歸れ歸らずば男なりとて怖からず、皆な捻殺して捨  
 んものをと驚く氣色はなかりけり無惨やな遊君は、思ひもよらぬ不具となり女のいきて生き甲斐なし。

南無阿彌陀佛と斗りにて舌を食ひ切り死してけり、旅人主従動轉しすは大事こそ起つたれ、所詮御籠昇  
 め相手なり御籠昇くと呼ばはれば、是非なく人々叢より出る姿を薄雲見て、なふ我夫の民部殿君こゝ  
 にましますから妹もあるに極まつたり、探し出して恨みをなさんと又狂ひ出かけ回り、あそこやこゝ  
 と尋ねつゝ御籠を怪しめ雨かみ寶垂を引ちぎれば、わつと云ふて二位の君逃出でんとし給ふを、帯を片  
 手に引さげ思ひの敵戀路の仇、姉が一念思ひ知れと首筋に兩腕入れ、あいやつと締めつくる兩人も堪り  
 兼、御籠のいさ杖棒おつと散々に打かくる、薄雲けらくと高笑ひし、ヤア推參なり悪女と生れし替  
 りには、和御前達の五人や十人蠅ども思は、こそサア、寄つて見よ蹴殺さんと、四方へ足を踏散  
 しなふ豊舟殿、御身とみづから夫婦とは、忝くも帝よりの御仰せ、言葉かはしの夫婦でも一世や二世の  
 縁ならぬに、ようもく情なく一夜の枕の交しませず、此妹めに思ひかへ妾を捨てさせ給ふよな、御身  
 の心つれなきゆゑ、姉が手にかげ妹をこれ締め殺すを見給へ、エ、憎や腹立や無念口惜し面にくし、あ  
 いうんと締めつくればさやつと斗を最期にて兩眼見つめ四肢ちやめ九穴より血流れ終に、むなしくな  
 り給ふ、勝海こらへず薄雲に飛か、つてむす組む、さしつたりと素首をつき起つ轉るんづ組合ふを、  
 豊舟棒をおつとりのべさんくゝに打据ゑくのたれを打つて悶ゆるを、打物抜いて差通し突通し、  
 刹那が間に兄弟は打つて打たる、邪淫の死に因果のほごそあましけれ、豊舟刀をからりと捨て、ア  
 、悲しきかなや某程不運なるもの世にはあらじ、妹は忍び妻姉は又名付の妻、二人の妻に一日も思ふま  
 りに添ひもせず、妹は姉が手にかゝり姉は夫の手にかゝり、同じ日の同じ時同じ枕に非業の死に宿世の  
 程の、はかなさを、思ふに付て、此子がため、ひとり母ひとりほをば、をばかと思へば母の敵かたき  
 と思へば母の姉、いかなる過去の悪縁にて因果と因果敵と敵が生れ合ひ、夫婦兄弟をばをひと今の報ひ



を知らずるぞと。人目も分かず聲を上げ前後も。分かず泣き給ふ。勝海夫婦も諸共に。實御道理ことわりと不覺の袖をぞぬらしける。以前の旅人與さめながらこれ。駕籠昇ごも。某はひろの津にてたかかうしの長といふ隠れもなき遊女屋なり。汝等が駕籠をかり大事の女郎を乗せたるに。引下して殺させ其分では濟むまじき。駕籠を買つて乗せれば乗手は其方へ渡したり。早々其女郎を返せくとねだるにぞ。勝海あやまり御尤。萬事御覽の通りなれば何共了簡いたしがたし。お國元へ參上し。何分にもお腹のゐる程御詫事仕らん。先御歸り下されよといへば長猶々立腹し。ヤア詫事とは太い云分。身代を打込で黄金千兩に買たる女。此上は千兩といふ黄金を出すか一つ。但殺せし女を元の如く生けて返すか一つ。さなくば處の探題へことわり。曲事に行なはんと大聲上げてひしめけば。ア、申し。先聞分て下されひへ。これなるはよしある御方我等は家來にてひが。此仁世に出申されば千兩が萬兩も急度わきため申べし。只今探題に御ことわりあつては。大事の武士の名を汚し先祖子孫の耻辱となる。眞平御免下されよと手を合せ詫けれ共。イヤサ武士にもせよ公家にもせよ先只今は駕籠昇つれ。何世に出ての千兩萬兩それは先の見えぬこと。是非上へ訴へんと走り出るを引とめ。扱詮方もなし是非もなし。然らば代りにあの女を參らせんが。御勘忍あるべきか長は小萩をよつく見て。ア、容貌格好先の女におよばね共。是非にかなはぬあれなりともと不精無性に云ひければ。勝海悦びユリヤ女房。近頃無念千萬ながら此上は力なし。あの方の手に渡り流れを立てくれまいかと。おろく。涙でいひもあへぬに女房につこど笑ひア、お主の爲つまのためいかほごつらき流れの身とても命を捨つるに勝りなんと。そこには悲しき涙をつゝみ上にいさめる體を見給ひ。豊舟刀おつとり既に自害と見えしを勝海小萩絶り付。是は物がついて狂亂ましますか。夫婦愛身を苦しむるも君を大事に存ずる故。悪人めらを亡し御世に出て姫君の

後世を吊はんと覺さずや。今死し給はんと仕給ふは。我々が心ざしを無下にせんと事なるか。エ、心弱や云ひ甲斐なや。御腹めされ本望ならばサア。切給へ我々も。ついで死出の供ぞサア。死に給へ腹切給へ。口惜や斯いひ甲斐なき主君と知らず。心をつくせし後悔さよと聲も惜ます泣き居たり。豊舟納得し給ひげに謬つたり許してくれよ。命ながらへ若をより立て敵を討て本領につき。長が門に金を積み小萩を迎ひ返すべし。去ながら悴に家はつがする共。我は男を立てる氣なし。姫が菩提汝等が。現世の祈りに發心せん是三寶への貢物と。髻ふつと切捨て。南無佛南無法南無僧と思ひ切たる潔よ。夫婦ははつと斗にてけうをさまして泣き居たり。かくて時刻もうつると長は小萩を伴なへば二人は死骸をかき抱きさらばくと呼びかはず。主人は妻に死に別れ下人は妻に生き別れ。別れくへ行水の水の袖のしがらみせさをむる。もみちにまがふ涙の雨ふるかひもなき世の中やとわつと叫び聲をたてア、斯あるべしとは思ひきやはらから。しつとに死出の道悪縁悪切めぐる月日も一つなる。いふてかへらぬ此嘆きとたがひに。見返りくして別れくへ行空の。空に音を鳴く四つの鳥別れば。同じたとへにも引かばこれをお申べし

才

世を厭ふ人とし聞けば假の宿に。心とむなど云ひ捨の言の葉とどの源は。もと思ふより生み出すをここの女の妹香川。水上たれか戀の初手色をつくりて商へる。むろの長に誘はれ身は丸ながらごもかも。勤め女にそめなせせ心は染まぬ袂の秋。小萩に於ける白露の消えなばかくはあらじをぞ。思ひ出すほご支への種さへに浮れてをりくは。よしなやまよ。さらりつと思ひながせばながれの身。待夜なければ



おのづから來ぬも恨みぬ浮れ女と。むろの浦舟こがれ來て流れを。立るぞ哀れなる。昔の花の、名も散りて。小萩かれゆく宮城野に。一夜の妻と仇名立ち。波のよるひる偽はりの。情けや人の氣を兼て。をかしからぬも笑みの顔。笑ひがなかの忍び泣き涙。計りや。誠なるらん。民部卿入道は。ありのすさみの浮世のさま。三界無安猶如火宅戀慕を涅槃の初門として。思ひ切りたる墨の袖色には染まず去ながら。我故愛身と成果し。小萩が嘆き如何ぞと。不惑にも覺束なく座禪の餘力有時は。むろ津の町に頭陀修行餘所の様に尋れば。今はその名も宮城野とて長が内にて第一の。流行出の太夫ひる三つよる三つ十二時を六日にして。賣れども客が支へ來て賣日足らぬと語るにぞ。ア、不惑や可哀な。傾城遊女の習ひ人目さかんに見ゆる程。内心苦しく命を削る勤どかや。ゆん手もめ手も見ず知らず他人の中に身を任せつらさぞ思ひやられぬ。言葉こそ交さずとも。せめて心でとはんと思ひ。長が門に立寄りて。行脚の僧に齋くれうと錫杖。突いておはしけり。時にあたりの遊女ども樽肴綿綿など其外の音物を。やり手下部に持ち運ばせ長が。もんに立つとひ。聞ますれば宮城野さまおん身受け極まりて。お大名の奥様にならんすと承る。勤に出さんして間もないに。かたの好い女郎やあやかるやうにと悦びの。暇乞に参りたりお目出度といふもあり。名残をしいといふもあり内外賑ひさめきけり。入道はつと驚き何ぞぞ廊を出ぬ内に。どうぞ一目逢ひたさが如何はせんと思ふ處に。宮城野は受出され。あすは廊を出舟の。とも女郎やあげ屋くを暇乞ひして歸るさの。門に入道笠を傾け身をば格子に片寄せ。忍びし風情宮城野はそれぞ見付けア禿。けふは妾が心ざしの日。回向を頼ましたきにあのばん様をどめませよと。いひ捨て内に入りければやり手禿は氣もつかず。是なふそこな坊様。暫く待たんせ鉢入れんと是も同じく内に入。宮城野しばしもたまりえず懸て表に走り出で。なふおなつかしやは淺ましのは有様やな

。定て妾を見忘れはし給ばじ。扱先づれあひの勝海は。いかゞ暮し侍ふぞや御姿ををがむに付け。猶し戀しき我夫やと涙に。沈む斗りなり。入道とかうのいらへもなく。かきくれ。むせび給ひけり。宮城野涙を押とめ。申は恐れ多けれ共扱膳甲斐なき御心や。なせに早く敵を亡し御本領に基き給ひ。價を返しみづからが廊の苦患を助け。元の如く勝海に添はせては給はらぬぞ。ア、情けなや其御左右を。今や〜と待うちに一目も知らぬ方よりも。妾がうはさを聞及び請出すに極まつて。あすは廊を出る筈。勤めの間は是非もなし思召ても御覽せよ。播磨の前司勝海とて隠れなき夫を持ち。又餘の男に添はれふのか。され共人に任せし身是非なく先へ参れ共行くとして其夜帯を解うか。物の見事に自害をして。見せんは二世かけし。勝海殿がいとしさ故今宵斗りの命の内に。夫の顔が見て死にたやなふ。聲斗りなり共と口説き。〜と嘆きしはことわり。せめて道理なり。豊舟入道も涙ながら。嘆きも恨みも尤々去ながら。さうあればとてさしあつて今何とせん。よし皆過去よりの定まること。只思ひあきらめられよ。先それは兎も角も。御身に兼々云ひたき事ありつれ共。折もなければうづみ火の。焦る。胸を今いふて晴さふか。イヤ〜いふも耻かしい事なれ共。おことをちらと見染しより。寝ても覺めても戀慕の絆とくに解かれずいふもいはる。首尾でもなく。戀煩ひしその内に思はずも此里の。傾城とならる。事は我戀のかなふ時節と。毎日爰に立暮せども。かゝる身なれば一夜あふべきあたひなく。見れば見る程ます思ひ。今よね風の派手姿さうもいはれぬ戀草を。寝引に餘所の妻でめとやさもなき内に墨染の。袖に情をほごせと。しとより添ひ口説かる。宮城野さよつとけうをさまし。シテ先それは御信實か。いやはやいふもよしなけれ共。みづからは忠孝深き勝海が妻ならずや。誠にかく淺ましき流れを立るを。誰故と思召ぞや。たとひ心にかくありとてそもや云はる。首尾なるか。エ、其御心ゆるにこそ。大事



の御身がむれ木となり給ふ。扱もさもしきお心やと愛相なくも耻しむる。ア、それ程の事をそちに習ふ身でもなく、義理も仁義も善悪も、よつく知つたる我なれ共戀にさばけぬ結ばれ糸。解いてくれずはなまなかに殺してくれよと絶り給ふを。拂ひ退け付き退けて。エ、どんな阿呆らし。かうした身となりぬればあなごつて宣ふな。お主にもせよ誰にもせよ。道に反し事を云ひ殺せなごとはあさはかな。餘の女とは違ふべし殺しかねはいたすまいと。にがくしくいひ放せごいやなふ。其腹の立つ顔が笑ひ顔より猶いと。無體に腰に抱き付き返事聞くまでいつまでも。人目も構はぬごうなりとも。猶舌たるくもつるれば。宮城野はつと息をつぎ。ム、御氣がそらなるかと思へごさも見えす。ア、合點したり推するに。妾に戀とは御偽り。定まる夫持ちながら引手数多の身に染まり。受出す男に氣の移らんかと心底引て御覽するよな。是殿さま。女ごこそ生れふすれ。二人の夫持つか持たぬかあすはしるしの見え申さん。ア、無念やかく成果て、お主にさへ疑がはる。さぞ我夫もかくもやごうしるめたくは思はれん。口惜かなしき身の上やと又さめくご泣きにける。入道聞き給ひいやなんばうたしなませても云ひ出すからは耻らはす。我戀偽りなき證據と腰の小さすがするりと抜き。小指をふつと押切つて我心中は此通と。投付給へば宮城野は恨しさうな顔ばせにてアウ。扱は確と執心が定なるか。ア、ア諄い命かけての戀なるは。ア、然らば妾も。心中を見せやさんといひ捨て「内」に入れるが。長が刀を盗み出しひん抜いて走り出。なふ人でなしの豊舟殿。主ある女に不義を云ひかけ逆も迷る、人ならず。我手にかけん打くるを錫杖にて受流し。其ま、取つて押へ給へばすは狼籍もの逃すなご。長が一家のあたりの者共棒ひつさげ駈來り。打よ縛れと取廻し上を下へと返しけり。かゝる處へ勝海は。餘り妻の戀しさに密に見舞に來りしが。それぞと見付かけ來り。ア、是々卒爾をすな町人共。事の仔細は知らねごも此發

心者は故ある人。指の先が當つても弓矢八幡勘忍せぬぞ。先棒を引け早く引けと睨み廻せば此勢ひに恐れて。少し退きけり。宮城野悦びなふ我夫の勝海殿。好き處への御出といひもあへぬにはつたぞ睨め。ごこへ我夫とは慮外千萬。いッかに零落給へばごとお主に向つて刀を抜く。不忠ぶ道の鳥濟のものは此勝海が女にあらず。去ながら言譯あらは眞直に申せ。道理が立すは諸天三寶言葉の下に討つて捨るご。腰の刀を抜き廻せば。ア、御尤去ながら自らゆめく誤りなし。仔細を申すもびんなけれ共。云はねば立す先づ聞き給へ。我君妾に御執心とて様々口説き給へども。もし御心もそらるやと。透しつ威しつ御異見を申せ共。御聞分もなく是見給へ。小指を切りて嘆かせ給へと靡かる、道ではなし。悪名立んも悲しさに勿體なくは存すれ共。害し参らせみづからも死なんと思ふ所存故と。始終を語るにぞ勝海あつと呆れ果て言語に。絶えて居たりしが。や、あつて勝海涙をはらくと流し。實や聖人の詞は違ひなし。朽たる木をばえるべからずとは。今こそおもひ知られたれ。器量骨柄はあつはれ人間一人と見ゆれごも。心の内は人に似ず。氏と云ひ家といひ肩を並べん公家武家なく。叡威に預り一度世に出給へ共。好色故に零落果て。そののみならず兄弟の姫の命を失ひ。家來のもの、女房は此如く流れを立て。武士たる者の女房が。町人土民下郎迄に様を付て機嫌を取り。傾城となりたるも。皆これ元は我君の好色。深き故ならずや。誠をいひ敵を亡し。其身や家來の耻を雪ぎ。名をばん天に輝かさんと思ふ根性さげもせで。然も法體三衣を着し。袈裟衣にも耻らはで。忠ある家來が女房に心をかくるは佛法にも。武道にもある事か。畜生界はさは知らず。先人間の法はなし。犬には鳥におどつたる蟲同然の人間か。御身を主と頼んより御山の猿に奉公せば。か程に耻は晒さじもの。其心底ども見届けず忠を屬み身を碎きし。我々夫婦が天運こそは口惜けれど。拳を握り牙を噛み。怒れる眼に涙を浮べ男泣きにぞ泣き居たる。



エ、云ひ甲斐なしかくまで諸人に耻を曝し。活きて何の益がある腹を切つて死に給へ。我々は若君若殿をより立て。御家は断絶すまじ。サア勝海か介錯せん。早々切腹し給へと刀を抜いて渡せども。さかうの答へもあらばこそ。押俯伏しておはしけれ。餘りの事に勝海からくと笑ひ。扱も笑止な大腰拔碌には腹はえ切れまじ。討て捨てんも刀穢し生けては置かれず如何せん。ヲ、思ひ付たり是。此穿いたる草履にておぬしの面を打ち申さん。いかに腑甲斐あらず共。下人に草履でいきづら打れ何とて生きてなられふぞ。縊れてなりとも死給へと草履を脱いでおつ取り。ついで打に丁々と叩き付け。持ちたる草履をかつばと捨ててうつと伏して。聲を上げ。扱もく天命つきたる主従やな譜代の下人が草履にて。主を打たる試しとては前代にも未代にも。又有べき共思はれず十逆罪とは思へ共。道に反ける主君なれば後生の事も思はれず。南無三寶しなしたり。扱あさましの身の成果やともだへ。つかれて嘆きしは道理。にも又哀れなり。エ、是程に耻しめても命が惜うて死なれぬか。よし某が腹切て手本に見せんと太刀を抜く。豊舟飛付きやれまて勝海。三世の諸佛大小の神も示現あれ全く某總路にあらず。先鎮めて事を聞け。我故憂めを見る事口惜くも又不憚に思ひ。忍びて日々に見舞ひけふもかく来る處に。身請極り事男に添ふを嘆く體と見ゆれば。某密通と沙汰あらば。請出す男嫉みそねみ思ひ捨てんは必定と。即座の思案出せしもかたく夫婦を大切故。殊に別れし姫が事。露の間も忘れねば二たび女に目もかけず。一生不犯の誓紙を書き二位の姫と來世まで。添はんと發心したる身がおことが妻に心をかけふか。いで其證據を見せんとて。守袋より姫君の黒髪と。一生不犯の誓紙をば取出し見せ給へば。勝海是はご肝を消しかうへを土に。ひれふして。こは有難き御心かくとも存せずお主を履にて打ち奉る事。又となき人非人天の咎め地神の怒り。何を以てか報すべき。せめては君の腹いせには足にかけられ。大地

に踏付け足手より。すんぐに刻みてたべと。手を合してぞ嘆きける。豊舟閉召いやとよそれも忠孝故親とも頼む其方に何の恨か残らんと。諸共涙の粒を見て處の男女ゆき、の人。扱も割なき主従の。道はかくこそ有るべけれと各。袖をぞ絞りける。時しもこそあれ宮城野が。身請の大盡大勢打連れ來りしか此體を見て。ヤア何者なるぞ慮外千萬。けふよりして我女房われ逃すなと下知をなし。ごつと寄るをよく見れば敵村正兄弟なり。こは天の與ふる處いかに處の者共。今は何をか包まん是は桃園民部卿。代々當國の主たるに彼輩がは出世を妨げたり。國の守の敵なればお味方やせと呼ははれば。扱は左様にひかやれ悪人め打殺せと。我もくと棒ひつさげは味方にこそ加はりけれ。村正ちつとも臆せず何町人の蠅蟲共。物の數にて數ならすわれかたひしぎにせよといふ。下人共抜きつれておめいてかゝるを町人共。叩き立て擲り立て。廓のそとへ。三重。追ちらす此勢ひに恐れをなし弟の村任落たり。村正大きに腹を立て豊舟目がけてかゝりしを。勝海かい潜つて小腕とり膝のあたりにごうと敷き。ヤイ大罪人め。うぬめら兄弟が心一つて姫君は兄弟を殺し。某主従女房か迄る姿の報ひいで思ひ知らすべし。いかに我君さま。せめてきやつめがさつづらを踏にじらせ給ひ。御腹いさせ給へやと引仰向れば豊舟は。眼も鼻もちぎれてのけと踏付く。踏にじり。引起し首打落しサア。御敵一人は亡したり。いざ此上の御悦に女郎一つと出給へ。某も女房と珍敷揚屋にて。夜明までしつぱりと恐れながら我君様。朝間に頼み奉ると勇みいさめる主従の縁こそ盡せぬ。三重。契なれ我大君のあめが下しるしめし。萬の事を拾させ給はぬ餘り檜の葉の。實こき天皇萬葉を撰らばれ。延喜の聖の御代には古今集を撰ばれし。その吉例に順し今もみそなはし。後の代にも傳はれどてなん藤原のいゝんを。和歌處の別當として源の順。大中臣の能宣清原の元輔紀の時文坂上のもちき。以上五人に詔して。昭陽舎に於て。後撰和歌集を撰はる。是より此輩